

授業科目名 <英訳>	人間科学入門 Introduction to Human Sciences				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 松本 卓也 人間・環境学研究科 教授 吉田 純 人間・環境学研究科 教授 永田 素彦 人間・環境学研究科 教授 田邊 玲子 人間・環境学研究科 准教授 戸田 剛文 人間・環境学研究科 准教授 桑山 智成 人間・環境学研究科 教授 奥田 敏広					
配当 学年	1,2回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
本講義では、人間科学系を構成する6関係分野から、教員を選出し、それぞれの専門を踏まえながら論究していく。											
<b>【到達目標】</b>											
総合人間のさまざまな分野の学問に接することで、興味の幅を広げる											
<b>【授業計画と内容】</b>											
総合人間学部の人間科学入門は、ヨーロッパでいわれている「人間科学」の学問的入門ではなく、総合人間学部の「人間科学系」のある分野の学問紹介・人物紹介と考えた方が分かりやすい。分野から選出された7名の教員が、それぞれの専門領域について講じる。詳細については、第一回の授業で説明する。											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
受講者の出席と複数のレポートにより、単位認定を行う。											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>【授業外学習(予習・復習)等】</b>											
とくになし											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国際文明学入門 B Introduction to International Civilizations B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 教授 国際高等教育院 教授	辻 正博 高谷 修 桂山 康司				
配当 学年	1,2回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
本講義は歴史文化社会論講座の3人の教員によるリレー講義である。国際文明学というテーマの下に、それぞれの教員が自らの専門領域の中からこのテーマにそった題目を選んで講義する。											
<b>【到達目標】</b>											
3人の担当者が講義する内容について、基本的な事柄を理解し、さらに、それらの知識をもとに、自分で創造的に探索・思考できるようになることを目指す。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
ユーラシア大陸の東と西、中国とヨーロッパで花開いたさまざまな文化の中から、講師が得意とするジャンルの話題を取り上げて解説する。講義は、下記の順序でリレー形式にて行う。											
辻 正博：高校世界教科書に見る中国史 『詳説世界史』（山川出版社）を批判的に再読する 桂山康司：分析と総合：「二つの文化」論再考 高谷 修：Augustan時代の諷刺詩 17～18世紀のイギリス文学											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
3人の担当者がそれぞれ、試験もしくはレポートを課す。3人の合議により成績を判定する。詳細については授業中に指示する。											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>【授業外学習（予習・復習）等】</b>											
配布された資料には、前もって目を通しておくこと。なお授業は、演習形式で行われる場合があります。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国際文明学入門A Introduction to International Civilizations A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 江田 憲治 人間・環境学研究科 教授 細見 和之 人間・環境学研究科 准教授 那須 耕介 人間・環境学研究科 准教授 齋藤 嘉臣 人間・環境学研究科 教授 小畑 史子 人間・環境学研究科 教授 土屋 由香 人間・環境学研究科 助教 鵜飼 大介					
配当 学年	1,2回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
7名のリレー講義のかたちで、「国際文明学」に関する入門を行う。 テーマは、思想、文学、経済、法学、社会学等、多岐にわたっている。											
<b>【到達目標】</b>											
「国際文明」に通じる思想、文学、経済、法学、社会学、歴史学についての基礎的知識と学問的観 点を獲得する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
第一回目のガイダンス授業で、授業の順番、および、各講師が具体的にどのような授業を行うかを 簡単に説明するので、必ず出席されたい。順番は決まっていないが、今期の授業は、江田憲治、細 見和之、那須耕介、齋藤嘉臣、小畑史子、土屋由香、鵜飼大介が担当する予定である。											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
レポート提出 課題や提出期限については、授業開始後に指示する。											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
<b>【参考書等】</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>【授業外学習(予習・復習)等】</b>											
授業中に配布する資料をあらかじめ読んだ上で、授業に必要な授業外学習については、別途授業中 に指示する。											
(その他(オフィスアワー等))											
学修相談にはいつでも応じる。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	文化環境学入門A Introduction to Cultural and Environmental Studies A	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授	中嶋 節子
			国際高等教育院 教授	増井 正哉
			人間・環境学研究科 助教	藤原 学
			人間・環境学研究科 教授	風間 計博
			地球環境学舎 准教授	岩谷 彩子
			人間・環境学研究科 教授	小島 泰雄
			人間・環境学研究科 教授	小方 登
			人間・環境学研究科 准教授	山村 亜希

配当 学年	1,2回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

文化環境学系の文化・地域環境論関係の教員による入門編のリレー講義である。本領域を構成する環境構成論・地域空間論・文化人類学のそれぞれの分野に固有の研究主題と方法を概略的に紹介する。統一テーマは特に設けない。さらには、課題によっては、それらの諸分野を縦断する研究学習方法によって可能となる研究例などを紹介することもある。

#### [到達目標]

文化・地域環境論に関わる、環境構成論・地域空間論・文化人類学の基本的な考え方や概念を理解する。とくに、履修学生の専攻以外の学問に関する分野横断的な知識を習得することにより、自らの研究の幅を広げることを目指す。

#### [授業計画と内容]

地環境構成論・域空間論・文化人類学それぞれ4回ずつ講義を行う。

#### [履修要件]

リレー形式の講義によって、3つの分野について基本的な理解をめざすことから、とくに出席を重視する。

#### [成績評価の方法・観点及び達成度]

出席状況とレポート(2本)により評価する。レポートの課題はそれぞれの教員から提示される。複数の教員にレポートを提出すること。3人以上の教員にレポートを提出した場合は、より高い評価を得た2つレポートについて成績に反映する。

#### [教科書]

授業資料は、それぞれの教員が授業中に指示するか、配布する。

## 文化環境学入門A(2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

各分野の入門文献を事前に読んでおく。また、各教員によって授業中に提示された文献を読解し、自主的に理解を深める。

### (その他(オフィスアワー等))

関心事項については、それぞれの教員に問い合わせること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	文化環境学入門 B Introduction to Cultural and Environmental Studies B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 勝又 直也 人間・環境学研究科 教授 赤松 紀彦 人間・環境学研究科 教授 太田 出 人間・環境学研究科 教授 岡 真理 人間・環境学研究科 教授 小倉 紀蔵 人間・環境学研究科 教授 塩塚 秀一郎					
配当 学年	1,2回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
比較文明論諸分野の基礎的な理論と知識を、各担当教員が具体的なテーマをとりあげて概説します。											
<b>【到達目標】</b>											
それぞれの文明がもつ地域的特性を多角的に分析し、文明相互の交流とその文化的所産について考察するための基礎的な理論と知識を習得する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
文化・環境学系の比較文明論関係の諸教員によるリレー講義です。各教員がそれぞれの専門を生かした入門講義を行います。以下、その一部を紹介します（なお、順序、テーマ、タイトルについては変更の可能性があります）。											
第1、2回：ガイダンス、勝又直也「ユダヤ学入門」											
第3、4回：岡真理「ホロコーストからパレスチナへ～パレスチナ問題の淵源～」											
第5、6回：小倉紀蔵「朝鮮半島の文明論的・文化論的世界観」											
第7、8回：太田出「東アジアにおける関帝信仰」											
第9、10回：赤松紀彦「大田南畝が見た中国伝統劇」											
第11、12回：塩塚秀一郎「母語以外の言語で書く作家たち」											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
平常点とレポートによる。期末レポートについての詳細は第1回目のオリエンテーションのときに説明します。											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>【授業外学習（予習・復習）等】</b>											
各回、参考文献について紹介があるので、授業を聞くだけでなく、興味を持ったテーマについて、こうした参考文献をたねねんに読み解くこと。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
第1回目の授業で全講義のアウトラインおよびレポートの提出方法などを紹介します。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	認知・行動科学入門 Introduction to cognitive & behavioral science				担当者所属・ 職名・氏名	総合人間学部 認知・行動科学関係 教員					
配当 学年	1,2回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
我々は、様々な環境に適応して行動をしている。すなわち、さまざまな刺激を認知し、それに応じて行動する。そうすると、環境がまたかわるから認知し直し、そしてまた行動する。このように認知と行動は我々の生活に常にリンクしている。この認知と行動についてさまざま視点から理解することを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・脳と心，運動や体の働き，健康や体力など，「認知・行動科学」で対象とする研究分野についての理解を深める。</li> <li>・「認知・行動科学」について俯瞰することで，将来の研究分野のより良い選択について知識を習得すると同時に，その最先端の研究に取り組む姿勢を養う。</li> </ul>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
本講義はリレー形式である。齋木教員、月浦教員、神谷教員、山本教員、石原教員、神崎教員、細川教員、久代教員、林教員、船曳教員（順不同）等が講義を行う。日程については、初回授業（ガイダンス）で指示する。認知に関しては、齋木教員、月浦教員、神谷教員、山本教員他、行動制御に関しては、石原教員、神崎教員、細川教員、久代教員他、身体機能に関しては、林教員、船曳教員他が講義を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出欠を重視する。レポートを考慮に入れる場合もある。詳細は授業中に指示する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
各教員が独自で行っている講義等の情報を予めある程度理解しておくことで，より深い理解が得られると思われる。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	言語・数理情報科学入門 Introduction to Linguistic and Mathematical Information Science				担当者所属・ 職名・氏名	総合人間学部 総合人間学部		言語科学関係 教員 数理情報論関係 教員			
配当 学年	1,2回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
認知情報学系の学系入門科目である。言語活動を貫く知のメカニズムの解明、および、数学と情報における基本的な考え方の習得を目標に解説する。											
<b>[到達目標]</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 数学と情報における基本的な考え方を習得する。</li> <li>・ 言語理論と言語記述の基本的な考えや研究方法を習得する。</li> </ul>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>言語科学関係および数理情報論関係所属の教員全員によるリレー講義である。</p> <p>毎回、各教員が自らの専門領域を中心に、言語・数理情報科学関係の初歩的な講義を行う。言語科学の観点からは、音韻・形態、シンタクスに反映される形式と意味の体系からなる記号系と、言葉の伝達のメカニズムの諸相を対象とした講義を行う。数学と情報科学の観点からは、数学的对象・構造の記述形式、情報の数理的側面、画像処理・ネットワークなどの情報技術について概説する。</p> <p>今年度は、前半部分を数理情報論関係の教員が、日程の後半を言語科学関係の教員がそれぞれ担当する。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>言語科学、数理科学それぞれを50点満点で採点し、その合算により成績を出す。</p> <p>どちらも、原則として、毎回の出席を必要条件として、両関係の各一人ずつの教員宛にレポートを提出する。詳細は授業中に指示する。</p>											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
各自で予習・復習を行い、示された課題に取り組むこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	自然科学入門 Introduction to Science				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 木下 俊哉 人間・環境学研究科 教授 田村 類 地球環境学舎 教授 宮下 英明 人間・環境学研究科 教授 石川 尚人					
配当 学年	1,2回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
自然科学についての基礎知識を理解するための入門科目として、物理学、化学、生物、地学の各分野から興味ある話題を選び講義する。それを通じて、私たちをとりまく宇宙・地球・生態系そしてそれらを構成する物質・情報が自然科学的な観点からどのように理解されているか解説する。											
[到達目標]											
自然科学の観点を学び、その基礎を理解する。											
[授業計画と内容]											
主に物理学、化学、生物学、地学から成り立つ自然科学について、各分野の専門家が内容を厳選して講義する。各分野の発展・成果と現在の課題について紹介する。これにより宇宙・地球・生態系という私たちをとりまく環境を理解するための論理・知識・方法論について概観できるようにする。同時にその環境を構成する物質や情報にも目を向け、それらの存在形態を研究しその性質を理解するために必要な概念・方法についても解説する。本講義を受講することで、自然科学系を目指す学生には学問内容を理解する入門的な講義として広く知識を得る助けとなるよう、また他の学系を目指す学生には自然科学全般の概念を理解する助けとなるよう努める。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
レポート，小テスト等											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習(予習・復習)等]											
特になし											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	人間存在論特別演習 Special Seminar on Human Ontology				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 佐藤 義之 人間・環境学研究科 教授 安部 浩 人間・環境学研究科 准教授 戸田 剛文 人間・環境学研究科 准教授 青山 拓央					
配当 学年	4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>この演習は人間存在論関係の学生に対する卒業論文指導の重要な一環である。具体的には履修者各人が人間存在論の諸問題に関する研究を発表し、人間存在論関係の教員全員とともにその検討をおこなう。</p> <p>この演習は必修科目ではないが、人間存在論関係の卒業予定者は、単位の要不要に関わりなく受講されたい。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
人間存在論関係の卒業論文作成のため、哲学論文執筆の技能の習得をめざす。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>人間存在論関係の卒業予定者が各自の研究成果を口頭で報告し、その報告内容を人間存在論担当の全教員および履修学生が批判的に検討・討議する。</p> <p>初回に発表順等の打ち合わせを行う。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
人間存在論を専攻する卒業予定者であること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席点と発表内容の評価との総合評価											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
発表のための原稿を指導教員とよく相談しながら発表日までに作成しておくこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	近代芸術論 A Theory of Modern Arts A				担当者所属・ 職名・氏名	京都工芸繊維大学 工芸学部 教授		並木 誠士			
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
近代京都の美術・工芸											
近代京都の美術・工芸について、その近代化の問題を中心に、東京との比較を通して概観してゆく。とくに社会背景と伝統産業および美術・工芸制作のかかわりに注目して、京都における「近代」の特性およびそこにおける美術・工芸の位相についての理解が深まるように講義を進める。											
<b>[到達目標]</b>											
京都の伝統産業や美術・工芸が、近代を迎えて、機械化や海外市場の展開にどのような対応をしたのか、という点をできるだけ具体的な作品に即して理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
01        ガイダンス											
02 - 05  近代京都の日本画・洋画											
06 - 07  美術学校と図案教育											
08 - 09  京都博覧会と内国勧業博覧会											
10 - 11  京都における美術館・博物館											
12 - 13  伝統工芸の近代 - 陶芸・染織・漆芸											
14        総括											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
学期末の試験とする。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書)											
並木ほか編 『京都 伝統工芸の近代』 (思文閣出版) ISBN:9784784216413											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
京都の美術館、博物館にはなるべく各自で見学に行くこと											
(その他(オフィスアワー等))											
講義はスライド等を用いるので、手元ライトを持参すること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	創造ルネッサンス論 A Art History A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 岡田 温司					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
主に西洋の芸術、芸術思想、現代思想について理解を深め、感性を磨くことを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
専門書を読んで理解し、要点を説明できるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下の分野の中から各自がいずれかを選択し、さらに個別のテーマを設定して、それについて、文献や資料の収集と解説をおこない、さらに成果についてプレゼンテーションする。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．ルネサンスの芸術と思想</li> <li>2．バロックの芸術と思想</li> <li>3．建築の歴史と思想</li> <li>4．デザインの歴史と思想</li> <li>5．近代の芸術と思想</li> <li>6．コンテンポラリーアートをめぐる批評や思想</li> <li>7．芸術・美学思想</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
通年で履修											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、発表											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業中に指示する。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワー 月 12:00 ~ 13:00 木 9:00 ~ 10:30											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											



授業科目名 <英訳>	社会統計論 A Theory of Social Statistics A				担当者所属・ 職名・氏名	神戸大学大学院 農学研究科 教授		金子 治平			
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>社会の現状を認識し，政策の企画・決定・評価するのに不可欠な統計資料をとりあげ，その作成過程や利用過程をテーマとした講義を行う。統計学は，歴史的には国家科学の一分野を出自とし，社会を認識することを目的として発展してきた。本講義では，統計資料の作成過程や利用過程について学ぶことによって，統計資料が作成される必然性，統計資料が映し出す社会的側面，さらに，社会の変容の中で生じている統計資料の作成・利用上の問題とその対策について考え，現代に生きる我々が持つべき情報リテラシーについて理解を深めることを目的とする。</p> <p>近年，政府が作成している家計調査や消費者物価指数に対して，政治的側面からも批判が行われていることも取り上げる。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>社会を認識する情報としての社会経済統計が社会的生産物であることを理解するとともに，統計資料の正しい使い方ができるようになる。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>各トピックについて，それぞれ1～3週の講義を行う予定である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 欧米と日本における人口センサスの歴史</li> <li>3. 標本調査の生成と展開</li> <li>4. 統計資料の真実性</li> <li>5. 社会環境の変化と統計資料の作成過程</li> <li>6. 統計資料の政治的・行政的利用</li> <li>7. ミクロ・データの分析的利用</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
80%は定期試験により評価するが，抜き打ちで行う数回の出席チェックや平常点も20%ほど加味する。											
<b>【教科書】</b>											
適宜，講義中に資料等を配布する。											
----- 社会統計論 A (2)へ続く -----											

## 社会統計論 A (2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

常日頃から経済や政治で利用されている情報とくに統計資料とその作成過程について関心を持つとともに、講義で取り上げた統計資料については各自がインターネット等でどのように作成・利用されているのか、その特徴は何か、などを確認してください。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	比較経営組織論 A Comparative Study of Business Organization A				担当者所属・ 職名・氏名	大阪経済大学経営学部 准教授 林田 修					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
ほとんどの現代人は企業=組織と関わりをもっている。この授業の前半では、なぜ企業は存在するのか、企業はどのような機能を果たすのか、世の中に無数に存在する企業がすべて統合されて単一の企業にならないのはなぜか（組織の限界）、といった問題について、コーディネーション（調整）とモチベーション（動機付け）の視点から考察する。またこの授業の後半では、情報が企業内に偏在し、メンバー間で利害が異なる時、メンバー同士がどのような駆け引きを繰り返すのか、それがどのような影響を企業業績に及ぼすのか、メンバー同士の協調を達成するにはどうしたらいいか、という問題を、メッセージ・ゲームの分析を通して考察する。											
【到達目標】											
組織におけるモチベーション問題やコーディネーション問題を理解し、それぞれに関する練習問題や応用問題を解けるようになること。											
【授業計画と内容】											
以下の各課題について、1～2週間の授業をする予定である。 1. 企業とは何か 2. コーディネーション問題とモチベーション問題 3. 取引費用アプローチ 4. 価値最大化原理とコースの定理 5. アドバース・セレクション（逆淘汰）とエージェンシー理論 6. スクリーニング（選別）と表明原理 7. オークション 8. シグナリング（コストのかかる情報伝達ゲーム） 9. チープ・トーク（コストのかからない情報伝達ゲーム）											
【履修要件】											
高校数学で習う程度の微積分の知識を必要とする。また後期開講予定の「比較経営組織論B」では組織のモラル・ハザード（倫理の欠如）について説明するので、できれば合わせて履修することを薦める。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
学期末試験の成績で評価する。											
【教科書】											
使用しない 配布プリントに従って授業する。教科書は指定しない。											
【参考書等】											
（参考書） 授業中に紹介する 初回の講義で関連文献のリストを配布して解説する（必ずしも購入しなくてよい）。											
----- 比較経営組織論 A (2)へ続く											

## 比較経営組織論 A (2)

### [授業外学習（予習・復習）等]

授業中に配布したプリントを読んで疑問点を明らかにして授業に出席してほしい。また授業が終わった後、わからなかったところを復習し、必要に応じて教員に質問すること。

### （その他（オフィスアワー等））

この授業は高校レベルの数学の知識（超初級の微積分）を必要とするが、基本的に文系学生向けの授業である。もちろん理系学生も大歓迎である。この授業を通じて、一見非合理に見えるかもしれない企業の活動・制度・慣行が実は数学モデルの分析を通じて合理的に説明可能であることを理解してほしい。そして企業経営について論理的に考える習慣を身につけてほしい。丁寧な解説に心がけるが、もし授業内容にわからないところがあれば、遠慮なく質問してほしい。積極的な参加を期待する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	公共政策論基礎ゼミナールII B Introductory Seminar on Public Policy IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 浅野 耕太					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金3	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
様々な領域で実施されている公共政策に関して、その分析に資する経済学などの標準的な教科書を輪読することによって、その必要性や評価軸を学ぶ。その上で、公共政策の基本原則や実際の形成過程を理解し、良き公共政策のありかたを考究する。											
<b>【到達目標】</b>											
公共政策の分析に活用できる経済学の基礎的概念とそれを用いた政策分析の手法を修得し、幅広い公共政策の理解に応用ができるようになること。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
第1回 イン트로ダクション 教科書の概要を説明する。基本的な参考文献などを紹介し、授業の進め方と準備・発表の方法を周知する。また、出席者の担当部分を決定する。											
第2回～第13回 教科書の精読 受講者は教科書の節を分担し、その内容を報告するとともに、問題の解答を行う。 以下のようなテーマそれぞれについて1～2週の授業を行う予定である。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．効率性と厚生</li> <li>2．独占と独占的競争</li> <li>3．価格差別化</li> <li>4．寡占</li> <li>5．割引と現在価値</li> <li>6．労働市場</li> <li>7．人的資本、差別、労働政策</li> <li>8．公共財、外部性、所有権</li> <li>9．税と財政支出</li> <li>10．国際貿易</li> </ol>											
第14回 まとめ 12回にわたる精読の成果をまとめ、残された課題や疑問点について全員で議論する。切りのよいところまで読了できなかった場合、この回を補充に充てることもある。											
<b>【履修要件】</b>											
ILASセミナー：公共政策論IIとの連続履修が強く推奨される。											
----- 公共政策論基礎ゼミナールII B (2)へ続く -----											

## 公共政策論基礎ゼミナールⅡB(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

出席(30点)、報告内容・貢献(70点)により総合的に評価する。個別の成績評価基準は第1回目の授業で説明する。

### [教科書]

Daniel S. Hamermesh 『Economics Is Everywhere, 5th ed.』 (Worth Publishers) ISBN:978-1-4641-8539-7

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

毎回事前に教科書を読んでおき、疑問点を整理した上で、授業に参加すること。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	体育実技III(体操種目) Active Physical Education III(Gymnastics)				担当者所属・ 職名・氏名	高の原スポーツ研究所 代表 金 尚憲					
配当 学年	1-4回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4	授業 形態	実技	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
器械運動が指導できる技能及び技術の獲得											
[到達目標]											
中学校・高等学校の体育教員採用試験に合格できる器械運動技能の獲得											
[授業計画と内容]											
この授業の目的は、体操・器械運動の指導者に必要とされる基本技（倒立、けあがり、腕立て前方転回等々）の習得及びそれらの技に関する指導法、幫助方法などの研修を通して、生徒にとってわかりやすく、楽しく、有益な体操・器械運動の授業が展開できる能力の獲得である。そのため、体操では、生理学、解剖学、力学等の見地から運動を理解し、各種スポーツ及び健康の保持、増進に役立つ働きについて実習、学習する。器械運動では、小・中・高で行われているマット、跳び箱、鉄棒での各種技の復習とその科学的理解及びそれらの技をより大きく、より美しく実施する練習と練習法の工夫、さらには各種技の幫助方法についても実習、学習する。また、必要に応じて平均台、平行棒、鞍馬、吊り輪についても指導する。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席状況及び実技テスト											
[教科書]											
適宜プリント配付											
[参考書等]											
(参考書) なし											
[授業外学習(予習・復習)等]											
この実技授業が十分にできる体調の管理及び指導書等で器械運動の各種技を調べておくこと。 (その他(オフィスアワー等)) オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	体育実技V(野外キャンプ種目) Active Physical Education V(Nature Experience)	担当者所属・ 職名・氏名	滋賀短期大学 准教授 北尾 岳夫
---------------	---	-----------------	------------------

配当 学年	1-4回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	実技	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	---------------	-----	------	----------	----	----------	-----

**【授業の概要・目的】**

テーマ：野外活動を通じた教育について考える。

この授業は、教員免許状の取得を予定している学生の履修を前提としている。よって、本授業で重視する点は、自分自身の野外活動技術を身に付けるというよりも、野外活動を通じた教育の意義を考えてもらうことをねらいとしている。加えてもう一点、日常の授業では出会うことのない他学の学生と接することで、同世代の多様性を理解するとともに、コミュニケーションスキルの向上を図っていただきたい。

実際に参加するキャンプは、担当教員が滋賀短期大学で授業として開講している3泊4日のキャンプである。このキャンプにスタッフ、また参加者の両側面から関わっていただく。運営者側、そして参加者側という2つの側面からこのキャンプに関わることで、学校教育の中で実践されるキャンプの運営方法を理解するとともに、野外活動が持つ教育的意義について考察を深めていただきたい。

**【到達目標】**

- ・ 野外活動教育を目的とする組織の中で、機能的に活動することができる。
- ・ 野外活動における快適な生活環境の確保ができる。
- ・ 野外活動を通して人の多様性を理解する。
- ・ 野外活動の教育的意義について理解する。

**【授業計画と内容】**

開講日程： 事前オリエンテーション（日時は後日連絡）  
本キャンプ 平成29年9月4日（月）～7日（木）  
気象警報などの発令に備え、8日（金）を予備日として設定

開講場所： 事前オリエンテーション（教室は後日連絡）  
本キャンプ 滋賀県希望が丘文化公園野外活動センター

内容： <事前オリエンテーション>

- 1) キャンプの概要説明・スタッフとしての心構え・テント設営練習

- <第1日目> 参加者受け入れ準備
- 2) 本部設営及び現地環境の理解と整備
  - 3) キャンプ・プログラムの理解
  - 4) 受け入れ準備 その1
  - 5) イニシアティブゲーム 実践

- <第2日目> 本キャンプ 第1日
- 6) 受け入れ準備 その2
  - 7) 開講式・本隊環境整備 補助
  - 8) イニシアティブゲーム 補助
  - 9) ナイトウォークラリー 実践

## 体育実技V ( 野外キャンプ種目 ) (2)

- < 第 3 日目 > 本キャンプ 第 2 日
- 10) クラフト その 1 実践
  - 11) クラフト その 2 実践
  - 12) キャンプファイヤー準備 補助
  - 13) キャンプファイヤー スタンツ実践
- < 第 4 日目 > 本キャンプ 第 3 日
- 14) 撤収 補助
  - 15) 振り返り ( 課題レポート )

### [履修要件]

教員免許状取得を目的とする学生の履修が原則ですが、授業目的を充分理解した上で参加するのであれば問題ありません。

また他学の教員、学生との交流を伴います。基本的なコミュニケーションスキルを有する学生の受講を希望します。

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

- ・事前オリエンテーションに対する平常点評価 [出席状況・受講態度] ( 10点 )
- ・キャンププログラムへのスタッフとしての積極的参加度合い ( 30点 )
- ・キャンププログラムへの参加者としての積極的参加度合い ( 30点 )
- ・最終日に現地で課すレポート ( 30点 )

### [教科書]

使用しない

### [参考書等]

( 参考書 )

日本野外教育研究会 編 『改訂キャンプテキスト』 ( 杏林書院 ) ISBN:4-7644-1548-8 ( 野外教育に興味のある学生は、購入してみてもいいかもしれません。 )

前島一義 『アウトドアに役立つロープワーク』 ( ナツメ社 ) ISBN:4-8163-2447-X ( 日常生活に役立つロープワークも学べます。 )

### [授業外学習 ( 予習・復習 ) 等]

この受講を機会に、野外活動で必要なロープワークについて事前学習しておかれることをお勧めします。

今回のキャンプで必要なロープワークは以下。

結 び：もやい結び・まき結び・自在結び・ひと結び・ふた結び

つなぎ：一重つなぎ

束 ね：シガースケットコイル

体育実技V ( 野外キャンプ種目 ) (3)へ続く

体育実技V ( 野外キャンプ種目 ) (3)

( その他 ( オフィスアワー等 ) )

宿泊費、食事費、その他雑費を含め ¥10,000 程度の費用が発生します。現地で徴収します。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	体育実技IV (フットサル・サッカー) Active Physical Education IV(Futsal.Soccer)				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 久代 恵介					
配当 学年	1-4回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	実技	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
本実習ではフットサル種目を通じて、スポーツを生涯にわたり楽しむための知識と技術を身につける。受講者間の相互の関わりを通じてコミュニケーション能力の向上を図るとともに、能動的な運動学習の取り組みによりスキルの向上を目指す。さらに、これらのことから他者に教授するために必要となる理論と技能を習得する。											
<b>[到達目標]</b>											
体育・スポーツを通じた生涯教育の指導者を養成する。スポーツが成し得る教育効果について、必要となる理論を理解する。さらに、体育・スポーツ教育の実践における技能の習得を目指す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1週は、体育館メインフロアにおいてガイダンスを行う。 第2週以降は体育館メインフロアにおいて実習を行う。授業前半は基本的な技術練習と、チームごとに当該時間の目標および課題設定を行う。後半はゲームに取り組む。ゲーム終了後、チームごとにフィードバックを行い、当該時間の目標および課題達成について各人で自己評価する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況と実習への積極性により総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
睡眠と食事をしっかりと摂り、体調を整えて参加すること。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論講義 A Lecture on Literary Representation in English A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 水野 尚之					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
ヘンリー・ジェームズの文学世界  19世紀後半から20世紀初頭にかけて大西洋の両側で創作活動を行なったアメリカ人作家Henry Jamesの生涯を概観しつつ、代表的な作品を精読する。Jamesの作品は次第に難解さを増すと一般に言われているが、実際に作品を精読することにより、先入観や偏見の一部を修正することになるだろう。											
<b>[到達目標]</b>											
19世紀後半から20世紀にいたるアメリカ文学の作品を、様々な資料を参考にしつつ読みこなす。資料収集の方法も学ぶ。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
Henry Jamesの生涯を概観しつつ、代表的な作品の特徴的な個所を精読する。初めに扱うのはJames家の系図とThe Small Boy and Othersであるが、その後は初期から中期にかけての作品、Roderick Hudson、The American、Daisy Miller、Washington Square、Confidence、The Portrait of a Ladyなどを扱う。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常の授業への取り組み(50%)と学期末試験(50%)により、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
あらかじめ配布した資料を十分に予習すること。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論講義 B Lecture on Literary Representation in English B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 水野 尚之					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
ヘンリー・ジェームズの文学世界  19世紀後半から20世紀初頭にかけて大西洋の両側で創作活動を行なったアメリカ人作家Henry Jamesの生涯を概観しつつ、代表的な作品を精読する。Jamesの作品は次第に難解さを増すと一般に言われているが、実際に作品を精読することにより、先入観や偏見の一部を修正することになるだろう。											
<b>[到達目標]</b>											
19世紀後半から20世紀にいたるアメリカ文学の作品を、様々な資料を参考にしつつ読みこなす。資料収集の方法も学ぶ。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
Henry Jamesの生涯を概観しつつ、代表的な作品の特徴的な個所を精読する。初めに扱うのはJames家の系図とThe Small Boy and Othersであるが、その後は中期から後期にかけての作品、The Bostonians、The Turn of the Screw、Guy Domville、The Ambassadors、The Wings of the Doveなどを扱う。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常の授業への取り組み(50%)と学期末試験(50%)により、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
あらかじめ配布した資料を十分に予習すること。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	人間形成論 Theory of Education				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 倉石 一郎					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>&lt;人種・エスニシティと教育改革&gt;  アメリカ合衆国の公教育は、人種・宗教・価値観の多様性とどう向き合うかという課題を宿命的に抱えている。この授業では、二冊のテキスト（『黒人ハイスクールの歴史社会学：アフリカ系アメリカ人の闘い1940-1980』と"Someone Has To Fail: The Zero-sum Game of Public Schooling"）を通して、歴史のおよび社会学的視点から、社会問題の解決の道具として公教育の改革がどのように試みられ、どのような結果が生じたかを考察していく。</p>											
【到達目標】											
1．米国黒人に対する差別と解放の歴史、とりわけ20世紀半ば以降の公民権運動が果たした歴史的意義を正しく理解する。 2．教育における人種隔離segregationと隔離撤廃desegregationの持つ意味を認識し、男女別学や障害児の隔離就学といった問題と関連づける広い視野を養う。 3．社会問題の解決に教育が動員される「社会問題の教育化」現象について正しく理解し、現代日本に応用できるような視点を獲得する。											
【授業計画と内容】											
1．オリエンテーション、授業のねらい 2．～7．米国における公民権運動と学校の人種隔離撤廃の闘い（『黒人ハイスクールの歴史社会学』に即して） 8～13．米国における「社会問題の教育化」の展開（"Someone Has To Fail: The Zero-sum Game of Public Schooling"）に即して 14．全体まとめ											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
レポートによる。評価の観点として、公民権運動の意義、学校の人種隔離がもたらした影響、社会問題の教育化といった重要概念がどれだけ理解され、自分自身の問題につなげることができるようになったかを重視する。											
【教科書】											
倉石一郎他訳 『黒人ハイスクールの歴史社会学：アフリカ系アメリカ人の闘い1940-1980』（昭和堂）ISBN:978-4812215562 Labaree, David F. 『Someone Has to Fail: The Zero-Sum Game of Public Schooling』（Harvard University Press）ISBN:9780674063860											
----- 人間形成論(2)へ続く -----											

## 人間形成論(2)

### [参考書等]

(参考書)

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業で取り上げるテキストの該当ページについて、事前にしっかりと読む込んでくること。事後に再度読み直し、復習すること。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	人間行動論 Human Behavior				担当者所属・ 職名・氏名	非常勤講師 菅 康弘(スガヤスヒロ)					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>場所 をめぐる民衆の文化と生活実践： 故郷 の誕生と近代都市</p> <p>故郷 の形成には近代日本の歩みが凝縮されている。民衆たちの唄いや語りといった生活実践がそこには刻印されている。そして 故郷 は都市の形成とも密接に連動している。本講義では、近代日本の歴史の中で人々の心に、どのように空間や特別な意味をもつ 場所 が構築されてきたかを、様々な大衆文化の資料をもとに解説する。</p>											
【到達目標】											
<p>空間や 場所 は人間に先立って存在するものではなく、人間の関与を通して形成されるものである。そしてこの過程が歴史を構成する。空間や時間といった認知カテゴリーを人間に先立つものと指定せず、人間的営為の産物として考えるような思考法を獲得すること、それこそが本講義の到達目標である。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>基本的に、以下の計画に従って講義を進める。ただし、受講者の状況などに応じて、順番や内容を変更する可能性がある。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>01. 講義全体をレビュー</li> <li>02. 試験問題（またはレポート課題）の発表と解説から講義の留意点を解説</li> <li>03. 都市への移動と近代：外在的移動要因</li> <li>04. 都市への移動と近代：認識的・表象的移動要因</li> <li>05. 中心へのまなざし、周縁へのまなざし</li> <li>06. 国民国家の成立と 故郷 の形成</li> <li>07. 故郷 への語りとその限定性</li> <li>08. 唄われる 故郷</li> <li>09. 都市否定言説の成立：「身は都会に、心は故郷に」</li> <li>10. 都市的孤独の誕生</li> <li>11. 孤独・望郷、慕情の定立</li> <li>12. 望郷 の定立と都市における大衆の生活実践</li> <li>13. 望郷の自律と屈折する 故郷 、そして商品化する 故郷</li> <li>14. 近代化と空間の形成・空間の経験</li> <li>15. 試験（レポートの場合は講義内容の総括）</li> </ol>											
【履修要件】											
特になし											
----- 人間行動論(2)へ続く -----											

## 人間行動論(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

学期末試験（論述形式・複数問から1問選択）によって評価する。レポートの場合は、別途課題を伝達する。

### [教科書]

使用しない

### [参考書等]

（参考書）  
授業中に紹介する

### [授業外学習（予習・復習）等]

授業中に指示する。

### （その他（オフィスアワー等））

人間・環境学研究科、文学部、文学研究科と共通の授業。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	社会情報論 Socio-Information Studies				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 吉田 純					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
ハーバーマス、ギデنز、ベック、ルーマンらの社会理論を枠組として、インターネット空間を中心とした情報ネットワーク社会の諸問題について考察する。											
【到達目標】											
現代の情報ネットワーク社会の諸問題について、社会学を中心とした学術的観点から理解できるようにする。											
【授業計画と内容】											
以下の計画で講義をおこなう。											
1 オリエンテーション 2 情報ネットワーク社会への視点 3 日本社会の情報化 情報化の現代史(1) 4 アメリカ社会の情報化 情報化の現代史(2) 5 監視社会論 システムの情報化(1) 6 リスク社会論 システムの情報化(2) 7 経済システムの情報化 システムの情報化(3) 8 再帰的近代化としての情報化 生活世界の情報化(1) 9 ネット空間の展開 生活世界の情報化(2) 10 生活世界のリアリティの再構築 生活世界の情報化(3) 11 公共圏の情報化 12 親密圏の情報化 13 公共圏 / 親密圏の再編成 14 情報ネットワーク社会論の再構築											
【履修要件】											
社会学関係の全学共通科目または学部での概論科目を履修していることが望ましい											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
素点(100点満点)で評価する。 ・平常点(40点)+期末レポート(60点) ・平常点は、PandAまたはTwitterを用いた課題の提出による (詳細はオリエンテーションで説明)											
----- 社会情報論(2)へ続く -----											

## 社会情報論(2)

### [教科書]

使用しない

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

- ・毎回の授業資料を、前日午前中までにPandAの「リソース」にアップロードするので、あらかじめダウンロードし、予習しておくこと。
- ・TwitterおよびPandAの「フォーラム」を、授業前・授業中・授業後の質疑応答・感想等の提出に利用するので、積極的に活用すること。

### (その他(オフィスアワー等))

PandAで、資料配付・課題提出・質問受付・その他の各種連絡をおこなう。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	生命倫理学 Bioethics				担当者所属・ 職名・氏名	こころの未来研究センター 特定助教 清家 理					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>高齢化社会の問題等を中心に、社会学や倫理学の立場から死生観を比較文化論的に探求する。例えばインフォームド・コンセント（治療選択・自己決定権）、Truth-Telling（告知）、医療情報の公開・透明性・所有権、を出発点として、公共資源分配と医療保険制度の問題点を提起し、また医療倫理学の思考法の問題点も検討する。また限られた医療経費や医療資源の分配における優先順位（誰がもらえて、誰がもらえないか）を決めるのも、生命倫理の重要課題である。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>医学倫理は、社会の倫理道徳的行動基盤、生と死に関する究極的な価値基準、生き方と死に方の理想像などによるものである。マニュアルやルールブックによつ絶対唯一の正解ではなく、その文化と状況に応じて最も相応しい倫理行動を探る、頭の訓練を繰り返す。コンフリクトに出遭う時、狭い主観的な見地から、より多元・多様な見解・理解ができるようになることは、本授業の取り上げる思考実験による問題解決のみならず、今後の人生に於いても有益なスキルになると思われる。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>授業は主に下記の課題を検討する予定：</p> <p>1回目 自己紹介と生命倫理学の紹介  2回目 症例紹介とその分析法  3回目 人口と医療福祉費配分問題  4回目 家庭内暴力・虐待  5回目 重大欠陥新生児  6回目 障害者福祉  7回目 致命的選択  8回目 優先順位  9回目 QALYs  10回目 医療政策  11回目 尊厳死・安楽死  12回目 ACP・AD・POLST  13回目 脳死・臓器移植  14回目 死別と悲嘆のケア  15回目 まとめ・フィードバック</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
<p>平常点評価 出席40%、中間課題20%、期末課題40%  毎回の提出物、授業への積極的な参加や発言などを総合的に評価する。</p>											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
----- 生命倫理学(2)へ続く -----											

生命倫理学(2)

---

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

毎回、宿題を提出してもらい、前回の宿題を返却する。  
その積み重ねの過程によって、スキルが身に付くので、  
途中で休んだりすると、次の段階が分からなくなる。  
よって、毎回の出席と宿題提出が重要になる。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーは事前のアポでお願い致します。  
時間と場所を確認した上、お越し下さるよう、よろしくお願い致します。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	人間形成史論 History of Education				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 小山 静子					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>近代日本における子ども観や人間形成のあり方を、家庭や学校での教育のあり方に焦点を当てながら、社会史的な観点から考察する。特に、近代的な学校教育の成立に関連づけて、「授かりものから「作るもの」「育てるもの」への子ども観の変化や、「家」の教育から家庭の教育への変化を取り上げる。</p>											
【到達目標】											
<p>子ども観や人間形成のあり方を歴史的な視点に立って理解できるようになる。 家庭や学校での教育のあり方について、歴史的事実に基づいて考察していく能力を養う。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>基本的には以下の計画に沿って、各回1～2時間の講義を行う。ただし、受講者の理解の状況によって、若干、変更する場合がある。</p>											
<p>1. 「家」の子ども (1) 江戸時代の「家」 (2) 「家」の教育</p>											
<p>2. 「家」と共同体</p>											
<p>3. 墮胎・間引き・捨て子 (1) 墮胎・間引き・捨て子の存在 (2) 出生抑制の理由</p>											
<p>4. 明治民法と「家」制度 (1) 民法の制定 (2) 民法の制定にともなう家族の変化</p>											
<p>5. 家庭の成立 (1) 家庭の登場 (2) 家庭像の啓蒙 (3) 新中間層の家族</p>											
<p>6. 学校教育と家庭教育 (1) 学校教育制度の成立 (2) 家庭教育論の登場 (3) 教育家族の成立</p>											
<p>7. 墮胎・避妊をめぐる動向 (1) 近代刑法の制定 (2) 避妊・墮胎をめぐる多様な感性 (3) 産児制限の議論と運動の展開</p>											
<p>8. 人口政策の展開</p>											
<p>9. 家族計画の時代 (1) 優生保護法の成立 (2) 家族計画運動 (3) 優生保護法の改正問題</p>											
<p>10. 家庭づくり (1) 教育家族の一般化 (2) 優生の思想 (3) 家庭づくり政策</p>											
----- 人間形成史論(2)へ続く -----											

## 人間形成史論(2)

### 【履修要件】

歴史に対する興味や関心をもっていることが望ましい。

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

学期末におけるレポート

### 【教科書】

使用しない

授業中に資料プリントを配布する。

### 【参考書等】

(参考書)

授業中に紹介する

### 【授業外学習(予習・復習)等】

教育に関する幅広い知見を獲得できるように、普段から教育に関する興味・関心を養い、教育史や家族史に関する書物に親しんでおくこと。

授業中に指示した参考文献の中から興味があるものを読むこと。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーは、木曜日の3時間目。ただし、事前にメールで予約をとること。メールアドレスは1回目の授業の際に伝える。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	精神病理学・精神分析学 Psychopathology. Psychoanalysis				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 松本 卓也					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
精神病理学と精神分析学による精神疾患の理論について学ぶ。											
<b>【到達目標】</b>											
自閉症（自閉症スペクトラム）の当事者の手記や映画などを参照し、自閉症において生じている体験を理解する。そして、精神病理学と精神分析学の立場からその体験の構造の理解につなげる。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
基本的に以下のプランに従って講義を進め、適宜、受講生にも発表を行ってもらおう。ただし講義の進みぐあい、時事問題への言及などに対応して順序や同一テーマの回数を変えることがある。											
第1回 自閉症とは何か 第2回 自閉症の歴史 第3回 手記と映画からみる自閉症（1） 第4回 手記と映画からみる自閉症（2） 第5回 手記と映画からみる自閉症（3） 第6回 手記と映画からみる自閉症（4） 第7回 自閉症への精神病理学からのアプローチ（1） 第8回 自閉症への精神病理学からのアプローチ（2） 第9回 自閉症への精神病理学からのアプローチ（3） 第10回 自閉症への哲学思想からのアプローチ（1） 第11回 自閉症への哲学思想からのアプローチ（2） 第12回 自閉症への哲学思想からのアプローチ（3） 第13回 自閉症への精神分析からのアプローチ（1） 第14回 自閉症への精神分析からのアプローチ（2） 第15回 フィードバック											
フィードバック方法は別途連絡します。											
<b>【履修要件】</b>											
精神病理学・精神分析学関連の科目を1つ以上履修しているか、並行して受講中であること。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
各受講生が授業内で行った発表、および平常点をそれぞれ50%の割合で評価する。											
----- 精神病理学・精神分析学(2)へ続く -----											

## 精神病理学・精神分析学(2)

### [教科書]

授業中に指示する

### [参考書等]

(参考書)

ウタ・フリス 『自閉症とアスペルガー症候群』(東京書籍) ISBN:448776159X

村上靖彦 『自閉症の現象学』(勁草書房) ISBN:4326153954

内海健 『自閉症スペクトラムの精神病理: 星をつぐ人たちのために』(医学書院) ISBN:4260024086

### [授業外学習(予習・復習)等]

予習として、参考書の読書。復習として、授業中に配布したプリントと自分自身のノートの内容を照らしあわせて理解を深めること。受講生には講義内で発表を行ってもらうため、その準備を行うこと。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	動態映画文化論IA Cinema Studies IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 木下 千花					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>&lt;フェミニズム映画批評の過去と現在&gt; 「見る」「見られる」関係を基盤にして感覚に直接訴える媒体（メディアム）であり、娯楽であり、商品である映画は、現実の社会のジェンダーやセクシュアリティのあり方を再生産し、分節化し、折衝し、批判してきた。本授業では、1970年代以降の英語圏を中心としたフェミニズム映画批評の代表的テキストを読み、主要な論点を理解するとともに、日本における文脈と対話させつつ、現在の多様化したアプローチに触れる。</p>											
【到達目標】											
<p>1) 1970年代以降、英語圏の映画理論を牽引したフェミニズム映画批評／理論の中心的な問題系を理解する。  2) 1)をふまえ、映像作品におけるジェンダー／セクシュアリティの問題についての意識を高め、議論できるようになる。  3) フェミニズム映画批評／理論とのかかわりつつ、方法論的な意識のある論文を書く。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>(予定)</p> <p>Part 1 フェミニスト映画批評／理論：The Beginning</p> <p>第1回 イントロダクション</p> <p>第2回 「視覚的快楽と物語映画」とそのインパクト</p> <p>第3回 「女性観客」とジャンル</p> <p>第4回 ケーススタディ：メロドラマ</p> <p>第5回 若尾文子的問題</p> <p>Part 2 流動的観客性への理論的試み: Feminist Film Criticism Rising</p> <p>第6回 マゾヒズム1（ドゥルーズとスタンバーグ+ディートリッヒ）</p> <p>第7回 マゾヒズム2（女性観客と男性スター）</p> <p>第8回 ボディ・ジャンル</p> <p>第9回 ケーススタディ：ホラー</p> <p>第10回 仮装からパフォーマンス・ヴィティティへ</p> <p>Part 3 多様化と歴史化: The State of the Field</p> <p>第11回 クィアな観客性と原節子的问题</p> <p>第12回 女性監督</p> <p>第13回 フェミニスト映画史：女性パイオニアの発掘</p> <p>第14回 妊娠映画序説</p> <p>第15回 期末論文テーマ発表</p>											
【履修要件】											
特になし											
----- 動態映画文化論IA(2)へ続く -----											

## 動態映画文化論IA(2)

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

発表もしくは中間レポート（30％）、期末論文（60％）、出席・授業参加（10％）

### 【教科書】

ondA（e-learning）を活用し、必読のテキストおよび資料はPDFファイルで配布する。

### 【参考書等】

（参考書）  
授業中に紹介する

### 【授業外学習（予習・復習）等】

講読資料配付および情報伝達のためPandA（e-learning）を活用する。履修者は毎週必ず配布されたテキストを読み、予習をしたうえで発表・議論に積極的に参加することを前提とする。また、授業時間以外でも映画を鑑賞することが必要になる。具体的な作品名、手続きについては第1回に説明する。

### （その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	動態映画文化論 I I A Cinema Studies IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 松田 英男					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
ジャンル映画についての具体的考察を行うとともに、研究論文を読みます。											
<b>【到達目標】</b>											
アメリカを中心としたジャンル映画について、基礎的な知識、洞察を獲得すること。各ジャンルについての視点の確立、代表的な作品についての基本的な理解を確保すること。最終的に、自分なりの立場、注目すべき作品を定められるようになることが目標となります。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
映画を具体的な相貌のもとにとらえるためには、映画テキストを丹念に観ることはもちろん、批評および映画史の理解が不可欠です。アメリカ映画を中心に代表的なジャンルを選び、具体的作品に即して考察します。											
初回はジャンル映画についての説明。以降、西部劇、ギャング映画、スクリーンボール・コメディ、フィルム・ノワール、ミュージカル映画、女性映画、SF映画、アニメーション映画について、代表的な論文を取り上げ、読んでいきます。読み終わられない分については、教室外で読むことを求めます。											
アニメーション映画（ディズニー、ドリームワークス、ユニヴァーサル、ライカなど他社の作品）、そして、今をときめくアメリカン・コミックヒーローの実写映画化作品が多くなるかもしれません。											
<b>【履修要件】</b>											
英語圏の映画に興味があり、自分で作品を相当数観る時間と意欲があること。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
小テスト、発表等で総合的に評価します。「講義」より「演習」に近いスタイルを志向。テキストを10数頁ほど事前に丹念に読み、授業で報告することを求めます。											
常時出席が前提。3回以上欠席した場合は、成績評価の対象とはなりません。遅刻は欠席に準じた扱いになります。											
----- 動態映画文化論 I I A (2)へ続く -----											

## 動態映画文化論 I I A (2)

### [教科書]

Matthew J. McEniry et al. 『Marvel Comics into Film: Essays on Adaptations Since the 1940s』 (McFarland) ISBN:978-0786443048 (マーベル・コミックの実写映画化作品についての本格的な論文集。各自用意すること。)

Web経路ないしプリントにより、資料を随時配付します。

### [参考書等]

(参考書)

随時、紹介します。HPの"Required Reading"にも掲載しています。

(関連URL)

<http://www.eonet.ne.jp/~wildbird/00entrance.html>(プリントおよび資料の配付、各種連絡などを行います。)

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業で扱う映画作品について視聴し、教科書、プリント、Web批評を参考に、映画史的価値、問題点等について考えておくこと。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	近代芸術論演習 A Seminar on Theory of Modern Arts A				担当者所属・ 職名・氏名	京都造形芸術大学 教授 上村 博					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>21世紀になっても随分になりますが、明治になってからまだ150年も経っていない、ともいえることができます。今日、自明のものとして受け入れられているさまざまな芸術制度は、西欧でも、精々のところ、200年ほど前にできたものです。それは「芸術」というジャンルそのものの概念をはじめ、感性や美、そして技術や知を巡る理論的反省の歴史ときわめて強くむすびついています。本科目では近代の芸術論の成立に至るまでの諸理論を、古典的テキスト（日本語版を使用）に基づきながら辿り、今日の芸術制作や受容を規制する枠組みがどのように形成されたのかを考察します。授業では受講者ごとに数回の分担課題（文献紹介）の口頭発表が求められます。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>芸術とそれに関連する基本的諸概念の成立を歴史的に理解し、今日の芸術の理論と制度について批判的な視点を獲得すること。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 「芸術」"art" という領域の成立</li> <li>2 形式と模倣（ミーメーシス）の問題</li> <li>3 有機体と完結性</li> <li>4 科学としての芸術</li> <li>5 「創造」概念の出自</li> <li>6 デザイン（Disegno）という概念</li> <li>7 天才の人間化</li> <li>8 感性の諸理論</li> <li>9 「美」をめぐる諸理論</li> <li>10 視覚と芸術史</li> <li>11 進歩と芸術史</li> <li>12 諸国民の芸術と文化遺産の問題</li> <li>13 環境決定論と芸術の地域性</li> <li>14 純粹視覚性の近代美学</li> <li>15 現代芸術の諸問題</li> </ol> <p>以上の進行は学生の関心や理解に応じて変更する場合があります。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
<p>概説書等で美術史や哲学史の流れを把握しておくことが望ましいです。必須というわけではありません。</p>											
----- 近代芸術論演習 A (2)へ続く -----											

## 近代芸術論演習 A(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

授業時の発表により評価し、その内容と授業への参加度（各発表者への質問やコメント）によります。

### [教科書]

資料については授業時に適宜配付。

### [参考書等]

（参考書）  
授業中に紹介する

### [授業外学習（予習・復習）等]

授業前には、プラトーン、アリストテレス、アルベルティ、レオナルド、ヴィンケルマン、カント、ヘーゲル、リーグル、フィードラーの著作について下調べをしておいてください。  
授業後には、授業中に紹介した諸文献について、自分の発表担当箇所以外も含め、再読してそれぞれの著作の意義を整理するとともに、今日の芸術言説を観察して授業で得られた知見と照らし合わせてください。

### （その他（オフィスアワー等））

担当講師は授業後早めに移動しますので、授業に関する質問や相談がある場合は、あらかじめその旨を講師にお伝えください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	近代芸術論演習 B Seminar on Theory of Modern Arts B				担当者所属・ 職名・氏名	神戸大学 教授 前川 修					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>写真論といえば、つねにベンヤミン、バルト、ソントグという写真論御三家が参照されてきた。しかしそれ以後に発表された、バーギン、セクーラ、タッグらのポストモダンの写真論（ボルトン『意味の抗争』）、あるいはオクトーバー派の写真論（クラウス、ブクロー）、その後のバッチェンの写真論、あるいは90年代以降のデジタル写真言説などは、依然として包括的に議論されてはいない。この授業では、こうした写真論の系譜を紹介するとともに、さらに写真の圏域を広げ、視覚文化のなかでの写真の位置や問題を具体的に考えてみたい。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
写真発明以来のさまざまな写真言説を理解できるための基本的な考え方を養う。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 イントロダクション</li> <li>2 モダニズム写真論（シャーカフスキー）</li> <li>3 モダニズム写真論への批判（タッグ、セクーラ）</li> <li>4 バルトの写真論</li> <li>5 バルトの写真論</li> <li>6 ベンヤミンの写真論</li> <li>7 ベンヤミンの写真論</li> <li>8 ヴァナキュラー写真論（バッチェン）</li> <li>9 ヴァナキュラー写真論（カルト・ド・ヴィジット）</li> <li>10 写真と心霊主義</li> <li>11 アマチュア写真論</li> <li>12 デジタル写真論</li> <li>13 デジタル写真論</li> <li>14 まとめ</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
分野は問わないが、写真映像への基本的な関心をもつ受講者を希望します。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
<p>平常点評価（出席、授業内での発表および発言）  出席は各4点（×12＝48点）  授業内での発表および発言はその回数とその内容により、評価する（52点満点）。</p>											
----- 近代芸術論演習 B (2)へ続く -----											

近代芸術論演習 B (2)

**[教科書]**

使用しない

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習 (予習・復習) 等]**

日常の写真映像の遍在について関心をもつこと。  
予習に最低 1 時間、復習に30分をとること。

**(その他 (オフィスアワー等) )**

授業中に指示した文献を各自読んでおくこと。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	人間形成史論演習 A Seminar on History of Education A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小山 静子					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
人間形成史（日本教育史やジェンダー史）に関する考察を深める。3回生にとっては卒業論文作成の最初のステップとなり、4回生にとっては卒業論文作成のための演習となる。											
<b>[到達目標]</b>											
人間形成史に関する幅広い知識を獲得するとともに、人間形成に関する諸問題について歴史的に考察する能力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>第1回目 イン트로ダクション 授業のねらいを説明し、進め方と準備・発表の方法を周知する。また出席者の担当部分を決定し、報告の予定を決める。</p> <p>第2～7回目 人間形成史（日本教育史やジェンダー史）に関する史料や論文をいくつか選んで講読する。</p> <p>第8～14回目 各自の興味・関心にしたがって研究を進め、報告する。 いずれにあっても、毎回、受講者の報告に基づいて討論を行い、そのことを通して、各自の問題関心への理解を深めるとともに、問題意識の明確化を図る。また、卒業論文作成に向けての準備も行う。 フィードバックの方法は別途連絡する。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
人間形成史論演習 B との連続履修を推奨する。3・4回生での重複履修可。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>授業での報告・討論をうけて、レポートを作成する。成績評価はそのレポート（70点）に討論への積極的な参加状況（30点）を加味して行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3分の2以上授業に出席しなかった場合は、単位を認めない。</li> <li>・独自の視点からのレポートについては、高い点を与える。</li> </ul>											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
史料や論文の講読に関しては、担当者は担当部分を精読し、必要に応じて参考文献に目を通したうえで、レジュメを作成すること。他の参加者も必ず当該部分を予習して授業に出席すること。各自のテーマに関する報告の際には、事前に十分調査したうえで、報告を行うこと。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーは、木曜日3時間目。ただし、あらかじめメールで予約をとること。メールアドレスは、1回目の授業の際に伝える。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	人間形成史論演習 B Seminar on History of Education B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小山 静子					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
人間形成史（日本教育史やジェンダー史）に関する考察を深める。3回生にとっては卒業論文作成の最初のステップとなり、4回生にとっては卒業論文作成のための演習となる。											
<b>[到達目標]</b>											
人間形成史に関する幅広い知識を獲得するとともに、人間形成に関する諸問題について歴史的に考察する能力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>第1回目 イン트로ダクション 授業のねらいを説明し、進め方と準備・発表の方法を周知する。また出席者の担当部分を決定し、報告の予定を決める。</p> <p>第2～7回目 人間形成史（日本教育史やジェンダー史）に関する史料や論文をいくつか選んで講読する。</p> <p>第8～14回目 各自の興味・関心にしたがって研究を進め、報告する。 いずれにあっても、毎回、受講者の報告に基づいて討論を行い、そのことを通して、各自の問題関心への理解を深めるとともに、問題意識の明確化を図る。また、卒業論文作成に向けての準備も行う。 フィードバックの方法は別途連絡する。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
人間形成史論演習 A との連続履修を推奨する。3・4回生での重複履修可。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>授業での報告・討論をうけて、レポートを作成する。成績評価はそのレポート（70点）に討論への積極的な参加状況（30点）を加味して行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3分の2以上授業に出席しなかった場合は、単位を認めない。</li> <li>・独自の視点からのレポートについては、高い点を与える。</li> </ul>											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
史料や論文の講読に関しては、担当者は担当部分を精読し、必要に応じて参考文献に目を通したうえで、レジュメを作成すること。他の参加者も必ず当該部分を予習して授業に出席すること。各自のテーマに関する報告の際には、事前に十分調査したうえで、報告を行うこと。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーは、木曜日3時間目。ただし、事前にメールで予約をとること。メールアドレスは1回目の授業の際に伝える。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	精神病理学・精神分析学演習 A Seminar in Psychopathology and Psychoanalysis A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 松本 卓也					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
精神病理学・精神分析学の分野で研究を行い、論文を作成するための演習である。特に、この分野で卒論作成を目指す3・4回生を主たる対象とする。											
<b>[到達目標]</b>											
テーマの見つけ方と展開の仕方を学び、資料を集めて整理し、論文の論理構成を考えて執筆に至るまでの流れを体験し、人間についての何らかの問題を学問的に専門性を発揮しながら捉え論じる力を身に着ける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
担当教員との相談により自ら研究テーマを決めて発表と討論を行う。大学院との共同演習になるので、この分野の研究内容を知ることにより自らのテーマへの考察を深めてほしい。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点による。											
<b>[教科書]</b>											
未定											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
原稿を作成したり、討論の内容を反映させて原稿を充実させたりする作業に取り組むこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	精神病理学・精神分析学演習 B Seminar in Psychopathology and Psychoanalysis B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 松本 卓也					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
精神病理学・精神分析学の分野で研究を行い、論文を作成するための演習である。特に、この分野で卒論作成を目指す3・4回生を主たる対象とする。											
<b>[到達目標]</b>											
人間科学、とくに精神分析や精神病理学に関係のある分野について、問題を見つけて展開し、論文として構成する力を身に着ける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
担当教員との相談により自ら研究テーマを決めて発表と討論を行う。大学院との共同演習になるので、この分野の研究内容を知ることにより自らのテーマへの考察を深めてほしい。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点による。											
<b>[教科書]</b>											
未定											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
取り組むべき問題について、これまでに行われた他の人々の取り組みを文献で調べたり、自分の考えを書いてみたりすること。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	社会情報論演習 A Seminar on Socio-Information Studies A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 吉田 純					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
社会情報論の領域における卒業論文作成のための演習をおこなう。											
<b>[到達目標]</b>											
社会情報論の領域における先行研究の整理をおこない、あわせて、問題設定・論理構成・論文形式等につき、卒業論文を作成するうえで必要となる研究力量を身につける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
受講者各自の問題関心にに基づき、情報と社会との関係、あるいは現代の情報ネットワーク社会の諸問題をめぐる内外の最新の関連文献の中からとくに重要と考えられるものを選んで報告する。毎回、受講者の分担報告に基づいて討論をおこない、各自の関心領域への理解を深めるとともに問題意識の明確化をはかることによって、卒業論文作成に向けての準備をおこなう。											
スケジュールは、第1回目の授業で受講者の希望に基づき調整する。											
<b>[履修要件]</b>											
後期の「社会情報論演習 B」への連続した履修を強く推奨する。											
なお、本演習で卒業論文作成指導を受けることを希望する学生は、3回生時に「人間行動論演習A,B (柴田悠准教授)を履修し、4回生時に本演習および「社会情報論演習 B」を履修することが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点により、素点(100点満点)で評価する。											
・出席率が6割に満たない場合は、原則として単位を認めない。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
自身の研究報告の前提として、事前に十分な時間を取り、教員やTAに相談して、文献の選び方、問題設定のしかた等について指導を受けること。											
研究報告完了後も、教員、TA、および他の受講者から受けたアドバイスを参考にし、卒業論文作成に向けて、文献やデータの収集・整理・読解をひきつづきおこなうこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	社会情報論演習 B Seminar on Socio-Information Studies B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 吉田 純					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
社会情報論の領域における卒業論文作成のための演習をおこなう。											
<b>[到達目標]</b>											
3回生は、社会情報論の領域における先行研究の整理をおこない、あわせて、問題設定・論理構成・論文形式等につき、論文作成に必要な研究力量を身につけ、4回生での卒業論文作成に向けての十分な準備をおこなう。											
4回生は、卒業論文を完成させる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
社会情報論および社会情報論演習 A で学んだ内容を踏まえ、情報と社会との関係、あるいは現代の情報ネットワーク社会の諸問題にとくに関心をもつ学生を対象として、卒業論文作成のための演習をおこなう。受講者各自の論文作成計画の報告に対して、指導・助言および出席者全員での討論をおこなう。											
スケジュールについては、原則として第1回目の授業で、受講者の希望に基づき調整する。											
<b>[履修要件]</b>											
前期の「社会情報論演習 A」からの連続した履修を強く推奨する。 なお、本演習で卒業論文作成指導を受けることを希望する学生は、3回生時に「人間行動論演習 A, B (柴田悠准教授)を履修し、4回生時に「社会情報論演習 A」および本演習を履修することが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点により、素点(100点満点)で評価する。 ・3回生は、期末レポートの提出を条件とする(レポートの評価は平常点に含める)。 ・出席率が6割に満たない場合は、原則として単位を認めない。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
・自身の研究報告の前提として、事前に十分な時間を取り、教員やTAに相談して、文献の選び方、問題設定のしかた等について指導を受けること。 ・研究報告完了後も、教員、TA、および他の受講者から受けたアドバイスを参考にし、卒業論文作成に向けて、文献やデータの収集・整理・読解をひきつづきおこなうこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論演習IA Seminar on Literary Representation in English IA	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 小島 基洋
---------------	---	-----------------	---------------------

配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

### [授業の概要・目的]

《テキストを読む批評》を読む

[1] 《テキスト》を読む

突然、現れた目の前の作品に如何に反応し得るのか。

小説、詩から、映画、絵画まで、様々なテキストを即興で「読む」。

[2] 《テキストを読む批評》を読む

そのテキストを過去の知性は如何に読んだのか。

批評家の思考の軌跡を「読む」。

### [到達目標]

作品の批評を高いレベルで実践する力を涵養する。

### [授業計画と内容]

#### 【テキスト】

『ダロウェイ夫人』『こころ』『モナリザ』『カラマーゾフの兄弟』

『ボヴァリー夫人』『マンズフィールド・パーク』『四つの署名』

『ピアノ・レッスン』『灯台へ』『ギリシャ壺に寄せる頌歌』

『出エジプト記』『フランケンシュタイン』『異邦人』

#### 【予定】

第1～5回 演習・講義

[印象批評] ペイター(Walter Pater)

[物語論] フロイト(Sigmund Freud)

[構造主義] バルト(Roland Barthes)

[テーマ批評] プーレ(George Poulet)

第6～7回 批評紹介

第8～12回 演習・講義

[ポスト構造主義] ドマン(Paul de Man)

[ポスト・コロニアル批評] サイド(Edward Said)

[新歴史批評] グリーンブラット(Stephen Greenblatt)

[理論]以後 イーグルトン(Terry Eagleton)

第13～14回 批評実践

#### 【内容】

演習・講義 テキストを読み、それに関する批評文を読む

批評紹介 受講者が批評家の優れた批評文を紹介、全員で検討。

批評実践 受講者が作品を選び、批評を執筆、全員で検討。

英米文芸表象論演習IA(2)

**【履修要件】**

特になし

**【成績評価の方法・観点及び達成度】**

批評の 紹介 実践 での提出物を評価する。  
前者が40%、後者が50%、受講者間の評価10%。

**【教科書】**

授業中に指示する

**【参考書等】**

(参考書)  
ピーター・バリー 『文学理論講義』(ミネルヴァ書房)

**【授業外学習(予習・復習)等】**

各自、優れた批評文、また、自らが批評すべき対象となる作品を探しておくこと。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論演習IB Seminar on Literary Representation in English IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 小島 基洋					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<b>【ジョイスの『ダブリン市民』を読む】</b>											
James Joyceの短編集Dubliners(1914)を読み解く。 20世紀文学を極限まで押し進めたジョイスの出発点の本短編集である。											
告解室で忍び笑う神父、少女がはめた銀の腕輪、自動車レースの熱狂、 選挙事務所で飲むスタウト、音楽界とウィスキーと鉄道事故、シャノン川に降り続く雪。											
アイルランドの首都ダブリンを舞台に、市井の人々の日常を丹念に描き出した本作は、 一見すると単純なリアリズム小説のようであるが、その企みは恐ろしく深い。											
<b>【到達目標】</b>											
短編を味読し、その文学的な核心を捉える力を涵養する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<b>【演習の流れ】</b>											
テキストをその場で読む。 内容に関する説明、および議論。											
<b>【予定】</b>											
第1回 イントロダクション											
第2回～13回 各短編を読む											
第14回 レポート検討会											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
最終回のレポートで評価する。											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
----- 英米文芸表象論演習IB(2)へ続く -----											

英米文芸表象論演習IB(2)

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

レポート作成に必要な作品、批評を読むこと。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論演習II A Seminar on Literary Representation in English IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 水野 尚之					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
研究テーマを設定し、卒業論文としてまとめるまでのプロセスをとおり、研究方法を学びながらそれを応用・実践する力を養う。											
<b>[到達目標]</b>											
英語による卒業論文執筆の実践、資料収集、論理的な文章作成、などの能力を高める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
受講生自身の研究報告、発表を中心にして、卒論指導を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
授業担当者が指導教員であること											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
報告・発表・作成論文内容などにより、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
積極的に資料・文献を収集してほしい。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーは火曜2時限、火・金曜12:00~13:00、ほか研究室在室時。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論演習II A Seminar on Literary Representation in English IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 廣野 由美子					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
研究テーマを設定し、卒業論文としてまとめるまでのプロセスをとおり、研究方法を学びながらそれを応用・実践する力を養う。											
<b>[到達目標]</b>											
自分で研究テーマを設定し、リサーチを行い、議論の構成を練り、論文を書くという練習を行う。それによって、学部で学んだことを総まとめすると同時に、研究のための基礎的な力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
受講生自身の研究報告、発表を中心にして、卒論指導を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
授業担当者が指導教員であること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
報告・発表・作成論文内容などにより、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
発表・報告の準備をする。適宜、原稿・資料等を用意する。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
集中講義として履修登録のうえ、詳細は担当教員と相談すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論演習II A Seminar on Literary Representation in English IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 小島 基洋					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
研究テーマを設定し、卒業論文としてまとめるまでのプロセスをとおして、研究方法を学びながらそれを応用・実践する力を養う。											
<b>[到達目標]</b>											
学術的に意義のある卒業論文を完成させる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
受講生の研究報告、発表を中心として、卒業論文指導を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
授業担当者が指導教員であること											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
報告、発表、作成論文内容などにより、総合的に判断する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
十分な準備をして発表に臨むこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
集中講義として履修登録のうえ、詳細は担当教員と相談すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論演習II B Seminar on Literary Representation in English IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 水野 尚之					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
研究テーマを設定し、卒業論文としてまとめるまでのプロセスをとおして、研究方法を学びながらそれを応用・実践する力を養う。											
<b>[到達目標]</b>											
英語による卒業論文執筆の実践、資料収集、論理的な文章作成、などの能力を高める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
受講生自身の研究報告、発表を中心にして、卒論指導を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
授業担当者が指導教員であること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
報告・発表・作成論文内容などにより、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
積極的に資料・文献を収集してほしい。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーは火曜2時限、および火・金曜12:00~13:00、ほか研究室在室時。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論演習II B Seminar on Literary Representation in English IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 廣野 由美子					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
研究テーマを設定し、卒業論文としてまとめるまでのプロセスをとおり、研究方法を学びながらそれを応用・実践する力を養う。											
<b>[到達目標]</b>											
自分で研究テーマを設定し、リサーチを行い、議論の構成を練り、論文を書くという練習を行う。それによって、学部で学んだことを総まとめすると同時に、研究のための基礎的な力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
受講生自身の研究報告、発表を中心にして、卒論指導を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
授業担当者が指導教員であること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
報告・発表・作成論文内容などにより、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
発表・報告の準備をする。適宜、原稿・資料等を用意する。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
集中講義として履修登録のうえ、詳細は担当教員と相談すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論演習II B Seminar on Literary Representation in English IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 小島 基洋					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
研究テーマを設定し、卒業論文としてまとめるまでのプロセスをとおして、研究方法を学びながらそれを応用・実践する力を養う。											
<b>[到達目標]</b>											
学術的に意義のある論文を完成させる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
受講生の研究報告、発表を中心として、卒業論文指導を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
授業担当者が指導教員であること											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
報告、発表、作成論文内容などにより、総合的に判断する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
十分な準備をして発表に臨むこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
集中講義として履修登録のうえ、詳細は担当教員と相談すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	ドイツ文芸表象論演習 A Seminar on German Literary Arts and Representation A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 奥田 敏広					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>20世紀を代表するドイツのノーベル賞作家トーマス・マンの短編小説『Walsungenblut(ヴェルズングの血)』を取り上げます。</p> <p>20世紀初頭のユダヤ人ブルジョア家庭を舞台に、エロティックな関係がただよふその双子の兄妹が、近親相姦を内容とするワーグナーの『ワルキューレ』を観劇することを中心に展開する物語です。</p> <p>ワーグナーを批判しつつ賞賛していたマンにおける、音楽と文学の問題、ユダヤ人の問題、近親相姦や同性愛の問題などを読み取ることが可能で、社会の代表者であったと見られがちなマンの、アウトサイダーぶりが端的に表れている短編小説です。</p> <p>初版以後は、作者の存命中には再販されなかったことも、そのような作品の性格に関係していると思われる。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>作品自身は、最初に翻訳を配布し、授業は上記作品を論じた評論をドイツ語で読み進めつつ、上述したようなテーマについて考察・議論し、それらについての理解を深めます。</p> <p>また、ドイツ語のまとまった文章（論説文）を、辞書を使いながら読み進める作業を通して、ドイツ語の読解能力を養います。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>初回 授業全体のオリエンテーションとトーマス・マンという作家の紹介です。</p> <p>2回～最終回 毎回、上記マンの作品について、音楽を対象とするのみならず、その形式自身が音楽であるというテーマで論じた評論を、参加者が分担して訳しつつ読み進めます。また適宜、物語内容に関する感想や分析述べてもらいます。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
ドイツ語初級文法の修得。ドイツ文学に関する知識は必ずしも必要ではありません。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
授業参加とレポート											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
<p>(参考書)</p> <p>授業中に紹介する</p>											
----- ドイツ文芸表象論演習 A (2)へ続く -----											

ドイツ文芸表象論演習 A(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

毎回読み進める 3 ~ 5 ページの内、少しでもいいですから辞書を使って予習してきてください。

**（その他（オフィスアワー等））**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	ドイツ文芸表象論演習 B Seminar on German Literary Arts and Representation B				担当者所属・ 職名・氏名	非常勤講師 武田 良材					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>1936年から1940年まで亡命生活を送った小説家イルムガルト・コインが、1938年末に世に出した長編小説『幼いコスモポリタン（Kind aller Länder）』の精読を軸に、亡命文士の生活に目を向けます。</p> <p>「新しい女性」の描き手として脚光を浴びた観察眼、1936年までのナチス・ドイツでの経験、亡命生活、亡命先が侵略されると密かに帰国し隠れ暮らしたたくましさ、それらの合わさった、貴重で愉快的な、亡命ドイツ文学の記録です。彼女と交流した亡命文士たちやその仲間たちについても紹介します。楽しくドイツ語読解力を磨きつつ、亡命ドイツ文学の世界を学びたいと思います。</p>											
【到達目標】											
<p>ドイツでは1933年にアドルフ・ヒトラーが首相に就任し、多くの知識人が世界各地に逃れました。ドイツ文学はナチス文学と亡命文学に分かれました。この演習では亡命文学の担い手たちが身を置いた状況を多数知り、各亡命地の特性を理解します。さらに小説を緻密にあじわうドイツ語読解力を磨きます。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>Irmgard Keun著"Kind aller Länder"(1938)を拾い読みしてゆきます。 主人公の少女とその両親が滞在地を変えてゆくのに合わせて、欧米各地の亡命地に目を向けてゆきます。</p> <p>1. アムステルダムのドイツ文学、作者について、授業の進め方 2~4. オーステンデ 5~7. ブリュッセル、プラハ、レンベルク 8~10. アムステルダム 11,12. パリ 13. ボルディゲラ、ニース 14. ニューヨーク、ノーフォーク</p>											
【履修要件】											
ドイツ語初級IAおよびIBを修了しているか、それと同等のドイツ語理解。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
授業への参加具合で評価します。											
【教科書】											
Irmgard Keun "Kind aller Länder"の引用集を配布する。											
【参考書等】											
(参考書) 授業中に紹介する											
----- ドイツ文芸表象論演習 B(2)へ続く -----											

ドイツ文芸表象論演習 B(2)

---

[授業外学習（予習・復習）等]

ドイツ語の小説を毎回二、三頁読み進めるので、少なくとも一頁は丁寧に調べなければなりません。

（その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	ヒストリー・オブ・アイデアズ演習 B Seminar on History of Ideas B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 多賀 茂					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
< 現代思想を原語で読む >											
文体・用語法等の特徴に注目しながら思想家の文章を講読することによって、その思想の理解を一層深める。											
<b>[到達目標]</b>											
将来の研究のための十分な基礎となるレベルまで、フランス語の読解能力を高めることをめざす。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
Lecture de quelques textes de quelques philosophes contemporains											
1. 全体の解説 2~4. ジル・ドゥルーズのテキスト 5~7. ジャック・ラカンのテキスト 8~10. ロラン・バルトのテキスト 11~13. ジョルジョ・アガンベンのテキスト 14. まとめ											
<b>[履修要件]</b>											
最低限フランス語初級文法を終えていること											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点（70パーセント）と最終日に行う小テストの成績（30パーセント）とを合わせて評価する											
<b>[教科書]</b>											
使用しない 必要なテキストは随時コピーして配布する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
予習：次回に進む部分を自ら訳してみしておくこと 復習：自分が間違った部分について、しっかり理解をしておくこと											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
授業中に指示する  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論講読IA Reading of Literary Works IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 廣野 由美子					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
19世紀イギリスの作家チャールズ・ディケンズの小説『大いなる遺産』（Great Expectations, 1861）は、鍛冶屋の少年ピップが、謎の恩人から遺産相続人に指定され、ジェントルマンの身分になる願望を達成し、やがて夢破れるまでの物語を、中年期に達した主人公が回想する一人称形式の小説である。授業ではテキストを精読し、作品解釈を深める。あわせて、文学批評の基礎的な方法を学ぶ。											
【到達目標】											
英語の原書を精読する力を養う。また、文学作品を読んで、たんに主観的な感想をもつにとどめず、テキストを客観的対象として扱い、分析する方法論を身につける。											
【授業計画と内容】											
第1回 イン트로ダクション 作家の伝記的紹介、および作品『大いなる遺産』誕生の背景となった時代・社会について説明。使用するテキスト、授業の進め方と準備・発表の方法等を周知する。											
第2回～第13回 テキスト『大いなる遺産』の精読。 授業では、和訳と解釈を中心とした演習形態をベースに、毎回1～2章ずつ進める予定である（次回に学生が発表する部分については、そのつど指示する）。あわせて、作品の解釈方法や分析方法について、講義者が解説する。											
第14回 試験  この作品は、三部構成より成り、本授業ではテキスト前半のVolume 1を扱う。なお、本科目は半期授業であるが、通年かけて継続的に同作品を読む予定なので、後期も引き続き「同科目B」を受講することが望ましい。											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
平常の授業への取り組み（40%）と学期末試験(60%)により、総合的に評価する。											
----- 英米文芸表象論講読IA(2)へ続く -----											

英米文芸表象論講読IA(2)

**[教科書]**

Charles Dickens 『Great Expectations (Penguin Classics)』 ( Penguin ) ISBN:978-0-141-43956-3

**[参考書等]**

( 参考書 )  
授業中に紹介する

**[授業外学習 ( 予習・復習 ) 等]**

授業中に扱う範囲のテキストを、毎回予習して授業に臨むこと。学生が発表する部分として事前に指定された部分を中心に精読し、その他の部分は速読するなど、各自学習方法を工夫する。

**( その他 ( オフィスアワー等 ) )**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論講読 I B Reading of Literary Works IB	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 廣野 由美子
---------------	---	-----------------	---------------------

配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### 【授業の概要・目的】

19世紀イギリスの作家チャールズ・ディケンズの小説『大いなる遺産』（Great Expectations, 1861）は、鍛冶屋の少年ピップが、謎の恩人から遺産相続人に指定され、ジェントルマンの身分になる願望を達成し、やがて夢破れるまでの物語を、中年期に達した主人公が回想する一人称形式の小説である。授業ではテキストを精読し、作品解釈を深める。あわせて、文学批評の基礎的な方法を学ぶ。

#### 【到達目標】

英語の原書を精読する力を養う。また、文学作品を読んで、たんに主観的な感想をもつにとどめず、テキストを客観的対象として扱い、分析する方法論を身につける。

#### 【授業計画と内容】

##### 第1回 イン트로ダクション

第2回より『大いなる遺産』の後半（Volume 2～）を読み進めるにあたり、作品前半（Volume 1）の内容、および同作品に関する批評史について概説。使用するテキストを紹介し、授業の進め方と準備・発表の方法を周知する。

##### 第2回～第13回 テキスト『大いなる遺産』の精読。

授業では、和訳と解釈を中心とした演習形態をベースに、毎回1～2章ずつ進める予定である（次回に学生が発表する部分については、そのつど指示する）。あわせて、作品の解釈方法や分析方法について、講義者が解説する。

##### 第14回 試験

この作品は、三部構成より成り、本授業では後半のVolume 2以降を扱う。なお、本科目は半期授業であるが、前期の「英米文芸表象論演習IA」と継続的な内容なので、前期で扱うテキストのVolume 1は、受講者がすでに読んでいることを前提として進める。

#### 【履修要件】

「英米文芸表象論演習 I A」を履修していない場合は、テキストの前半（Volume 1）を読んでおくことが望ましい。

英米文芸表象論講読 I B (2)

**[成績評価の方法・観点及び達成度]**

平常の授業への取り組み(40%)と学期末試験(60%)により、総合的に評価する。

**[教科書]**

Charles Dickens 『Great Expectations (Penguin Classics),』 (Penguin) ISBN:978-0-141-43956-3

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

授業中に扱う範囲のテキストを、毎回予習して授業に臨むこと。学生が発表する部分として事前に指定された部分を中心に精読し、その他の部分は速読するなど、各自学習方法を工夫する。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	英米文芸表象論講読II A Reading of Literary Works IIA				担当者所属・ 職名・氏名	非常勤講師 巽 孝之					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
アメリカ文学に親しむには、植民地時代以来、アメリカ文学史において長く培われたアメリカン・ナラティブの形成と発展に注目することが不可欠である。批評理論が脱構築から新歴史主義へと展開した1990年代、文学研究と文化研究を架橋するニュー・アメリカニズムの方法論により、ピューリタニズムからモダニズムに及ぶアメリカ文学思想史の展望を検討する。											
【到達目標】											
17世紀植民地時代から20世紀ポスト冷戦時代へおよぶ射程の中で、文学はいったいどのように思想と連動したのか、あるいは思想はいかに文学を創造したのか。アメリカ文学史の常識と非常識を考えながら、まったく新しいアメリカ文学思想史を習得する。											
【授業計画と内容】											
【初日】 イントロダクション ピューリタン植民地時代：ウインスロップからマザーまで ピューリタン植民地時代：セイラムの魔女狩り アメリカ独立革命時代：フランクリンの修辞学											
【第2日】 アメリカ独立革命時代：ジェファソン草稿版「独立宣言」の影響 ロマンティシズム時代：ポー、ホーソーン、メルヴィル ロマンティシズム時代：文学者としてのリンカーン 南北戦争前後の時代：トウェインのブラックユーモア											
【第3日】 南北戦争前後の時代：ビアスと日米文学史 世紀転換期の時代 モダニズムの時代 ポストモダニズムの時代											
【第4日】 惑星思考のアメリカ文学史 ディスカッション コンクルージョン											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
最終日の論述試験で評価を行う。											
【教科書】											
Peter High 『An Outline of American Literature』 (New York: Longman, 1986) ISBN:9780582745025 巽孝之 『ニュー・アメリカニズム』 (青土社、2005年) ISBN:9784791761968 授業では膨大なハンドアウトを配布、その場で読破してもらう。											
----- 英米文芸表象論講読II A (2)へ続く -----											

英米文芸表象論講読II A(2)

[参考書等]

(参考書)

巽孝之 『モダニズムの惑星』 (岩波書店、2013年)

巽孝之 『リンカーンの世紀 アメリカ大統領たちの文学思想史』 (青土社、2013年) ISBN: 9784791767021

巽孝之 『アメリカン・ソドム』 (研究社、2001年) ISBN:9784327471972

[授業外学習(予習・復習)等]

あらかじめ講義範囲のアメリカ文学史を再確認しておくこと。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	ドイツ文芸表象論講読 A Reading German Literary Arts and Representation A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 奥田 敏広 非常勤講師 松波 烈					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>ともに戦後のドイツを代表する作家 Wolfdietrich Schnurre nとHildesheimer の短編小説『Manoever』と、『ein Pilzjahr』を取り上げ、テキストを読みます。</p> <p>前者は、軍事演習中の平原に羊の大群が押し寄せてきて軍隊や戦車を飲み込むという黙示録的な謎の多い作品であり、後者は、架空の人物の伝記という体裁で、シュレーゲル、体操のヤーン、ホフマン、ジョルジュ＝サンド等の19世紀ヨーロッパ文化の代表者たちを触発していたという人物について語っています。</p> <p>ともに奇想天外というべき発想に基づく物語で興味深い作品です。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>やさしいドイツ語で書かれた、10ページ程度の極めて短い短編小説を、辞書を使いながら読み進める作業を通して、ドイツ語の読解能力を養います。</p> <p>また、戦後ドイツやヨーロッパの文化的伝統について考察するきっかけとなるテキストであり、それらについての理解を深めます。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
初回 授業全体のオリエンテーションとです。											
2回～最終回 毎回、上記の作品について、参加者が分担して訳しつつ読み進めます。											
<b>[履修要件]</b>											
ドイツ語初級文法の知識											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
授業への参加の仕方を重要な評価基準とするが、状況に応じてレポートなどを課する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業中に指示する。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	ドイツ文芸表象論講読 B Reading German Literary Arts and Representation B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 奥田 敏広					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>旧約聖書外典の中に、暴君ホロフェルネスを殺して、絶滅寸前にあった町を救ったユディットの話があります。古代ユダヤのジャンヌ・ダルクともいうべきこの美女は、絵画（クリムト等）や音楽（モーツァルト等）と並んで、さまざまな劇作品の素材ともなってきましたが、その中でほぼ同じ時期と場所で（19世紀中ごろのウィーン）作られ上演されたヘッベルとネストロイの戯曲をとりあげます。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>ドイツ語のまとまった作品（短編小説）を、辞書を使いながら読み進める作業を通して、テキストのさまざまな分析方法を実際に即して身につけます。</p> <p>上記の二つの作品を、宗教と恋愛（個人主義的審美主義）、近代の社会と超人思想などの視点から精読し比較・考察することを通して、文学における素材の継承と独創性、さらに戯画化の問題について理解を深めます。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>第1～2回は、素材となったユディット物語、この素材をめぐる作家ヘッベルとネストロイなどについて概説しながら、授業全体のオリエンテーションを行います。同時に、ヘッベルの『ユディット』の翻訳と、ネストロイの『Judith und Holofernes』ドイツ語テキストを配布します。ヘッベルの翻訳は第3回授業までに読んできてください。</p> <p>第3回は、ヘッベルの『ユディット』のテーマやモチーフについて、参加者の感想を発表してもらい議論します。</p> <p>第4～12回は、ヘッベルの『ユディット』と比較参照しながら、もっぱらネストロイの『Judith und Holofernes』を精読します。</p> <p>第13回～15回は、ヘッベルとネストロイの作品をめぐる、素材の継承と独創性、戯画化の問題について考察し検討します。</p> <p>第16回は、フィードバックです。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
ドイツ語初級文法の修得。ドイツ文学に関する知識は必ずしも必要ではない。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点											
<b>[教科書]</b>											
上記「授業計画と内容」で挙げた作品をコピーして配布する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業中に示した分析方法について、批判的に再考してください。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：教育・社会・国家 Introductory Seminar: Education, Society and Nation-State				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 倉石 一郎					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
初等、中等学校に勤務する教師という存在にクローズアップし、専門職としての自律性と国家の一吏員の立場とのはざままで苦悩するありさま、教師と教員養成制度の歴史、現在の課題、教師の労働をとりまく問題などを考える。また学生の関心の高いいじめ問題についても考える。											
<b>[到達目標]</b>											
日本における教師が置かれた社会的立場、その国際比較でみた特徴、教師の労働の変遷、いじめの本質などを理解し、今後の教育問題への洞察力を深めること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
1．オリエンテーション 2．～13．グループ発表：日本の教師のあり方にスポットライトを当てた比較的読みやすい文献、および学生の関心の高いいじめ問題に関する本を文献講読する。 ・菅野仁『教育幻想：クールティーチャー宣言』筑摩書房 ・林純次『残念な教員：学校教育の失敗学』光文社 ・内藤朝雄『いじめの構造：なぜ人が怪物になるのか』講談社 14．全体まとめ、ふりかえり。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
セミナーでの発表、討論、共同作業への貢献などを総合した平常点評価による。											
<b>[教科書]</b>											
菅野仁『教育幻想：クールティーチャー宣言』（ちくまプリマー新書） 林純次『残念な教員：学校教育の失敗学』（光文社新書） 内藤朝雄『いじめの構造：なぜ人が怪物になるのか』（講談社現代新書）											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
グループ発表においては、他のメンバーと密に連絡を取り、協調して発表準備を行うこと。											
（その他（オフィスアワー等））											
履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：ジェンダー論 Introductory Seminar: Gender Studies				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小山 静子					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>セミナー参加者の報告と討論をふまえながら、ジェンダーに関する基本的な知識を獲得するとともに、ジェンダーに関わる諸問題への理解を深める。そのことを通して、報告や討論の技術もみがく。</p> <p>まず教科書の輪読を行い、基本的な知識の獲得をめざす。出席者は割り当てられた教科書の担当部分について、レジユメを用いて報告する。他の出席者は必ず予習をして臨み、質問・意見を出すことにする。</p> <p>次いで、参加者は自らが興味・関心をもつテーマについて報告し、他の参加者とともに質疑応答を行う。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
ジェンダーに関する幅広い知識を獲得するとともに、ジェンダーに関する諸問題について考察する能力を養う。またさまざまな情報を組み立てながら、自らの主張を発表する力や、議論を深め討論する技術を身につける。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
ジェンダーという視点にたって社会事象を見るということがどういうことなのか、その基本認識の形成に努める。											
第1回目：イントロダクション 授業のねらいを説明し、進め方を周知する。また出席者の担当部分を決定する。											
第2回目：報告の準備の仕方、レジユメの書き方、報告や討論のやり方などについて説明する。											
第3～8回目：教科書の輪読 ジェンダー概念やジェンダー論に関する基本的な知識を得るために教科書を輪読し、ジェンダーについての共通理解をもつ。											
第9～14回目：各自のテーマに基づいた報告 新聞から、セミナー参加者が興味・関心をもったジェンダーに関わる記事の一つを選び、それをもとに調査して報告を行う。それについて質疑応答する。											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
----- 基礎演習：ジェンダー論(2)へ続く -----											

## 基礎演習：ジェンダー論(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

授業での報告・討論をうけて、レポートを作成する。成績評価はそのレポート（70点）に、討論への積極的な参加状況（30点）を加味して行う。

- ・ 3分の2以上授業に参加しなかった場合は、単位を認めない。
- ・ 独自の視点からのレポートについては、高い点を与える。

### [教科書]

千田有紀ほか『ジェンダー論をつかむ』（有斐閣）ISBN:4-641-17716-1

### [参考書等]

（参考書）  
授業中に紹介する

### [授業外学習（予習・復習）等]

教科書の輪読に際しては、担当者は担当部分を精読し、必要に応じて参考文献に目を通したうえで、レジュメを作成すること。他の参加者も必ず当該部分を予習して授業に出席すること。各自のテーマに関する報告の際には、事前に十分調査したうえで、報告を行うこと。

### （その他（オフィスアワー等））

第1回目の授業で、報告の予定などを決めるので、必ず出席すること。  
（履修希望者が多い場合は人数制限をする場合がある。）

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：発達心理学 Introductory Seminar: Developmental Psychology				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 大倉 得史					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
受講生自身の自己分析と他者との語り合い、および発表と討論を通して、青年期の人格形成と心の動きを具体的に明らかにしていく。											
<b>[到達目標]</b>											
自己分析を通して、自分の中のかすかな感覚や無意識的な心の動きを知り、自分を大切にできるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
0．自己分析の方法論（第1回） 1．アイスブレイキング（第2回） 2．青年期における基本的対人態度（第3～5回） 3．青年期における親（家族）との関係（第6～8回） 4．青年期における友人関係（第9～11回） 5．青年期における愛と性愛（第12～14回）											
<b>[履修要件]</b>											
要件ではないが、「心理学II」（大倉担当）で青年期の問題を扱うので、そちらも履修するとさらに青年期への理解が深まる。「発達心理学基礎ゼミナール」との連続履修を推奨する。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
各回の自己分析内容と討論への参加度、およびレポートによって評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 大倉得史『拡散 diffusion ～「アイデンティティ」をめぐり、僕達は今～』（ミネルヴァ書房）											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
夢を記録し、自己分析すること。 青年期に関する文献を集めておくこと。											
（その他（オフィスアワー等））											
自己分析のワーク中心の授業となるので、受講人数の上限を15名程度とする。初回の授業でエントリーシートを書いてもらうので、必ず出席すること。エントリーシートに基づいて授業への適性があると判断された者の中から、抽選で受講者許可者を決定する。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：社会学II Introductory Seminar：Sociology II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 吉田 純					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
《55のキーワードを通して現代日本社会を読む》											
<p>社会学は、私たちが生きている社会の構造の総体を、日常的な「常識」を遥かに超えた自由な視野から捉え直し解き明かすことによって、私たちが「常識」の束縛から解き放ち、人間と社会についての新たな知を獲得することを目指す学問である。</p> <p>このゼミでは、現代日本の社会・文化を解読するための55の身近なキーワードを社会学の視点から解説したテキストを読むことを手がかりとして、ひとりひとりの受講者が、文理・専門・将来の進路の違いを問わず、21世紀を生きる市民として、自己と世界との関係を明視する知性、すなわち本来の意味での 教養 を獲得することを目指す。</p>											
【到達目標】											
<p>社会学的思考によって、常識を超えた角度から現代社会を認識・考察する方法を習得し、その成果を最終的にはレポート(小論文)として集成する。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>授業初回はオリエンテーション、第2回は教員による模擬報告等をおこなう。</p> <p>第3～13回は、テキストで解説されている55のキーワードの中から各自の関心にしたがって1つないし2つのキーワードを選択し、それらを通して現代日本の社会・文化について考察した内容の報告・質疑応答・討論をおこなう。報告は、単なる教科書の要約ではなく、さらに文献やデータを参照し、独自の視点からおこなうこと。</p> <p>最終回は、期末レポート(小論文)作成のための総括討論をおこなう。</p> <p>以上の方針に基づき、下記のスケジュールで進行する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>オリエンテーション(自己紹介、日程調整等)</li> <li>教員の模擬報告、各担当者のキーワードの選択</li> <li>～13. 以下の各章・各キーワードの中から、各自が選択した1つないし2つのキーワードについての報告をおこなう。 (教科書の総目次は、関連URLを参照)</li> </ol> <ol style="list-style-type: none"> <li>[1] 若者・世代 アイドル/アラサー/オタク/キャラ/終活/スクールカースト/ファストファッション/ ゆとり世代</li> <li>[2] メディア・ネット 炎上/ガラケー/ググる/クレマー/ソーシャルメディア/ネトウヨ/ビッグデータ</li> <li>[3] 恋愛・結婚・家族 イクメン/LGBT/婚活/さずかり婚/ストーカー/草食系/DV/ペットロス</li> <li>[4] 仕事</li> </ol>											
----- 基礎演習：社会学II(2)へ続く -----											

基礎演習：社会学II(2)

――― 自宅警備員 / 就活 / 宅配 / 派遣 / パワハラ / ブラック企業 / プレゼン / ワーク・ライフ・バランス

[5] つながり

居場所 / おひとりさま / 下流 / 逆ギレ / 孤独死 / コミュカ / つっこみ / 無縁社会

[6] 食・健康

除菌 / 食育 / 食材偽装 / 新型うつ / シンドローム / 認認介護 / ミシュラン / メンタル

[7] 環境・災害

異常気象 / 絆 / グローカル / 里山 / 想定外 / 風評被害 / ボランティア / リスク社会

14. 期末レポート作成のための総括討論

【履修要件】

特になし

【成績評価の方法・観点及び達成度】

(1)担当した報告の内容およびゼミへの出席・参加状況を中心とする平常点(60点満点)

(2)学期末の小論文(レポート、40点満点)

【教科書】

井上俊・永井良和(編著)『今どきコトバ事情 現代社会学単語帳』(ミネルヴァ書房) ISBN: 4623075214

【参考書等】

(参考書)

授業中に紹介する

(関連URL)

<http://www.minervashobo.co.jp/book/b213830.html>(教科書の内容説明・総目次)

【授業外学習(予習・復習)等】

報告担当者以外も、毎週、次回の範囲を精読し、予習しておくこと。また、授業終了後、当日の担当者の報告や質疑応答を踏まえて、教科書のその範囲を読み返しておくこと。

(その他(オフィスアワー等))

・PandAサイトを、授業時間外の質疑応答・討論等に活用する。利用方法については初回の授業で説明する。

・全学共通科目「ILASセミナー:社会学II」と合同開講しますが、総合人間学部の学生は別途選抜を行いますので、総合人間学部便覧のシラバスを確認のうえ第1回目の授業に出席してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：社会心理学 Introductory Seminar: Social Psychology				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 永田 素彦					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
防災・減災および災害復興に関して、人間科学（自然科学とは異なるもう一つの科学）としての社会心理学による実践／研究のアプローチについて理解を深める。											
[到達目標]											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 防災・減災に対する人間科学的アプローチ（研究者と当時者の協同的实践を前提とするアプローチ）を理解する。</li> <li>・ 各種グループワークの手法を体験的に学ぶ。</li> </ul>											
[授業計画と内容]											
<ul style="list-style-type: none"> <li>1．イントロダクション</li> <li>2～3．人間科学的アプローチの視点と姿勢</li> <li>4～6．災害情報</li> <li>7～9．被災者支援と災害ボランティア</li> <li>10～12．災害復興</li> <li>13～14．地域防災と防災教育</li> </ul> <p>毎回の授業は、受講者（担当者）による教科書の発表、教員による解説、受講者によるディスカッションやグループワーク、から構成される。</p>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
担当分の発表など授業への参加度、および、課題レポートにより評価する。											
[教科書]											
矢守克也他 『防災・減災の人間科学』（新曜社）ISBN:978-4-7885-1218-4											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
・ 授業で取り上げるセクションには、事前に目を通してきてください。											
（その他（オフィスアワー等））											
履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：哲学 Introductory Seminar on: Philosophy				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 戸田 剛文					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
近代のイギリスの哲学者ジョージ・バークリ(1685-1753)の主著のひとつである『ハイラスとフィロナスの三つの対話』(Three Dialogues between Hylas and Philonous)を原書(英語)で読む。この書は、バークリ研究の書としてだけでなく、哲学の入門書としても高く評価されてきたものである。人と世界がどのようにかかわっているかに関するひとつの哲学理論の理解を深めたい。											
<b>[到達目標]</b>											
身近なテーマを用いることにより、普段、当然のように考えている概念がいかなるものであるのかを考察することで、常に深く考える思考力を身につける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
出席者にテキストを訳してもらいつつ、議論を行う。											
基本的に担当者は決めず、少しずつ毎回全員に訳してもらおう方針で進める。											
テキストとなるプリントは、最初の講義時に配布する。											
とくに、知覚の相対性についての議論から、バークリがどのようにして「存在するとは知覚されることである」というテーゼを導くようになったのかという点を、とりあげ、当時の粒子仮説に基づく科学理論との対比を中心に考察していく。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点・・・出席、および予習などの達成度によって判定する											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
英語のテキストを読むので、必ず事前に訳してくる。訳していない場合は出席とは認めない。											
(その他(オフィスアワー等))											
履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：倫理学 Introductory Seminar: Ethics				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 佐藤 義之					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>倫理とは自由な主体の営みであり、自由な主体にとってしか倫理は意味をもたない。こういうものとしての自由を極限まで押しつめて考えたのが、フランスの現象学派の哲学者サルトルである。授業では彼の思想を通じて、われわれの自由について見直したい。</p> <p>テキストは講演原稿であるため、哲学書としては比較的平易である。基本事項の解説を多く加えながら熟読する。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>サルトルのテキストを英訳で読み、自由を中心とする哲学的な問題意識に触れ、自ら考えるとともに、彼の独自の自由論について、基本的な知識を習得する。</p> <p>また、このことを通じて、学術的な文章を精読する訓練を行う。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>第1回：授業方法、成績の算定法等についてのガイダンスを行う。</p> <p>第2回～第14回：上記テキストを精読し、教員からの問題提起をきっかけに、学生が自ら考えを深めていくことを重視する。その過程で自由、倫理という事象、サルトルが属する現象学派の考え方、またその背景にある近現代の哲学の流れについて、基本的な事項を理解してもらう。</p> <p>フィードバック：個別に質問を受付ける。詳細は別途連絡する。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点。具体的には出席と授業時のテキストの訳の様子、質疑応答の際の授業内容の理解度等を評価対象とする。予習が不十分な場合は減点対象である。											
<b>[教科書]</b>											
テキストは Jean-Paul Sartre の仏語原著からの英訳 "Existentialism Is a Humanism" (Yale University Press) を使用し、必要箇所をプリントにして配付する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
当日授業で読む箇所の予習は不可欠である。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
ゼミナール形式の授業なので、受講希望者多数の場合は受講者を制限することがある。制限の詳細は掲示等に注意すること。第1回目の授業に必ず出席すること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：西洋思想史 Introductory Seminar: The History of Western Thought				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 安部 浩					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
西洋哲学における古典中の古典を取り上げ、その講読を通して西洋思想史上の基礎的な問題の所在を確認し、同時に又それらの諸問題に関して参加者全員で討議すること。これが本ゼミナールの狙いである。 本ゼミナールを通して受講生諸君は、正確な語学の知識、テキストを精緻に読解する能力と論理的思考力、相手の言うことを理解した上で自分の考えるところを相手にも理解して貰えるように表現する能力等を涵養しうるであろう。											
<b>[到達目標]</b>											
正確な語学の知識、テキストを精緻に読解する能力と論理的思考力、相手の言うことを理解した上で自分の考えるところを相手にも理解して貰えるように表現する能力等を涵養する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
カントの『純粋理性批判』を取り上げ、主としてその「序論」を講読する（どこからどこまでを読むかについては、初回の授業で指示をする）。 テキストは、基本的には英訳（こちらでプリントを用意する）を用いるが、原典（ドイツ語）も適宜参照することにしたい。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点（訳読とゼミナールでの発言）と定期試験による。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
所定の文献を予習して精読し、復習してよく理解する。											
（その他（オフィスアワー等））											
履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：科学論 Introductory Seminar: Philosophy and History of Science				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 青山 拓央					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>哲学と科学に興味があり、かつ、文章を読むということについて深く学びたい学生に向けて、少人数形式の授業を行ないます。受講者は順に発表担当を引き受け、自分が「読めなかった」文章（何らかの仕方哲学・科学に関わる文章）を紹介し、その「読めなさ」の理由を説明します。その後、クラス全体でその文章について意見交換を行ない、哲学的観点と精読的観点の双方から「読めなさ」の構造を分析します。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>「読めなさ」の分析を通じて文章精読の技術を学ぶとともに、哲学的・科学論的な観点からも新たな知見を獲得する。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>第1回：授業についてのガイダンスを行ない、発表担当を選定する。履修希望者多数の場合は、少人数形式であることをふまえ受講制限を行なう。</p> <p>第2回～第14回：各回の発表担当に文章についての解説をしてもらい、その後、クラス全体でのディスカッションを行なう。授業に使用する文章は発表担当が自由に選ぶことができるが、ふさわしい文章が見つからない場合は教員が助言を行なう。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>発表担当者としての発表内容、および、各回の授業におけるディスカッションへの参加度をもとに、成績評価を行なう。（詳細は講義のガイダンスにて説明します。）</p>											
<b>[教科書]</b>											
<p>使用しない 必要に応じて、プリントを配布します。</p>											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書） 授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
<p>発表担当を割り振られた際には、十分な準備を行なってください。</p>											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
<p>少人数形式であることをふまえ、受講希望者多数の際は、受講制限をすることがあります。活発な議論への参加を期待します。</p> <p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：美の思想 Introductory Seminar: Aesthetics				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 武田 宙也					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
美学・芸術学研究（美や芸術についての哲学的思考）とはどのようなものか、発表と議論を通じて体験的に理解する。											
<b>[到達目標]</b>											
文献を正確に読解する能力、それを独自の観点から論じる能力、発表に対する質問力などを総合的に養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
美学・芸術学に関する基本文献を取り上げ、毎回担当者が決められた範囲について分析と考察を加えた発表を行い、その後発表をめぐって皆で議論をする。取り上げる文献としては、とりわけ現代の芸術および文化的現象について考えるうえで広く示唆に富み、かつ専門的知識がなくても取り組みやすいものを予定している。初回にガイダンスを行い、また発表のスケジュールを決めた後、各回の授業は基本的に、受講者の報告と議論を中心として進行する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点（出席・発表内容・授業への参加度）によって評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
発表の対象となる箇所をあらかじめ読んでくること。											
（その他（オフィスアワー等））											
履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：西洋美術の歴史 Introductory Seminar: History of Western Art				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 岡田 温司					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
キリスト教美術への導入 I 西洋のキリスト教美術の主題や図像、宗教的意味についての理解を身につけ深める。											
<b>[到達目標]</b>											
宗教画を見たときに、そのテーマが理解できるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
キリスト、聖母マリア、天使など、キリスト教における主要な人物に関連する芸術のテーマや表現に慣れ親しむことを目的とする。 参加者は、少なくとも1回、自分に関心のあるテーマについて調べてきたことを授業中に口頭発表する。											
<b>[履修要件]</b>											
後期に開講される「創造ルネッサンス論基礎ゼミナール」の受講を推奨する。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点、発表 各自が毎回テーマをきめて発表をおこなう。											
<b>[教科書]</b>											
岡田温司 『天使とは何か』（中央公論新社）（2016年4月刊行予定） 岡田温司 『処女懐胎』（中央公論新社）ISBN:9784121018793 岡田温司 『キリストの身体』（中央公論新社）ISBN:9784121019981											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書）											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
口頭発表のための予習準備とレジュメの作成。											
（その他（オフィスアワー等））											
履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	ヒストリー・オブ・アイディアズA History of Ideas A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 多賀 茂					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
現代思想の可能性 ーフーコー・ドゥルーズ・ラカン・バルト・アガンベン											
現代社会の中に生きる私の状況を確認し、その状況からの脱却の道を何人かの思想家とともに探る											
[到達目標]											
20世紀後半から21世紀にかけて活躍した（している）、とくにフランス（やイタリア）の思想家について、基本的な知識を得るとともに、そこを出発点として現代社会に対する自らの視点を構築する能力を育む。											
[授業計画と内容]											
第1回 オリエンテーション											
第2回-第4回 フーコーとともに現代社会を分析する											
第5回-第7回 ドゥルーズとともに社会と個人の間を問う											
第8回-第9回 ラカンとともに自己の構造を問う											
第10回-第11回 バルトとともに社会と個人の間を問う											
第12回-第13回 アガンベンとともに人間の未来を問う											
第14回 まとめ											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点とレポートの提出による（両者の比率は授業中に説明する）											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
予習、復習とも、授業中に指示する文献をできるだけ読むことを求める											
（その他（オフィスアワー等））											
授業中に指示する。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	制度・生活文化史 A Cultural History of Social Institutions and Life A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 田邊 玲子					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>テーマ：西欧近代と明治日本における恋愛論</p> <p>恋愛 という現象は、西欧思想や文学の伝統さまざまに解釈され、さまざまな意味や機能が付託され、社会形成の規範的原動力ともされてきた。</p> <p>本講義では、近代以前の西欧における恋愛論を概観したのち、近代における社会変革のなかで生まれてきた恋愛観を考える。さらに、文明開化を目指した明治日本が新たな社会構築のために西洋から導入した恋愛観と、実際の 恋愛事件 について考え、 恋愛 というものに、いかに個人と社会との関係性が託され、制度化され、規範化されてきたか、あるいはそうしたものを逃れてきたのか、を検討する。一見 普遍的 で、きわめて 個人的 に思われる現象が、いかに構築されてきたかを、具体的なテキストに基づいて、分析的・批判的に検討する力を養い、明治という転換期の日本が取り入れた西洋の思想の一端を知るとともに、それがいかに明治の自己像に取り込まれたのかを知ることを目的とする。</p>											
【到達目標】											
<p>恋愛論 を手がかりに、社会変革をもたらした近代西欧の思想・文学を学び、その思想を明治日本がいかに取り入れたかを考察するとともに、一見 普遍的 で、きわめて 個人的 に思われる現象が、いかに社会との関連で構築されてきたかを、具体的なテキストに基づいて、分析的・批判的に検討する力を養う。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>扱うのは、</p> <p>西欧：</p> <p>プラトンの恋愛論 オウィディウスの恋愛論 中世の宮廷風恋愛 近代市民社会の恋愛論（ルソー、レッシング、ゲーテ、スタンダール、フォーリエ等）</p> <p>日本：</p> <p>明治期日本の小説や 男女交際論 （福沢諭吉、田口卯吉、末広鉄腸、徳富蘇峰、北村透谷など）</p> <p>である。</p> <p>それぞれ、テキストを事前に配布する。授業中にテキストについて意見を求め、議論をするので、事前に読んでおくこと。</p>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
<p>成績評価は、平常点（授業中の議論参加）（50%）、および学期末のレポート（50%）による。この二点ともに合格基準に達していることが、全体としての合格の前提条件である。</p>											
----- 制度・生活文化史 A (2) へ続く -----											

制度・生活文化史 A(2)

レポートについては、到達目標の達成度に基づき評価する。  
独自性が高いものについては、高い点を与える。

**[教科書]**

使用しない  
適宜プリントを配布する。

**[参考書等]**

(参考書)

**[授業外学習(予習・復習)等]**

事前に配布したプリントは必ず読んでおくこと。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	制度・生活文化史演習 A Seminar on Cultural History of Social Institutions and Life A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 田邊 玲子					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
履修者それぞれのテーマによる発表を行う。それにより、発表者は自身の問題関心の明確化をはかり、他の出席者は自身の関心以外のさまざまなテーマと出会い、見聞を広めることになる。議論の仕方なども身につけてゆく。文化社会論分野で卒論を計画している人には、論文作成指導の演習ともなる。											
<b>[到達目標]</b>											
問題の設定、資料の収集、資料の扱い方、分析の仕方、論理の展開、論文の書き方などを、発表を重ねるなかで身につけてゆくと同時に、他の履修者の発表を聞き、議論することで、議論の仕方も身につける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
文化社会論、制度・生活文化史に関する考察を深める。この分野で卒論を計画している人には、論文作成指導の演習ともなる。 参加者の関心および卒論のテーマにしたがって、文献発表および論文の中間発表などを行う。 履修者の人数にもよるが、原則として毎回一人が1時間発表し、30分を議論にあてる。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
成績については、2段階評価とし、演習における発表、議論参加などで、総合的に判断する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
発表時には事前にレジユメを作成し、配布すること。 また、発表前には事前にテーマをアナウンスし、参加者に事前に読んでほしい文献等があれば、配布しておく。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	制度・生活文化史演習 B Seminar on Cultural History of Social Institutions and Life B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 田邊 玲子					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
履修者それぞれのテーマによる発表を行う。それにより、発表者は自身の問題関心の明確化をはかり、他の出席者は自身の関心以外のさまざまなテーマと出会い、見聞を広めることになる。議論の仕方なども身につけてゆく。文化社会論分野で卒論を計画している人には、論文作成指導の演習ともなる。											
<b>[到達目標]</b>											
問題の設定、資料の収集、資料の扱い方、分析の仕方、論理の展開、論文の書き方などを、発表を重ねるなかで身につけてゆくと同時に、他の履修者の発表を聞き、議論することで、議論の仕方をも身につける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
文化社会論、制度・生活文化史に関する考察を深める。この分野で卒論を計画している人には、論文作成指導の演習ともなる。 参加者の関心および卒論のテーマにしたがって、文献発表および論文の中間発表などを行う。  履修者の人数にもよるが、原則として毎回一人が1時間発表し、30分を議論にあてる。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
成績については、2段階評価とし、演習における発表、議論参加などで、総合的に判断する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
発表時には事前にレジュメを作成し、配布する。 また、発表前には事前にテーマをアナウンスし、参加者に事前に読んでほしい文献等があれば、配布しておく。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	関係発達論の応用 Relational Development				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 大倉 得史					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>関係発達論とは、生来の身体的資質、周囲の対人関係、社会・文化的環境の三者の絡み合いのもとで人間の自己性がいかに形作られていくかを究明する理論である。本講義では特に、周囲の「他との関係性が「自」へと沈殿していくという関係発達論を支える根本的メカニズムや、エピソード記述法などの方法論的問題について考究を深めつつ、それをさまざまな領域における実践活動につなげていく道筋を探っていく。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
関係発達論的な考え方の基本を理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 子どもの心の育ち（1回～3回）</li> <li>2 視線触発と他者の登場（4回～5回）</li> <li>3 身体の機能（関身体性・間主観性など）と自己の感覚（6～7回）</li> <li>4 発達障がいの世界（8～9回）</li> <li>5 情緒と能力（10回）</li> <li>6 エピソード記述法の方法論（11回～12回）</li> <li>7 関係発達論の応用分野（13～14回） <ol style="list-style-type: none"> <li>ア）主体としての心を育む子育て</li> <li>イ）保育</li> <li>ウ）青年期</li> <li>エ）供述分析</li> </ol> </li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
関係発達論、のいずれかを履修済み（履修中も可）であること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、授業中の小課題、期末レポート。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 大倉得史『育てる者への発達心理学』（ナカニシヤ出版） 鯨岡峻『エピソード記述入門』（東京大学出版会）											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
参考書として挙げた『育てる者への発達心理学』の該当領域を、事前によく理解して授業に臨むこと。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	心理学実験 Experiments on Psychology				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授	齋木 潤	人間・環境学研究科 教授	月浦 崇	人間・環境学研究科 助教	山本 洋紀	人間・環境学研究科 教授	永田 素彦	人間・環境学研究科 准教授	大倉 得史
	配当 学年	2-4回生	単位数	2		開講年度・ 開講期	2017・ 前期		曜時限		火4,5		授業 形態		実験
<b>【授業の概要・目的】</b>															
<p>知覚、認知、発達、社会的行動など、心理学の基本的な領域の実験や実習を通じて、心理学の初歩を学ぶ。この授業は、総合人間学部、文学部、教育学部の3学部で行われてきた心理学実習・実験の入門的な授業を統合したもので、学生の皆さんにとって、よりバラエティに富んだ授業内容を選択できるように工夫したものである。京都大学は、認知、臨床、動物、社会、発達、知覚、神経科学など、日本でも最も幅広い範囲の心理学を学ぶことのできる場であり、是非このチャンスを生かして心理学の面白さを実感すると共に、実験の実施からレポートの作成に至る基礎的手順の習得が期待される。</p>															
<b>【到達目標】</b>															
心理実験の実施からレポートの作成に至る基礎的手順を習得する。															
<b>【授業計画と内容】</b>															
<p>この授業では、まず、3学部共通の授業で心理実験とレポートの書き方の基礎を学び、その後、2週間をひとつのユニットとして、ユニット毎に原則として自分の希望する学部での授業を受けることができる。日程（授業各回の担当教員・テーマ）の詳細については、授業初回にガイダンスを行う。出席者は必ず、このガイダンスに出席すること。以下、例年の授業計画を示す。</p> <p>第1回 ガイダンス・各ユニットの説明  第2～4回 基礎的な心理実験とレポートの書き方、レポートの添削、ユニット決定  第5～6回 第1ユニット 錯視、日常記憶、インタビュー法など  第7～8回 第2ユニット 赤ちゃん研究法、動物研究法、ゲーミングなど  第9～10回 第3ユニット 視覚心理物理学実験、ニューロン活動記録、精神検査など  第11～12回 第4ユニット イメージ、知能検査、記憶能力測定など  第13～ 所属学部の授業</p>															
<b>【履修要件】</b>															
特になし															
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>															
テーマ毎に出されるレポートの平均点による。															
----- 心理学実験 (2)へ続く -----															

## 心理学実験 (2)

### [教科書]

使用しない

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

実習後、指示に従って、レポートを作成すること

### (その他(オフィスアワー等))

受講者多数の場合、人数を制限することがある。  
初回の授業に必ず出席すること。初回に、ガイダンスと抽選(受講者多数の場合)を行う。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	自己存在論I Ontology of Self I	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 安部 浩
---------------	------------------------------	-----------------	-------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

「自己存在」は人間存在を特色づける基本的な規定の一つであり、哲学史上、精神、主体、自己意識、実存、現存在、一人称といった概念の下で究明され続けてきたものである。時の古今を問わず、洋の東西を問わず、こうした考察が絶えず繰り返されているという事実は、「今ここにこうしてある私とは何者であるのか」という問いが、我々にとっていかに根源的であり、そしてまたいかに抜き差しならないものであるかをいみじくも物語っていると言えよう。

本講義のねらいは、そのような「自己存在」を基軸としながら、主として近現代の哲学における諸問題を考究し、もって受講者各人自身による思索の歩みを裨益せんとすることにある。

もとより「ゼルプスト・デンケン（自分で考え抜くこと）」は、決して一朝一夕になしうるものではない。だがそれこそが哲学をすることの生命であり、そしてまた一身を賭して試みるに値する事柄であることを受講生諸氏が本講義を通して感得されんことを冀ってやまない。

#### [到達目標]

「ゼルプスト・デンケン（自分で考え抜くこと）」は、決して一朝一夕になしうるものではないとはいえ、それこそが哲学をすることの生命であり、そしてまた一身を賭して試みるに値する事柄であることを理解する。

#### [授業計画と内容]

およそ「自律」無くして、我々の「自己存在」は成立しえないであろう。だが「自由」無くしては「自律」もまたありえまい。すると「自己存在」の成立においては「自由」が不可欠であることになる。

しかるに果たして我々は自由であるのか。自らが自由なる者であることを内面的に感じ取る「自由感」は、所詮は単なる主観的な感情の域を出ないのか、それともそれ以上のものであるのか。科学的世界観を受け入れ、そこに自らをも位置づけつつ、我々は己自身の自由をいかにして確保しうるのか。人間存在を強固に条件づけている歴史的・宗教的制約と我々の自由とは、一体どのような関係にあるのか。

本年度の「自己存在論Ⅰ」では、以上のような問題について考察することにする。そしてその際の手掛かりにしたいのが、シェリングの『人間の自由の本質』である。本講義を「シェリングの自由論」と題する所以である。

如上の問題意識に鑑みて目下のところ、以下のような課題について、1課題あたり2～3回の授業を行う予定である。

1. 自由の感情と科学的世界観
2. スピノザの汎神論との対決
3. 人間の自由の「実在的」概念
4. 人間の自由の「形式的」概念
5. 人間の自由と歴史
6. 人間の自由と神

## 自己存在論I(2)

### 【履修要件】

哲学系科目I・II(哲学I・II、倫理学I・II、科学論I・II、論理学I・II等)の中、少なくとも一つを既修していることが望ましいが、そうでない場合にも本授業を履修して頂くことは可能である(その代わりに頑張ってお話の付いてきて下さい)。

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

レポート試験によって評価する。

### 【教科書】

使用しない

### 【参考書等】

(参考書)  
授業中に紹介する

### 【授業外学習(予習・復習)等】

教科書、及び授業中に指示する文献を予習し、筆記した講義ノートで復習する。

### 【その他(オフィスアワー等)】

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	自己存在論II Ontology of Self II	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 安部 浩
---------------	--------------------------------	-----------------	-------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

「自己存在」は人間存在を特色づける基本的な規定の一つであり、哲学史上、精神、主体、自己意識、実存、現存在、一人称といった概念の下で究明され続けてきたものである。時の古今を問わず、洋の東西を問わず、こうした考察が絶えず繰り返されているという事実は、「今ここにこうしてある私とは何者であるのか」という問いが、我々にとっていかに根源的であり、そしてまたいかに抜き差しならないものであるかをいみじくも物語っていると言えよう。

本講義のねらいは、「自己存在論I」と同様、そのような「自己存在」を基軸としながら、主として近現代の哲学における諸問題を考究し、もって受講者各人自身による思索の歩みを裨益せんとすることにある。但し本講義は、このねらいを「自己存在論I」とは違った仕方追求せんとするものである。

もとより「ゼルプスト・デンケン（自分で考え抜くこと）」は、決して一朝一夕になしうるものではない。だがそれこそが哲学をすることの生命であり、そしてまた一身を賭して試みるに値する事柄であることを受講生諸氏が本講義を通して感得されんことを冀ってやまない。

#### [到達目標]

「ゼルプスト・デンケン（自分で考え抜くこと）」は、決して一朝一夕になしうるものではないとはいえ、それこそが哲学をすることの生命であり、そしてまた一身を賭して試みるに値する事柄であることを理解する。

#### [授業計画と内容]

ハンス・ヨナス—二十世紀哲学の古典の一つ『責任の原理』の著者である彼は今日、環境倫理学の鼻祖の一人として知られている。しかしながら彼の哲学の出発点はハイデガー哲学であり、その影響下で行われた古代グノーシス思想の研究であった。そしてこうした第一期のグノーシスをめぐる宗教哲学的研究と第三期の環境倫理学の企図を橋渡ししたのが、第二期の自然哲学の構想であった。

今述べたヨナス哲学の展開は、もちろん一見脈絡がないように思われる。だがそこには「自己と世界の二元論」の克服とでも呼ぶべき、自己存在論の問題系に連なる重要な問題意識が一貫して伏在している。その具体的な消息を詳らかにし、もって前述の克服に向けたヨナスの思索の試みを我々なりに批判的に吟味すること。これが本講義のねらいである。本年度の「自己存在論II」を「ハンス・ヨナスの哲学—自己と世界」と題する所以である。

如上の問題意識に鑑みて目下のところ、以下のような課題について、1課題あたり2～3回の授業を行う予定である。

1. ヨナスの古代グノーシス研究
2. グノーシスとハイデガー哲学
3. ヨナスの自然哲学
4. 『責任の原理』
5. 「自己と世界の二元論 = ニヒリズム」の克服？

#### [履修要件]

哲学系科目I・II（哲学I・II、倫理学I・II、科学論I・II、論理学I・II等）の中、少なくとも一つを既修していることが望ましいが、そうでない場合にも本授業を履修して頂くことは可能である（その

-----  
自己存在論II(2)へ続く

自己存在論II (2)

代わりに頑張って私の話に付いてきて下さい)。

**[成績評価の方法・観点及び達成度]**

レポート試験によって評価する。

**[教科書]**

使用しない

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

教科書、及び授業中に指示する文献を予習し、筆記した講義ノートを復習する。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	認識人間学I Epistemological Human Studies I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 青山 拓央					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
世界の事物を認識するうえで、言語はきわめて大切な道具です。ある意味では、私たちは言語を通して初めて、世界を「見る」ことが可能になります。本講義では言語と認識との関係について、分析哲学・科学哲学のさまざまな知見を解説する予定です（いわゆる「言語論的転回」や「全体論の意義などについてもお話しします）。教科書は使用しませんが、参考書に挙げた拙著『分析哲学講義』の該当箇所をブラッシュアップした内容を解説するとともに、同書にも記されていない、ここ最近の研究成果も紹介するかたちにて、講義を進めていきたいと考えています。											
<b>[到達目標]</b>											
分析哲学・科学哲学の基礎的な知識を得るとともに、言語と認識との関係について、さまざまな観点から理解を深める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
下記の7つのテーマに沿って、言語と認識との関係を考えます（授業の進行具合に応じて、どのテーマに何週をあてるかを変更する場合があります）。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．ガイダンス・分析哲学とは何か（第1週～第2週）</li> <li>2．言語の「意味」の客観性（第3週～第4週）</li> <li>3．名前と述語の機能について（第5週～第6週）</li> <li>4．文脈原理と全体論（第7週～第8週）</li> <li>5．意味の使用説と自然科学（第9週～第10週）</li> <li>6．可能世界と形而上学（第11週～第12週）</li> <li>7．心の哲学を概観する（第13週～第14週）</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
期末の筆記試験で成績を評価します。採点基準はやや厳しめです。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 青山拓央『分析哲学講義』（筑摩書房）											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業前の予習はとくに必要ではありませんが、授業後の復習は十分に行なってください。											
（その他（オフィスアワー等））											
教室収容人数に応じて、初回講義の際、受講者を制限することがあります。授業での積極的な質問・発言を期待します。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	認識人間学II Epistemological Human Studies II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 青山 拓央					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>私たちは世界のなかに、事物だけでなく「価値」も見いだします。そうした「価値」はどのような仕方で存在し、どのような仕方で認識されるのでしょうか。本授業では、「善悪」「美醜」そして「幸不幸」といったテーマを取り上げ、たんに主観的な幻想ではなく、しかし客観的な物質とも異なる、価値というものの在り方とその認識論上の意味を探ります（その際、分析哲学でのさまざまな知見を参照します）。教科書は使用しませんが、参考書に挙げた拙著『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』の一部をブラッシュアップした内容と、さらに他の多くの先行研究について、お話しをする予定です。</p>											
[到達目標]											
<p>おもに分析哲学に関する基礎的な知識を得るとともに、価値と認識との関係について、さまざまな観点から理解を深めます。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>下記の5つのテーマに沿って、価値と認識との関係を考えます（授業の進行具合に応じて、どのテーマに何週をあてるかを変更する場合があります）。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス・幸福は哲学の問題になるか（第1週～第2週）</li> <li>2. ラッセルとアリストテレス（第3週～第4週）</li> <li>3. 分析哲学での「価値」の検討（第5週～第8週） （「善悪」「美醜」「幸不幸」等をそれぞれ検討。）</li> <li>4. 枚挙的質問と説明的質問の差異（第9週～第10週）</li> <li>5. 可能世界と価値判断（第11週～第14週）</li> </ol>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>期末の筆記試験で成績を評価します。採点基準はやや厳しめです。</p>											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
<p>（参考書） 青山拓央『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』（太田出版）</p>											
[授業外学習（予習・復習）等]											
<p>授業前の予習はとくに必要ではありませんが、授業後の復習は十分に行なってください。</p>											
（その他（オフィスアワー等））											
<p>教室収容人数に応じて、初回講義の際、受講者を制限することがあります。授業での積極的な質問・発言を期待します。</p> <p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	哲学・文化史I History of Philosophy and Culture I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 戸田 剛文					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>哲学という学問は、その対象に比較的制限のない学問であり、およそ私たちの身の回りの多くのものがその研究対象となる。むしろ、身近なものにこそ、重要な問題が含まれていると言ってよい。つまり、私たちが持っている既成概念を、そのまま既成のものとして受けとらず、改めて再検討しつづけることが重要なのである。というのも、思想を始めとして学問の進歩とは、多くの場合、既成概念や慣習化した権威を、無条件に正しいものとして受け取らないことによって行われてきたからである。また、私たちが社会で生きていく上でも、常に自分自身で物事をとらえ直そうとする姿勢は、思考力の向上につながり、より豊かな発想を生み出す源になると考えられる。</p> <p>この講義では、私たちの身近な事柄にかんする哲学的な問題をとりあげ、それがどのようなものかを解説し、自らが思考するための第一歩へとつなげることを狙いとする。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
身近なテーマを用いることにより、普段、当然のように考えている概念がいかなるものであるのかを考察することで、常に深く考える思考力を身につける。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>哲学の諸問題をひとつのテーマについて、1テーマ2-3回くらいをめどに、なぜそれらのことが問題になるのか、どのような考え方があるのか、ということ講義する。</p> <p>現在予定しているテーマは、テキストに従い、次のようなものである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 色</li> <li>2. 私と他者</li> <li>3. 論理</li> <li>5. 自由</li> <li>6. 知識</li> </ol> <p>また授業中、ときどき小テストを行う。 いつ小テストを行うかは特に指示しない。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席30% 小テスト30% レポート40%で判定する。											
----- 哲学・文化史I (2)へ続く -----											

哲学・文化史I (2)

**[教科書]**

使用しない

**[参考書等]**

(参考書)

戸田 剛文 他 『哲学をはじめよう』(ナカニシヤ出版) ISBN:978-4779508431

**[授業外学習(予習・復習)等]**

授業中に出てきたテキストなどを読んで自分自身で考えてください。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	哲学・文化史II History of Philosophy and Culture II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 戸田 剛文					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>自由意志をめぐる問題について、これまでどのような議論がなされていたのかを概観し、現代社会においても重要な問題である自由と責任についての多面的な考えを身につける。 また自由と責任の問題だけではなく、思想史に関する知識を身につけることも、重要なテーマとしている。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>身近なテーマを用いることにより、普段、当然のように考えている概念がいかなるものであるのかを考察することで、常に深く考える思考力を身につける。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>自由がなぜ問題となってきたのかを歴史的にまず論じる。</p> <p>具体的には、中世における神学と自由意志をめぐる問題、近代のホブズを源流とするような両立可能主義(compatibilism)にどのようなものがあるのかを、確認する。</p> <p>後半では、両立可能主義の続きにはじまり、両立不可能主義についての議論を考える。さらに、現代の科学が、自由と責任の問題について、どのような影響を及ぼしてきたかについて紹介する。</p> <p>さらに、こういった議論を手掛かりに、科学と哲学の関係を考える。</p> <p>1. ガイダンス 2-3 導入 4-6 両立可能説と両立不可能説 7-8 結果論証 9-11 フランクファートの問題 12-14 ストローソンの問題</p> <p>学生にも数人（これまでは、4人）に、この問題に関する論文を読んで、その内容を解説してもらおう。その場合、発表者以外にも、その論文を読んでくることを要求する。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席点 30% 小テスト30% レポート40%											
で採点											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
----- 哲学・文化史II (2)へ続く -----											

哲学・文化史Ⅱ (2)

---

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

授業中に出てきた書籍などに目を通して自分なりに考えを発展させてください。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	人間実践論I Philosophical Theory of Human Acts I	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 佐藤 義之
---------------	--	-----------------	--------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

フランスの現象学者メルロ=ポンティは、もっぱら知覚論や身体論において、主体の事実にあり方、主体によって生きられた世界の姿について、斬新な見解を示した。『知覚の現象学』の時期の彼の思想の流れを知覚論、身体論を中心にたどってゆきたい。

#### [到達目標]

メルロ=ポンティを通じて、知覚論、心身問題を中心にした哲学の代表的な議論を学ぶ。そのことで哲学的なものの見方を習得する一助としたい。

#### [授業計画と内容]

総題：メルロ=ポンティの思想

##### (1) 現象学とは何か

現象学という立場 (第1～2回)

##### (2) 身体:世界に住み込む、意味により組織化された身体

身体の謎 導入 (第3回)

機械的身体観と現実の身体 (第4～5回)

身体図式 (第6回)

実践の主体としての身体 ハイデガーを手がかりに (第7回)

身体の主体と身体 (第8～9回)

実存と事実性 (第10回)

##### (3) 実存による知覚

古典的知覚観批判 (第11回)

実存による知覚 (第12回)

##### (4) 実存的意味と自然

実存的意味と知覚的意味 (第13回)

非人間的な自然と人間的意味 (第14回)

フィードバック：詳細は別途連絡する。

#### [履修要件]

1回生の受講は原則的に認めない。哲学・思想系の基礎論科目のなかから「哲学」、「倫理学」、「論理学」、「西洋社会思想史」、「科学論」、「宗教学」のどれかひとつ以上を履修済みであることが望ましい。

#### [成績評価の方法・観点及び達成度]

授業に関連するレポートを2回提出してもらう予定であるが、そのレポートによって評価する。

人間実践論I (2)

**[教科書]**

使用しない

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

関心のある者は、授業中に紹介した参考書を読んで、自ら学習を深めてほしい。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	人間実践論II Philosophical Theory of Human Acts II	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 佐藤 義之
---------------	--	-----------------	--------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

講義ではレヴィナスの最初の主著『全体性と無限』を手がかりに他者と倫理について考えてみたい。レヴィナスは、倫理について極限的な思考を展開するとともに、そこから哲学の根本的変革を企てた思想家である。

#### [到達目標]

レヴィナスの議論を通じて、他者論、倫理についての代表的な議論に触れる。そのことで哲学的なものの見方を習得する一助としたい。

#### [授業計画と内容]

総題：レヴィナスの思想

##### (1) 序

現象学という立場(第1回)

他者の謎(第2回)

##### (2) 顔と倫理

顔の体験と無限の責任(第3～4回)

「選び」とその根拠?(第5回)

##### (3) 同と他

同と他(第6回)

同の具体的あり方 享受、労働、所有(第7回)

##### (4) 他者の絶対他性

テーマ化と同化(第8回)

言語とテーマ化(第9～10回)

##### (5) 学に対する顔の先行性

教えと学問(第11回)

「第一哲学としての倫理学」(第12回)

批判的考察(第13～14回)

フィードバック：詳細は別途連絡する。

#### [履修要件]

1回生の受講は原則的に認めない。哲学・思想系の基礎論科目のうち、「哲学」、「倫理学」、「論理学」、「西洋社会思想史」、「科学論」、「宗教学」のどれかひとつ以上を履修済みであることが望ましい。

#### [成績評価の方法・観点及び達成度]

授業に関連するレポートを2回提出してもらう予定であるが、そのレポートによって評価する。

人間実践論II (2)

**[教科書]**

使用しない

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

関心のある者は、授業中に紹介した参考書を読んで、自ら学習を深めてほしい。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	メディア・スタディーズB Media Studies B	担当者所属・ 職名・氏名	京都造形芸術大学 教授 河田 学 京都精華大学 専任講師 蘆田 裕史 非常勤講師 増田 展大
---------------	---------------------------------	-----------------	--

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	---------------	-----	------	----------	----	----------	-----

### 【授業の概要・目的】

言葉本来の意味に遡って考えるならば、「メディア」とは人と人との間にあって、そのコミュニケーションを媒介をするものごとだと考えることもできるかもしれない。しかし、現在メディア論と呼ばれている研究領域では、もっと広い意味で「メディア」というものを捉えている。たとえば、1960年代に『グーテンベルクの銀河系』(The Gutenberg Galaxy: the Making of Typographic Man, 1962)、『メディア論』(Understanding Media: the Extensions of Man, 1964)などを著しのちのメディア論に多大な影響を与えたマーシャル・マクルーハンは、メディアとは人間の身体を拡張するものであると考えた。テレビやラジオは人間の目や耳を拡張するものだからこそメディアなのであって、それと同様に、人間の脚を拡張する自動車もメディアであり、皮膚を拡張する衣服もまたメディアだということになる。また、メディアは人間の必要や欲望に奉仕するばかりではなく、逆に人間の認識や価値観、世界観を再構成することもあるだろう。本講義ではこのようなメディア認識に立ち、さまざまなメディアと人間とのインタラクションについて考察を行う。

### 【到達目標】

- 以下の2点を本授業の到達目標とする。
1. メディアは決して透明なものではなく、メディアは私たちが世界とかわるかわり方に大きな影響を与えているということを理解する。
  2. 1の認識のもと、特定のメディアにおける媒介作用のありようを自分で考察することを可能にするような、メディア論的視点を獲得する。

### 【授業計画と内容】

授業は集中講義として、3人の講師が、それぞれ1つずつのテーマについて4~5コマの授業時間を使って解説を行う。テーマ、担当者、開講日等の詳細については、別途掲示により発表するが、おもに以下のような授業日程を念頭においている。

- 第1日目 メディア・スタディーズ概論：透明なメディアと不透明なメディア（4コマ）
- 第2日目 映像文化とメディア：アニメーションを中心に（4コマ）
- 第3日目 メディアとしてのファッション（4コマ）
- 第4日目 学生による発表およびまとめ（3コマ）

第4日目には、1~3日目の授業のテーマを踏まえ、自分が見つけた素材をメディア論的に考えたことについて簡単な発表をしてもらうことを予定している。

### 【履修要件】

特になし

## メディア・スタディーズB(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

- ・ 授業への参加の積極性（出席、授業内での発言等） .....50%
- ・ 講義中に指定する課題（発表またはレポート） .....50%

### [教科書]

授業中に指示する

### [参考書等]

（参考書）  
授業中に紹介する

### [授業外学習（予習・復習）等]

予習はとくに必要ないが、毎日の講義内容をノートにとり復習すること、それをもとに身近な範囲から素材を探し、自分自身で「メディア論」を実践するように。

### （その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	心理学研究法入門 Introduction to psychological methods				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 齋木 潤	人間・環境学研究科 教授 月浦 崇	人間・環境学研究科 准教授 船曳 康子	文学研究科 教授 板倉 昭二	文学研究科 教授 藤田 和生	こころの未来研究センター 特定助教 畑中 千紘
	配当 学年	1回生	単位数	2		開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時間	金4	授業 形態	講義
【授業の概要・目的】											
心理学を初めて学ぶ大学1回生、他の回生を対象として、心理学固有の方法論とその歴史的背景を幅広く学ぶとともに、それらの方法を使うための基本的なスキルの習得を目指す。観察法、面接法、質問紙法、実験法などの代表的な研究法を取り上げ、古典的な研究例のデモンストレーションを行うとともに、研究法の歴史などにも触れる。											
【到達目標】											
心理学の講義では、主として、心理学的な現象や事実を学ぶが、この授業では、それらの現象や事実を発見するために心理学が発展させてきた方法論の基礎を学ぶことを目指す。心理学を知識として学ぶだけでなく、将来自身で心理学の研究を目指す学生にとっては必須の科目である。											
【授業計画と内容】											
2コマを1単元として、基本的な研究法を実習やデモンストレーションを用いながら紹介する。											
第1回 インTRODクシヨン 齋木(総人)											
第2-3回 観察法 板倉(文)											
第4-5回 面接法 船曳(総人)											
第6-7回 質問紙法・テスト法 畑中(こころ)											
第8-9回 実験1(学習) 藤田(文)											
第10-11回 実験2(認知) 齋木											
第12-13回 実験3(生理) 月浦											
第14回 まとめ 全員											
各単元では、古典的な研究例のデモンストレーションを行うとともに、研究法の歴史などにも触れる。 各単元ごとにレポートを提出											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
各単元ごとに提出するレポートによって評価する。レポートは、各単元の内容の理解、レポート課題の出来、期日までに提出しているかなどを総合的に評価する。6単元のレポートの評定の平均点を最終評価とする(未提出のレポートは0点と換算)。											
【教科書】											
使用しない											
----- 心理学研究法入門(2)へ続く -----											

心理学研究法入門(2)

---

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

予習は特に必要ないが、レポートを作成するための作業が必要。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーは担当教員ごとに、KULASIS及び授業内でアナウンスする。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	精神分析I Psychoanalysis I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 松本 卓也					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
フロイトが発見した無意識の働きを理解し、その具体例を、各時代の哲学者や、芸術作品のなかに探っていく。そこから、無意識が人間の創造性に与える影響と、無意識という考えが現代思想に及ぼした影響を知る。											
【到達目標】											
人間の精神に無意識の存在を想定する精神分析の思考法に接し、無意識が織りなす象徴的表現の諸形式の成り立ちを理解すること。											
【授業計画と内容】											
基本的に以下のプランに従って講義を進める。ただし講義の進みぐあい、時事問題への言及などに対応して順序や同一テーマの回数を変えることがある。											
第1回 こころの病と創造性はどう関係するのか 第2回 プラトンの詩人狂人説 第3回 プレモダン、モダン、ポストモダンの心的構造 第4回 アリストテレスからデューラーへ（メランコリーと創造性） 第5回 デカルトにおける狂気と悪霊 第6回 カントによる狂気の種類 第7回 ヘーゲルによる狂気の乗り越え 第8回 ヘルダーリンの統合失調症と詩作 第9回 ハイデガーにおける狂気と詩作 第10回 ラカンにおける狂気と創造性 第11回 ラランシュとフーコーのヘルダーリン論 第12回 ドゥルーズにおける狂気と創造性（1） 第13回 ドゥルーズにおける狂気と創造性（2） 第14回 まとめ 第15回 期末試験											
フィードバック方法は別途連絡します。											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
期末試験による。											
----- 精神分析I(2)へ続く -----											

## 精神分析I(2)

### [教科書]

各回講義ごとに、プリントを配布する。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

予習として、参考書の読書。復習として、授業中に配布したプリントと自分自身のノートの内容を照らしあわせて理解を深めること。

### (その他(オフィスアワー等))

後期の「精神分析II」においては、無意識が社会や集団の病理にどのように関わってゆくかを学ぶ。継続受講が勧められる。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	精神分析II Psychoanalysis II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 松本 卓也					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
精神分析学の見地から、無意識の構造を通して、社会と集団の病理を考察する。											
【到達目標】											
人間が集団をつくる際に働いている心理的メカニズムに焦点をあてる精神分析の考え方に沿って、社会と集団の病理を理解することができるようになる。											
【授業計画と内容】											
基本的に以下のプランに従って講義を進める。ただし講義の進みぐあい、時事問題への言及などに対応して順序や同一テーマの回数を変えることがある。											
第1回 フロイトの集団心理学（1）フロイトの集団論 第2回 フロイトの集団心理学（2）原父殺害と根源的暴力 第3回 ラカンの集団心理学（1）ラカンの集団論 第4回 ラカンの集団心理学（2）人種差別論 第5回 ラカンの集団心理学（3）4つのディスクール 第6回 ラカンの集団心理学（4）包摂型社会と排除型社会 第7回 ラカンの集団心理学（5）全体と非全体の集団論 第8回 ラカン左派の集団分析（1）象徴的権力 第9回 ラカン左派の集団分析（2）ナショナリズム 第10回 ラカン左派の集団分析（3）ヨーロッパのアイデンティティ 第11回 ラカン左派の集団分析（4）消費社会論 第12回 ラカン左派の政治思想（1）ラクラウ、ムフとジジェク 第13回 ラカン左派の政治思想（2）バディウとミレール 第14回 まとめ 第15回 期末試験											
フィードバック方法は別途連絡します。											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
期末試験による。											
----- 精神分析II(2)へ続く -----											

## 精神分析II(2)

### [教科書]

ヤニス・スタヴラカキス 『ラカニアン・レフト(仮題)』(岩波書店)

### [参考書等]

(参考書)

ジグムント・フロイト 『人はなぜ戦争をするのか エロスとタナトス』(光文社) ISBN:978-4334751500

ジグムント・フロイト 『フロイト全集 17 1919 1922年 不気味なもの、快原理の彼岸、集団心理学』(岩波書店) ISBN:978-4000926775

### [授業外学習(予習・復習)等]

予習として、期間中にテキストと参考書の読書。復習として、授業中に示したテキストの参照頁をノートと照合して理解を深める。

### (その他(オフィスアワー等))

本講義では、「フロイト左派」「ラカン左派」と呼ばれる議論が主に取り扱われる。精神分析Iおよび精神分析学において、精神分析の考え方になじんでおくことで、本講義における社会と集団の病理の構造がよりよく理解できる。継続受講が勧められる。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	創造ルネッサンス演習 A Seminar on Art History A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 岡田 温司					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
4年生は卒業論文の完成、3年生は卒業論文へ向けてテーマの設定、資料収集の方法や解読などについて指導をおこなう。											
<b>[到達目標]</b>											
卒論をまとめることができる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1～3週     テーマの設定と資料収集     研究テーマは、芸術全般、美学、芸術思想、現代思想、視覚文化などの分野から受講生の関心や興味に合わせて、相談の上で決定する。</li> <li>・ 4～15週     毎週1名ないし2名、各自の研究テーマにそって、経過報告ないし発表をおこなう。資料紹介。</li> </ul>											
<b>[履修要件]</b>											
通年で履修											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、発表											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業中に指示する。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワー 月 12:00～13:00 木 9:00～10:30											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	創造ルネッサンス演習 B Seminar on Art History B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 岡田 温司					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
4年生は卒業論文の完成、3年生は卒業論文へ向けてテーマの設定、資料収集の方法や解読などについて指導をおこなう。											
<b>[到達目標]</b>											
卒論をまとめることができる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
前期に引きつづいて、毎週1名ないし2名、各自の研究テーマにそって、経過報告ないし発表をおこなう。 4年生は卒業論文の完成へ向けて、その構成と内容について具体的な指導をおこなう。3年生は、次年度へのステップとして小論文を仕上げるべく指導をおこなう。											
<b>[履修要件]</b>											
通年で履修											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、発表											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業中に指示する。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワー 月 12:00~13:00 木 9:00~10:30											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	社会心理学演習 A Seminar on Social Psychology A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 永田 素彦					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
社会心理学の分野で卒業研究を行うために必要な理論と方法を学ぶ											
【到達目標】											
社会心理学のメタ理論である社会構成主義に関する基本的事項を理解する。また社会心理学の研究法として、マスメディア分析の方法を実習を通して習得する。											
【授業計画と内容】											
【理論編】 『あなたへの社会構成主義』（K. J. ガーゲン著）の輪読を通して、社会構成主義のメタ理論、理論、方法論を詳しく学ぶ。項目は次の通り。 1. 伝統的人間観の行きづまり 2. 共同体による構成 事実と価値 3. 対話の力 明日を創る試み 4. 社会構成主義の地平 5. 「個人主義的な自己」から「関係性の中の自己」へ 6. 理論と実践（1） 対話のもつ可能性 7. 理論と実践（2） 心理療法・組織変革・教育・研究 8. 理論と実践（3） マスメディア・権力・インターネット 9. 「批判に答える」 【方法編】 実習を通して、マスメディア分析の方法を学ぶ。											
【履修要件】											
全学共通科目「社会心理学」「社会心理学基礎ゼミナール」を履修していることが望ましい											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
毎回の出席と発表、期末レポート提出											
【教科書】											
K. J. ガーゲン、東村知子（訳）『あなたへの社会構成主義』（ナカニシヤ出版）											
【参考書等】											
（参考書） 授業中に紹介する											
【授業外学習（予習・復習）等】											
前半の輪読については、発表者以外も必ず事前に読んで、疑問点を整理しておくこと。後半のマスメディア分析については、授業時に課題を指示する。											
（その他（オフィスアワー等））											
社会心理学の分野で卒業研究を行うことを考えている場合は、必ず履修してください。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	社会心理学演習 B Seminar on Social Psychology B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 永田 素彦					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
社会心理学の分野で卒業研究を行うために必要な理論と方法を学ぶ											
<b>[到達目標]</b>											
実践的現場研究の理論と方法に関する基本的事項を理解する。また社会心理学の研究手法として、 コンフリクト解析の手法を実習を通して習得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<b>【理論編】</b> 杉万俊夫『グループ・ダイナミクス入門』を輪読し、実践的現場研究の理論と方法論を学ぶ。（ 9回程度）											
<b>【方法編】</b> 集団間コンフリクトを分析する数理モデルとして、ゲーム理論の1種である「コンフリクト解析」 の実習を行う。数学、ゲーム理論に関する予備知識は必要ない。（5回程度）											
<b>[履修要件]</b>											
前期の「社会心理学演習A」から連続して履修することが望ましい。 全学共通科目「社会心理学」「社会心理学基礎ゼミナール」を履修していることが望ましい											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
毎回の出席、発表、レポート提出											
<b>[教科書]</b>											
杉万俊夫『グループ・ダイナミクス入門』（世界思想社）ISBN:978-4-7907-1588-7											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 「コンフリクト解析」については、授業中にプリントを配布する。											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
前半の輪読については、発表者以外も必ず事前に読んで、疑問点を整理しておくこと。後半のコン フリクト解析については、授業時に課題を指示する。											
（その他（オフィスアワー等））											
社会心理学の分野で卒業研究を行うことを考えている場合は、必ず履修してください。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	動態映画文化論演習IB Seminar on Cinema Studies IB	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 木下 千花
---------------	---	-----------------	---------------------

配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

### 【授業の概要・目的】

#### <サイレント映画史へのアプローチ>

19世紀末から1930年前後まで映画は「サイレント」だった。映画が芸術として、大衆娯楽として、プロパガンダとして、グローバルなビジネスとして、目覚ましい発展と変容を遂げたのはサイレント時代である。この授業では、「ニューメディア」だったサイレント映画の歴史を紹介するとともに、興行の場（映画館）や他の芸術・メディアとの関係にも注目する映画史の最新のアプローチに触れる。

授業は演習形式を取り、履修者は毎週必ず配布されたテキスト（英語を含む）を読み、予習をしたうえで発表・議論に積極的に参加することを前提とする。

### 【到達目標】

- 1) 初期映画、サイレント映画という歴史的な表象形式へのリテラシーを得る。
- 2) フィルム・アーカイブの活動と連動し一次資料に依拠した「新しい映画史」のアプローチを学ぶ。
- 3) 映画と他のメディアとの関係についての考えを深める。

### 【授業計画と内容】

#### Part 1 初期映画というパラダイム

- 第1回 イントロダクション：「初期映画」と「サイレント」
- 第2回 映画「誕生」以前：スクリーン・プラクティス
- 第3回 アトラクションの美学
- 第4回 ポーターとグリフィス

#### Part 2 「映画」の誕生

- 第5回 「長編映画」の登場、アメリカ映画産業v.合州国
- 第6回 古典的ハリウッド映画の成立；映画館研究
- 第7回 1910年代ヨーロッパ映画というオルタナティブ
- 第8回 日本映画の1910年代：資料分析演習

#### Part 3 1920年代アヴァンギャルド

- 第9回 カリガリからヒトラーへ？
- 第10回 ソヴィエト・モンタージュ
- 第11回 「フォトジェニー」とアヴァンギャルド

#### Part 4 映画史研究の諸相

- 第12回 アーカイブとテクノロジー
- 第13回 サイレント映画館の音
- 第14回 サイレント・コメディ
- 第15回 期末論文テーマ発表

## 動態映画文化論演習IB(2)

### 【履修要件】

特になし

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

発表もしくは中間レポート（30%）、期末論文（60%）、出席・授業参加（10%）

### 【教科書】

PondA（e-learning）を活用し、必読のテキストはPDFファイルで配布する。

### 【参考書等】

（参考書）

### 【授業外学習（予習・復習）等】

授業時間以外で映画を鑑賞することが必要になる。具体的な作品名、手続きについては第1回授業で説明する。授業時間以外に半日ほど関西圏のフィルムアーカイブで実地見学を行う予定（参加は任意）。

### （その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	動態映画文化論演習 I I B Seminar Cinema Studies IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 松田 英男					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
ジャンル映画についての具体的考察を行うとともに、研究論文を読みます。											
<b>【到達目標】</b>											
アメリカを中心としたジャンル映画について、基礎的な知識、洞察を獲得すること。各ジャンルについての視点の確立、代表的な作品についての基本的な理解を確保すること。最終的に、自分なりの立場、注目すべき作品を定められるようになることが目標となります。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
映画を具体的な相貌のもとにとらえるためには、映画テキストを丹念に観ることはもちろん、批評および映画史の理解が不可欠です。アメリカ映画を中心に代表的なジャンルを選び、具体的作品に即して考察します。											
初回はジャンル映画についての説明。以降、西部劇、ギャング映画、スクリーンボール・コメディ、フィルム・ノワール、ミュージカル映画、女性映画、SF映画、アニメーション映画について、代表的な論文を取り上げ、読んでいきます。読み終わられない分については、教室外で読むことを求めます。											
アニメーション映画（ディズニー、ドリームワークス、ユニヴァーサル、ライカなど他社の作品）、そして、今をときめくアメリカン・コミックヒーローの実写映画化作品が多くなるかもしれません。											
<b>【履修要件】</b>											
英語圏の映画に興味があり、自分で作品を相当数観る時間と意欲があること。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
「演習」です。テキストを10数頁ほど事前に丹念に読み、授業で報告することを求めます。											
小テスト、発表等で総合的に評価します。常時出席が前提。3回以上欠席した場合は、成績評価の対象とはなりません。遅刻は欠席に準じた扱いになります。											
<b>【教科書】</b>											
Matthew J. McEniry et al. 『Marvel Comics into Film: Essays on Adaptations Since the 1940s』 (McFarland) ISBN:978-0786443048 (マーベル・コミックの実写映画化作品についての本格的な論文集。各自用意すること。) Web 経由ないしプリントにより、資料を随時配付します。											
----- 動態映画文化論演習 I I B (2)へ続く -----											

## 動態映画文化論演習 I I B(2)

### [参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

HPの"Required Reading"にも掲載しています。

(関連URL)

<http://www.eonet.ne.jp/~wildbird/00entrance.html>(プリントおよび資料の配付、各種連絡などを行います。)

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業で扱う映画作品について視聴し、教科書、プリント、Web批評を参考に、映画史的価値、問題点等について考えておくこと。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	創造行為論演習 A Seminar on the Theory of Creative Arts A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 武田 宙也					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
芸術についての哲学的思考、現代美術、現代思想などに関連するテーマを研究している学生を対象として、卒業論文執筆のための指導を行う。											
<b>[到達目標]</b>											
卒業論文の完成に向けた研究テーマの絞り込みや内容の吟味・練り上げのほか、他者の発表内容を正確に理解し、それに積極的に反応する能力の向上。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
毎回一人ないし二人の学生に自身の研究内容について発表してもらい、その後、それをめぐって受講者全員で議論を行う。発表のスケジュールは初回の授業時に決める。											
<b>[履修要件]</b>											
創造行為論演習 B をあわせて受講するのが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
発表の内容（質疑に対する応答を含む）および議論への参加度による。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
なし。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	創造行為論演習 B Seminar on the Theory of Creative Arts B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 武田 宙也					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
芸術についての哲学的思考、現代美術、現代思想などに関連するテーマを研究している学生を対象として、卒業論文執筆のための指導を行う。											
<b>[到達目標]</b>											
卒業論文の完成に向けた研究テーマの絞り込みや内容の吟味・練り上げのほか、他者の発表内容を正確に理解し、それに積極的に反応する能力の向上。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
毎回一人ないし二人の学生に自身の研究内容について発表してもらい、その後、それをめぐって受講者全員で議論を行う。発表のスケジュールは初回の授業時に決める。											
<b>[履修要件]</b>											
創造行為論演習 A をあわせて受講するのが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
発表の内容（質疑に対する応答を含む）および議論への参加度による。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
なし。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	人間形成論演習 A Seminar A on Theories of Education				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 倉石 一郎					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
人間形成・教育に関するテーマで受講者が発表し、それに基づき討論を行うことで教育学の素養を身につける。特に共同研究を重視し、学生がグループでテーマを決め、調査や研究を行い、最終的に成果を形にすることをめざす。重複履修可。											
[到達目標]											
共同研究のプロジェクト、発表内容の作成を通じ、教育学・人間形成に関する自分の関心を明確化し、他者に伝わる形にそれを整理できるようになる。問題意識を醸成し、卒業論文に向けた研究に方向性を与える。											
[授業計画と内容]											
全14回の全てを個人発表にあてる。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席と発表による。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習(予習・復習)等]											
発表者は事前に入念な準備を行うこと。それ以外の場合も、事前に配布された発表者のレジюмеをしっかりと読んで臨むこと。事後には、授業で指摘された点やアドバイスを踏まえ、研究をブラッシュアップすること。											
(その他(オフィスアワー等))											
できるかぎり演習A,演習Bとワンセットで通年履修すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	人間形成論演習 B Seminar B on Theories of Education				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 倉石 一郎					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
人間形成・教育に関するテーマで受講者が発表し、それに基づき討論を行うことで教育学の素養にさらに磨きをかける。特に共同研究を重視し、学生がグループでテーマを決め、調査や研究を行い、最終的に成果を形にすることをめざす。重複履修可。											
<b>[到達目標]</b>											
共同研究のプロジェクト、発表内容の作成を通じ、教育学・人間形成に関する自分の関心を明確化し、他者に伝わる形にそれを整理できるようになる。問題意識を深化させ、卒業論文の研究に向けた具体的ステップを踏み出す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
全14回の全てを個人発表にあてる。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席と発表による。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
発表者は事前に入念な準備を行うこと。それ以外の場合も、事前に配布された発表者のレジюмеをしっかりと読んで臨むこと。事後には、授業で指摘された点やアドバイスを踏まえ、研究をブラッシュアップすること。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
できるかぎり演習A,演習Bとワンセットで通年履修すること。 オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	関係発達論演習 A Seminar on Relational Development A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 大倉 得史					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
発達心理学に関するテーマでの「研究能力」（自ら問題を発見し、適切な方法論により、新しい知見を創出する能力）を身につけることを目指す。4回生は卒業論文作成のためのテーマ設定、先行研究レビュー、方法の選定、調査の実施等を、「各自で」行っていく。3回生は研究の進め方の概略を学んだ上で、興味のあるテーマについて「各自で」研究を進めていく。											
<b>[到達目標]</b>											
4回生は、卒論の「問題・目的」「方法」までを書くことができること。 3回生は、自分の興味のあるテーマを見つけ、それについて必要な研究を行うことができること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
各自が自分なりの興味・関心にしたがって研究を進め、担当回に発表していくという演習形式。発表について全員で議論を行い、それを踏まえて発表者には今後の研究の方向性（案）を、それ以外の者には研究を進める際に必要となる考え方を提示していく。なお、関係発達論演習を初めて履修する3回生は、いきなり「自分なりのテーマで研究を進めよ」と言われても戸惑いが大きいと思われるので、こちらからいくつかの課題を与える中でテーマを発見できるようにするなど、ある程度配慮する。											
<b>[履修要件]</b>											
発達心理学に関連するテーマで自分なりの研究を行おうとする者（卒論指導者は別の先生であっても良いが、「発達心理学の演習」としての当演習での研究もきちんと行える者）。全学共通科目「関係発達論 ・ ・ 」「発達心理学基礎演習」「発達心理学基礎ゼミナール」のうち2科目以上を履修中ないしは履修済であることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、発表、議論への参加、学期末の研究報告書の提出。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 大倉得史『語り合う質的心理学』（ナカニシヤ出版） 鯨岡峻『エピソード記述入門』（東京大学出版会）											
----- 関係発達論演習 A (2)へ続く -----											

## 関係発達論演習 A(2)

### [授業外学習（予習・復習）等]

自分の興味・関心にしたがって、意欲的に文献調べを行うこと。

### （その他（オフィスアワー等））

3・4回生での重複履修可。4限の授業だが、できれば5限の大学院生ゼミにも参加すると実力が伸びる。オフィスアワーは火4限。ちなみに担当教官が受け持っている発達心理学関連科目の概要、難易度は次のとおりなので、履修の際の目安にしてほしい（リレー講義の場合は担当回の概要と難易度）。<初級>心理学（大倉担当分）・・・青年期（講義）発達心理学基礎演習・・・青年期（グループワーク）<中級>関係発達論・・・重要な先行研究の理論的検討（講義）関係発達論・・・主として乳幼児期の養育論（講義）心理学実験（大倉担当分）・・・観察等の方法論（実習）<上級>関係発達論の応用・・・身体論・言語論・自我論・方法論等（講義）関係発達論演習A・B・・・卒業研究に向けた指導（演習）

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	関係発達論演習 B Seminar on Relational Development B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 大倉 得史					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
発達心理学に関するテーマでの「研究能力」（自ら問題を発見し、適切な方法論により、新しい知見を創出する能力）を身につけることを目指す。4回生は卒業論文作成のためのテーマ設定、先行研究レビュー、方法の選定、調査の実施等を、「各自で」行っていく。3回生は研究の進め方の概略を学んだ上で、興味のあるテーマについて「各自で」研究を進めていく。											
<b>[到達目標]</b>											
4回生は、卒論の「問題・目的」「方法」までを書くことができること。 3回生は、自分の興味のあるテーマを見つけ、それについて必要な研究を行うことができること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
各自が自分なりの興味・関心にしがって研究を進め、担当回に発表していくという演習形式。発表について全員で議論を行い、それを踏まえて発表者には今後の研究の方向性（案）を、それ以外の者には研究を進める際に必要となる考え方を提示していく。なお、関係発達論演習を初めて履修する3回生は、いきなり「自分なりのテーマで研究を進めよ」と言われても戸惑いが大きいと思われるので、こちらからいくつかの課題を与える中でテーマを発見できるようにするなど、ある程度配慮する。											
<b>[履修要件]</b>											
発達心理学に関連するテーマで自分なりの研究を行おうとする者（卒論指導者は別の先生であっても良いが、「発達心理学の演習」としての当演習での研究もきちんと行える者）。全学共通科目「関係発達論 ・ ・ 」「発達心理学基礎演習」「発達心理学基礎ゼミナール」のうち2科目以上を履修中ないしは履修済であることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、発表、議論への参加、学期末の研究報告書の提出。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 大倉得史『語り合う質的心理学』（ナカニシヤ出版） 鯨岡峻『エピソード記述入門』（東京大学出版会）											
----- 関係発達論演習 B (2)へ続く -----											

## 関係発達論演習 B (2)

### [授業外学習（予習・復習）等]

自分の興味・関心にしたがって意欲的に文献調べをすること。

### （その他（オフィスアワー等））

3・4回生での重複履修可。4限の授業だが、できれば5限の大学院生向けゼミにも参加すると実力がつく。オフィスアワーは火曜4限。ちなみに担当教官が受け持っている発達心理学関連科目の概要、難易度は次のとおりなので、履修の際の目安にしてほしい（リレー講義の場合は担当回の概要と難易度）。<初級>心理学 B（大倉担当分）・・・青年期（講義） 発達心理学基礎演習・・・青年期（グループワーク）<中級>関係発達論・・・重要な先行研究の理論的検討（講義） 関係発達論・・・主として乳幼児期の養育論（講義） 心理学実験（大倉担当分）・・・観察等の方法論（実習）<上級>関係発達論の応用・・・身体論・言語論・自我論・方法論等（講義） 関係発達論演習 A・B・・・卒業研究に向けた指導（演習）

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	自己存在論演習I Seminar on Ontology of Self I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 安部 浩					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>19世紀から20世紀への変わり目に、大部の哲学の専門書が刊行された。何の変哲も無い表題にもかかわらず、その数々の斬新なる所説の故に、同書は忽ち、少なからぬ支持者―「ミュンヘン現象学派」、シェラー、ハイデガー等―を贏ち得た。</p> <p>この「現象学」宣言の書、『論理学研究』の掉尾を飾る第六研究を読み進めていくことで、われわれは、意識の志向性の構造分析や、明証と真理との相関関係、および感性的・範疇的直観の区別に関する考察に努めることにしよう。そしてそれにより、語学・哲学上の正確な知識、及び論理的思考力に基づく原典の厳密な読解力を各人が涵養すること、そしてこの読解の過程において浮上してくる重要な問題をめぐる参加者全員の討議を通して、各人が自らの思索を深化させていくことが、本演習の目的である。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
語学・哲学上の正確な知識、及び論理的思考力に基づく原典の厳密な読解力を各人が涵養すること、そしてこの読解の過程において浮上してくる重要な問題をめぐる参加者全員の討議を通して、各人が自らの思索を深化させていくこと。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
原則的には毎回、予め指名した二名の方にそれぞれ、報告と演習の記録を担当して頂くことにする。なお本演習の進度は、その年度の受講者各位の哲学文献読解力の如何によらざるをえない為、各回に読む箇所については、初回のガイダンスの際に委細指示することにする。											
<b>[履修要件]</b>											
ドイツ語を既修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点で評価する。											
<b>[教科書]</b>											
Edmund Husserl 『Logische Untersuchungen, zweiter Band, Teil』 (Felix Meiner) ISBN:3-7873-1094-0 (Gesammelte Schriften 4)											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書)											
Edmund Husserl 『Logical Investigations Vol.2』 (Routledge) ISBN:10-0415241901 (tr. by Dermot Moran)											
エドムント・フッサール 『論理学研究4』 (みすず書房) ISBN:4-622-01926-4 (立松弘孝訳)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
教科書の毎回の所定の範囲を予習し、各回の報告資料や演習記録等を基に復習すること。											
(その他(オフィスアワー等))											
受講者には、自分の担当箇所や各回に扱う部分に限らず、テキストを遍く熟読した上で出席することが求められる故、その点には十分留意されたい。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	自己存在論演習II Seminar on Ontology of Self II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 安部 浩					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>19世紀から20世紀への変わり目に、大部の哲学の専門書が刊行された。何の変哲も無い表題にもかかわらず、その数々の斬新なる所説の故に、同書は忽ち、少なからぬ支持者―「ミュンヘン現象学派」、シェラー、ハイデガー等―を贏ち得た。</p> <p>この「現象学」宣言の書、『論理学研究』の掉尾を飾る第六研究を読み進めていくことで、われわれは、意識の志向性の構造分析や、明証と真理との相関関係、および感性的・範疇的直観の区別に関する考察に努めることにしよう。そしてそれにより、語学・哲学上の正確な知識、及び論理的思考力に基づく原典の厳密な読解力を各人が涵養すること、そしてこの読解の過程において浮上してくる重要な問題をめぐる参加者全員の討議を通して、各人が自らの思索を深化させていくことが、本演習の目的である。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
語学・哲学上の正確な知識、及び論理的思考力に基づく原典の厳密な読解力を各人が涵養すること、そしてこの読解の過程において浮上してくる重要な問題をめぐる参加者全員の討議を通して、各人が自らの思索を深化させていくこと。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
原則的には毎回、予め指名した二名の方にそれぞれ、報告と演習の記録を担当して頂くことにする。なお本演習の進度は、その年度を受講者各位の哲学文献読解力の如何によらざるをえない為、各回に読む箇所については、初回のガイダンスの際に委細指示することにする。											
<b>【履修要件】</b>											
ドイツ語を既修していることが望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
平常点で評価する。											
<b>【教科書】</b>											
Edmund Husserl 『Logische Untersuchungen, zweiter Band, Teil』 ( Felix Meiner ) ISBN:3-7873-1094-0 ( Gesammelte Schriften 4 )											
----- 自己存在論演習II (2)へ続く -----											

## 自己存在論演習II (2)

### [参考書等]

(参考書)

Edmund Husserl 『Logical Investigations Vol.2』 (Routledge) ISBN:10-0415241901 (tr. by Dermot Moran)

エドムント・フッサール 『論理学研究4』 (みすず書房) ISBN:4-622-01926-4 (立松弘孝訳)

### [授業外学習(予習・復習)等]

教科書の毎回の所定の範囲を予習し、各回の報告資料や演習記録等を基に復習すること。

### (その他(オフィスアワー等))

受講者には、自分の担当箇所や各回に扱う部分に限らず、テキストを遍く熟読した上で出席することが求められる故、その点には十分留意されたい。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	認識人間学演習I Seminar on Epistemological Human Studies I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 青山 拓央					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>近現代哲学における 時間の哲学 の知識を学び、精密な読解能力を身につけることを目的として、Theodore Sider や Simon Prosser らの諸論文を精読する予定です（クラス全体での輪読形式）。同文献は、J. M.E. McTaggart による著名な論文「時間の非実在性」（1908）の影響を強く受けたものであり、哲学史上の重要な議論の発展を知るとともに、時間論の最新の状況に触れることができます。演習では英語文献のほか、必要に応じて邦語文献も参照します。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>クラス全体での精読を通じて、専門文献の読解能力を育てるとともに、 時間の哲学 の中心的論点を学びます。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>各回の授業において、受講者全員でテキストを精読しながら、内容の考察を進めていきます（その際、出席の確認も行ないます）。訳出は輪読形式で進め、必要に応じて適宜、ディスカッションの時間を設けます。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>平常点（出席・訳出）を基本として成績評価を行ないます。議論への参加と貢献度を、平常点に加えます。</p>											
<b>[教科書]</b>											
テキストは初回に配布します。											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書） 授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
<p>授業に先立ってテキストを確認し、不明な単語や文法を調べておくことを推奨します。</p>											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
<p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	認識人間学演習II Seminar on Epistemological Human Studies II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 青山 拓央					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>近現代哲学における 自由の哲学 の知識を学び、精密な読解能力を身につけることを目的として、Daniel Dennett や Alfred Mele らの諸論文を精読する予定です（クラス全体での輪読形式）。同文献は、ホップズ以来の約350年にわたる自由意志論を引き継いだものであり、哲学史上の重要な議論の発展を知るとともに、自由論の最新の状況に触れることができます。演習では英語文献のほか、必要に応じて邦語文献も参照します。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>クラス全体での精読を通じて、専門文献の読解能力を育てるとともに、 自由の哲学 の中心的論点を学びます。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>各回の授業において、受講者全員でテキストを精読しながら、内容の考察を進めていきます（その際、出席の確認も行ないます）。訳出は輪読形式で進め、必要に応じて適宜、ディスカッションの時間を設けます。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>平常点（出席・訳出）を基本として成績評価を行ないます。議論への参加と貢献度を、平常点に加えます。</p>											
<b>[教科書]</b>											
<p>テキストは初回に配布します。</p>											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書） 授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
<p>授業に先立ってテキストを確認し、不明な単語や文法を調べておくことを推奨します。</p>											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
<p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	哲学・文化史演習I Seminar in History of Philosophy and Culture I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 戸田 剛文					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
スコットランド常識学派の代表者といわれるトマス・リードの『人間の知的能力論』を原典で読む。  リードは、近代イギリス経験論の影響をうけつつ、ロックからヒュームにいたる哲学者を批判した哲学者であり、その評価は近年ますます高まっている。知識とはどのようなものかを考える上でも、彼の議論は興味深い手掛かりをわれわれに与えてくれる。											
<b>[到達目標]</b>											
身近なテーマを用いることにより、普段、当然のように考えている概念がいかなるものであるのかを考察することで、常に深く考える思考力を身につける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
とくに担当者を決めず、数行ずつ訳してもらいながら進めていく。  途中で重要な人物や理論などについて、調べてもらって解説してもらう。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業のテーマに関連することをさらに調べて自分なりの考えを発展させてください。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	哲学・文化史演習II Seminar in History of Philosophy and Culture II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 戸田 剛文					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
古典的プラグマティスト、パースのQuestions concerning certain Faculties claimed for Manを読みます。  このテキストの読解を通して、近代のデカルト的認識論に対する現代の批判およびプラグマティズムの源流について学習します。											
【到達目標】											
哲学史の研究を通して、近代以降大きな影響を与えたデカルトの考え方、およびそれに対する反動からどのように新しい知識観が出てきたのかについて知識を得る。またそういった異なる知識観を学びながら、自分で知識というものがどういうものかを考える。											
【授業計画と内容】											
担当者を決めて、毎回数段落ずつ進めていきます。											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
出席と授業中の発言											
【教科書】											
テキストはこちらでコピーを用意する。											
【参考書等】											
(参考書) 授業中に紹介する											
【授業外学習(予習・復習)等】											
授業のテーマに関連する書籍などを読んでさらに考えを発展させてください。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	人間実践論演習I Seminar on Philosophical Theory of Human Acts I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 佐藤 義之					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
E. レヴィナスは倫理の問題を手がかりに、旧来の哲学の根本的革新を企て、思想界に大きな影響を残した。レヴィナスの著作を仏語原文で読み、彼の思想を理解する。											
[到達目標]											
レヴィナスの著作を精読することで、レヴィナスの思想を理解するとともに、道徳を極限まで押しつめて考える彼の思想を通じて、道徳というものを改めて考えなおすことをめざす。											
[授業計画と内容]											
レヴィナスの最初の主著（『全体性と無限』）から第二の主著（『存在するとは別の仕方、あるいは存在することの彼方に』）への移行期の論文（「謎と現象」(Énigme et phénomène)）を読み、第二の主著の思想の萌芽と、そこに至る彼の思想の転換を眺めてみたい。 初回はガイダンスにあてる。											
[履修要件]											
仏語原典で読むので、フランス語の最低限の読解力は不可欠である。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点											
[教科書]											
テキストは上記著作をプリントにして配付する。											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
当日授業で扱う箇所の予習は不可欠である。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	人間実践論演習II Seminar on Philosophical Theory of Human Acts II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 佐藤 義之					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>E. レヴィナスは倫理の問題を手がかりに、旧来の哲学の根本的革新を企て、思想界に大きな影響を残した。レヴィナスの著作を仏語原文で読み、彼の思想を理解する。</p> <p>なお、本年度前期（人間実践論演習I）に続けて上述の同一テキストを読むが、後期からの参加者も授業についてこられるように、改めて詳しい解説を加えつつ進んでゆく。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
レヴィナスの著作を精読することで、レヴィナスの思想を理解するとともに、道徳を極限まで押しつめて考える彼の思想を通じて、道徳というものを改めて考えなおすことをめざす。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>レヴィナスの最初の主著（『全体性と無限』）から第二の主著（『存在するとは別の仕方で、あるいは存在することの彼方に』）への移行期の論文（「謎と現象」（Énigme et phénomène））を読み、第二の主著の思想の萌芽と、そこに至る彼の思想の転換を眺めてみたい。前期授業のつづきの箇所から読み進める。</p> <p>初回はガイダンスにあてる。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
仏語原典で読むので、フランス語の最低限の読解力は不可欠である。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点											
<b>[教科書]</b>											
テキストは上記著作をプリントにして配付する。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
当日授業で扱う箇所の予習は不可欠である。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	舞台芸術論演習 A Seminar on Performing Arts A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 桑山 智成					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
この授業ではWilliam Shakespeare の A Midsummer Night's Dream (『真夏の夜の夢』) についてディスカッションを通して理解を深め、さらに上演練習を通して、この作品がどのような特質を持っているのか、その特質に迫ることにある。											
<b>[到達目標]</b>											
場面の構成や、セリフが持つ演劇的效果・音楽性・空間性への理解を深ること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1回 シェイクスピアの時代の劇場形態、及びセリフの読み方についての解説 第2～12回 配役の決定後、毎回それぞれの場面の演劇的・言語的ポイントについてディスカッションを行う。またそれを反映した上演方法について検討し、上演練習を行う。 第13回・14回 上演発表											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点(授業でのコメント)(40%) 期末上演発表(30%) 期末レポート(30%)											
<b>[教科書]</b>											
R. A. Foakes 『A Midsummer Night's Dream』 (Cambridge University Press) ISBN:9780521532471 (updated edition)											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業では翻訳作業は行わない。各授業でのディスカッションや上演練習のために事前にテキストをよく読んでおくこと。上演の規模は受講者数による。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	舞台芸術論演習 B Seminar on Performing Arts B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 桑山 智成					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
さまざまなジャンルのシェイクスピアの翻案作品を取り上げ、シェイクスピアの原作の特質はどこにあるのか、翻案作品の作り手の狙いはどこにあるのかを考える。											
<b>[到達目標]</b>											
シェイクスピアとその翻案作品を通して、台詞劇、バレエ、オペラ、ミュージカル、音楽、絵画、映画など、さまざまな芸術ジャンルへの理解を深めること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1回～第5回 講師がケーススタディーとして『ハムレット』を取り上げ、作品の解説を行いながら、翻案作品とその特質を解説する。またこの期間に、それぞれの受講生が扱う作品の選定作業も進める。 第6回～第14回 受講生が担当する翻案作品とその原作について発表を行い、ディスカッションを重ね、最終レポートを作成していく。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点（授業でのコメント）（40%） 口頭発表（30%） 最終レポート（30%）											
<b>[教科書]</b>											
使用しない プリント配布。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
前半は『ハムレット』を扱うので事前に作品を読んでおくこと。後半は自分が担当する翻案作品についてリサーチを行い、原作との比較も通して、その特質について文章をまとめていく。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	人文科学研究方法論演習 A Seminar in Research Methods for Humanities and Social Sciences A				担当者所属・ 職名・氏名	こころの未来研究センター 特定助教 清家 理					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
人文科学を研究する為には、先行研究を押さえるための情報探索、及び隣接する学問体系を股がらざるを得ないことが多い。本演習Aでは、研究テーマ、背景、目的、方法を設定するために、先行研究を念入りに探索する実践的学習を実施する。研究を遂行する上で、情報の検索・収集・分析から、論理構造や目次作りまで、高度な論文の書き方と発表法を目指して指導する。											
<b>[到達目標]</b>											
本演習によって、学生は信憑性と注目度の高い情報を直ぐに探せ、それらを自分の研究論文の先行研究として位置付けられるようになる。そして論文の論理的構成と標準的形式を理解して、研究方法論の基礎を身に付ける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
下記の様な内容を毎週紹介し、それぞれに関する宿題を一緒に添削・訂正する：											
1 メモの取り方、本の開き方、学術的集中法等											
2 研究テーマの選び方・絞り方・目的と研究題目											
3 論文調の表現や注意点・中心的概念の定義の種類											
4 基礎文献の特定・確認・検索方法											
5 Cinii/Web of Science による有用記事 + 目的の明瞭化											
6 書評で注目される著書の検索											
7 Impact Factor や被引用件数で雑誌記事を検索											
8 アブストラクトの使い方と書き方											
9 アウトライン・目次 論理構造の形成											
10 書評・優れた研究の事例検討											
11 新聞記事・大宅壮一 (+ 文献表)											
12 非売品：英語と日本語の博論検索、政府白書から科研・財団報告書											
13 文献表作成確認											
14 試験代わりの最終提出											
<b>[履修要件]</b>											
論文作成は、数冊の本を読めば出来る研究ではなく、広範囲な文献収集を要するので、明確な研究仮説及び計画的な時間配分を心がけられる学生を期待する。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
中間の提出：10%、学期末レポート試験：30%、 毎回の出席と宿題提出：60%、と計算して評価する。 なお、4回以上授業を欠席した場合には、単位を認めない。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する 毎回、宿題を提出してもらい、また前回の返却を行う。その積み重ねで最後の評価が決まる。願わくば、論文作成を目指す学生は「人文科学研究方法論」をなるべく早い(3回生の)内に受けて頂											
----- 人文科学研究方法論演習 A(2)へ続く -----											

## 人文科学研究方法論演習 A(2)

きたい。多くの講座の論文作成にも役立つ。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業外学習としては、毎回、受講者の研究テーマに関する作文か、図書館やデータベースで資料に基づく調査か、いずれの作業を必要とする。毎週提出された作文や資料は、次週に返却され、その積み重ねで成果が上がってゆく。またディスカッションの種にもなるので、その予習と提出は欠かせない。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーは水曜日に設定していますが、必ず事前にアポイント希望のご連絡をお願い致します。教室は、南総合館南棟334号演習室の予定である。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	人文科学研究方法論演習 B Seminar in Research Methods for Humanities and Social Sciences B				担当者所属・ 職名・氏名	こころの未来研究センター 特定助教 清家 理					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語

### [授業の概要・目的]

研究を遂行する上で、文献研究のみならず、フィールド調査法、統計学を用いた分析も重要な研究手法である。そのため本講義では、データ収集や調査方法の吟味と実施（特にフィールド調査法）、得られたデータ（質的・数量的）の分析、研究結果のまとめ、プレゼンテーションやディスカッション手法、以上を学び、国内外の学会発表、論文作成に活用できる研究の基礎力習得をめざす。また、座学のみならず、実際に「聞き取り調査演習」（データを収集し、入力まで実施する実習）を行うことで、より座学で得た知識を体得できるようにしていく。

### [到達目標]

本講義を通じ、「人」「社会」に関わる研究を行う者としての「研究力」と「人間力」の強化をめざす。具体的には、以下の通りである。

- 複眼的視野を持って、社会・人間等の研究対象を見ることができる。
- 社会状況や動向に即した研究テーマ、切り口（テーマへのアプローチ）を考えられる。
- 研究テーマ、手法の広がりによる研究対象の深い考察や洞察ができる。
- 数量的データ（量的データ）、文字的データ（質的データ）双方を融合させた研究ができる。
- 意見や価値観の相違を受容することによる、他者の価値観の理解や共有が図れる。
- 研究成果（分析や調査結果）を分かりやすく専門家以外に説明できる能力と責務が持てるようになる。（研究倫理）
- 研究成果を実社会に還元する視点やアイデアを持ち続ける。（研究の社会実装化。社会貢献）

### [授業計画と内容]

- 第1講：イントロダクション - 既存調査票から調査目的を探ってみよう -
- 第2講：データに慣れてみよう - ある事象や傾向を示す数字、文字データを読み取ってみよう -
- 第3講：データを集める - 聞き取り調査法 - （実習前演習）
- 第4講：データを集める - 聞き取り調査法 - （実習：くらしの学び庵もしくは高齢者福祉機関）
- 第5講：データを集める - 聞き取り調査法 - （実習フィードバック）
- 第6講：データを集める - 聞き取り調査法 - （データ入力の演習）
- 第7講：医療者による調査と結果発表 - まとめかた、プレゼン方法を学ぼう -
- 第8講：メディアと調査 - 情報収集が本職の人から学ぶ「調査」
- 第9講：調査手法演習 - 半構造化面接 - （実習前演習）
- 第10講：調査手法演習 - 半構造化面接 - （実習：くらしの学び庵もしくは高齢者福祉機関）
- 第11講：調査手法演習 - 半構造化面接 - （実習フィードバック）
- 第12講：調査演習 - テーマ設定とデータ収集 -
- 第13講：調査演習 - データの整理と分析 -
- 第14講：調査演習 - 研究プロトコル作成とプレゼン -

## 人文科学研究方法論演習 B(2)

### 【履修要件】

特になし

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

毎回の出席と中間および期末課題提出（講義中の取り組みを完成させる形式）、グループワークへの積極的な参加や発言、以上を総合的に評価する。積極的に講義参加ができる学生を期待する。

### 【評価方法】

平常点評価（出席20％，グループワークやプレゼンテーション参加40％）

+

期末課題40％

### 【教科書】

授業中に指示する

### 【参考書等】

（参考書）

授業中に紹介する

（関連URL）

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/event2/2014/09/manabian2014.php>（こころの未来研究センター主催プロジェクト概要）

### 【授業外学習（予習・復習）等】

・官公庁から出ている白書、ニュースや新聞等のメディアで提示されている「調査」「グラフ」に着目していただきたい。そして、自分が興味ある領域については、常に切り抜きやデータ保管するなどし、自分なりの分析、さらに実施すべき調査について考える作業の実施が望ましい。

### （その他（オフィスアワー等））

講義形式は、講義とグループワーク、プレゼンテーションと討議の2タイプで進める。

講義トピックに合致した新聞やニュース報道等、情報に対するアンテナをはりめぐらし、常々より情報収集に努めること。（これが予習、復習につながる）

文献検索等は研究の基礎であるため、本講義と連携している人文科学研究方法論演習Aの受講が望ましい。（人文科学研究方法論演習Aで設定した研究プロトコルを通じた、実際のデータ収集を実施する予定）

本講義内容は、医学・健康領域にも含まれるため、講義でも説明を行うが、全学共通科目「超高齢社会の生活論」でも老年期の医学について取り扱うので、より理解を深めるため

## 人文科学研究方法論演習 B (3)

にも、受講が望ましい。

時間が許す学生は、こころの未来研究センター主催で実施中の『くらしの学び庵』  
- 孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発プロジェクト - に参画し、街の  
高齢者にふれあうことで、調査結果をよりイメージしやすくなり、かつ、生活ニ  
ーズを知る機会を得ることも有意義であると考えられる。  
(推奨レベル：一部は、実習でフィールド活用予定)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	心理学研究法演習 Proseminar on psychological methods				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 永田 素彦	こころの未来研究センター 特定助教 柳澤 邦昭	文学研究科 教授 板倉 昭二	文学研究科 教授 蘆田 宏	こころの未来研究センター 准教授 内田 由紀子	こころの未来研究センター 特定助教 上田 祥行
	配当 学年	1回生	単位数	2		開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金4	授業 形態	演習
【授業の概要・目的】											
心理学の研究に必要な基本的な研究法を、実習を通して学ぶ。あわせて基礎的な推測統計の技法を学ぶ。											
【到達目標】											
心理学の研究法として、質的研究法、社会心理実験、質問紙法、知覚実験のデータ収集法、分析法を習得する。推測統計の基礎を理解する。											
【授業計画と内容】											
第1回 インTRODクション 板倉（文） 第2 - 4回 フィールド研究（質的研究法） 柳澤（こころ） 第5 - 7回 社会心理実験（social interactionなど） 永田（総人） 第8 - 10回 質問紙法 内田・上田（こころ） 第11 - 13回 知覚実験 蘆田・矢追（文） 第14回 まとめ											
各单元の中で実際にデータを収集し、基礎的な分析を行う。											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
各单元ごとのレポート											
【教科書】											
使用しない											
【参考書等】											
（参考書） 授業中に紹介する											
【授業外学習（予習・復習）等】											
データ入力や分析は授業外に行うことになる。また、各单元で用いる分析手法について、十分予習・復習をすること。											
（その他（オフィスアワー等））											
履修要件は設けませんが、内容的には心理学研究法入門の履修が前提となるので、なるべく前期に履修してください。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	創造行為論講読演習 Readings in the Theory of Creative Arts				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 武田 宙也					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
美学・芸術学を研究するうえで必要となる外国語の読解能力を身につける。講読文献の選定に当たっては、古典的な美学理論書、過去から現在にいたる芸術潮流に大きな影響を与えた批評言説、最新の雑誌記事などの中から、受講者の興味・関心や語学力を考慮しつつ適切なものを取り上げる。初回にガイダンスおよび文献の選定を行った後、各回の授業は基本的に、受講者の報告と議論を中心として進行する。											
<b>[到達目標]</b>											
外国語文献を正確に翻訳し、論旨を理解できるようになること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
現代の芸術について考えるうえで重要な外国語文献（おもにフランス語および英語）を輪読する。											
<b>[履修要件]</b>											
フランス語の初級文法を一通り習得していること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点（出席・発表内容・授業への参加度）によって評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
講読文献をあらかじめ読んでくること。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	社会調査のための統計学 Statistics for Social Research				担当者所属・ 職名・氏名	非常勤講師 中森 弘樹					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
社会調査によって得られたデータを分析するために必要となる統計手法について、その原理と利用方法を修得することが本講義の目的である。確率論の基礎（確率と分布）、と推測統計（推定と検定）を中心に概説する。											
<b>【到達目標】</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会調査に必要な、統計学の基礎を修得する。</li> <li>・コンピューターで統計分析を行う際に、それがどのような原理に基づいているのかを理解できるようになる</li> </ul>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 確率論は社会学にどう役立つか</li> <li>2 確率変数、期待値、分散</li> <li>3 確率変数の性質</li> <li>4 二項分布とその応用</li> <li>5 ポアソン分布とその応用</li> <li>6 正規分布とその応用</li> <li>7 区間推定</li> <li>8 帰無仮説のテスト</li> <li>9 中心極限定理</li> <li>10 サンプルングの基礎</li> <li>11 t分布と平均値の差の検定</li> <li>12 カイ二乗分布と独立性の検定</li> <li>13 回帰分析</li> <li>14 各種の相関係数</li> <li>15 3つ以上の変数の関係と統制変数</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
試験による。											
<b>【平成26年度以前入学者】</b>											
80-100:優(A)											
70-79 : 良(B)											
60-69 : 可(C)											
0-59:不合格											
<b>【平成27年度以降入学者】</b>											
96-100:A+											
----- 社会調査のための統計学 (2)へ続く -----											

社会調査のための統計学 (2)

85-95:A  
75-84:B  
65-74:C  
60-64:D  
0-59:F

**[教科書]**

授業時にプリントを配布する。

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

復習をして、分からないことがあれば次の授業時に遠慮なく申し出ること。

**(その他(オフィスアワー等))**

質問・連絡等はh.nakamori1225@gmail.comまで。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	中国文字文化論 The Culture of Chinese Characters				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 松江 崇					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語

### [授業の概要・目的]

元来は古代中国語を表記した文字である「漢字」について、その誕生の背景となった古代中国語との関係に着目しつつ概説する。すなわち、漢字の基本的な機能や構造、形態の種類（字体）、さらにそれらの歴史的変遷について、具体例を紹介しながら解説していく。さらに漢字を秩序立てて収録した古代の辞書を資料としつつ、比較言語学的方法を用いることにより古代の漢字音を復元（「再構」）する方法の原理を解説する。漢字文化圏における言語文化の核心とも言うべき「漢字」について、その機能・構造・音韻の各側面を、歴史的観点を踏まえつつ、総合的に理解することを目的とする。

### [到達目標]

漢字の機能や構造・字体、さらにそれらの歴史的変遷に関する基礎的知識を習得し、背景にあった古代中国語との複雑な関係を理解し得るようになる。また、古代の辞書を資料としつつ、比較言語学的方法を用いることにより古代の漢字音を復元（「再構」）する方法の原理を理解し、復元された漢字音を自らの研究に応用できるようになる。

### [授業計画と内容]

基本的には以下の計画に従って講義を進める。ただし講義の進捗状況に応じて順序や同一テーマの回数を変えることもある。

#### （一）漢字の歴史的変遷 [第1回～第9回]

【第1回】漢字とは何か 漢字基本機能と基本構造

【第2回】漢字の起源；殷代の甲骨文と西周の金文（1）

【第3回】殷代の甲骨文と西周の金文（2）

（甲骨文の発見や解読に関わる基礎知識を紹介し、具体的な用例を講読する）

【第4回】小篆と『説文解字』（1）

【第5回】小篆と『説文解字』（2）

【第6回】隷書の成立と漢字の規範化

【第7回】簡体字とピンインの成立（1）

【第8回】簡体字とピンインの成立（2）

【第9回】漢字の文字論的性格の再検討

#### （二）古代漢字音の復元 [第10回～第14回]

【第10回】漢字音再構成の原理（1）

【第11回】漢字音再構成の原理（2）

【第12回】『広韻』と『韻鏡』（1）

【第13回】『広韻』と『韻鏡』（2）

【第14回】漢字音の再構成の実践

（受講者自らが実際に漢字音の復元作業を体験する）

【第15回】期末試験

【第16回】フィードバック

## 中国文字文化論(2)

### 【履修要件】

特になし

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

原則として平常点（＝授業への積極的な参加、10点）レポート（2回、各20点）、期末試験（筆記試験、50点）により評価する。  
レポートについては到達目標の達成度に基づき評価し、高い独自性を備えているものには特に高い評価を与える。

### 【教科書】

プリントを配布する。

### 【参考書等】

（参考書）

大西克也・宮本徹 『アジアと漢字文化』（放送大学教育振興会）ISBN:978-4-595-30906

阿辻哲次 『図説・漢字の歴史』（大修館書店）ISBN:4-469-23056-1

### 【授業外学習（予習・復習）等】

毎回授業が終了するたびに、復習をしておくこと。  
必要に応じて、予習を課すことがある（授業中に指示する）。

### （その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	中国書誌論 The History of Chinese Books	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 松江 崇
---------------	---------------------------------------	-----------------	--------------------

配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

中国の書物、すなわち「漢籍」（古代中国語で表記された文献）を扱う場合、辨えておくことが必須な事項がある。目的とする文献をどのような手順で探し、使用目的にあわせてどのような版本（刊本、写本を含む）を選択し、版本による文字の異同の是非をどのように判断すべきか、といったことである。これらに関する基礎的な知識を提供することを目的として、漢籍の体系化・分類方法に関する学問である「目録学」、さらに漢籍のテキストに関する学問である「版本学」、文字の校勘に関する学問である「校勘学」についての入門的な内容を講ずる。

#### [到達目標]

現在も図書館で使用されることのある漢籍の分類方法である四部分類の内実を理解し、単独では刊行されていない文献を叢書の中から探し出し得るなど、実際に目録学の知識を応用できるようになる。また、目的とする文献に関して、代表的な版本の種類とそれらの特色に関わる事項を理解し、使用目的に相応しい版本を選択できるようになる。さらに、版本による文字の異同がある中で、当該の版本ではどのような基準で文字が選択されたのかを推定できるようになる。

#### [授業計画と内容]

基本的には以下の計画に従って講義を進める。ただし講義の進捗状況に応じて順序や同一テーマの回数を変えることもある。

##### (一) 目録学入門 [第1回～第5回]

【第1回】目録学の萌芽と『漢書』『芸文志』

(現存する最古の目録である後漢・班固の『漢書』『芸文志』から清代の『四庫全書総目提要』に至る体系化・分類方法の変遷を概観する)

【第2回】四部分類通覧(経部・史部)

【第3回】四部分類通覧(子部・集部)

(『四庫全書総目提要』の分類体系の具体的な内実を紹介する)

【第4回】主要な叢書について

(『四部叢刊』や『叢書集成』などの叢書の成立背景と特色とを紹介する)

【第5回】目的とする文献の探し方

(単独では刊行されていない文献を、叢書の中から探し出す作業を実践する)

##### (二) 版本学入門 [第6回～第12回]

【第6回】「版本」とは何か；刊本の誕生(1)

【第7回】刊本の誕生(2)

【第8回】唐五代・宋代の印刷事業

【第9回】元・明・清代の印刷事業

【第10回】版本成立の年代推定と「避諱」

(語彙項目や文法項目、さらに皇帝の本名(諱)を文献に記せないために生ずる避諱という現象など、版本の歴史の変遷に関わる現象を解説する)

【第11回】版本学に関わる用語の整理

【第12回】敦煌文献について

##### (三) 校勘学入門 [第13回～第14回]

【第13回】伝統的手法による校勘

【第14回】言語学的観点からの校勘の試み

【第15回】期末試験

中国書誌論(2)

【第16回】フィードバック

【履修要件】

特になし

【成績評価の方法・観点及び達成度】

成績評価の方法・観点及び達成度

原則として平常点（＝授業への積極的な参加、10点）レポート（2回、各20点）、期末試験（筆記試験、50点）により評価する。

レポートについては到達目標の達成度に基づき評価し、高い独自性を備えているものには特に高い評価を与える。

【教科書】

プリントを配布する。

【参考書等】

（参考書）

井波稜一『知の座標 中国目録学』（白帝社）ISBN:978-4891746346

陳国慶（著）、沢谷昭次（訳）『漢籍版本入門』（研文出版）ISBN:978-4876360413

【授業外学習（予習・復習）等】

毎回授業が終了するたびに、復習をしておくこと。

必要に応じて、予習を課すことがある（授業中に指示する）。

（その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	文明構造論IIA Structure of Civilizations IIA		担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 江田 憲治	非常勤講師 関根 真保	非常勤講師 武上 真理子	非常勤講師 中村 朋美	東南アジア地域研究研究所 助教 中山 大将				
	配当 学年	2-4回生		単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木4	授業 形態	講義	使用 言語
【授業の概要・目的】												
「文明構造論」とは、現代の「国際文明」を構造的に考察し、文明諸領域のさまざまな問題点を考察する学問領域である。この「文明構造論」の趣旨から、本講義では、アジア近代における国境と境界を共通テーマとし、歴史学・社会学などを分析手段に用い、下記の個別テーマについて、リレー講義を行う。												
【到達目標】												
近年、その限界が指摘されてもいる「西欧近代主義」の限界を理解し、多面的かつ多元的に、現代の「国際文明」を理解するための知識と視座を獲得する。												
【授業計画と内容】												
第1回 ガイダンス												
第2回～第4回 国境と国民の時代 日露境界地域サハリン島(中山)												
第5回～第7回 「租界」に住んだ人々 戦前期上海の外国人社会(関根)												
第8回～第10回 越境する科学 孫文を例として(武上)												
第11回～第13回 国境の出現 中央アジア地域の近代(中村)												
第14回 総括												
【履修要件】												
特になし												
【成績評価の方法・観点及び達成度】												
出席状況とレポート。												
【教科書】												
授業中に指示する プリントを配布する。												
【参考書等】												
(参考書) 授業中に紹介する												
【授業外学習(予習・復習)等】												
授業中に配布する資料をあらかじめ読んだ上で出席すること。授業に必要な授業外学習については、別途授業中に指示する。												
(その他(オフィスアワー等))												
授業内容やレポート作成についての質問は、授業中において受け付けるほかに、江田研究室で受け付ける(吉田南総合館4階421室、水曜12:00～13:00)。												
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。												

授業科目名 <英訳>	文明構造論IIB Structure of Civilizations IIB		担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 江田 憲治
				人間・環境学研究科 助教 鵜飼 大介
配当 学年	2-4回生	単位数	2	非常勤講師 西井 美幸
開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木4	非常勤講師 須藤 秀平
授業 形態	講義	使用 言語	日本語	非常勤講師 石澤 将人
				非常勤講師 武上 真理子
				非常勤講師 藪田 有紀子
【授業の概要・目的】				
「文明構造論」とは、現代の「国際文明」を構造的に考察し、文明諸領域のさまざまな問題点を考察する学問領域である。この「文明構造論」の趣旨から、本講義は、欧米近代の「理念」と国際関係を共通テーマとし、歴史学・文学・政治学などを分析手段に用い、下記の個別テーマについて、リレー講義を行う。				
【到達目標】				
近年、その限界が指摘されてもいる「西欧近代主義」の偏重を克服し、多面的かつ多元的に、現代の「国際文明」を理解するための知識と視座を提供する。				
【授業計画と内容】				
第1回 ガイダンス (江田・鵜飼)				
第1回～第3回 ヴィルヘルム・フォン・フンボルトにおける自由と教養の理念 (石澤)				
第4回～第6回 18世紀末～19世紀初頭のドイツ像ないし民族/民衆概念 (須藤)				
第7回～第9回 大戦前後のドイツ人文主義について (西井)				
第10回～第12回 レナード・ウルフと国際連盟 (藪田)				
第13回～第14回 科学史から見る西洋近代文明 (武上)				
【履修要件】				
特になし				
【成績評価の方法・観点及び達成度】				
出席状況とレポート。				
【教科書】				
授業中に指示する プリントを配布する。				
【参考書等】				
(参考書) 授業中に紹介する				
【授業外学習(予習・復習)等】				
授業中に配布する資料をあらかじめ読んだ上で、出席すること。授業に必要な授業外学習については、別途授業中に指示する。				
(その他(オフィスアワー等))				
授業内容やレポート作成についての質問は、授業中において受け付けるほかに、江田研究室で受け付ける(吉田南総合館4階421室、水曜12:00～13:00)。				
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。				

授業科目名 <英訳>	多文化社会論IA Studies on Multicultural Society IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 土屋 由香					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
現代アメリカ社会とそれが形成されてきた歴史とを、政治・経済・民族・宗教・ジェンダーなど複眼的な視点から考察し基礎的な知識を修得するとともに、特に関心を持ったテーマについて、自主的な学びを通してさらに深い知識を身につける。アメリカについて幅広く体系的に学ぶための入門的コースであると同時に、より高度な専門的学習へと進むためのきっかけを提供することを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代アメリカ社会とそれが形成されてきた歴史について基礎的・体系的な知識を修得する。</li> <li>・専門的・学術的な文献を正確かつ批判的に読みこなす能力を身につける。</li> <li>・体系的な学びの中から特に関心のあるテーマを見つけ、自主的に学ぶ能力を養う。</li> <li>・自主的に学んだ内容をまとめ、口頭および記述によって表現する能力を養う。</li> </ul>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
学期の前半は、渡辺靖編『現代アメリカ』（有斐閣アルマ）を共通テキストとして基礎的かつ体系的な知識を修得し、学期後半は其中で特に関心を持ったテーマについて、授業中に提示するリストの中から各自選んだ文献を読んで口頭発表、ディスカッションおよびレポート作成を行う。（前半部分と後半部分の割合は受講者数によって調整する。）											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポート、口頭発表、授業への積極的取組みなどを総合的に判断する。出席は3分の2以上を必要とする。											
<b>[教科書]</b>											
渡辺靖編『現代アメリカ』（有斐閣アルマ）ISBN:978-4-641-12419-6											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
各回の報告者は、レジュメを用意し、「ファシリテーター」としての自覚をもって授業に臨むこと。また報告者以外の学生も読書課題を必ず読んでから授業に臨むこと。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィス・アワーは水曜5限または個別のアポイントメントによる。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	多文化社会論II A Studies on Multicultural Society IIA				担当者所属・ 職名・氏名	非常勤講師 藤岡 真樹					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語及び英語
【授業の概要・目的】											
<p>本授業は、おもに歴史学の観点から、第二次世界大戦後のアメリカ合衆国の政治や社会、文化についての理解を深めようとするものです。具体的には、1950年代初頭までのアメリカの大学における研究活動と国家との関係に関する講義と、1960年代の市民権運動（Civil Rights Movement）や学生運動を扱った書物や論文の講読を組み合わせた授業を実施します。</p>											
【到達目標】											
<p>この授業では、第二次世界大戦後のアメリカの歴史に関する講義と受講生による書物や論文（日本語および英語）の講読や報告（プレゼンテーション）を通じて、1) 1940年代後半から1960年代にかけてのアメリカへの歴史的理解を深めてもらうこと、2) 学術書や学術論文を、論旨から逸脱することなく読み、かつ、ポイントを適切に提示するプレゼンテーション力を身につけてもらうこと、3) 担当者や他の学生の議論を通じて、学術的かつ生産的な議論の方法を学んでもらうこと、を目的とします。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>受講生の理解度合いによって、回数および計画を変更する場合があります。</p> <p>第1回 イン트로ダクション（授業の進め方、教材および成績評価方法についての説明、報告にあたっての基礎知識の教授）</p> <p>第2回～第5回 【講義】第二次世界大戦期から1950年代初頭までのアメリカの大学における地域研究（とくに）ソ連研究の歴史を振り返る。（教科書を使用します。）</p> <p>第6回～第9回 【講読】冷戦期の自然科学と連邦政府・軍部・産業との関係を概観する論文を読む（コピーを配布します）。</p> <p>第10回～第14回 【講読】1960年代の市民権運動と学生運動に関する論文を読む（コピーを配布します）。</p> <p>第15回 フィードバック</p>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
<p>平常点：60% 予習の有無、授業への積極的な参加と報告、発言</p> <p>レポート（定期試験に代わるもの）:40% 教科書や参考文献、配布資料の内容を踏まえて執筆してもらいます。レポートのテーマ、体裁や執筆上の注意点については、授業中に説明します。</p>											
----- 多文化社会論II A (2)へ続く -----											

## 多文化社会論II A(2)

### [教科書]

藤岡真樹 『アメリカの大学におけるソ連研究の編制過程』 (法律文化社) ISBN:978-4-589-03814-2

### [参考書等]

#### (参考書)

本授業に関連する文献としては、Stuart W. Leslie, *The Cold War and American Science: The Military-Industrial-Academic Complex at MIT and Stanford* (New York: Columbia University Press, 1993) と、W. J. Rorabaugh, *Berkeley at War: The 1960s* (New York: Oxford University Press, 1989)があります (必ずしも購入する必要はありません)。

### [授業外学習(予習・復習)等]

#### 【予習について】

購読においては、受講生に文献の報告をしてもらいます。指名された受講生はレジュメを作成し、参加人数分を用意して授業に臨んでください (基本的には、1名で1回の報告を担当してもらう予定ですが、参加者の人数および学年によっては複数で担当してもらうこともあります)。報告担当者以外の受講生も文献を必ず読んでください。授業中に予習の有無を確認するための質問をします。

#### 【注意事項】

- 1) レジュメの書き方および印刷方法は初回の授業で伝えますので、受講希望者は必ず出席してください。
- 2) 全授業に出席するのが前提ですが、とくに報告の担当回に正当な理由なく無断欠席した場合には、単位を認定しないことがあります。出席および報告が不可能になった場合には、事前に授業担当者まで連絡してください。

### (その他(オフィスアワー等))

#### 【オフィス・アワー】

毎週金曜日の15時から17時まで受けつけます。申し出があれば、日時、場所の変更も可能です。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	国際関係論IA International Relations IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 齋藤 嘉臣					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>国際秩序を維持するメカニズムはいかに構築され、どのように変遷してきたのか。国際社会は17世紀以降、国際社会の安定のために様々な戦争抑止メカニズムを構築してきた。19世紀のウィーン体制、第一次世界大戦後の国際連盟、第二次世界大戦後の国際連合はすべて、平和維持のメカニズムが体现された例である。戦争を防ぎ平和を創る新たなメカニズムの構築が期待されながら、噴出する民族紛争やテロリズムの脅威に対し有効な手立てを見出すことができない今日の国際秩序を念頭に置く時、国際秩序の構築史を振り返ることは、今日的な意義を有していると言える。そこで、過去200年の戦争と平和の歴史を考察することで、今日の国際秩序を史的文脈の中で理解するための思考の基盤をつくることを、講義の目的とする。</p>											
[到達目標]											
国際政治の歴史に関する深い理解を得る。											
[授業計画と内容]											
以下の内容で各1-2回程度、講義する。（進め方は変わる可能性もある）											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション</li> <li>2 国際関係の起源</li> <li>3 勢力均衡と市民革命の時代</li> <li>4 「ヨーロッパ協調（Concert of Europe）」体制の構築</li> <li>5 「ヨーロッパ協調（Concert of Europe）」体制の変容</li> <li>6 ドイツ統一と帝国主義の時代</li> <li>7 ヴェルサイユ体制と平和</li> <li>8 第2次世界大戦への道</li> </ol>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
試験の成績（100%）											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
毎回の講義後には、指定された参考文献等を読み、内容の理解を深めること。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国際関係論IB International Relations IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 齋藤 嘉臣					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
近年、冷戦史は新たな活況を呈している。従来のような米ソに排他的な焦点を当てる冷戦史観や東西対立を殊更強調する冷戦史観は相対化されつつあり、かわって米ソの同盟国の外交や東西協力にも注目が集まるようになった。また、軍事的・政治的対立に加えて文化的な対立にも目配りする研究の蓄積により、冷戦をより包括的に再照射することが可能になっている。そこで、講義では、新しい冷戦史の観点から、20世紀後半の国際政治史を検討する。これにより、冷戦期と冷戦後の国際社会の変化と連続性を、明らかにすることが可能となる。											
[到達目標]											
第二次世界大戦後の国際政治についての深い理解を得る。											
[授業計画と内容]											
以下の内容を各1-3回程度、講義する。（進め方は変わる可能性もある）											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション</li> <li>2 戦後秩序の模索と冷戦の始まり</li> <li>3 イデオロギー対立と「演劇」性</li> <li>4 封じ込めと1955年体制 冷戦対立の激化と外交の希求</li> <li>5 多極化の世界とデタントの進展</li> <li>6 文化外交（ジャズ外交）の展開</li> <li>7 デタントと冷戦終結</li> </ol>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
試験の成績（100%）											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
毎回の講義後には、指定された参考文献等を読み、内容の理解を深めること。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国際関係論IIA International Relations IIA				担当者所属・ 職名・氏名	大阪大学 教授 真山 全					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>国際関係論IIA及びIIBは、国際関係論という科目名称ながら内容は国際法である。IIAとIIBはそれぞれ2単位の隔年開講科目であって、両者で国際法の全範囲が講義される。すなわち、IIAは、国際法の一次的規則ともいわれる部分を中心に検討し、IIBではそうした規則の違反があった場合の対応に関する国際法規則をみる。講義は、従来型の講義形式をとる。特に他の法学科目の履修を本科目の履修条件とはしていないので、法学上の基本的な概念も必要があれば説明する。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>国際法を通じて、法的な思考ができ、国際関係その他における様々な事象を法的にも分析できるようにする。国際関係や政治学を勉強する場合にも、ある程度の法的思考や国際法の知識が必要であるから、法学専攻者以外にとっても有用な講義となるであろう。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 国際法の法的性質（任意法的性格、主権国家間の水平的関係の規律）</li> <li>2. 国際法の主体（国家、国際機構等）</li> <li>3. 国際法の法源（条約、慣習法、法の一般原則）</li> <li>4. 国際法と国内法の関係（国際関係及び国内法秩序における効力関係）</li> <li>5. 国家と政府の承認と承継</li> <li>6. 国家領域（領域取得権原）</li> <li>7. 同（領土、領水、領空）</li> <li>8. 海洋法（領水、EEZ、大陸棚）</li> <li>9. 同（公海、深海底）</li> <li>10. 航空法（領空とそれ以外の空、防空識別圏）</li> <li>11. 宇宙法（宇宙空間と天体）</li> <li>12. 南極その他、</li> <li>13. 国籍（国籍付与の方式）</li> <li>14. 外国人法（一国内にある外国人の処遇）</li> <li>15. 国際的人権保障（一国内にあるその国の国民の人権保護）、全体のまとめ</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>主に定期試験により評価するが、出欠状況も考慮する。定期試験7出欠3の割合である。なお、講義のメモ以外の目的で電子機器を使用している場合も減点する。</p>											
<b>[教科書]</b>											
<p>加藤信行他『ビジュアルテキスト 国際法』（有斐閣）          坂元茂樹他編『ベーシック条約集』（東信堂）          奥脇直也編『国際条約集』（有斐閣）          上記の教科書及び条約集（条約集はいずれか一方でよい）は講義に持参のこと。</p>											
----- 国際関係論IIA(2)へ続く											

国際関係論IIA(2)

[参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

各回の講義の範囲を事前に教科書で予習し、講義後も条約集で条文などを確認しつつ復習する。講義は、口頭説明と板書によるが、教科書も参照する。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーは設定しない。担当教員は、非常勤講師であるので、講義時間以外で質問等を実施する場合には、メールによることになるが、そのアドレスは講義中に必要があれば連絡する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	社会経済システム論IA Theory of Socio-Economic System IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 柴山 桂太					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>グローバル化がもたらす社会経済への変化について、歴史的・理論的に考察する。グローバル化は、最近になって始まったものではなく、歴史上、何度か繰り返されている。とりわけ19世紀末から20世紀初頭にかけては、現在に匹敵する貿易や投資の拡大があったことが確認されている。この時代は同時に、金融危機が頻発した時代であり、国内格差が拡大した時代であり、帝国主義の時代でもあった。この時代と現代の比較を通じて、現代のグローバル化が直面しているさまざまな課題について考えるのが、この講義の目的となる。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>グローバル化という切り口から現代史を独自に理解し直すと共に、経済学や経済思想についての基礎知識を身につける。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>以下の論点を扱う。なお論点毎の回数は固定したものではなく、その時々受講者の理解度や時事的状況の変化に応じて適宜、変更される。</p> <p>(1) グローバル化とは何か【3回】 グローバル化は具体的にどのような経緯で進展してきたのか。時事問題を交えて解説する。</p> <p>(2) グローバル化の歴史比較【4回】 貿易や投資が地球規模で活発になる現象は、歴史的に何度か繰り返されている。過去と比較した場合の、現代のグローバル化の特徴について考える。</p> <p>(3) 国家主権と民主主義【4回】 過去と現在の反グローバル化の動きは、どのような背景で起きたのか。ナショナリズムや保護主義の歴史と、最近のポピュリズム政治の台頭について解説する。</p> <p>(4) グローバル化と国際政治【3回】 国家間の関係に経済グローバル化はどのような影響を与えているのか。19世紀の帝国主義、20世紀の冷戦の歴史を振り返りつつ、現代のポスト冷戦期の国際秩序の再編について考える。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポート試験(3000字程度)による。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
----- 社会経済システム論IA(2)へ続く -----											

社会経済システム論IA(2)

---

**[参考書等]**

(参考書)

出来る限り多くの文献を講義中に紹介する。

**[授業外学習(予習・復習)等]**

レポート作成にあたっては、統計資料の活用と講義中に指示する参考文献の読解が不可欠となる。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	社会経済システム論IB Theory of Socio-Economic System IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 柴山 桂太					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
二〇〇八年以後の世界的な経済危機は、単に各国の政策の失敗によって引き起こされたと考えすることはできない。一九八〇年代から始まった資本主義や国際関係の構造変化にまで目を向ける必要がある。講義では、現代の世界経済が直面する危機について、グローバルな不均衡の拡大や、所得格差、債務の拡大といった観点から歴史的、理論的に考察していきたい。											
【到達目標】											
世界経済の現状について基本的事項を理解し、および現代の資本主義が直面する諸問題についての理解を深める。											
【授業計画と内容】											
以下のトピックを取り上げる。なお項目毎の回数は固定的なものではなく、進行状況に応じて適宜、修正される。											
(1) 資本主義の危機とは何か?【3回】 一九三〇年代、七〇年代の危機と比べた時、現代の経済危機にはどのような特徴があるのか。歴史を振り返りつつ解説する。											
(2) 経済成長と長期停滞【4回】 近代的な経済成長はどのような背景で起きたのか。また、最近の先進国で見られる経済停滞は、どのような要因によるのか。複数の学説を紹介しつつ、解説する。											
(3) 格差・不平等の拡大【3回】 格差や不平等の拡大が起きている歴史的・理論的な背景と、最近の政治状況との関連について概説。											
(4) 金融の不安定化と政策の「実験」【3回】 資本主義の歴史につきもののバブルについて解説するとともに、金融危機以後に行われている実験的な経済政策の今後について考える。											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
レポート試験(3000字程度)によって評価する。											
【教科書】											
使用しない											
----- 社会経済システム論IB(2)へ続く -----											

社会経済システム論IB(2)

---

**[参考書等]**

(参考書)

出来る限り多くの文献を講義中に紹介する。

**[授業外学習(予習・復習)等]**

レポート作成に当たっては、統計資料の活用と講義中に指示する参考文献の読解が不可欠となる。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	文明構造論演習III A Seminar IIIA on Struture of Civilizations				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 細見 和之					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
ドイツの思想家・批評家ヴァルター・ベンヤミンの著作、『ベンヤミン・コレクション5』、『ベンヤミン・コレクション6』を日本語訳で読み進めることで、20世紀前半におけるドイツ語圏での思想動向を、その歴史的背景に照らして深く理解することをめざす。あわせて、受講者に自由な発表の機会を設定して、各自の問題意識を明確にしてゆくことをめざす。											
[到達目標]											
ベンヤミンの難解な文章を日本語訳をつうじて精読することによって、20世紀のヨーロッパを代表する優れた知性と感性に親しむことで、たんに知識としての文化理解のみならず、その文化を捉える自らの知性と感性を鍛え上げることができる。独自の発表の回では、最終的な卒業研究にいたるステップとして、自らの問題意識を高めるとともに、他の受講者の発表および討論をつうじて、関心領域を広げることができる。											
[授業計画と内容]											
ベンヤミンの文章を精読し合う回と各自が独自の発表を行う回を、隔週で設定することを基本とする。ベンヤミンを読む回では、事前に担当者を設定して、当該の範囲について設問を事前に届けていただき、受講者はその設問に自分なりの解答をもって授業に臨む。また、発表の回では、発表者が事前にテーマなりレジュメなりを届け、発表後にできるかぎり相互討論の時間を設ける。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席を重視し、そのなかでの発表、議論、応答などを成績の判定基準とする。											
[教科書]											
ヴァルター・ベンヤミン 『ベンヤミン・コレクション5』（ちくま学芸文庫） ヴァルター・ベンヤミン 『ベンヤミン・コレクション6』（ちくま学芸文庫）											
[参考書等]											
（参考書） 細見和之 『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む』（岩波書店）											
[授業外学習（予習・復習）等]											
ベンヤミンの文章を精読する回には、必ず当該箇所を事前に読み、設問担当者の設問に自分なりの答えを用意しておくこと。 発表の回では、少しずつでも自分の問題意識を明確にできるよう、大胆に取り組むこと。											
（その他（オフィスアワー等））											
火曜日と水曜日の昼休みには、原則として研究室にいます。なんなりとご相談に来てください。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	文明構造論演習III B Seminar IIIB on Structure of Civilizations				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 細見 和之					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
ドイツの思想家・批評家ヴァルター・ベンヤミンの著作、『ベンヤミン・コレクション7』、『ドイツ悲劇の根源』を日本語訳で読み進めることで、20世紀前半におけるドイツ語圏での思想動向を、その歴史的背景に照らして深く理解することをめざす。あわせて、受講者に自由な発表の機会を設定して、各自の問題意識を明確にしてゆくことをめざす。											
[到達目標]											
ベンヤミンの難解な文章を日本語訳をつうじて精読することによって、20世紀のヨーロッパを代表する優れた知性と感性に親しむことで、たんに知識としての文化理解のみならず、その文化を捉える自らの知性と感性を鍛え上げることができる。とくに後半で読みあう『ドイツ悲劇の根源』はきわめて難解ながら、同時に影響力の大きな著作。独自の発表の回では、最終的な卒業研究にいたるステップとして、自らの問題意識を高めるとともに、他の受講者の発表および討論をつうじて、関心領域を広げることができる。											
[授業計画と内容]											
ベンヤミンの文章を精読し合う回と各自が独自の発表を行う回を、隔週で設定することを基本とする。ベンヤミンを読む回では、事前に担当者を設定して、当該の範囲について設問を事前に届けていただき、受講者はその設問に自分なりの解答をもって授業に臨む。また、発表の回では、発表者が事前にテーマなりレジュメなりを届け、発表後にできるかぎり相互討論の時間を設ける。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席を重視し、授業中の発表、議論、応答などを成績の判定基準とする。											
[教科書]											
ヴァルター・ベンヤミン 『ベンヤミン・コレクション7』（ちくま学芸文庫） ヴァルター・ベンヤミン 『ドイツ悲劇の根源 上・下』（ちくま学芸文庫）											
[参考書等]											
（参考書） 細見和之 『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む』（岩波書店）											
[授業外学習（予習・復習）等]											
ベンヤミンの文章を精読する回には、必ず当該箇所を事前に読み、設問担当者の設問に自分なりの答えを用意しておくこと。 発表の回では、少しずつでも自分の問題意識を明確にできるよう、大胆に取り組むこと。											
（その他（オフィスアワー等））											
火曜日と水曜日の昼休みには、原則として研究室にいます。なんなりとご相談に来てください。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	多文化社会論演習IA Studies on Multicultural Societies IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 土屋 由香					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語及び英語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>本授業では冷戦期アメリカの文化と政治について、英語の学術書からの抜粋を毎週1章分ずつ読み、当該分野における重要な先行研究のうち、少なくとも3～4冊分の概要とそれらの学術的位置づけを把握することを目的とする。文化と政治、私的領域と公的領域の密接な関係を具体的な事例研究を通して学び、文化の政治性や政治の文化への浸透について理解を深める。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語の学術文献を正確かつ批判的に読みこなす能力を養う。</li> <li>・冷戦期アメリカの文化と政治に関する重要文献のうち何冊かを選び、その内容や学術的意義を理解する。</li> <li>・文化と政治、私的領域と公的領域の関係性について理解する。</li> <li>・「冷戦期アメリカの文化と政治」という分野における先行研究について説明出来るようになる。</li> </ul>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>冷戦期アメリカの文化と政治に関する主要な英語文献を毎週1章ずつ読み、担当者を決めて口頭報告とディスカッションを行う。各文献から3～4章ずつ、少なくとも1学期間で3～4冊をカバーする。具体的には、Elaine Tyler May, <i>Homeward Bound: American Family in the Cold War</i>; Christina Klein, <i>Cold War Orientalism: Asia in the Middlebrow Imagination, 1945-1961</i>; Mary Dudziak, <i>Cold War Civil Rights: Race and the Image of American Democracy</i>ほかを使用する。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
口頭報告、レポート、授業への積極的取り組みなどを総合的に評価する。3分の2以上の出席が必要である。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する 毎週課題を配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
課題を読んでから授業に臨むこと。報告者はレジュメを作成し、「ファシリテーター」としての自覚をもって授業に臨むこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィス・アワーは水曜5限または個別のAppointmentによる。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国際関係論演習IA Seminar on Law of International Relations IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 齋藤 嘉臣					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
今日の国際政治を研究する視座を養うため、国際政治に関する書籍を輪読する。授業を通して履修者には、個別の研究課題に独自の観点から研究を行うことができる素地を獲得することが期待される。											
<b>[到達目標]</b>											
国際政治や外交史に関する書籍を読み、国際政治学上における意義を理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
履修者と相談の上、輪読する書籍を決定する。 演習時には、毎回、担当者を事前に決定し、担当章に関する報告を行った後、参加者全員で内容の確認をすると同時に議論を深める。履修者には、事前に該当する章の精読を求めるほか、A4で一枚程度で内容分析とコメントを示したものを事前に回覧することを求める。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポート・個別報告（50%） 出席点・議論への貢献（50%）											
<b>[教科書]</b>											
未定											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
演習の前には扱うことが予定される箇所について精読し、自ら内容分析を行うと同時にコメントを用意すること。また、演習の後には、指示された参考文献を深く読みこむこと。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国際関係論演習IB Seminar on Law of International Relations IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 齋藤 嘉臣					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
外交・国際政治にかかわるテーマにつき個別研究課題に独自の観点から研究を行うことができる素地を獲得する。											
<b>[到達目標]</b>											
外交・国際政治に関する個人研究を行い、報告ならびにコメント提供を行うことのための視座を涵養する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
外交・国際政治に関連する個人研究を進め、報告を行った後に履修者全員で討議を深めることで、国際政治に対する理解を深めることが目的である。テーマはかなり広く、オリジナリティのある視点からの報告に期待する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
最終レポート提出・個別報告（50%） 議論への貢献（50%） 出席は成績評価の条件ではないが、4回以上の欠席者には単位を与えない。											
<b>[教科書]</b>											
特になし											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 特になし											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
各自、演習の前後に自らスケジュールを立て、個別研究を進めておくこと。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国家・社会法システム論演習IA Seminar on Law and Social System IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 那須 耕介					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
現代の法哲学・政治理論にかかわる文献の講読をおこないます。今年度は、中山竜一『二十世紀の法思想』を読む予定です。テキストの精読とそれにもとづく意見交換（とそこからの逸脱と）を通じて、各自の設問の明確化・深化拡充をうながしたいと考えています。											
<b>【到達目標】</b>											
今年度のテキストには中山竜一先生の『二十世紀の法思想』を選びました。二度の世界大戦および冷戦とその終結を経験した二十世紀の世界を背景に、法思想はどのような展開を見せたのか。ケルゼン、ハート、（ウィトゲンシュタイン、）フラー、ドゥオーキン、アンガー、ケネディ、デリダらの企てを「法の自立性」と「言語論的転回」をキーワードに読み解きます。これらの流れを追うことで、現代の法思想・法哲学の基本的な問題関心とそれらへの取り組みに際してとられてきた主要な手法について理解を深め、批判的な検討を加えます。指定テキストの正確な把握はもちろん、その要約的大意や中心的／周縁的論点をとらえて明確に示す訓練に重点をおきます。また、テキストの背景にある書き手の問題関心とその源泉への想像力、あるいは論点をふまえての逸脱的な議論展開や問題提起の力をやしません。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
原則として、ゼミ参加者が交代でテキストを要約して報告し、適宜議論をおこないます。初回・第2回目のみは那須が導入的解説を行います。その後は受講者の報告と討論が中心となります。原則として1つの章を2回に分けて取り上げます。参考のため、以下、テキストの目次を挙げておきます。											
はじめに											
第1章 20世紀法理論の出発点 ケルゼンの純粹法学											
第2章 法理論における言語論的転回 ハートの『法の概念』											
補論 ハート理論における「法と道徳」											
第3章 解釈的実践としての法 ドゥオーキンの解釈的アプローチ											
第4章 ポストモダン法学 批判法学とシステム理論											
補論 脱構築と正義 デリダ「法の力」											
第5章 むすび											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
発表分担(50%)と議論への貢献度(50%)によって評価します。											
----- 国家・社会法システム論演習IA(2)へ続く -----											

国家・社会法システム論演習IA(2)

**[教科書]**

中山竜一 『二十世紀の法思想』（岩波書店）

**[参考書等]**

（参考書）  
授業中に紹介する

**[授業外学習（予習・復習）等]**

報告を担当しないときにもテキスト該当箇所には目を通して論点・疑問点を整理しておいてください。本講の主題とは無関係な問題の探求を怠らず、そこで得た知見をここでの議論に生かしてもらえると嬉しいです。

**（その他（オフィスアワー等））**

質問・苦情・要望・相談・面談の申し込み等はnasu.kosuke.6a@kyoto-u.ac.jpにて申し受けます。（@は小文字に直してください。）

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	国家・社会法システム論演習IB Seminar on Law and Social System IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 那須 耕介					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
現代の法哲学・政治理論にかかわる文献の講読をおこないます。今年度は、前期でとりあげた中山竜一『二十世紀の法思想』に紹介された思想家と主題に即して、受講生各自が自分の関心に基づいて報告を行い、出席者で討論を加えることにしたいと思います。二十世紀の法思想・法哲学が取り組んだ課題の中から特に興味深いものを各自が選び、理解を深めるとともに批判的な観点を養います。											
<b>[到達目標]</b>											
原則として、今年度前期の演習で取り上げた思想家・論点の中から、受講者が自身の関心に即して主題を選び、持ち回りで報告を行います。とはいえ、あまり厳しい限定を設けず、出席者の興味関心を最大限に活かせる場としたいと思います。 初回・第2回目については那須が導入的解説を行い、3回目以降は受講者の報告と討論を中心とします。割当て・スケジュールについては第2回目に確定します。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
できれば今年度前期の「国家・社会法システム論IA」を受講していることが望ましいですが、そこでの指定テキスト（中山竜一『二十世紀の法思想』岩波）を読んでおいていただければ問題ありません。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
発表分担(50%)と議論への貢献度(50%)によって評価します。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 中山竜一『二十世紀の法思想』（岩波書店）											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
報告を担当しないときにもテキスト該当箇所には目を通して論点・疑問点を整理しておいてください。本講の主題とは無関係な問題の探求を怠らず、そこで得た知見をここでの議論に生かしてもらえると嬉しいです。											
（その他（オフィスアワー等））											
質問・苦情・要望・相談・面談の申し込み等はnasu.kosuke.6a@kyoto-u.ac.jpにて申し受けます。（@は小文字に直してください。）											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国家・社会法システム論演習IIA Seminar on Law and Social System IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小畑 史子					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
働くことに関して職場で生起する様々な問題を、法律学的に解決する方法を検討し、雇用社会の在り方や国家の役割を議論する。											
<b>[到達目標]</b>											
自ら選んだテーマに関する発表と議論の司会をすることにより、設定したテーマに関して網羅的に調査する能力と、労働・雇用問題に関する洞察力と、問題の重要性や正確な内容を聞き手に伝える表現力と、議論をまとめ上げる能力を身につけることができる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第一回目に毎週の発表担当者を決める。発表者は担当する週の回の前半45分に自分の選んだテーマにつき発表を行う。後半の45分は、その発表をもとに全員でディスカッションを行う。テーマは、働くことに関する法律を中心とした国家・社会法システムに関する項目の中から、担当者が自由に選択することとする。たとえば、高齢者雇用安定法改正や過労死の業務上外認定の基準、リストラ解雇の効力、労働者派遣法の課題、いわゆる名ばかり管理職問題、職務発明の対価、留学費用の返還請求等のテーマが考えられる。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点による。担当回における発表および議論の司会進行の内容ならびにそれ以外の回において果たした役割や発言の内容により、優（非常に優れている）、良（優れている）、可（合格水準に達している）、不可（合格水準に達していない）の四段階評価を行う。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
発表を担当する回については、事前に綿密な準備をし、発表と議論がスムーズに行えるようにすること。それ以外の回については、その前の回の最後に次回の発表担当者が行う予告を聞き、指示があればそれに従った予習をすること。											
（その他（オフィスアワー等））											
ゼミはゼミ員全員で作りに上げていくものです。授業外でも、新聞や判例集などで伝達される社会問題の法的解決につき興味を持ってキャッチするよう心がけてください。オフィスアワーは特に定めません。問い合わせはobata.fumiko3r@kyoto-u.ac.jpまでメールでお願いします。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国家・社会法システム論演習IIB Seminar on Law and Social System IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小畑 史子					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
働くことに関して職場で生起する様々な問題を法律学的に解決する方法を検討し、雇用社会の在り方や国家の役割について議論する。											
<b>[到達目標]</b>											
自ら選んだテーマに関する発表と議論の司会をすることにより、設定したテーマに関して網羅的に調査する能力と、労働・雇用問題に関する洞察力と、問題の重要性や正確な内容を聞き手に伝える表現力と、議論をまとめ上げる能力を身につけることができる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第一回目に、各週の発表担当者を決定する。各週の発表担当者は、ゼミの前半において、働くことに関する法律を中心とした国家・社会法システムについての項目の中から自由に選んだテーマにつき発表を行う。ゼミの後半では、その発表について全員でディスカッションを行う。たとえば、労働契約法制定の意義、間接差別の法理、CSR(企業の社会的責任)、公務員を巡る問題、精神疾患の業務上外認定、育児休業法の改正等のテーマが考えられる。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点による。担当回における発表および議論の司会進行の内容ならびにそれ以外の回において果たした役割や発言の内容により、優（非常に優れている）、良（優れている）、可（合格水準に達している）、不可（合格水準に達していない）の四段階評価を行う。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
発表を担当する回については、事前に綿密な準備をし、発表と議論がスムーズに行えるようにすること。それ以外の回については、その前の回の最後に次回の発表担当者が行う予告を聞き、指示があればそれに従った予習をすること。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーは特に定めませんが、何かありましたらobata.fumiko.3r@kyoto-u.ac.jpまで御連絡ください。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	社会経済システム論演習IA Seminar on Socio-Economic System IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 柴山 桂太					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>イギリスのEU離脱、アメリカのトランプ大統領誕生など、グローバル化の逆流現象が世界各地で起きている。貿易や金融、人の移動によって結びつきつつあった世界経済はなぜ、分断と再編の時を迎えているのか。</p> <p>この現代的な問題を考える上で、最重要の古典とでも言うべき書物がK・ポラニー『大転換』（1941）である。自由貿易と金本位制によって結びついていた一九世紀文明はなぜ崩壊したのか。古典的自由主義は、なぜ大恐慌をきっかけに二〇世紀的な保護主義・集産主義へと「大転換」したのか。本書の分析を手がかりに、グローバル化の過去と現在について考えてみたい。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
K・ポラニーの示す「二重の運動」や「社会の自己防衛」などの概念を深く知ることを通じて、グローバル化によって生じる経済社会の変化や今後について、一定の見通しを得ることが期待される。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>K・ポラニー『大転換』を輪読する。ポラニーが「一九世紀文明」と呼んだ当時のグローバル経済はどのように形成され、また崩壊することになったのか。ポラニーの分析が依拠している経済人類学の知見とはどのようなものか。「社会の自己防衛」とは何であるのか。金本位制が有していた欠点は、現代のユーロ体制でも繰り返されているのか。過去の反グローバル運動と現代のそれは、何が同じで何が異なるのか。本書を読み進めながら、そのような問題について議論していきたい。報告者は担当章の内容要約だけでなく、関連する話題についても適宜、調べてもらうことになる。</p> <p>必要な知識は適宜、解説しながら授業を進める。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席（20）、報告（20）と学期末のレポート（60）によって評価を行う。なお、出席不足の者、未報告者には単位認定を行わない。											
<b>[教科書]</b>											
カール・ポラニー 『[新訳]大転換』（東洋経済新報社）											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業外学習としては、担当章のレジюме作成が挙げられる。											
（その他（オフィスアワー等））											
参加者は、担当箇所についてレジюмеを下に報告が求められる。 詳細は初回講義時に指示する。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	社会経済システム論演習IB Seminar on Socio-Economic System IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 柴山 桂太					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>一九七〇年代の危機がケインズ主義から新自由主義への転換をもたらしたとすれば、現代の危機は新自由主義の終わり、新たな政治・経済思想のはじまりとなるはずである。では、それはどのようなものになるのか。</p> <p>話を急ぐ前に、新自由主義とは何だったのかを総合的に検証してみる必要がある。七〇年代の危機とは何だったのか。その後生まれた新自由主義体制の特徴とは、どのようなものであったのか。まず、W・シュトレーク『時間かせぎの資本主義』を輪読しながら、新自由主義の問題点を、さまざまな角度から検証していきたい。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
現代の経済危機が、国民国家や民主主義の危機でもあるという視点を学ぶことで、二〇世紀後半から始まった時代状況の変化について理解を深める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>W・シュトレーク『時間かせぎの資本主義』（みすず書房）を輪読する。本書は、一九八〇年代の新自由主義革命の経緯とその帰結を独自の仕方で整理したものであるが、その中で国家、資本主義、民主主義の関係を理論的に整理している。著者はドイツの社会学者であり、EU統合の本質的な限界についても分析を加えている。</p> <p>ただし、新自由主義の問題点は本書で語り尽くされたわけではない。本書を講読し終わった後は、受講者各自の視点から、関連するテーマについて調べ、報告することが求められる。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席（20）、報告（20）と学期末のレポート（60）によって評価を行う。なお、出席不足の者、未報告者には単位認定を行わない。											
<b>[教科書]</b>											
W・シュトレーク『時間かせぎの資本主義』（みすず書房）											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
担当章のレジюме作成、および、関連した知識の習得。											
（その他（オフィスアワー等））											
文献の指定、担当については初回時の講義時に指示する。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	社会経済システム論演習ⅢA Seminar IIIA on Socio-Economic Theory				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 大黒 弘慈					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
現代資本制社会の構造と運動メカニズムを解明するための手続きとして、経済思想の歴史を、おもに貨幣と信用の視点から俯瞰する。アリストテレスから重商主義、重農主義、古典派経済学、マルクスを経て現代にいたるまでの経済思想を取り扱う。あるいは経済思想の重要文献、および隣接諸分野の重要文献のなかから適当な文献を選び、輪読を行なう。											
<b>【到達目標】</b>											
経済思想の歴史を俯瞰すると同時に、隣接諸分野の視点を積極的に導入することで、現代社会を複眼的に分析する姿勢を養う。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
以下のような課題について、1課題あたり1～2週の授業をする予定である。あるいは年度に応じて2～3の課題を集中的に取り上げることもある。											
1．比例と交換（マルクス、アリストテレス、交換的正義、分配的正義） 2．類似と通貨（グreshamの法則、コペルニクス、ニュートン） 3．模倣と信用（バジョットの法則、タルド、国家と中央銀行） 4．流行と慣習（アダム・スミス、ヴェブレン、先祖がえり） 5．模倣と権力（高田保馬、タルド、従属意志、威信への渴望） 6．模倣と進化（社会ダーウィニズム、ミーム、ミラーニューロン） 7．模倣の法則と価値形態論（模倣衝動の抑圧と回帰、家畜と貨幣） 8．模倣と物象化（アドルノ、ミメシス、投影、行為の物象化） 9．純粋資本主義論と世界資本主義論（宇野弘蔵、岩田弘、ウォーラーステイン） 10．帝国と帝国主義（ネグリ、レーニン、柄谷行人）											
<b>【履修要件】</b>											
社会経済システム論演習 Bを履修することが望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
平常点評価（出席状況、報告内容、授業内発言）と、学期末レポートにより、総合的に評価する。											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 大黒弘慈 『貨幣と信用 純粋資本主義批判』（東京大学出版会） 大黒弘慈 『模倣と権力の経済学：貨幣の価値を変えよ（思想史篇）』（岩波書店） 大黒弘慈 『マルクスと贋金づくりたち：貨幣の価値を変えよ（理論篇）』（岩波書店） その他、授業中に適宜紹介する。											
----- 社会経済システム論演習ⅢA(2)へ続く -----											

社会経済システム論演習III A(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

各年度のテーマに沿って読書リストを作成し、並行して読み進めることが望ましい。

**（その他（オフィスアワー等））**

daikoku.kouji.8a\*kyoto-u.ac.jp

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	社会経済システム論演習IIIB Seminar IIIB on Socio-Economic Theory				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 大黒 弘慈					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
現代資本制社会の構造と運動メカニズムを解明するための手続きとして、経済思想の歴史を、おもに貨幣と信用の視点から俯瞰する。アリストテレスから重商主義、重農主義、古典派経済学、マルクスを経て現代にいたるまでの経済思想を取り扱う。あるいは経済思想の重要文献、および隣接諸分野の重要文献のなかから適当な文献を選び、輪読を行なう。											
<b>【到達目標】</b>											
経済思想の歴史を俯瞰すると同時に、隣接諸分野の視点を積極的に導入することで、現代社会を複眼的に分析する姿勢を養う。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
以下のような課題について、1課題あたり1～2週の授業をする予定である。あるいは年度に応じて2～3の課題を集中的に取り上げることもある。											
1．比例と交換（マルクス、アリストテレス、交換的正義、分配的正義） 2．類似と铸貨（グreshamの法則、コペルニクス、ニュートン） 3．模倣と信用（バジョットの法則、タルド、国家と中央銀行） 4．流行と慣習（アダム・スミス、ヴェブレン、先祖がえり） 5．模倣と権力（高田保馬、タルド、従属意志、威信への渴望） 6．模倣と進化（社会ダーウィニズム、ミーム、ミラーニューロン） 7．模倣の法則と価値形態論（模倣衝動の抑圧と回帰、家畜と貨幣） 8．模倣と物象化（アドルノ、ミメシス、投影、行為の物象化） 9．純粹資本主義論と世界資本主義論（宇野弘蔵、岩田弘、ウォーラーステイン） 10．帝国と帝国主義（ネグリ、レーニン、柄谷行人）											
<b>【履修要件】</b>											
社会経済システム論演習 Aを履修することが望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
平常点評価（出席状況、報告内容、授業内発言）と、学期末レポートにより、総合的に評価する。											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 大黒弘慈 『貨幣と信用 純粹資本主義批判』（東京大学出版会） 大黒弘慈 『模倣と権力の経済学：貨幣の価値を変えよ（思想史篇）』（岩波書店） 大黒弘慈 『マルクスと贋金づくりたち：貨幣の価値を変えよ（理論篇）』（岩波書店） その他、授業中に適宜紹介する。											
----- 社会経済システム論演習IIIB(2)へ続く -----											

社会経済システム論演習IIIB(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

各年度のテーマに沿って読書リストを作成し、並行して読み進めることが望ましい。

**（その他（オフィスアワー等））**

daikoku.kouji.8a\*kyoto-u.ac.jp

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	西欧文化論基礎ゼミナールB Proseminar on Culture in Western Europe B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 水野 眞理 人間・環境学研究科 教授 高谷 修 人間・環境学研究科 准教授 池田 寛子					
配当 学年	1-3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
英文学入門											
本ゼミナールは、分野教員3名がリレー形式でヨーロッパ英語圏の文学の歴史を概観し、英国の古代から現代にいたる文学の重要なテキストに実際に触れる。ここで言うヨーロッパ英語圏とはブリテン島すなわち、イングランド、スコットランド、ウェールズにアイルランドを加えた地域を指し、この地域における国家の興亡、言語の変容、階級の再編、ヨーロッパ諸国からの文化的影響を念頭に置きつつ、ダイナミックな英文学史を描く。											
【到達目標】											
英国の古代から現代にいたる文学をとりまく状況を考慮に入れつつ、重要なテキストに触れることにより、英文学の基礎知識を獲得しながら、文学研究の魅力を味わう。											
【授業計画と内容】											
第1週	オリエンテーション (水野・高谷・池田)										
第2週	(水野) 「巡礼の時代」 チョーサー『カンタベリー物語』										
第3週	(水野) 「騎士道物語」マロリー『アーサー王の死』 スペンサー『フェアリー・クイーン』										
第4週	(水野) 「女王の国の文化」 シェイクスピア『ハムレット』										
第5週	(水野) 「キリスト教叙事詩」ミルトン『楽園喪失』										
第6週	(高谷) 「王政復古の文学」ドライデン										
第7週	(高谷) 「小説の勃興 1」デフォー、スウィフト、										
第8週	(高谷) 「小説の勃興 2」フィールディング、リチャードソン										
第9週	(高谷) 「ロマンティックとは」ワーズワース、コールリッジ、キーツ、シェリー										
第10週	(池田) 「世紀末から20世紀へ」 ワイルド、 ショー										
第11週	(池田) 「世紀末から20世紀へ」 イェイツ										
第12週	(池田) 「モダニズム」 ジョイス、エリオット										
第13週	(池田) 「現代英文学」 デイラン・トマス、イシグロ										
第14週	まとめ										
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
演習科目であるので、授業への積極的参加と発表・各教員へのレポートにより評価する。継続的に出席できない人には向かないだろう。											
【教科書】											
授業中に指示する 履修者は、リストの文献を所定の回までに読んでおくことが求められる。											
----- 西欧文化論基礎ゼミナールB (2)へ続く -----											

西欧文化論基礎ゼミナールB (2)

---

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

履修者は、リストに示された文献を所定の回までに読んでおくこと

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーは初回のオリエンテーションで告知する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：公共政策論 I Introductory Seminar: Public Policy I				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 佐野 亘					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
具体的な政策課題を多面的に検討し議論することを通して、公共政策の分析とデザインのための理論および技法を修得することを目指す。本ゼミを通じて、受講者は、「社会問題を解決すること」の難しさを味わうとともに、論理的思考とプレゼンテーションの能力を高めることが望まれる。											
<b>[到達目標]</b>											
この授業を受講することで、プレゼンテーションやグループ作業の能力を高めることができるとともに、社会問題やその対応策について、どのように調査・研究をすすめればよいか、その基本的な知識を得ることができる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
なぜある社会問題が「問題」としてとりあげられるのか、またそうした問題を解決するうえで政府はいかなる役割を果たすべきであるのかについて、具体的な政策 이슈 を事例として、考察を深めることを目指す。公共的な問題を発見し適切に解決するのは決して容易でないことを実感として理解できるようになればと考えている。 参加する学生は、関心のある社会問題をとらえ、その現状ならびに対策について調べたうえで、改善策を提案することを目指すし、その研究発表を行う。また、参加者の間での討論と協働作業を多く重視する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席（70%）、報告内容（20%）、授業への参加態度（10%）にもとづき、評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
報告に向けて準備をおこなうだけでなく、報告後も、報告で足りなかった点、うまくいかなかった点などを反省し、改善策を考えることが望まれる。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：公共政策論II Introductory Seminar: Public Policy II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 浅野 耕太					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
様々な領域で実施されている公共政策に関して、その分析に資する経済学などの標準的な教科書を輪読することによって、その必要性や評価軸を学ぶ。その上で、公共政策の基本原則や実際の形成過程を理解し、良き公共政策のありかたを考究する。											
<b>【到達目標】</b>											
公共政策の分析に活用できる経済学の基礎的概念とそれを用いた政策分析の手法を修得し、幅広い公共政策の理解に応用ができるようになること。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
第1回 イン트로ダクション 教科書の概要を説明する。基本的な参考文献などを紹介し、授業の進め方と準備・発表の方法を周知する。また、出席者の担当部分を決定する。											
第2回～第13回 教科書の精読 受講者は教科書の節を分担し、その内容を報告するとともに、問題の解答を行う。 以下のようなテーマそれぞれについて1～2週の授業を行う予定である。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．トレードオフと機会費用</li> <li>2．需要曲線と供給曲線</li> <li>3．消費者</li> <li>4．生産と費用</li> <li>5．短期における企業</li> <li>6．長期における企業と競争的市場</li> </ol>											
第14回 まとめ 12回にわたる精読の成果をまとめ、残された課題や疑問点について全員で議論する。切りのよいところまで読了できなかった場合、この回を補充に充てることもある。											
<b>【履修要件】</b>											
後期に開講される公共政策論基礎ゼミナールIIとの連続履修が望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
平常点（30点）、報告内容・貢献（70点）により総合的に評価する。個別の成績評価基準は第1回目の授業で説明する。											
<b>【教科書】</b>											
Daniel S. Hamermesh 『Economics Is Everywhere, 5th ed.』（Worth Publishers）ISBN:978-1-4641-8539-7											
----- 基礎演習：公共政策論II (2)へ続く -----											

基礎演習：公共政策論II (2)

---

[参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

毎回事前に教科書を読んでおき、疑問点を整理した上で、授業に参加すること。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：労働法 Introductory Seminar: Employment Law				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小畑 史子					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>新聞等で報道されている、または職場で身近に起こる、雇用や労働に関する法律問題を10項目程度取り上げます。</p> <p>毎回のテーマにつき、担当者（担当グループ）による発表と、それに基づく全員でのディスカッションをしてもらい、各テーマについての知識を深め自分の意見を説得力を持って主張できるようになること、そして自分の担当したテーマにつき深く掘り下げて準備し、聞き手に分かりやすく効果的なプレゼンテーションをする訓練を積んでもらいたいと考えています。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>わが国の雇用社会で起こっている問題を深く理解し、ディスカッションを通じて、それに関する自分の考えを明確にする。社会問題に関する概略と問題の所在を聞き手にわかりやすく正確に伝え、また、議論の整理とまとめができるようになる。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>どのようなテーマを取り上げるかは、初回に受講生の希望を聞いて決める予定です。例としては、以下のようなものが考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・採用・就職活動</li> <li>・配転・出向</li> <li>・労働時間</li> <li>・年次有給休暇</li> <li>・ブラック企業</li> <li>・育児休業・介護休業</li> <li>・パワー・ハラスメント</li> <li>・最低賃金</li> <li>・障害者雇用</li> <li>・職務発明</li> <li>・過労死・過労自殺</li> </ul> <p>その他の回には、評価が分かれている判決を解説し、それにつき全員で議論したり、またスピーチの練習をする等の内容を予定しています。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
平常点評価（出席状況、発表の内容、授業内での発言等）											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
----- 基礎演習：労働法(2)へ続く -----											

## 基礎演習：労働法(2)

---

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

グループ・プレゼンテーションを成功させるためには、個人での準備と共に、グループメンバー全員で集まって打合せをすることが必要です。グループ全体での準備に積極的に参加し、分かりやすく魅力のあるプレゼンテーションを協力して作り上げてください。個人で発表する場合には、テーマに関する情報を幅広く集め、多様な視点から検討し、その上でまとまりのあるプレゼンテーションをするよう心掛けてください。

### (その他(オフィスアワー等))

他の発表者(発表グループ)の発表担当の回には、プレゼンテーションを聞いた後、積極的にディスカッションに参加してください。相談があれば、授業の前後でもそれ以外の約束した日時にも乗りますので、申し出てください。

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：法哲学 Introductory Seminar: Philosophy of Law				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 那須 耕介					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>毎回最新・直近の新聞・雑誌の記事（ただし英語）をとりあげ、的確にその内容をつかみ、人に伝える訓練を積むと同時に、そこに含まれている法哲学・政治哲学的問題についての理解を深めることをめざします。受験勉強とはひと味違った英文読解の訓練と現代社会における法的・政治的諸問題に対する関心の開発、そしてその理論的含蓄の探求という、一石二鳥、一石三鳥（二重苦、三重苦ではない）をねらう人のためのゼミです。</p>											
【到達目標】											
<p>一定の長さと内容をもった英文に短時間で目を通し、細部にとらわれることなく大要を正確につかむ能力を身につけること、およびそれを素材に論点の整理、対立意見の可能性と比較検討、議論と説得の能力をのばすことをめざします。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>海外の新聞・雑誌等のコラム記事を取り上げ、その内容を担当者に要約・報告してもらいます。そこで扱われる問題をふまえて参加者で討論し、その過程で問題の背景にある理論的争点に対する洞察力を身につけていくこととなります（担当教員による示唆・助言あり）。テーマは法か政治に（どこかで）関わることであれば何でも。最初は担当教員がテキストを選んで適宜提供しますが、馴れてきたら参加者みずから好きなテーマと記事を選んでもらうかもしれません。</p> <p>ありうるテーマは以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・戦争と国際正義</li> <li>・同性婚と「家族」の未来</li> <li>・グローバリズムの光と陰</li> <li>・生殖医療と倫理</li> <li>・スポーツと法・政治</li> </ul>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
出席して議論に加わること（60点相当）、課題を提出し、率先して問題提起を行うこと（40点相当）。											
【教科書】											
使用しない											
-----基礎演習：法哲学(2)へ続く-----											

## 基礎演習：法哲学(2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

隔週で簡単な宿題を出す予定です。また、議論の素材にしたい英文テキストを各自探しておいてください。

### (その他(オフィスアワー等))

質問・苦情・要望・相談・面談の申し込み等はnasu.kosuke.6a[at]kyoto-u.ac.jpにて申し受けます。( [at]にはアットマークを入れてください。)

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：現代社会と法 Introductory Seminar: Law and Contemporary Society				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 見平 典					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
現代社会では多様な問題が解決を迫られているが、法は、そのような問題の解決手段として呼び出される一方で、しばしばそうした問題を生み出す原因にもなっている。本ゼミナールでは、現代社会の諸問題に、現代法システムがどのように関わっており、また関わるべきかについて考察する。「社会を通して法を知る」とともに、「法を通して社会を知る」機会となるようにしたい。											
<b>【到達目標】</b>											
現代法システムをめぐる諸問題について、基礎的な知識と分析の視点を修得することを目標とする。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<b>【第1回】</b> オリエンテーションの回として、授業の進め方や、授業の準備・報告の方法について説明する。											
<b>【第2回 第14回】</b> 各回とも、現代の法システムに関わる問題について、事前に指名された担当者の報告後、全員が参加して議論を行う形式をとる。報告にあたり、文献があらかじめ指定される場合と、報告者の自由に委ねられる場合がある。											
取り上げる問題については、できるだけ幅広いものとするを考えている。「現代社会と弁護士（法曹人口、弁護士の社会的役割等）」、「現代社会と裁判所」（裁判官人事、違憲審査制、司法の独立、司法による政策形成等）、「現代社会と法規制」（たばこ規制等）、「現代社会と政治」（議院内閣制のあり方等）などを予定しているが、受講生の人数や背景的知識、時事的な問題状況などに応じて変更する場合もある。											
<b>【第15回】</b> まとめの回として、これまでの議論を評価・総括する。											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
平常点（出席、報告内容、討論への貢献度）により、評価する。 なお、4回以上の欠席は、不合格とするので注意すること。											
----- 基礎演習：現代社会と法 (2)へ続く -----											

## 基礎演習：現代社会と法 (2)

### [教科書]

授業中に指示する

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

各回とも、指定された文献を読んだ上で、授業に臨んで下さい。また、日頃から新聞やニュース番組等を通して、法・政治・社会に関する幅広い問題について知見を拓けるように心掛けて下さい。

### (その他(オフィスアワー等))

文系、理系を問わず、多様な学生さんの受講を歓迎します。皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：国際政治論 Introductory Seminar: International Politics				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 齋藤 嘉臣					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
国際政治に関連する基礎的な文献を輪読し、参加者全員で討議を深めることで、現代国際政治に対する理解を深めることが目的である。扱うテーマは紛争に関するものである。											
<b>[到達目標]</b>											
国際問題を分析する際に重要となる、アプローチについて十分な理解を得ることで、自ら研究する際の視座を得る。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
国際紛争に関する研究書を輪読する。中でも、紛争を分析する視点、冷戦後のグローバル化や新しい国際政治主体の台頭等を扱うことになる。また、担当者と参加者全体で、文献を基にした質疑応答を行う。											
具体的には、担当者による担当箇所の報告（20分）、担当箇所を基にした批判・コメント（10分）を行い、その後に議論を行う。											
なお、最終的には担当箇所およびその関連分野につき、4000字以上のレポートとして提出することが求められる。											
また、多くの参加者が見込まれた場合、初回の時間に選抜を行うので、履修希望者は必ず初回に参加すること。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポート・個別報告、平常点・議論への貢献（出席自体は評価対象でないが、欠席の多い学生は単位を付与しない）											
<b>[教科書]</b>											
ジョセフ・S・ナイ・ジュニア, デイヴィッド・A・ウェルチ（田中明彦、村田晃嗣訳）『国際紛争原書第9版 -- 理論と歴史』（有斐閣）（（最新の版のものを使用するので、確認すること。））											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
ゼミ後には、ゼミ中に行われた議論をふまえ、指定された参考書等にあたり個別研究を進めること。											
（その他（オフィスアワー等））											
国際政治に対する関心を持っていること、研究意欲を持っていること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：経済思想 Introductory Seminar: Economics Thoughts				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 大黒 弘慈					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
経済学の狭い枠にこだわらず、経済の本質にかかわる啓蒙的な本を土台に、問題意識の発掘に努める。											
【到達目標】											
現代経済の諸問題に対症療法的にバラバラに論じるのではなく、そのつど理論と思想に還元しながら体系的に理解する姿勢を養う。											
【授業計画と内容】											
貨幣は、あらゆる物が買えるという意味で、それがなければまともな社会生活が送れないと同時に、億万長者を夢想する守銭奴が、社会と縁を切ってひたすら蓄財に励む手段ともなりうる。こうした貨幣の逆説は、アリストテレスの古代から現代にいたるまで、人の注意を惹きつけてやまなかった。バブル崩壊、ユーロ統合、金融恐慌、ビットコインなどのきわめて現代的な現象もこのことと無縁ではない。このゼミでは、必ずしも経済学の枠にこだわらず、おもに貨幣と信用にかかわる書物を通じ、視野を広く取って問題意識の発掘に努めたいと思う。以下のような課題について、それぞれ2～3週授業をする予定である。あるいは年度に応じて2～3の課題を集中的に取り上げることがある。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．比例と交換（マルクス、アリストテレス、交換的正義、配分的正義）</li> <li>2．類似と铸貨（グreshamの法則、コペルニクス、ニュートン、贋金づくり）</li> <li>3．模倣と信用（バジヨット、タルド、国家と中央銀行）</li> <li>4．流行と慣習（スミス、ヴェブレン、先祖がえり）</li> <li>5．模倣と権力（高田保馬、勢力意志、従属本能、威信への渴望）</li> </ol>											
【履修要件】											
後期「経済原論基礎ゼミナール」の連続した履修が望ましい。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
平常点評価（出席状況、報告内容、授業内発言）と、学期末レポートにより、総合的に評価する。											
【教科書】											
授業中に指示する											
【参考書等】											
（参考書）											
大黒弘慈 『模倣と権力の経済学：貨幣の価値を変えよ（思想史篇）』（岩波書店）											
大黒弘慈 『マルクスと贋金づくりたち：貨幣の価値を変えよ（理論篇）』（岩波書店）											
----- 基礎演習：経済思想 (2)へ続く											

基礎演習：経済思想 (2)

その他、授業中に適宜紹介する。

**[授業外学習（予習・復習）等]**

指定された古典を、適切な二次文献を参照にしながら、徹底的に読み込む。

**（その他（オフィスアワー等））**

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：社会経済システム論 Introductory Seminar: Socio-Economic Systems				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 柴山 桂太					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
現代日本が直面するさまざまな問題について、受講者各自が調べ報告してもらう。まず、戦後日本の政治・経済・社会の歩みについて簡単な概説を行った後、関連したテーマを受講者各自が設定し、毎回の授業で報告してもらうことになる。戦後体制（冷戦体制、55年体制、バブルの崩壊）の終わりとともに始まった平成期日本のさまざまな問題について、理解と関心を深めてもらうのが講義の目的となる。											
<b>[到達目標]</b>											
時事問題への関心と理解を深めること、およびそれらの問題に関する基礎知識を身につけることが目標となる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
1. 戦後日本の歩み 冷戦体制と五五年体制 / オイルショックとバブル / 家族・地域社会の変化 2. 産業社会の変化 日本的経営の確立 / グローバル化 / デフレーションと長期停滞 3. 現代の課題 一党優位制の是非 / 地方分権と道州制 / TPP / 少子化 / ナショナリズム (以上はとりあえずのものであり、講義で扱われるトピックは受講者の関心に応じて変更される。)											
講義はゼミ形式で行われる。数回の授業（2～3回）の後、受講者の関心を聞きつつ、報告の割り当てを決める。その後は、毎回の報告と、その内容についての受講者全員での討議を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
報告（30）、平常点（20）、およびレポート（50）による評価。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
報告の準備は入念に行ってもらおう。											
（その他（オフィスアワー等））											
報告内容についての相談は講義後に適宜、行う。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：日本古代・中世政治文化論II Introductory Seminar: Politics and Culture in Ancient and Medieval Japan II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 元木 泰雄					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
日本中世史（おもに平氏政権、源平争乱、鎌倉幕府）に関するの基本史料を輪読する。史料の読解に習熟するとともに、この当時の政治史を検討する。											
<b>[到達目標]</b>											
漢文史料の読解に熟達することを目指す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
鎌倉幕府の公式歴史書『吾妻鏡』や、親幕府派の右大臣九条兼実の日記『玉葉』をはじめとする様々な古記録を講読する。テキストは返り点付きの漢文である。まず漢文史料への習熟を第一に考え、正確な読み下しと、現代語訳を行いたい。 高校までの教科書や概説書の記述と異なり、生の史料によって歴史を考える新鮮な体験を通して、平氏政権や源平争乱など、中世成立期の諸問題に対する認識を深めたい。 授業方法は人数によって異なるが、原則として出席者全員の予習を前提とし、発言を求める。											
<b>[履修要件]</b>											
人数の制限があるので、一回目の授業に必ず出席すること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
人数にもよるが、平常点・レポートで評価する。 5回以上の欠席は不可とする。											
<b>[教科書]</b>											
授業中にプリントを配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
必ず全員辞書を見て予習すること。基本が励行できないものは即刻不可とする。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：近世西洋史学 Introductory Seminar: Early Modern Western History				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 合田 昌史					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
中世末から近代初頭におけるヨーロッパとアジア・アフリカ・アメリカとの関係のありかたを学ぶ。											
<b>[到達目標]</b>											
前近代西洋史研究への導入と報告方法を理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
日本語ないし英語の二次文献を配布し、毎時間担当者を決めて、担当の文献について口頭発表する。											
<b>[履修要件]</b>											
高校で世界史を履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点と報告内容を重視する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業内で報告することが必須です。											
(その他(オフィスアワー等))											
履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：Contemporary History Introductory Seminar: Contemporary History				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 特定講師 BHATTE, Pallavi Kamlaka					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	英語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>This is an undergraduate introductory course, providing students an understanding of nationalist and independence movements.</p> <p>This course aims to help students:</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Acquire various academic language skills necessary to develop reading, thinking and writing in English.</li> <li>2. In using Primary and Secondary Sources effectively.</li> <li>3. In areas such as acquisition of historical analysis, interpretation, and content literacy skills</li> </ol>											
<b>【到達目標】</b>											
The ultimate goal of this course is to provide a platform for students to engage in investigating significant questions and debates in Contemporary History.											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>The course will cover themes relating to Nationalist and Independence movements in Africa and Asia and post-1945 Central European States.</p> <p>Week 1: Introduction to the Course and Overview</p> <p>Week 2 to Week 15: Case Study on the following five States</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1)Zimbabwe</li> <li>(2)India &amp; Pakistan</li> <li>(3)Vietnam</li> <li>(4)Czechoslovakia</li> <li>(5)Poland</li> </ol> <p>Week 16: Feedback &amp; Summary of the Course</p> <p>*Note:This syllabus will be subject to changes and/or revisions</p>											
<b>【履修要件】</b>											
There are no prerequisites											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
<p>Method:</p> <p>Giving students exposure to academic writing and enabling them to understand the basic rules thereof.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Providing students with opportunities to receive guidance on academic writing skills.</li> <li>2. Providing students with opportunities for discussion</li> </ol> <p>Evaluation:</p>											
-----基礎演習：Contemporary History(2)へ続く-----											

**基礎演習：Contemporary History(2)**

Students are evaluated by reports submitted on any 4 Case Study topics dealt with in the Course as well as by their presentation and discussions in class.

**[教科書]**

使用しない

**[参考書等]**

(参考書)

Joseph Gibaldi 『MLA Handbook for Writing Research Papers』 (Modern Language Association of America) ISBN:978-1603290241

University of Chicago Press 『The Chicago Manual of Style 16th Ed』 (University of Chicago Press) ISBN:978-0226104201

**[授業外学習(予習・復習)等]**

No prior knowledge of history is required. Students should be able to participate in discussions with their classmates in English.

**(その他(オフィスアワー等))**

No office hours specified. Meetings are to be arranged by appointment.

Any new information and instructions will be communicated in class or through electronic medium.

Classroom Management:

Be respectful to everyone and everything in class.

Use of Electronic devices will be allowed only by permission.

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：中国史の基礎資料 Introductory Seminar: Readings of Essential texts for Chinese History				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 辻 正博					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>「中国史の基本資料を読む 漢文訓読法の基礎」 中国史の基本資料を講読する中で、漢文訓読の基本的な技法を身につけることが、この授業の目的です。</p> <p>日本人は古来、中国の歴史や文化に強い関心を持ち、それを知らうとしてさまざまな工夫を凝らしてきました。「訓読」とは、中国語（古典漢文）に訓点をつけ、日本語＝「漢字仮名交じり文」として読解するために編み出された、先人の知恵の一つです。現代中国語は現代音で音読するのが普通ですが、古典（漢文）については、訓読方式で読むのも味わい深いものです。</p> <p>この授業では、中国史の基本資料を「訓読」して、その内容を理解することを目的とします。高校時代に漢文を少しかじった程度の人でも、少し努力をすれば訓読のコツをつかむことは容易です。この機会に、訓読の基本的な技法を身につけましょう。</p> <p>今年度は、編年体で書かれた歴史書として名高い『資治通鑑』の文章に挑戦していただきます。</p>											
【到達目標】											
中国学の基礎となる「漢文」の読解について、基礎的な知識を身につける。											
【授業計画と内容】											
<p>初回授業時の「ガイダンス」に、授業の進め方について説明しますので、必ず出席すること。</p> <p>訓読の技法を身につけることを第一の目的としますので、2週目以降の授業では、それにふさわしいテキストを輪読します。教材とするテキストを順番に読んでもらい、その後で解説を行います。</p> <p>必要に応じて、授業時に漢和辞典を引いて調べてもらうつもりです。必ず「紙の辞書」を持参すること！</p> <p>ゼミ形式の授業なので、毎回担当する覚悟で出席してほしいと思います。無論、毎回出席することを前提として、授業を進めます。</p>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
<p>出席状況（20％）と発表内容（80％）による。単に出席するだけでは「単位」を取ることはできませんので、ご注意ください。</p> <p>3度の欠席で「不可」となります。</p>											
【教科書】											
こちらでテキストを用意し、配布します。											
【参考書等】											
（参考書） 授業中に紹介する											
----- 基礎演習：中国史の基礎資料(2)へ続く -----											

基礎演習：中国史の基礎資料(2)

---

[授業外学習（予習・復習）等]

高等学校で学習した「漢文」の基礎について、きちんと復習しておくこと。

（その他（オフィスアワー等））

受講者は、漢和辞典を必ず持参すること。（初回授業時に何点か紹介します。）  
履修希望者が多い場合は人数制限をすることがある。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：日本近代文学 Introductory Seminar: Japanese Modern Literature				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 須田 千里					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>日本近代の短篇小説の名手、芥川龍之介の作品を読むことを通じて、日本近代文学を研究する基本的な技法、すなわち、先行文献の探索の仕方、問題意識の設定、論の立て方、説得的な発表の仕方、独自性をいかに出すか、などを学ぶ。</p> <p>芥川は、典拠や素材を古典文学・外国文学などに求め、それを自らの問題意識に添って改変することによって、独自の文学世界を作り上げた作家である。受講生は、自分が担当した作品について先行論文を捜し、自分独自のアプローチを行いながら、それを自分の言葉で発表することが求められる。ほかの受講生は、当該作品に関して素朴な疑問や発表内容への質疑を通じて、批判的読解力の養成を行う。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>受講生自身が担当した作品について独自のアプローチを行いながら、それを自分の言葉で発表できるようになる。ほかの受講生は、当該作品に関して発表内容への質疑を行い、批判的で主体的な読解能力を得る。以上が、この授業の目標である。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>(1)ガイダンス(授業の進め方など)、イントロダクション(発表の仕方)、取り上げる作品や発表の順番を決める。</p> <p>(2)~(14)教科書に掲載された以下の作品について、受講生が適宜好きな作品を選び、発表し、みなで質疑応答を行う。「羅生門」「鼻」「芋粥」「或日の大石内蔵助」「蜘蛛の糸」「地獄変」「枯野抄」「奉教人の死」「杜子春」「秋」「舞踏会」「南京の基督」「藪の中」「トロッコ」「雛」「六の宮の姫君」「一塊の土」「玄鶴山房」「点鬼簿」「河童」「歯車」。</p> <p>(15)まとめ。授業で言い漏らした事、新たな質問や意見があれば取り上げて議論する。発表予定者が多い場合、この回を補充に充てることもある。</p> <p>(16)フィードバック</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席を含む授業への参加・態度40パーセント、発表60パーセント。											
<b>【教科書】</b>											
芥川龍之介『羅生門 蜘蛛の糸 杜子春 外十八篇』(文春文庫) ISBN:978-4-16-711305-6											
----- 基礎演習：日本近代文学(2)へ続く -----											

## 基礎演習：日本近代文学(2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

自分の担当する作品は言うまでも無いが、他の受講生の発表予定作品についても事前に読んでおき、自分の考えや意見、質問事項を整理して、授業時に率先して発言出来るようにしておくこと。

### (その他(オフィスアワー等))

発表順はくじ・じゃんけんなどで決めるので、いつ当たってもよいようにスケジュール調整しておくこと。発表時の無断欠席は単位なし。

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	欧米歴史社会論IA Euro-American History and Society IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 合田 昌史					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
本講義では、大航海時代の代表的人物をとりあげ、彼らの活動が西洋社会の経済・文化・宗教等に与えた影響について考察する。											
<b>[到達目標]</b>											
巨視的な見方とディテールを大切に扱う姿勢を併せ持った歴史観を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下の小テーマに沿って授業を進める。 1．大航海時代と人物研究 2．エンリケ王子の時代 3．エンリケ王子の社会的背景 4．エンリケ王子の財政 5．エンリケ王子の思想 6．エンリケ王子の評価											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
定期試験（筆記）											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
参考資料に目を通すことが望ましい。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	欧米歴史社会論IB Euro-American History and Society IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 合田 昌史					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
本講義では、大航海時代の代表的人物をとりあげ、彼らの活動が西洋社会の経済・文化・宗教等に与えた影響について考察する。											
<b>[到達目標]</b>											
巨視的な見方とディテールを大切に扱う姿勢を併せ持った歴史観を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下の小テーマに沿って授業を進める。 1．大航海時代の三大航海者 2．ヴァスコ・ダ・ガマの前半生 3．ヴァスコ・ダ・ガマの航海 4．ヴァスコ・ダ・ガマの評価 5．マゼランの前半生 6．マゼランの航海 7．マゼランの評価											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
定期試験（筆記）											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
参考資料に目を通すことが望ましい。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	欧米歴史社会論IIA Euro-American History and Society IIA				担当者所属・ 職名・氏名	京都府立大学 文学部 教授 川分 圭子					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>授業題目 イギリス人と西インド</p> <p>イギリス人は、1620年代から西インド（カリブ諸島）に進出し、たくさんの島々を領有するようになった。彼らは、そこで本国消費とヨーロッパ再輸出用に砂糖を生産し、黒人奴隷制による商品作物栽培の体制を作り上げた。しかし19世紀に入ると、砂糖は世界中で生産されるようになり、とくに西インドから輸入するメリットはなくなる。そのような中で、1833年には奴隷制が廃止され、19世紀中葉以降は自由貿易主義が高まって、イギリスはほとんど西インドから砂糖を輸入しなくなる。また1960-80年代には、西インド諸国はほとんど独立し、現在に至っている。ただ現在も、西インドは砂糖に代わりうる産業を構築できたとはいえず、経済的に困窮した状況にある。本授業では、あまり取り上げられてこなかった奴隷解放・自由貿易時代以降の西インドを取り上げ、そこで起こっていた問題やそれに対処しようとしたイギリス人の行動について考える。</p>											
【到達目標】											
<p>教科書的には奴隷解放や独立で問題が解決したかのように語られがちな西インドの近現代史を再考することで、それらによって何も問題が解決していないことを理解する。またそれを通して、17-19世紀に行われた活動がいかに未解決なまま現代まで持ち越されているかを知る。また過去においてこれらの問題がどのように考えられていたのか、現場を知る人々の声と一般世論や知識人の問題理解の間にどのような落差があったのか、この落差がその後の歴史にどのような影響を及ぼしたのかを考える。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>以下の小テーマ（各1 - 2回程度）に沿って授業を進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 現在の西インドと過去の現存状態</li> <li>2 英領西インド成立史（17, 18世紀）</li> <li>3 西インド利害関係者 西インド植民地から利益を得たイギリス人達</li> <li>4 奴隷制廃止</li> <li>5 19世紀の世界的砂糖生産の変化と自由貿易</li> <li>6 奴隷解放・自由貿易時代の西インド</li> <li>7 帝国主義と対植民地政策の転換</li> <li>8 独立への歩み</li> <li>9 再び現在へ</li> </ol>											
【履修要件】											
高校において世界史を履修していることが望ましい。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
出席と授業への参加（質疑応答など）を重視する。											
【教科書】											
使用しない											
----- 欧米歴史社会論IIA(2)へ続く -----											

欧米歴史社会論IIA(2)

---

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

授業中に配布する資料は、授業中に解説をくわえるが、授業後にも再読して理解を深めることが必要である。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	欧米歴史社会論IIB Euro-American History and Society IIB	担当者所属・ 職名・氏名	非常勤講師 本田 毅彦
---------------	---	-----------------	-------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### 【授業の概要・目的】

テーマ：近現代のイギリス社会における、知的な協働作業としての伝記辞典作成 『イギリス国民伝記辞典』を素材にして

本講義では、近代のイギリス社会において「伝記記述」というジャンルが形成され、そのいわば集大成として、19世紀後半に『イギリス国民伝記辞典』が刊行されるのに至ったプロセスを検討します。同辞典は、20世紀末から今世紀初頭にかけて新たな版が作成されましたが、そちらの内容も検討したいと思います。

『イギリス国民伝記辞典』の編纂が、ウェブ上での知的な協働作業の先駆ともみなしうるようなプロジェクトであったことを明らかにしながら、歴史学研究と伝記記述の関係についても考えてもらうことを、授業の目的にしたいと思います。

#### 【到達目標】

上記の授業目的に関連し、資料を参照しながら、具体的かつ詳細に状況の推移を解明し、より理解を深めるとともに、歴史研究の方法を習得してもらいたいと思います。

#### 【授業計画と内容】

基本的に、以下の計画に従って講義を進めます。ただし、講義の進み具合、時事問題への言及などに対応して、順序や同一テーマの回数を変えることがあります。

第1回 ガイダンス

第2回 近代イギリス社会における辞書・事典の作成の伝統

第3回 ブリタニカ百科事典、オックスフォード英語辞典、イギリス国民伝記辞典への讃辞と批判

第4回 近代イギリス社会における伝記記述の伝統の創生

第5回 19世紀末～20世紀初頭に訪れた、イギリス社会の伝記記述の革新

第6回 イギリス国民伝記辞典の初代編集者であり、「知的貴族」のキーパーソンでもあったレズリー・スティーヴン

第7回 キリスト教福音派から知的貴族へ

第8回 レズリー・スティーヴンの家系的背景

第9回 レズリー・スティーヴンのキャリア

第10回 イギリス国民伝記辞典編纂プロジェクトの始動

第11回 イギリス国民伝記辞典の編纂プロセス

第12回 イギリス国民伝記辞典の功績と限界

第13回 20世紀におけるイギリス国民伝記辞典の推移

第14回 新版としてのオックスフォード・イギリス国民伝記辞典の編纂

#### 【履修要件】

高校で世界史を履修していることが望ましい、と思います。

## 欧米歴史社会論IIB(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

平常点評価（20％）、レポート（40％）、定期試験（40％）  
平常点評価は、出席状況を基礎にします。

### [教科書]

使用しない

### [参考書等]

（参考書）  
授業中に紹介する

### [授業外学習（予習・復習）等]

授業中に使用する資料を、順次、KULASISに掲示しますので、予習・復習のために活用してください。

### （その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本歴史文化論IA Japanese History and Culture IA	担当者所属・ 職名・氏名	非常勤講師 上野 勝之
---------------	--	-----------------	-------------

配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

本講義では歴史学的アプローチによる日本古代・中世前期の夢観念の歴史を扱う。日本に限らず、夢は古くから占いや神意を知る手段とされてきた。近年は歴史学、仏教史学、国文学など諸分野で夢に関する研究も増え、また最近では医学、脳科学的研究の進展が著しいとはいえ、世間では依然として夢占いなどへの関心も高い。とかく夢に対する“信仰”の側面が強調されることの多い当時の夢観念について、史料に即して概観したい。

#### [到達目標]

夢の神秘性といった一般的なイメージではなく、日本の夢観念に関する詳しい歴史的事態を学ぶことにより、日本の文化や宗教意識に関する新たな知見を得て、自分なりの考察・説明ができるようになる。

#### [授業計画と内容]

講義形式で授業を行う。夢については素材となる史料によってその表現様式が大きく異なる。本講義では、和歌、説話、物語、夢記、日記などその史料の種類別、また往生に関する夢などテーマ別の検討も交えながら、中世前期までの夢観念の概要を見通すこととする。なお、講義テーマの順序は適宜変更することもあり得る。

はじめに（1週）通史的研究の概観と分析視覚

- 1 上代の夢（2週）
    - 1 - 1 記紀と風土記（1週）
    - 1 - 2 万葉集の夢・死者と相聞（1週）
  - 2 平安時代の和歌と夢（1週）
  - 3 日記文学と物語（1週）
  - 4 貴族たちの夢とその記録（1週）
  - 5 仏教と夢・入胎と往生を中心に（1週）
  - 6 僧の夢記（3週）
    - 6 - 1 明恵の夢記（1週）
    - 6 - 2 円仁と円珍（1週）
    - 6 - 3 密教僧と法然の夢記（1週）
  - 7 夢と説話伝承（1週）
  - 8 夢の意味と夢解（1週）
  - 9 娯楽としての夢語り（1週）
  - 10 中世以後の夢（1週）
- まとめ（1週）

#### [履修要件]

日本史に関する基礎知識があることが望ましい。

## 日本歴史文化論IA(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

学期末に到達目標に即したレポート課題を提示し、そのレポートの内容により成績評価する。レポートの評価はオリジナリティを重視し、素点（100点満点）の絶対評価で評点する。

### [教科書]

授業中にプリントを配布する。

### [参考書等]

（参考書）

西郷信綱『古代人と夢』（平凡社ライブラリー）（古典的名著、西洋古典学などの教養を生かして日本古代の夢に関する基本的視点を形作った書）

河東仁『日本の夢信仰 宗教学から見た日本精神史』（玉川大学出版部）（近年の通史的研究の代表。文学作品を中心としながら近世の夢占いまで幅広く論及。）

河合隼雄『明恵 夢を生きる』（講談社+ 文庫）（夢の達人たる明恵を世に広く知らしめた書。仏教学などの専門家からは疑問の声もある。）

### [授業外学習（予習・復習）等]

授業中に参考文献を指示するので、その内容を事前に学習しておく。

### （その他（オフィスアワー等））

自分なりの関心を持って参加することを期待する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本歴史文化論IB Japanese History and Culture IB	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 吉江 崇
---------------	--	-----------------	--------------------

配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

### [授業の概要・目的]

#### 摂関期の政治と宮廷社会

摂関期における政治と宮廷社会との関係について、その時代の特色やそれがその後の歴史にどのような影響を与えたかについて理解することを目的とする。その際、当該期を考える上で重要ないくつかの現象を取り上げ、その内容を詳細に検証する。古記録や古文書などの諸史料を解読しつつ、課題に取り組む。

### [到達目標]

日本における古代・中世史の様相について具体的な知識を獲得するとともに、その研究方法を習得することで、日本歴史の発展と内容について、自らの視点から考察・説明できるようになる。

### [授業計画と内容]

7世紀後葉に成立した日本の律令国家は、長い過渡期を経て、10世紀後葉に新たな国家体制へと転成を遂げた。そうした時代背景の中で登場するのが、いわゆる摂関政治である。ここでは、そうした摂関期の様相を把握するために、政治と宮廷社会との関係を、いくつかの現象に焦点をあてて整理する。まずは、摂関政治の特徴を藤原兼家期と藤原道長期を中心に概観する。次いで、摂関期・院政期を考える上で先例の継承を、吉書というものの登場を取り上げて説明する。最後に、当該期の宮廷社会の規範意識を公家新制や沽価法をもとに検討する。授業は講義形式で行う。

#### はじめに（1週）

##### 1 後期摂関政治論（5週）

- 1 - 1 問題の所在
- 1 - 2 摂政・関白の登場
- 1 - 3 無官の摂政と一座の宣旨
- 1 - 4 関白 内覧 一上
- 1 - 5 摂関政治の展開過程

##### 2 吉書の登場 近衛府の吉書を中心に（4週）

- 2 - 1 問題の所在
- 2 - 2 大将着陣儀における吉書
- 2 - 3 大糧米制度の変容
- 2 - 4 吉書および吉書儀礼の形成

##### 3 規範意識の変質（4週）

- 3 - 1 問題の所在
- 3 - 2 沽価法の制定
- 3 - 3 皇朝十二銭の終焉
- 3 - 4 公家新制の世界

#### おわりに（1週）

## 日本歴史文化論IB(2)

### **[履修要件]**

日本史に関する基礎知識があることが望ましい。

### **[成績評価の方法・観点及び達成度]**

学期末に到達目標に即したレポート課題を提示し、そのレポートの内容により成績評価する。レポートの評価はオリジナリティを重視し、素点（100点満点）の絶対評価で評点する。

### **[教科書]**

授業中にプリントを配布する。

### **[参考書等]**

（参考書）  
授業中に紹介する

### **[授業外学習（予習・復習）等]**

授業中に参考文献を指示するので、その内容を事前に学習しておく。

### **（その他（オフィスアワー等））**

授業参加には、十分な予習が必要である。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本歴史文化論IIA Japanese History and Culture IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 元木 泰雄					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
源頼朝論  昨年度に引き続き、頼朝の評伝を講ずる。 本講義では、奥州合戦、頼朝上洛、この間の公武交渉について、『吾妻鏡』『玉葉』『愚管抄』等の史料に基づいて再検討を加える。											
[到達目標]											
これによって、当該期の政治情勢に関する認識を深め、中世成立期の新たな歴史像を理解する。また、政治史のありかた、その分析の方法と、意味を習得する。 あわせて関連史料（主に日記・古記録・軍記）を配布し、史料読解力を高めるとともに、史料批判の方法を学習する。											
[授業計画と内容]											
<p>主要なテーマは以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1．義経追捕と守護地頭</li> <li>2．奥州合戦の前提</li> <li>3．奥州合戦の結果</li> <li>4．頼朝の上洛</li> <li>5．後白河の死去と征夷大將軍</li> </ol> <p>以上のテーマを2，3回に分けて説明する。 毎回、史料を配布し、出席者に読み下してもらおう。</p>											
[履修要件]											
日本歴史文化論 Bとの連続受講を推奨する。一定程度の漢文読解力を前提とする。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
試験。授業の欠席者は減点する。											
[教科書]											
毎回プリントを配布する。											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習(予習・復習)等]											
参考文献に必ず目を通しておくこと。 極めて専門性の高い授業であるから、前提となる研究に関する知識は理解のために必須である。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本歴史文化論IIB Japanese History and Culture IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 元木 泰雄					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
源頼朝の評伝  本講義では、頼朝と九条兼実との関係、再度の上洛、大姫入内問題等、頼朝晩年の諸問題を取り上げ、『吾妻鏡』『玉葉』『愚管抄』等の史料を通して再検討する。											
<b>[到達目標]</b>											
この授業によって、当該期の政治情勢に関する認識を深め、中世成立期の新たな歴史像を理解する。また、政治史のありかた、その分析の方法と、意味を習得する。 あわせて関連史料（主に日記・古記録・軍記）を配布し、史料読解力を高めるとともに、史料批判の方法を学習する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>主要なテーマは以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1．九条兼実の栄華と頼朝</li> <li>2．頼朝の再上洛</li> <li>3．建久7年の政変</li> <li>4．大姫入内問題と頼朝の構想</li> <li>5．頼朝の死去と鎌倉幕府内紛</li> </ol> <p>それぞれを2，3回に分けて論じる。 毎回史料を配布し、出席者に読み下しを担当してもらう。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
日本歴史文化論 Aとの連続受講を推奨する。一定程度の漢文読解力を前提とする。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
試験。授業の欠席者は減点する。											
<b>[教科書]</b>											
毎回プリントを配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
指示する参考文献に必ず目を通しておくこと。 極めて専門性の高い授業であるから、前提となる研究に関する知識は理解のために必須である。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学IA Japanese Philology and Literature IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 佐野 宏					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>本講義では、『時代別国語大辞典上代編』（三省堂、第10刷）の「未詳語彙」を中心に語彙研究を行う。語彙分析は使用される個々の作品解釈や前後の時代の語彙に照らして総合的に記述される。語彙研究の方法は関係する諸領域に波及するところが少なくない。そのため、文系・理系を問わずに自ら資料や用例と向き合うことで、言語分析の観点を涵養するには最適である。最初にいくつかの見本を講義形式で提示するので、それに倣って自らの担当項目を選別し研究発表を行ってもらおう。全ての回ではないが主として演習形式で講義を進める。古辞書の性質や使い方、用例の書誌といった日本語史研究における語彙研究の基礎的な知識を習得することを目的とする。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
古辞書の性質や使い方、用例の書誌といった日本語史研究における語彙研究の基礎的な知識を習得することを目的とする。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 導入 上代語概説</li> <li>2 個別検討（名詞語彙の場合）</li> <li>3 個別検討（動詞語彙の場合）</li> <li>4 動詞派生一覧（プリントを配付する）</li> <li>5 形態論概説</li> <li>6 個別検討：演習形式</li> <li>7 個別検討：演習形式</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
日本語学文献講読論 を履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
成績は、期末のレポート試験70%、平常点30%によって評価する。レポート試験の課題は講義中に指示する。その採点基準は、問題設定30点、解決方法50点、結論20点の100点満点で評価する。なお口頭発表を受講者に求めるが、これをもって平常点とする。											
<b>[教科書]</b>											
<p>坂本信幸・毛利正守『萬葉事始』（和泉書院）ISBN:4870887282（上代文学一般を扱う上で必要であるから、購入しておくこと）</p> <p>井手至・毛利正守『新校注 萬葉集』（和泉書院）ISBN:4757604904（もしくは、『萬葉集 本文篇』（塙書房 ISBN：482730081X）を購入しておくこと。）</p> <p>大谷雅夫他『万葉集』（岩波書店）（岩波文庫です。）</p>											
----- 日本語学・日本文学IA(2)へ続く -----											

日本語学・日本文学IA(2)

**[参考書等]**

(参考書)

授業中に紹介する

参考図書や論文については、講義中に紹介しつつその特徴を読書案内として解説する。その他はテキストの『萬葉事始』に基本文献の目録があるので参照されたい。

**[授業外学習(予習・復習)等]**

プリントを配付するので、熟読し、問題点を整理すること。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーは木曜日4限である。会議などで不在の場合があるから、事前に相談されたい。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学IB Japanese Philology and Literature IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 佐野 宏					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>本講義では、『時代別国語大辞典上代編』（三省堂、第10刷）の「未詳語彙」を中心に語彙研究を行う。語彙分析は使用される個々の作品解釈や前後の時代の語彙に照らして総合的に記述される。語彙研究の方法は関係する諸領域に波及するところが少なくない。そのため、文系・理系を問わずに自ら資料や用例と向き合うことで、言語分析の観点を涵養するには最適である。最初にいくつかの見本を講義形式で提示するので、それに倣って自らの担当項目を選別し研究発表を行ってもらう。全ての回ではないが主として演習形式で講義を進める。古辞書の性質や使い方、用例の書誌といった日本語史研究における語彙研究の基礎的な知識を習得することを目的とする。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
日本語学文献講読論IIIを受講していることが望ましい。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 導入 上代語概説</li> <li>2 個別検討（形状言の場合）</li> <li>3 個別検討（意味分化の実態）</li> <li>4 動詞派生一覧（プリントを配付する）</li> <li>5 形態論概説</li> <li>6 個別検討：演習形式</li> <li>7 個別検討：演習形式</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
成績は、期末のレポート試験70%、平常点30%によって評価する。レポート試験の課題は講義中に指示する。その採点基準は、問題設定30点、解決方法50点、結論20点の100点満点で評価する。なお口頭発表を受講者に求めるが、これをもって平常点とする。											
<b>[教科書]</b>											
<p>坂本信幸『萬葉事始』（和泉書院）ISBN:4870887282（上代文学一般を扱う上で必要であるから、購入しておくこと）</p> <p>井手至・毛利正守『新校注 萬葉集』（和泉書院）ISBN:4757604904（もしくは、『萬葉集 本文篇』（塙書房 ISBN：482730081X）を購入しておくこと。）</p>											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書）</p> <p>授業中に紹介する</p>											
----- 日本語学・日本文学IB(2)へ続く -----											

日本語学・日本文学IB(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

プリントを配付するので、問題点を整理しておくこと。

**（その他（オフィスアワー等））**

オフィスアワーは木曜日4限であるが、会議で不在のことがあるから、事前に相談すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学IIA Japanese Philology and Literature IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 長谷川 千尋					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
和歌の家、冷泉家の歌学とはいかなるものであったか。その実態は十分に明らかであるとは言えない。そこでまずは室町時代の冷泉持為の講釈に基づく『古今和歌集』注釈書により、その特質や系譜を探る。その上で、初代為相の門人であるという大江広貞の古今注に遡り、さらにいわゆる冷泉流伊勢物語注釈書群と古今注との関係、古今伝授のありようなどに考察を進める。											
<b>[到達目標]</b>											
レポート課題に対して、独自に問題を設定した上で、自主的な資料収集、問題の考察を行い、適切な文章にまとめる能力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
冷泉持為注（5回程度） 大江広貞注（4回程度） 伊勢物語注釈書との関係（3回程度） 古今伝授と切紙（1回程度）											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
学期末レポートに拠る。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
講読したテキストの復習をし、内容を十分に理解する。 学期末レポートの準備。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学II B Japanese Philology and Literature IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 長谷川 千尋					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
藤原定家に仮託された一連の歌論書や、前期に考察の対象とした冷泉流の古典注釈書の享受が、中世文学において一つの核を成すに至ることは従来指摘されている通りであるが、本講義では、その個別の状況を改めて辿りながら、一連の書が影響を及ぼした文化圏について考察する。											
<b>[到達目標]</b>											
当該範囲の文学史の基礎知識を習得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
定家偽書概説（1回） 心敬の歌論・連歌論その他（5回程度） 了俊、正徹その他（3回程度） 世阿弥の能・能楽論（4回程度）											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
学期末試験（筆記）による。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業中に講読したテキストを復習し、内容を十分に理解する。 学期末試験に向けての準備。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	西欧近現代表象文化論IA Culture and Its Representation in Modern Western Europe IA	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 水野 眞理
---------------	--	-----------------	--------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

### 【授業の概要・目的】

イギリス文学作品とその文化的背景をなす歴史・政治テクストを精読することを通して、古典古代以来の西欧文化の多様性とその相互作用を考察し、イギリス文化の特質を解明する。

今年度は英国ルネサンス期を代表する詩人エドモンド・スペンサー(Edmund Spenser)の物語詩『妖精の女王(The Faerie Queene)』の第5巻を取り上げる。スペンサーは拡張期にあったプロテスタント国家の官僚として植民地経営に関わる一方、イタリア・フランスの文学形式の英国化を目指す詩人として、Philip Sidney, Shakespeare, Donneなどとともに英国ルネサンスを体現する詩人の一人である。その代表作を丹念に読みつつ、英国ルネサンス文化への理解を深める。また、その語りの特質  
ロマンス性、寓意性、教訓性、娯楽性など と、韻文としての特質 詩型、音感などを考察する。

正義の騎士アーティガルを主人公とする第5巻は、時代的にはエリザベス1世の時代にあたり、その政治とりわけアイルランド征服とも関わりの深い要素を多く含んでいる。このような観点から、本講義では英国ルネサンス文化への理解を深めるとともに、今日的課題であるポストコロニアリズムという批評的視点からの読みも試みる。

なお、本講義は、教職科目(英語)の必修科目でもある。

### 【到達目標】

- (1) 英文学の名作を読みながら、英国の文学、歴史、言語、精神性などを理解する。
- (2) 文学作品のみならず、当時の女性君主に関する言説にも触れ、英国の文化を総体として見渡す視点も獲得する。
- (3) 作品を読むだけでなく、批評を原文で読むことにより、学問的な手続きを学ぶ。

### 【授業計画と内容】

以下の予定で授業形式は講義を基本とするが、学生の発言・質問を促すよう心がける。毎回、コメントの提出を求める。

第1週 オリエンテーション 英詩概説

第2週 Edmund Spenserの生涯と作品

第3週～9週 The Faerie Queene, Book V 講読

第10週 歴史的背景 イングランドのアイルランド政策

第11週～13週 The Faerie Queene, Book V のポストコロニアリズム的解読・フェミニズム的解読

第14週 まとめ

### 【履修要件】

特になし

## 西欧近現代表象文化論IA(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

授業への積極的参加と毎回のコメント(50点)、および期末試験(50点)を総合する。

### [教科書]

Edmund Spenser 『The Faerie Queene, Book Five』 (Hackett) ISBN::978-0872208018

第5巻の全文が含まれるものであれば他の版でも可。ただし、作品の抜粋によるものは不可。定期試験に教科書の持参を求める可能性があるため、携帯等で読む電子書籍版は避けてください。

授業中にレジュメは配布しますが、作品テキストは教科書で参照するので、毎回作品のテキストは持参してください。

### [参考書等]

(参考書)

エドモンド・スペンサー 『妖精の女王3 (ちくま文庫)』 (筑摩書房) ISBN:4-480-42073-8 (絶版。古書サイトや図書館等で探してください。他の訳でも可。)

エドモンド・スペンサー 『妖精の女王4 (ちくま文庫)』 (筑摩書房) ISBN:4-480-42074-6 (絶版。古書サイトや図書館等で探してください。他の訳でも可。)

16世紀の詩の英語は、読み辛いと思われるので、邦訳も十分に活用してください。

### [授業外学習(予習・復習)等]

(1)扱う作品は英文学の名作とされるが、16世紀に書かれたため、英語読解に多少の困難が伴うと予想される。したがって、授業開始までに翻訳でよいので、The Faerie Queene 第5巻を通読しておいてもらいたい。翻訳は、参考書の欄に示したちくま文庫版で読むことができるが絶版。古書サイトや図書館等で探してください。

(2)原文テキスト中、授業で取り上げた箇所については、授業後、各自音読によって再読されたい。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーは月5。事前にメールでアポイントメントをとられたい。(miram.uno@nifty.com)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	西欧近現代表象文化論IIA Culture and Its Representation in Modern Western Europe IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 池田 寛子					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>テーマ「イギリス地域文化の基盤としてのケルト的伝統」 イギリス諸島における言語的、文化的な多層性についての理解を深め、多元性を維持することの意義を考える。 本講義は英語の教職免許の必修科目です。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
映像資料、画像、英文資料を用いて、イギリス諸島全体を視野に入れ、とりわけアイルランドの「ケルトの名残」についての多角的な理解を目指す。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>第1回 - 第3回 「ケルト」とは？ 今なぜ「ケルト」が注目されるのか 第4回 - 第6回 ケルトの神話伝説から民間信仰へ - 多神教の名残としての妖精たち、民間伝承物語、木をめぐる信仰 第7回 - 第10回 ケルトの英雄伝説およびケルトの「三大悲話」(The Three Sorrows of Storytelling) 第11回 - 第13回 ケルトの伝統と現代の文化・文学 第14回 総括と補足</p> <p>各回の講義内容は相互に関わりあうため、扱う主要テーマが前後する場合がある。 受講生には授業のテーマに沿った英文資料の読解に基づき、リサーチとそれに基づいた短いプレゼンを行ってもらおう(資料は自由選択、半期に少なくとも一人一回担当)。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
<p>学期末レポート：講義で扱った題材から自由にテーマを選び、レポートを作成、締め切り厳守で提出。 講義毎に質問とコメントの時間を取るので、自由な観点からの積極的な発言を期待する。一人一回以上プレゼンも担当すること。レポートおよびプレゼンなどによる授業参加を総合的に判断して成績を出す。 レポート(40点)平常点(60点)の合計で採点する。</p>											
<b>【教科書】</b>											
授業毎にハンドアウトを配布。											
<b>【参考書等】</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
----- 西欧近現代表象文化論IIA(2)へ続く -----											

西欧近現代表象文化論IIA(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

それぞれの講義テーマに沿った英文資料を配布するため、指示した場合はあらかじめ目を通し、また授業後に読み直してレポートテーマの設定などに役立てることが望ましい。プレゼンの担当者は事前に準備すること。

**（その他（オフィスアワー等））**

オフィスアワーは金曜日12時から12時半です。できれば前日までにメールで連絡をください。オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	西欧近現代表象文化論IVB Culture and Its Representation in Modern Western Europe IVB				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 桂山 康司					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>テーマ：英詩史上の諸問題  英詩史は可能か、という根本問題から、英詩のリズム、様々な詩形の発達とその特徴、ギリシア・ローマ古典文学との関係など、英詩史上の諸問題を考察する。</p>											
[到達目標]											
毎年、個別のテーマを取り上げて（本年度については、詩の評価について考察することを通じて）、そこから、詩的特質の一般的特徴について理解を深める。											
[授業計画と内容]											
<p>本年度は、詩の評価（善し悪し）について考察する。  詩の評価はその定義づけと密接にかかわることを確認しつつ、詩における前衛的表現の歴史的経緯をたどることを通じて、多様な評価の軸を一つ一つ紐解きながら論点を整理し、そこから評価の基準となるべき観点を提示したい。</p> <p>第1回 詩とは人生の批評である。criticism of life  第2回 詩とは形式である。form  第3回 詩とは内容である。content  第4回 詩とは内容と形式の呼応である。tension  第5回 曖昧性 ambiguityについて  第6回 逆説 paradoxについて  第7回 弁証法的構造的 dialecticについて  第8回 iconicityについて  第9回～第13回 詩の評価はいかにあるべきか  第14回 まとめ</p>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
評価は、期末に提出するレポートによる。											
[教科書]											
プリントを使用する。											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
自らの専門的知識を活用し、講義内容について、それを自己の領域の言葉に翻案すればどうなるかを、講義のたびごとに、自らに問うことを求めたい。											
（その他（オフィスアワー等））											
受講に際して、英詩に関する専門的知識はことさら必要としない。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	西欧古代・中世表象文化論III B Culture and Representation in Ancient and Medieval Europe IIIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 高谷 修					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
翻訳の歴史再考  ギリシア・ローマ文学の英訳を考える											
<b>[到達目標]</b>											
西洋古典文学の英訳を歴史的に考察する。まず古典語の韻律法に関して初歩的な学識を確認する。次に古典作品の英訳を検討し、翻訳の実際を検討した後で、翻訳理論に対する知見を深める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
ギリシア・ローマの作品とその英訳を検討し、考察する。											
<b>[履修要件]</b>											
ギリシア語やラテン語を学んでいなくてもよいが、これらの外国語に興味をもっている学生を歓迎したい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常の活躍(80%)とレポート(20%)による。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない プリントを配布する予定。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 高谷修 『ギリシア・ローマ文学と十八世紀英文学』(世界思想社) 青木巖 『西洋古典とイギリス文学』(研究社)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
毎時間、古典文学とその英訳をプリント配布するので、前もって予習しておくこと。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国際関係論IVA International Relations IVA				担当者所属・ 職名・氏名	非常勤講師 大川 良文					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>2016年は、イギリスのEU離脱、保護貿易の実施を明言したトランプ新大統領の登場と世界が反グローバル化に大きく舵を切ったと思わせる重大事件が起こりました。グローバル化を推し進めるのか、それとも制限するのかは、いつの時代も国際政治経済の大きな議論の的となってきました。これらの議論の中にはイデオロギーを前面に押し出した感情的なものも多く、結論ありきで語られるものも多く存在します。本講義では、グローバル化推進派と反推進派の対立の構図を理解するために、政治、経済、歴史の側面からグローバル化に関する理解を深めていきます。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>グローバル化を巡る議論を理解するための基礎概念について理解する。具体的には次のようなことである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グローバル化と国内制度との関係</li> <li>・国際貿易、国際資本移動が国民経済にもたらすメリットとデメリット</li> <li>・国際政治のトリレンマ（ハイパーグローバル化と国家主権と民主主義は同時に成り立たない）の理解</li> <li>・国際経済体制を巡る論点の理解</li> </ul>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．グローバル化・パラドクス概論</li> <li>2．市場と政府の関係</li> <li>3．第1次グローバル化の進展と挫折</li> <li>4．自由貿易/保護貿易論</li> <li>5．国際通商体制（GATT/WTO）論</li> <li>6．ブレトン・ウッズ体制の成功と挫折</li> <li>7．グローバル金融市場論</li> <li>8．経済発展とグローバル化</li> <li>9．2つの開発経済論</li> <li>10．世界経済の政治的トリレンマ</li> <li>11．グローバル・ガバナンス</li> <li>12．新時代のグローバル化についての原則</li> <li>13．国際経済体制改革の方向性</li> <li>14．世界経済の現状とグローバル化・パラドクス</li> <li>15．まとめ</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
----- 国際関係論IVA(2)へ続く -----											

## 国際関係論ⅣA(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

レポート（30点）と期末試験（70点）によって評価する

### [教科書]

ダニ・ロドリック 『グローバルゼーション・パラドクス～世界経済の未来を決める3つの道』（白水社）ISBN:978-4-560-08276-8

### [参考書等]

（参考書）

授業中に紹介する

その他の参考文献は、できるだけ多く、授業中に指示する。

### [授業外学習（予習・復習）等]

第2回～第13回までの講義は、教科書の各章に対応した内容となっているので、講義前に教科書を読んでおくこと。講義は、教科書を事前に読んできたことを前提に行います。

### （その他（オフィスアワー等））

非常勤教員であるためオフィスアワーは設けていない。講義内容に関する質問などはメールで受け付けます。連絡方法については講義内で説明します。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	公共政策論演習IA Seminar on Public Policy IA				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 佐野 亘					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
政策立案などに関する基本的な文献を講読することを通じて、現実の公共政策のあり方について調査・検討するとともに、自分なりに適切な政策のあり方を提言できるような力を身につけることを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
この科目を履修することにより、政策を取り巻く現実の状況や実際的な困難を深く理解するとともに、基本的な調査方法や文献収集の方法を身に付けることができる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
受講者は、各自、担当する論文について要約をおこない、発表する。その際、単に内容をまとめるだけでなく、実際の事例を参照するとともに、自分自身の意見や疑問も必ず付け加える。そのうえで、受講者全員で、その内容について議論をおこなう。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
授業への参加態度（報告、質問、討論への参加など）にもとづいて、総合的に評価をおこなう。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
テキストは必ず事前に読んでくること。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	公共政策論演習IB Seminar on Public Policy IB				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 佐野 亘					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
適切な公共政策を実現するには、机上の空論に終わらないように、単に理想の社会のあり方を構想するだけでなく、その具体的な実現方法について考える必要がある。本演習では、受講者は、各自、みずからの興味・関心にもとづいてテーマを決め、それについてどのような政策がこれまで実施されてきたのか、またそこにはどのような問題があったのかを調査・報告するとともに、その改善策を提案する。この演習を通じて、受講者は、理論的な知識を具体的な問題に応用する力を身につけるとともに、みずからの問題意識を言語化し、他者に理解可能なかたちで伝える能力を身につけることが期待される。											
<b>[到達目標]</b>											
この科目を履修することにより、現実の政策課題について、さまざまな理論的観点から分析をおこなうとともに、そうした分析を、より適切な政策提案へとつなげる能力を身につけることができる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
1．イントロダクション  2．～ 13． 受講者による報告  14．まとめ											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
授業への参加態度（報告、質問、討論への参加など）をもとに、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
各自の報告に向けて準備をおこなうとともに、ふだんから、さまざまな社会問題や政策課題について情報収集をおこなっておくこと。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	公共政策論演習IIA Seminar on Public Policy IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 浅野 耕太					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
現実の公共政策について、文献調査、現地調査、統計解析などに基づき、自立して分析を行うための基礎的な力を環境経済学、資源経済学、エコロジー経済学、ミクロ経済学、計量経済学、政策科学などに関する基本文献の輪読や演習を通じて養うことを目的としている。本年度は計量経済学の基本文献の輪読と演習を行う。											
<b>[到達目標]</b>											
中級程度の計量経済学の内容を輪読とフリーの統計計算ソフトウェア R を活用した問題演習を通じて学び、身近な社会現象を定量的に把握できるようにする。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1回 イン트로ダクション 教科書の概要を説明する。基本的な参考文献などを紹介し、授業の進め方と準備・発表の方法を周知する。											
第2回～第14回 各章の概要と論点の提示並びに問題演習 受講者は問題を分担し、解答を行う。 以下のようなテーマそれぞれについて1～2週の授業を行う予定である。											
<ul style="list-style-type: none"> <li>1. R 入門</li> <li>2. 確率・統計のおさらい</li> <li>3. モンテカルロ実験</li> <li>4. 単回帰モデル</li> <li>5. 重回帰モデル：推定</li> <li>6. 重回帰モデル：推測</li> <li>7. 質的変量を用いた重回帰モデル</li> </ul>											
第15回 まとめ 13回にわたる授業の成果をまとめ、残された課題や疑問点について全員で議論する。切りのよいところまで読了できなかった場合、この回を補充に充てることもある											
<b>[履修要件]</b>											
統計計算ソフトウェア R に関する知識は不要であるが、統計入門あるいは公共政策論 を履修済みであることが望ましい。後期に開講される公共政策論演習IIBとの連続履修を推奨する。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、報告内容、その他の貢献を斟酌し、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
Florian Heiss 『Using R for Introductory Econometrics』 ( Createspace Independent Publishing Platform ) ISBN:9781523285136											
----- 公共政策論演習IIA(2)へ続く -----											

公共政策論演習IIA(2)

---

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

毎回事前に教科書を読み、疑問点を整理したうえで、授業に出席すること。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	公共政策論演習IIB Seminar on Public Policy IIB	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 浅野 耕太
---------------	--	-----------------	--------------------

配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

現実の公共政策について、文献調査、現地調査、統計解析などに基づき、自立して分析を行うための基礎的な力を環境経済学、資源経済学、エコロジー経済学、ミクロ経済学、計量経済学、政策科学などに関する基本文献の輪読や演習を通じて養うことを目的としている。本年度は計量経済学の基本文献の輪読と演習を行う。

#### [到達目標]

中級程度の計量経済学の内容を輪読とフリーの統計計算ソフトウェア R を活用した問題演習を通じて学び、身近な社会現象を定量的に把握できるようにする。

#### [授業計画と内容]

##### 第1回 イン트로ダクション

教科書の概要を説明する。基本的な参考文献などを紹介し、授業の進め方と準備・発表の方法を周知する。

##### 第2回～第14回 各章の概要と論点の提示並びに問題演習

受講者は問題を分担し、解答を行う。

以下のようなテーマそれぞれについて1～2週の授業を行う予定である。

1. 時系列データの回帰分析：基本
2. 時系列データの回帰分析：発展
3. 時系列回帰における系列相関と分散不均一性
4. プーリングデータ
5. パネルデータ
6. 同時方程式モデル
7. 実証研究の進め方

##### 第15回 まとめ

13回にわたる授業の成果をまとめ、残された課題や疑問点について全員で議論する。切りのよいところまで読了できなかった場合、この回を補充に充てることもある

#### [履修要件]

前期に開講される公共政策論演習IIAの履修を要件とする。

## 公共政策論演習IIB(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

出席、報告内容、その他の貢献を斟酌し、総合的に評価する。

### [教科書]

Florian Heiss 『Using R for Introductory Econometrics』 ( Createspace Independent Publishing Platform )  
ISBN:9781523285136

### [参考書等]

( 参考書 )  
授業中に紹介する

### [授業外学習 ( 予習・復習 ) 等]

毎回事前に教科書を読み、疑問点を整理したうえで、授業に出席すること。

### ( その他 ( オフィスアワー等 ) )

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	欧米歴史社会論演習II A Seminar on Euro-American History and Society IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 合田 昌史					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
卒業論文の作成を目的とした、研究・調査方法の指導と、プレゼンテーションの実施。											
<b>[到達目標]</b>											
論文作成に向けての一里塚となることを目指す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
ヨーロッパ各国の歴史や文化・社会に関して、参加者各自が設定した研究テーマについてプレゼンテーションを行ってもらい、助言や指導を行い、また出席者全員による、質疑や討論を行う。一人の発表には原則として1時間半をあて、可能な限り議論を深めてゆく。大学院人間・環境学研究科の授業と共通。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
プレゼンテーションおよび授業への出席と、積極的な参加を重視する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
互いの報告に関心を持つことが重要である。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	欧米歴史社会論演習II B Seminar on Euro-American History and Society IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 合田 昌史					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
卒業論文の作成を目的とした、研究・調査方法の指導と、プレゼンテーションの実施。											
<b>[到達目標]</b>											
論文作成に向けての一里塚となることを目指す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
ヨーロッパ各国の歴史や文化・社会に関して、参加者各自が設定した研究テーマについてプレゼンテーションを行ってもらい、助言や指導を行い、また出席者全員による、質疑や討論を行う。一人の発表には原則として1時間半をあて、可能な限り議論を深めてゆく。大学院人間・環境学研究科の授業と共通。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
プレゼンテーションおよび授業への出席と、積極的な参加を重視する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
互いの報告に関心を持つことが重要である。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本歴史文化論演習IA Seminar on Japanese History and Culture IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 吉江 崇					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
日本社会の発展を歴史的視点から考察し解明するための研究方法や、一次史料（日記・古文書など）の扱い方を習得するための演習を行う。日本の古代・中世に関する研究課題・研究方法を習得し、史料を解読する演習を行う。											
<b>[到達目標]</b>											
日本古代・中世史の基本史料について学び、その内容を的確に読解・考察することにより、その時代の社会・文化・政治について検討・説明できるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業の計画と内容の具体的な中身は、受講生と協議しながら決定する。基本的には、（１）日本の古代・中世の基本史料を読み解くことと、（２）各自の研究内容を発表してもらい、質疑応答を行う。授業は、（１）（２）の両者を並行して実施するが、おおむね（１）を中心に、（２）は臨機に行う。											
（１）古代・中世史料の読解 平安時代の古記録や古文書を読解する。原本の写真・影写本などと照らし合わせながら、正確に内容を読み解くことを目指す。取りあげる古記録や古文書は受講生と協議しながら決定するが、分野横断的に多角的に分析することが可能な史料を読み解くことを基本とする。											
（２）研究内容の発表 参加者各自が研究内容を発表し、質疑応答しながら、研究内容の深化を目指す。原則として、１回の授業で１人の報告を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
日本史に関する基礎知識があることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況と発表内容により、平常点で評価する。古代・中世史料を分担して輪読し、担当箇所を正確に読み解くことが必要である。素点（100点満点）の絶対評価で評点する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
使用するテキストを事前に配布するので、事前に学習しておく。											
（その他（オフィスアワー等））											
授業参加には、十分な予習が必要である。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本歴史文化論演習IB Seminar on Japanese History and Culture IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 吉江 崇					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
日本社会の発展を歴史的視点から考察し解明するための研究方法や、一次史料（日記・古文書など）の扱い方を習得するための演習を行う。日本の古代・中世に関する研究課題・研究方法を習得し、史料を解読する演習を行う。											
<b>[到達目標]</b>											
日本古代・中世史の基本史料について学び、その内容を的確に読解・考察することにより、その時代の社会・文化・政治について検討・説明できるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業の計画と内容の具体的な中身は、受講生と協議しながら決定する。基本的には、（１）日本の古代・中世の基本史料を読み解くことと、（２）各自の研究内容を発表してもらい、質疑応答を行う。授業は、（１）（２）の両者を並行して実施するが、おおむね（１）を中心に、（２）は臨機に行う。											
（１）古代・中世史料の読解 平安時代の古記録や古文書を読解する。原本の写真・影写本などと照らし合わせながら、正確に内容を読み解くことを目指す。取りあげる古記録や古文書は受講生と協議しながら決定するが、分野横断的に多角的に分析することが可能な史料を読み解くことを基本とする。											
（２）研究内容の発表 参加者各自が研究内容を発表し、質疑応答しながら、研究内容の深化を目指す。原則として、１回の授業で１人の報告を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
日本史に関する基礎知識があることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況と発表内容により、平常点で評価する。古代・中世史料を分担して輪読し、担当箇所を正確に読み解くことが必要である。素点（100点満点）の絶対評価で評点する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
使用するテキストを事前に配布するので、事前に学習しておく。											
（その他（オフィスアワー等））											
授業参加には、十分な予習が必要である。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本歴史文化論演習IIA Seminar on Japanese History and Culture IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 元木 泰雄					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
古文書学を取り上げる。おもに中世の古文書を対象に、内容の正確な理解のために様式について検討する。あわせて写真の複写を配布し、読解力の養成を図る。											
<b>[到達目標]</b>											
日本中世古文書に対する読解力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
佐藤進一著『新版日本古文書学』に沿って授業を進める。主なテーマは以下の通り。 1．古文書とは何か 2．公式様文書(律令制の文書様式) 3．公家様文書(宣旨、奉書など、貴族政権の文書様式) 4．鎌倉幕府の文書(下文、御教書、下知状など、将軍・執権の文書) 5．室町幕府の文書(御判御教書、御内書など、将軍の文書) 様式を検討するとともに、崩し字の解釈力も練成する。毎回、次回までの課題を課す。											
<b>[履修要件]</b>											
返り点なしの漢文が読解できる学力を前提とする。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点、小テスト											
<b>[教科書]</b>											
佐藤進一『新版日本古文書学』 毎回史料のプリントを配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
毎回授業内容と関係する宿題を課す。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本歴史文化論演習IIB Seminar on Japanese History and Culture IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 元木 泰雄					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
古文書学を取り上げる。 中世後期の様々な古文書を取り上げ、古文書読解力の練成を図る。											
<b>[到達目標]</b>											
中世の古文書に対する読解力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
佐藤進一著『新版古文書学入門』に沿って授業を進めるが、写真を用いて実践的な読解力を要請する。 主なテーマは以下の通り。 1．室町幕府の文書（奉行人奉書、施行状など） 2．土地関係の文書（売券、譲状など） 3．合戦関係の文書（軍忠状など） 4．戦国時代の文書 前期より難解な文書を取り上げる。毎回、次回までの課題を課す。											
<b>[履修要件]</b>											
日本歴史文化論演習 Aの履修を前提とする。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点、小テスト											
<b>[教科書]</b>											
毎回、史料のコピーを配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
毎回授業内容に関する宿題を課す。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学演習IA Seminary on studies of Japanese Philology and Literature IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 佐野 宏					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>古代日本文学における「萬葉集」の注釈研究を行う。本年度は、巻一を取り上げ、古注釈書を丹念に読み込みながら現行諸注の問題点を指摘し、一首ずつ精読する。本文校訂の方法や注釈方法を通して、日本語の音韻史研究、文法史研究、語彙史研究を試みる。日本語の表現研究の一つとして、主として古代日本語の研究手法の習得を目的とする。この演習で重要なのは、論文にせよ、発表にせよ、用例・データに語らせる方法を習得し、誤ってもよいから、そこに自らの論を構築してみせることである。古典作品の問題点・未解決点は、常に残されている。従来にはない新たな観点からの検証・証明方法の開発を求めたい。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
古代日本文学の研究方法について基礎的な事項を習得し、自ら問題解決ができるようになること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス（研究発表の例題：都合2回）</li> <li>2 日本文学史概説（上代文学概説）</li> <li>3 日本語史概説1（上代音韻史）</li> <li>4 日本語史概説2（上代語における文法・語法上の特徴）</li> <li>5 日本語史概説3（古代日本語の語構成の特質）</li> <li>6 演習担当1人目</li> <li>7 演習担当2人目</li> <li>8 演習担当3人目</li> <li>9 演習担当4人目</li> <li>10 演習担当5人目</li> <li>11 演習担当6人目</li> </ol> <p>演習担当者の担当順は、受講者確定後に行う。最初に例題を示すので、それに倣って自らが担当する作品について研究をはじめめる。最初の数回で上記のように研究に資する講義を行うが、受講者数に応じて回数を調整する。前期中に受講者は少なくとも1回は演習担当を行うこととし、その内容を論文にして期末に提出することを課す。受講者が少ない場合は、複数回の演習担当を行うことがある。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
言学、日本語学文献講読論I を受講していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
期末のレポート（50%）、授業中の研究発表（30%）、積極的な議論への参加度（20%）											
<b>[教科書]</b>											
井手至・毛利正守『新校注 萬葉集』（和泉書院）（佐竹昭広『萬葉集 本文篇』（塙書房）のいずれかを購入のこと） 坂本信幸・毛利正守『萬葉事始』（和泉書院）											
----- 日本語学・日本文学演習IA(2)へ続く -----											

日本語学・日本文学演習IA(2)

[参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

演習担当者のレジメを熟読し、問題点を整理して自らの意見をまとめてくること。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーは授業日の放課後1時間程度とする。それ以外は事前に確認を取ること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学演習IB Seminary on studies of Japanese Philology and Literature IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 佐野 宏					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>古代日本文学における「萬葉集」の注釈研究を行う。本年度は、巻一を取り上げ、古注釈書を丹念に読み込みながら現行諸注の問題点を指摘し、一首ずつ精読する。本文校訂の方法や注釈方法を通して、日本語の音韻史研究、文法史研究、語彙史研究を試みる。日本語の表現研究の一つとして、主として古代日本語の研究手法の習得を目的とする。この演習で重要なのは、論文にせよ、発表にせよ、用例・データに語らせる方法を習得し、誤ってもよいから、そこに自らの論を構築してみせることである。古典作品の問題点・未解決点は、常に残されている。従来にはない新たな観点からの検証・証明方法の開発を求めたい。</p>											
【到達目標】											
古代日本文学の研究方法について基礎的な事項を習得し、自ら問題解決ができるようになること。											
【授業計画と内容】											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス（研究発表の例題：都合2回）</li> <li>2 日本文学史概説（上代文学概説）</li> <li>3 日本語史概説1（上代音韻史）</li> <li>4 日本語史概説2（上代語における文法・語法上の特徴）</li> <li>5 日本語史概説3（古代日本語の語構成の特質）</li> <li>6 演習担当1人目</li> <li>7 演習担当2人目</li> <li>8 演習担当3人目</li> <li>9 演習担当4人目</li> <li>10 演習担当5人目</li> <li>11 演習担当6人目</li> </ol> <p>演習担当者の担当順は、受講者確定後に行う。最初に例題を示すので、それに倣って自らが担当する作品について研究をはじめ。最初の数回で上記のように研究に資する講義を行うが、受講者数に応じて回数を調整する。後期中に受講者は少なくとも1回は演習担当を行うこととし、その内容を論文にして期末に提出することを課す。受講者数が少ない場合は、複数回の演習担当を行うことがある。また後期からの新たな受講生がなく、前期から継続して受講する者だけである場合は、最初にガイダンスとともに例題解説を二回程度行い、その次から直ちに演習担当者の発表を行う。なお前期受講者は、前期に担当した作品以外のものを担当することとする。</p>											
【履修要件】											
言学、日本語学文献講読論Iを受講していることが望ましい。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
期末のレポート（50%）、授業中の研究発表（30%）、積極的な議論への参加度（20%）											
【教科書】											
井手至・毛利正守『新校注 萬葉集』（和泉書院）（もしくは『萬葉集 本文篇』（塙書房）のいずれかを購入のこと。）											
----- 日本語学・日本文学演習IB(2)へ続く -----											

日本語学・日本文学演習IB(2)

坂本信幸・毛利正守 『萬葉事始』 (和泉書院)

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

演習担当者のレジメを熟読し問題点を整理して、自らの意見をまとめてくること。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーは授業日の放課後1時間程度とする。それ以外は事前に確認を取ること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学演習IIA Excises in Japanese Philology and Literature IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 長谷川 千尋					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
室町時代の連歌作品である『永享十二年十月十五日山何百韻』を読む。本作品は、当代を代表する連歌作者として名高い宗砌、忍誓、親当（蜷川新右衛門）の三吟である。発句は「朽てけりたが錦木ぞ下紅葉」。未紹介の写本を底本にして、諸本と対校しながら解読を進める。											
<b>[到達目標]</b>											
国文学の文献資料に対して、諸本を対校して確定した本文に基づき、辞典類、索引類等を適切に用いて注釈を施した上で、本文を解読し、発表する能力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
演習担当者は、『永享十二年十月十五日山何百韻』から順に四句ずつ担当し、本文批判、語釈、用例探索等に基づいて解釈を行い、受講者と質疑応答・意見交換をする。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
演習発表の内容と、質疑応答・意見交換への取り組みによって評価する。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
毎回のテキストの下読みと問題点の整理。 演習発表の準備。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学演習IIB Excises in Japanese Philology and Literature IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 長谷川 千尋					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
室町時代の連歌作品である『永享十二年十月十五日山何百韻』を読む。本作品は、当代を代表する連歌作者として名高い宗砌、忍誓、親当（蜷川新右衛門）の三吟である。発句は「朽てけりたが錦木ぞ下紅葉」。未紹介の写本を底本にして、諸本と対校しながら解読を進める。											
<b>[到達目標]</b>											
国文学の文献資料に対して、諸本を対校して確定した本文に基づき、辞典類、索引類等を適切に用いて注釈を施した上で、本文を解読し、発表する能力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
前期に引き続いて『永享十二年十月十五日山何百韻』の続きを読む。演習担当者は、順に四句ずつを担当し、本文批判、語釈、用例探索等に基づいて解釈を行い、受講者と質疑応答・意見交換をする。											
<b>[履修要件]</b>											
前期に「日本語学・日本文学演習 A」を受講しておくことが望ましいが、後期からの受講も可とする。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
演習発表の内容と、質疑応答・意見交換への取り組みによって評価する。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
毎回のテキストの下読みと問題点の整理。 演習発表の準備。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学演習ⅢA Excercises in Japanese Philogy and Literature IIIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 須田 千里					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>内田百閒は近代日本文学を代表する幻想小説作家である。この授業ではその短編集を取り上げ、皆で分担して読み、作品内容の理解・注釈・先行論文の読解による新たな作品像の構築を目指す。教室で意見交換することによって、お互いの知見を高めていきたい。</p> <p>なお、後期の日本語学・日本文学演習ⅢBの履修を推奨する。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>自分の担当作品に関して内容の把握が出来、従来の評価や論点を知った上で、自分独自の考えを論理的に述べられるようになること。他の受講生の多様な意見を受け入れ、適宜意見交換をしながらさらに自分の論点を深められること。クラス全体で、重層的に考えを発展していけること。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>第1回 ガイダンス 授業の進め方の説明。受講者各自で教科書から好きな作品を選び、順番を決めて発表していく。発表に際しては、作品のあらすじ、語句の注釈を行った上で、自分独自の論点を文章にまとめ、レジュメとして配布し、45分間で発表する。残りの45分間は、他の受講生との質疑応答や意見交換に費やされる。</p> <p>第2回 内田百閒の生涯と作品について。</p> <p>第3～14回 各自の担当作品の発表。扱う作品は、短編集『冥途』『旅順入城式』所収のもの</p> <p>第15回 まとめ 達成目標の確認、残された課題の検討。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
発表5割、出席を含めた授業への参加態度5割。											
<b>[教科書]</b>											
内田百閒 『冥途・旅順入城式』（岩波文庫）ISBN:4-00-311271-7											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書） 授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
<p>事前に次の発表作品を読んでおき、自分で関心ある点は独自に考えをまとめておく。また、気に掛かる点や分からない点はどこか、事前にチェックしておくこと。</p>											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
<p>発表順はくじ・じゃんけんなどで決めるので、いつ当たってもよいようにスケジュール調整しておくこと。発表時の無断欠席は単位なし。</p> <p>オフィス・アワーは特に定めないが、講義時間外に直接話したい学生は、人環HPよりメールアドレスを検索し、希望日時を第三希望までと、学生番号、氏名を明記してメールすること。</p> <p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学演習III B Exercises in Japanese Philology and Literature III B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 須田 千里					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>久生十蘭は近来とみに熱烈なファンを獲得している作家である。この授業ではその中短編集を取り上げ、皆で分担して読み、作品内容の理解・注釈・先行論文の読解による新たな作品像の構築を目指す。教室で意見交換することによって、お互いの知見を高めていきたい。</p> <p>なお、前期の日本語学・日本文学演習III Aの履修を推奨する。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>自分の担当作品に関して内容の把握が出来、従来の評価や論点を知った上で、自分独自の考えを論理的に述べられるようになること。他の受講生の多様な意見を受け入れ、適宜意見交換をしながらさらに自分の論点を深められること。クラス全体で、重層的に考えを発展していけること。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>第1回 ガイダンス。授業の進め方の説明。受講者各自で教科書の作品を分担し、順番を決めて発表していく。発表に際しては、作品のあらすじ、語句の注釈を行った上で、自分独自の論点を文章にまとめ、レジュメとして配布し、45分間で発表する。残りの45分間は、他の受講生との質疑応答や意見交換に費やされる。</p> <p>第2回 久生十蘭の生涯について。研究史の概略。</p> <p>第3回～第14回 各自の担当作品の発表。扱う作品は、「湖畔」「ハムレット」「墓地展望亭」「骨仏」「生霊」「雲の小径」「虹の橋」「妖女アリス芸談」</p> <p>第15回 まとめ 達成目標の確認。残された課題の検討。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
発表5割、出席を含めた授業への参加態度5割。											
<b>【教科書】</b>											
久生十蘭 『墓地展望亭・ハムレット 他六篇』（岩波文庫）ISBN:978-4-00-311842-9											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>【授業外学習（予習・復習）等】</b>											
<p>事前に次回の発表作品を読んでおき、自分で関心ある点は独自に考えをまとめておく。また、気に掛かる点や分からない点はどこか、事前にチェックしておくこと。</p>											
----- 日本語学・日本文学演習III B(2)へ続く -----											

日本語学・日本文学演習III B(2)

---

(その他(オフィスアワー等))

発表順はくじ・じゃんけんなどで決めるので、いつ当たってもよいようにスケジュール調整しておくこと。発表時の無断欠席は単位なし。

オフィス・アワーは特に定めないが、講義時間外に直接話したい学生は、人環HPよりメールアドレスを検索し、希望日時を第三希望までと、学生番号、氏名を明記してメールすること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	書論・書写演習A Exercises in Japanese Calligraphy A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 長谷川 千尋					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
くずし字で書かれた様々なジャンルの古典文学作品（写本）を紹介し、資料の読解を行いながら翻字する。											
<b>[到達目標]</b>											
くずし字で書かれた平仮名資料を一通り解読でき、漢字資料にもある程度まで対応できる力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1回 ガイダンス 第2～6回 写本の翻字・解読 第7～15回 発展的資料の翻字・解読 受講者の理解度・習熟度に応じて、内容と進度を調節する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
定期試験（筆記）による。講義期間中に、小テストを1回程度実施し、到達度を確認する。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 児玉幸多 『くずし字解読辞典（普及版）』（東京堂出版）ISBN:449010331X その他授業中に紹介する。											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
小テストに備えた、テキストの復習。 定期試験に向けての自主的な準備。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	書論・書写演習B Exercises in Japanese Calligraphy B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 長谷川 千尋					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
くずし字で書かれた様々なジャンルの古典文学作品（版本）を紹介し、資料の読解を行いながら翻字する。											
<b>[到達目標]</b>											
くずし字で書かれた平仮名資料を一通り解読でき、漢字資料にもある程度まで対応できる力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1回 ガイダンス 第2～6回 版本の翻字・解読 第7～15回 発展的資料の翻字・解読 受講者の理解度・習熟度に応じて、内容と進度を調節する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
定期試験（筆記）による。講義期間中に、小テストを実施し、到達度を確認する。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 児玉幸多 『くずし字解読辞典（普及版）』（東京堂出版）ISBN:449010331X その他授業中に紹介する。											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
小テストに備えた、テキストの復習。 定期試験に向けての自主的な準備。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	契約関係原理論 Principles of Contract-Relation				担当者所属・ 職名・氏名	大阪市立大学 教授 高橋 眞					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
契約にかかわる民法上の諸制度について、その内容、原理（所有権、私的自治、取引の安全等）、社会法的制約との関係を、具体的な問題に即して理解するとともに、社会問題の中から契約法理が形成され、鍛えられる過程を把握する。このことを通じて、契約関係に関する諸制度を主体的に使いこなし、さらに望ましいルールを獲得する力を身につけるための基礎を獲得する。											
【到達目標】											
ここで取り扱う民法上の諸制度について理解するとともに、具体的な事例におけるそれらの制度の運用を批判的に検討する眼を獲得すること。											
【授業計画と内容】											
第1回 はじめに 法の解釈と適用に関する基礎的な事項を説明する。											
第2回 民法解釈の基本原則 - - 所有権と契約 建築請負における完成建物の所有権の帰属に関する判例を検討し、判断の根拠として、政策的考慮以前に「所有権と契約」という基本原則から出発するべきことについて考える。											
第3回 所有権の移転と公示（1） - - 登記の役割と限界 不動産登記の役割と、その効力および限界について説明する。											
第4回 所有権の移転と公示（2） - - 不動産の二重譲渡をめぐって 所有権を二重譲渡するとは何を意味するか、そのような事態が生ずるのはなぜか、登記制度の濫用に対して裁判所がどのように対応しているかについて説明する。											
第5回 外観の信頼保護（1） - - 取引の安全 真実に権利を有しない者から物を買っても、その所有権を取得することはできない。その例外として、取引の迅速・安全を保護するために、本来の権利者に落ち度がなくとも第三者を保護する制度（動産の即時取得・債権の準占有者への弁済）について説明する。											
第6回 外観の信頼保護（2） - - 本人によるコントロール 真実に代理権を有しない者と契約を結んでも、本人との間に契約は成立しない。しかし、その契約について代理権のない者の行為につき、本人が何らかの原因を与えている場合に、本人が責任を負うことがある。この場合、事情を知らない相手方の保護は、単に外観への信頼ではなく、本人が代理人をコントロールするべきことを根拠とすることを示す。											
第7回 外観の信頼保護（3） - - 意思表示と第三者保護 真実の権利関係と異なる内容の陶器は無効であり、これを信頼しても権利を取得することはできない。しかし「通謀虚偽表示」規定の類推適用によって、登記を信頼した第三者が保護される場合がある。意思表示の効力について概観した後、この類推適用の構造について検討し、第6回と同様、自らの意思の表示を自らコントロールするべきことが根拠であることを示す。											
第8回 契約の解釈――目的物の瑕疵と合意の内容 売買目的物に瑕疵がある場合の処理につき、「瑕疵担保責任」に基づいて判断した判例を検討する。その中で、当事者の契約の趣旨と内容が決定的であること、したがって、「瑕疵担保責任」とは、当事者間で定められた債務内容の実現にかかわる責任として、債務不履行責任の一種であることについて説明する。											
第9回 債権の構造――債務に関する理論構成の意味 瑕疵担保責任と債務不履行責任とは、かつて、その性質が全く異なるものと理解されていた。そして、その適用領域や効果についても、大いに異なるものとされていたが、実際の裁判例を見る											
契約関係原理論(2)へ続く											

## 契約関係原理論(2)

と、責任の性質論はほとんど意味を持っていない。債務に関する理論構成は何を意味するかについて検討する。

### 第10回 契約への制約(1) - 利息制限法をめぐって

利息の制限をめぐって、立法と判例は互いに影響しながら大きく展開した。その過程を、社会的背景とともに概観するとともに、裁判所は社会の矛盾に立ち向かってどこまでのことができるかという問題を検討する。

### 第11回 契約への制約(2) - 借地借家法をめぐって

住宅問題はすぐれて社会的な課題であり、借地・借家をめぐる紛争は、日本の産業革命と都市化の進展とともに大きな社会問題となってきた。判例の展開とともに借地・借家に関する法律の整備も継続して行われてきた。ここでは、借地借家法による契約の社会的規制の主なもの確かめるとともに、より広く、住宅のあり方につき、民間市場と公的セクターの両者の役割を検討する。

### 第12回 安全配慮義務(1) - 19世紀ドイツの判例と立法(社会問題から法規範へ)

雇用・労働契約における労働環境の安全を確保するための安全配慮義務は、契約法上、初めから当然のこととはされていなかった。安全配慮義務が、19世紀後半のドイツの判例によって形成され、ドイツ民法典に明記されるまでの経過を示すとともに、それが社会政策としてだけではなく、雇用契約の本質から導かれることの意味について検討する。

### 第13回 安全配慮義務(2) - 日本の判例の示すもの(法概念とその構造)

安全配慮義務は、日本では昭和50年(1975年)の最高裁判決によって認められた。当初は突発的な労働災害に関する事例であったが、さらに職業病や過労死・過労自殺、学校事故の事例へと拡大している。これらの多様な事例に関して、昭和50年判決の定義および説明に立ち返り、どのように考えるべきかという点について説明する。

### 第14回 安全配慮義務(3) - 自然災害と安全配慮義務

安全配慮義務は、事故が起きた後の損害賠償責任の根拠となるが、本質的には、事故を未然に防ぐために使用者や学校管理者があらかじめ措置をとることにその根幹がある。屋外スポーツでの落雷事故や、東日本大震災の津波の事件に関する裁判例を通じて、このことを検討する。

### 第15回 まとめ

以上の内容を振り返り、契約関係を考えるための視点や方法を整理してまとめとする。

## 【履修要件】

特になし

## 【成績評価の方法・観点及び達成度】

1回の記述式試験において評価する。

### 〔評価基準〕

1回の記述式試験において、100点満点中、60点以上となること。

## 【教科書】

使用しない

資料として、プリントを配布する。

## 【参考書等】

(参考書)

授業中に紹介する

契約関係原理論(3)へ続く

### 契約関係原理論(3)

---

#### [授業外学習（予習・復習）等]

授業で聞いた内容に疑問を持った点について調べ、質問をすることを推奨する。

#### （その他（オフィスアワー等））

第1回の授業の時に、メールアドレスを示すので、それを通じて質問し、アポイントをとることとしたい。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	国家・社会法システム論IIA Law and Social System IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小畑 史子					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
採用内定の取消、病気休職期間満了時に治癒していないことを理由になされた退職扱い、成果主義に基づく賃金減額、名ばかり管理職等の、働くことに関するトラブルをめぐる重要な判決を毎週1件取り上げて、現実に職場で生起する事件とそれに関する法的判断を分析し、雇用社会の在り方について論じる力を涵養する。											
<b>【到達目標】</b>											
職場で実際に起きた事件の内容を詳細に知ることにより、雇用社会で生じるトラブルにはどのようなものがあるか、トラブルの芽を摘むためには何が必要かを理解することができる。それらの事件について裁判所が下した判決・決定を学ぶことにより、法的な紛争解決の方法を理解し、またその課題を考察できる。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
第一週：インターネット総合研究所事件・東京地判平20・6・27、第二週：宣伝会議事件・東京地判平17・1・28、第三週：三洋電機コンシューマエレクトロニクス事件・広島高松江支判平21・5・22、第四週：マッキンエリクソン事件・東京高判平19・2・22、第五週：東京海上日動火災保険事件・東京地判平19・3・26、第六週：西濃シェンカー事件・東京地判平22・3・18、第七週：ネスレ日本事件・最二小判平18・10・6、第八週：新日本製鐵事件・東京高判平20・1・24、第九週：エーシーニールセン・コーポレーション事件・東京地判平16・3・31、第十週：福岡双葉学園事件・最三小判平19・12・18、第十一週：協愛事件・大阪高判平22・3・18、第十二週：三菱自動車事件・最二小判平19・11・16、第十三週：大道工業事件・東京地判平20・3・27、第十四週：杉本商事事件・広島高半平19・9・4 第十五週：姪浜タクシー事件・福岡地判平19426 を取り上げ、各事件で問題とされたテーマにつき解説を加えた後、判決を全員で確認し、判決の内容や結論につきディスカッションする。ただし時事問題との関係等により順序等を若干変更することがある。											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
期末レポートによる。その内容により、優（非常に優れている）、良（優れている）、可（合格水準に達している）、不可（合格水準に達していない）の四段階評価を行う。											
<b>【教科書】</b>											
小畑史子 『裁判例が示す労働問題の解決』（日本労務研究会）ISBN:978-4-88968-091-1											
----- 国家・社会法システム論IIA(2)へ続く -----											

## 国家・社会法システム論IIA(2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

毎回、授業の前に、とりあげる事件を教科書で一読してくること。事実関係の概要は把握しているという前提で授業を進める。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーは特に定めません。問い合わせはobata.fumiko.3r@kyoto-u.ac.jpにメールでお願いします。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>		国家・社会法システム論IIB Law and Social System IIB				担当者所属・ 職名・氏名		人間・環境学研究科 教授 小畑 史子			
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
企業秘密漏洩、セクシャルハラスメント、過労自殺、派遣切り等、働くことに関する現代的な問題を浮き彫りにした重要な判決を取り上げ、その内容と事件の背景をも分析し、法解釈の手法の習得と、雇用社会を展望する力の涵養を目指す。											
【到達目標】											
職場で実際に生じた事件の内容の詳細を知ることにより、雇用社会においてどのようなトラブルが生じているか、またそのようなトラブルを未然に防ぐには何をすべきかを理解することができる。それらのトラブルにつき裁判所が下した判決・決定を学ぶことにより法解釈の方法を習得し、またそれらを批判的に検討することにより課題を見いだすことができる。											
【授業計画と内容】											
第一週：新阪神タクシー事件・大阪地判平17・3・18、第二週：コンドル馬込事件・東京地判平20・6・4、第三週：ダンス・ミュージック・レコード事件・東京地判平20・11・26、第四週：A市職員事件・横浜地判平16・7・8、第五週：国・中央労基署長事件・東京地判平20・1・17、第六週：国・中央労基署長事件・名古屋地判平21・5・28、第七週：中央労基署長事件・東京地判平19・3・28、第八週：和歌の海運送事件・和歌山地判平16・2・9、第九週：前田道路事件・高松高判平21・4・23、第十週：JT乳業事件・名古屋高金沢支判平17・5・18、第十一週：東邦生命保険事件・東京地判平17・11・2、第十二週：神奈川信用農業協同組合事件・最一小判平19・1・18、第十三週：いすゞ自動車事件・宇都宮地栃木支決平21・5・12、第十四週：パナソニックプラズマディスプレイ事件・最二小判平21・12・18、第十五週：浜野マネキン紹介所事件・東京地判平20・9・9 の順に授業を進める予定である。各週の事件で問題となったテーマにつき解説を加えた後、判決を全員で確認し、判決の内容や結論につきディスカッションする。ただし時事問題への言及等の都合上、順序等を若干変更することがある。											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
期末レポートによる。その内容により、優（非常に優れている）、良（優れている）、可（合格水準に達している）、不可（合格水準に達していない）の四段階評価を行う。											
【教科書】											
小畑史子 『裁判例が示す労働問題の解決』（日本労務研究会）ISBN:978-4-88968-091-1											
----- 国家・社会法システム論IIB(2)へ続く -----											

## 国家・社会法システム論IIB(2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

毎回、授業の前に、教科書のうちその週に取り上げる裁判例についての頁を一読してくる。事実関係については事前に読んできたという前提で授業を進める。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーは特に定めません。問い合わせはobata.fumiko.3r@kyoto-u.ac.jpにお願いします。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	国家・社会法システム論ⅢA Law and Institution of Nation and Society IIIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 見平 典					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>日本ではこれまで司法の役割は限定的であったが、社会の「法化」の進展や司法制度改革の実現などにより、司法の果たす役割は急速に拡大している。本授業では、司法が現実にもどのように動いているのかについて、日本とアメリカを比較しつつ講義する。</p> <p>学際性を特徴とする総合人間学部の開講科目として、司法政治学・法社会学・憲法学の知見を総合した、学際的な授業になるように努めたい。また、授業では、日米両国の司法の比較を通して、両国の政治・社会の特徴や相違についても理解を深められるようにしたい。</p> <p>このように、本授業は通常法律学の授業（法解釈学の授業）とは異なり、司法を政治学的・社会的に理解しようとするものであることから、法や司法に関心のある学生はもちろん、政治や社会に関心のある学生、アメリカに関心のある学生等、様々なバックグラウンドを持った学生の受講を歓迎する。</p>											
【到達目標】											
法システム、特に司法システムの現実の動態について、学際的な方法を通して理解することを目標とする。											
【授業計画と内容】											
<p>ⅢAでは、具体的には以下の内容を予定している。各項目、数回分をあてる予定である。なお、以下は予定であり、受講生の背景知識や関心、理解状況等に応じて、取り上げる項目や配分回数等を変更する場合がある。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1．オリエンテーション</li> <li>2．司法システムへの学際的アプローチ</li> <li>3．アメリカの司法システムの基礎知識</li> <li>4．司法システムの機能</li> <li>5．司法システムの人事</li> <li>6．定期試験</li> </ol>											
【履修要件】											
特になし											
----- 国家・社会法システム論ⅢA(2)へ続く -----											

国家・社会法システム論III A(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

定期試験の結果による。

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

特に、復習を大切にしてください。復習では、ノートを参照しながら、授業内容を整理して理解するとともに、授業で言及した論点等について検討を加えて下さい。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	中国古典講読論A Readings in the Chinese Classics A				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 道坂 昭廣					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
中国古典世界の文学者や知識人たちの逸話を読む。（『太平広記』選読）											
<b>[到達目標]</b>											
中国古典世界を支えた、知識人及び民衆の発想や表現を理解することが出来るようになる。読解を通して、東アジア世界の根底にある中国的教養が理解できるようになる。 中国古典文について、高度な読解力が身につく。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
中国古典世界において、文学の担い手は知識人の集団であった。彼らは優れた才能の持ち主たちであった。しかし、一方で極めて人間的な逸話も残している。それらを読んでゆくことにより、中国古典世界をより親しみやすいものにしたい。高校までの漢文の授業のように、読解だけを目的とするのではなく、読解を通して、広く中国古典文化を紹介することを目的とする。宋代に編集された『太平広記』は全500巻で、テーマ別に前代の知識人の逸話を纏めている。 比較的名前の知られている人物、例えば<驍勇>篇の趙雲や、<文章>篇の王維などの逸話、また唐代伝奇中のキュウ髯伝（<豪侠>篇）などを、選読する。 <驍勇>篇<文章>篇<豪侠>篇から選んだ作品群を、それぞれ五回前後の授業で順に読んでゆく。											
<b>[履修要件]</b>											
後半（中国古典講読論B）の連続履修を推奨する											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
原則として平常点（20％）と定期試験（80％）で評価する。 平常点は、授業における発言。定期試験は筆記試験を行う。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 漢和辞典は必携。											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
必ず、辞書を用いて、課題文について大まかな意味を把握しておくこと。 有名な逸話が多いので、授業で読解ののち、日中の物語などに影響がないか調査すること。											
（その他（オフィスアワー等））											
必ず予習してくること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	中国古典講読論B Readings in the Chinese Classics B				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 道坂 昭廣					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
中国古典世界の文学者や知識人たちの逸話を読む。（『太平広記』選読）											
[到達目標]											
中国古典世界を支えた、知識人及び民衆の発想や表現を理解することが出来るようになる。読解を通して、東アジア世界の根底にある中国的教養が理解できるようになる。 中国古典文について、高度な読解力が身につく。											
[授業計画と内容]											
中国古典世界において、文学の担い手は知識人の集団であった。彼らは優れた才能の持ち主たちであった。しかし、一方で極めて人間的な逸話も残している。それらを読んでゆくことにより、中国古典世界をより親しみやすいものにしたい。高校までの漢文の授業のように、読解だけを目的とするのではなく、読解を通して、広く中国古典文化を紹介することを目的とする。宋代に編集された『太平広記』は全500巻で、テーマ別に前代の知識人の逸話を纏めている。 有名な文学者、例えば韓愈、の逸話を載せる<文章篇>、古代の音楽家の逸話<楽篇>、王羲之を始めとする書道家の逸話<書篇>から、余り長くなく、かつ比較的親しみやすい文章を選び、各篇が五回前後の授業で終わるように読んでゆく。											
[履修要件]											
前半（中国古典講読論A）との連続履修を推奨する。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
原則として平常点（20％）と定期試験（80％）で評価する。 平常点は、授業における発言。定期試験は筆記試験を行う。											
[教科書]											
プリント配布											
[参考書等]											
（参考書） 漢和辞典は必携。											
[授業外学習（予習・復習）等]											
必ず、辞書を用いて、課題文について大まかな意味を把握しておくこと。 有名な逸話が多いので、授業で読解ののち、日中の物語などに影響がないか調査すること。											
（その他（オフィスアワー等））											
必ず予習してくること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	中国社論IA Chinese Culture and Society IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 辻 正博					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>「隋唐史料論」          隋唐時代の社会を研究するためには、種々の史料を利用せねばならないこと改めて言うまでもない。この講義では、各種史料の成立事情と特徴、利用に際しての注意点などについて、具体例を織り交ぜつつ解説する。</p>											
【到達目標】											
隋唐史に関する各種史料について、基本的な知識を獲得するとともに、各史料の特徴とその限界について理解を深める。											
【授業計画と内容】											
<p>以下のテーマについて、2～3週を目途に講義を進める。          なお、初回授業（ガイダンス）時に、学期の授業計画および講義で必要される諸事項について説明を行うので、必ず出席すること。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「正史」をめぐる諸問題……成立史、テキストをめぐる問題</li> <li>2. 『大唐創業起居注』と唐初の実録</li> <li>3. 『資治通鑑』……編纂の経緯、『通鑑考異』と胡三省注</li> <li>4. 『通典』と『通志』『文献通考』</li> <li>5. 『大唐六典』の史料論</li> <li>6. 『唐会要』……通行本の問題点と使用上の注意</li> <li>7. 石刻史料 特に墓誌について</li> </ol>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
期末レポートの成績により成績評価を行います。よく工夫のなされているレポート・独自の観点を提示したレポートに対して、高い評価を与えます。「剽窃」については、「試験における不正行為」と見なし、厳正に対処します。											
【教科書】											
使用しない											
----- 中国社論IA(2)へ続く -----											

## 中国社会論IA(2)

### [参考書等]

(参考書)

島田虔次ほか編 『アジア歴史研究入門1、3』(同朋舎、1983年)

山根幸夫編 『中国史研究入門(上)〔増補改訂版〕』(山川出版社、1991年)

礪波護ほか編 『中国歴史研究入門』(名古屋大学出版会、2006年)

### [授業外学習(予習・復習)等]

「参考書等」に掲げる参考文献を随時閲読し、予習復習に努めること。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィス・アワーについては、特に曜日・時間を定めていません。授業時以外に直接話をしたい学生は、

tsuji.masahiro.4m@kyoto-u.ac.jp

に連絡して日時を調整すること。(学生番号、氏名を明記してメールしてください。)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	中国社会論IB Chinese Culture and Society IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 辻 正博					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>「唐宋法制史料要説」 唐宋時代の主要な法制史料について解説を加えるとともに、代表的な箇所を選読する。日本古代の政治制度にも大きな影響を与えた唐代の律令格式について理解を深めるとともに、宋代の法制がどのように唐制を発展的に継承したかについても探究してほしい。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
唐宋時代の主要な法制史料についての理解を深める。法制史料独特の記述・表現に慣れる。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>以下のそれぞれテーマについて、おおむね2週を目途に講義を進める。 なお、初回授業（ガイダンス）時に、学期の授業計画および講義で必要される諸事項について説明を行うので、必ず出席すること。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 唐律と律疏</li> <li>2) 宋刑統</li> <li>3) 『唐令拾遺』と『唐令拾遺補』</li> <li>4) 唐の格・式 戸部格 水部式</li> <li>5) 天聖令</li> <li>6) 慶元条法事類</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
中国史、特に唐宋時代史に関する基本的な事項（概説レベル）を理解していること。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
<p>期末レポートの成績により成績評価を行います。よく工夫のなされているレポート・独自の観点を提示したレポートに対して、高い評価を与えます。「剽窃」については、「試験における不正行為」と見なし、厳正に対処します。</p>											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
----- 中国社会論IB(2)へ続く -----											

## 中国社会論IB(2)

### [参考書等]

(参考書)

滋賀秀三編 『中国法制史 基本資料の研究』(東京大学出版会、1993年) ISBN:4130361031

必要に応じてプリントを配布する。

### [授業外学習(予習・復習)等]

上記の参考書および講義中に紹介した参考文献を自主的に閲読し、講義内容に対する理解を各自深めること。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィス・アワーについては、特に曜日・時間を定めていません。授業時以外に直接話をしたい学生は、

tsuji.masahiro.4m@kyoto-u.ac.jp

に連絡して日時を調整すること。(学生番号、氏名を明記してメールしてください。)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	西欧古代・中世表象文化論IA Culture and Representation in Ancient and Medieval Europe IA				担当者所属・ 職名・氏名	文学研究科 教授 中畑 正志					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>こんにち「哲学」と呼ばれる営みは、プラトンによって思想的にも社会的にも確立されるに至った。プラトンの思索とその問題をたどり、哲学の一つの基本的あり方を見届ける。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>「哲学」と呼ばれる営みが確立されるにいたるうえで決定的な役割を果たしたプラトンの哲学の概観し、こんにちの哲学のあり方を考察する手がかりを得る。あわせて西洋古代から伝承された資料の扱い方について、文献学の基礎的素養も養う。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>以下の各項目について講述する。各項目には、受講者の理解の程度を確認しながら、( )で指示した週数を充てる。各項目の講義の順序は固定したものではなく、担当者の講義方針と受講者の背景や理解の状況に応じて、講義担当者が適切に決める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 「哲学」という固有名詞 (2週)</li> <li>2 プラトンの「生の選び」 (2週)</li> <li>3 なぜ対話篇なのか (3週)</li> <li>4 イデア論の成立 (3週)</li> <li>5 世界の価値性と規範性 (1週)</li> <li>6 知の可能性に賭ける (1週)</li> <li>7 魂の構造化 (3週)</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
定期試験80点 + 授業中に課す小レポート 1回20点											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
<p>(参考書) 藤澤令夫 『プラトンの哲学』 (岩波書店)</p>											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業内で事前に読むべき資料などの配付するので、予習してくること											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	西欧古代・中世表象文化論IB Seminar on Culture and Representation in Ancient and Medieval Europe IB				担当者所属・ 職名・氏名	文学研究科 教授 中畑 正志					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>こんにちの哲学的な思考の枠組やわれわれが使用する基本的諸概念は、アリストテレスによって形成された。しかし他方で、近現代の哲学はそのアリストテレスに対する批判を通じて構築された。このおうなアリストテレスの哲学を概観することを通じて、その継承と変容を確認し、われわれの現在の思考のあり方を反省する。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>アリストテレスの探究を具体的に検討することを通じて、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 個と普遍、主語と述語、可能と実現など、われわれがものを考える上でふつうに使う多くの言葉は、アリストテレスがその考察を通じて作りだした。そのような概念がどのように形成されたのかをその形成の現場に遡って学ぶ。</li> <li>2 近代の哲学の基本的部分、アリストテレス的思考の否定を通じて確立された。われわれはそれによって何を失っているのかを確認し、現在の思考のあり方の歴史性を反省する能力を養う。</li> </ol>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>以下の各項目について講述する。各項目には、受講者の理解の程度を確認しながら、( )で指示した週数を充てる。各項目の講義の順序は固定したものではなく、担当者の講義方針と受講者の背景や理解の状況に応じて、講義担当者が適切に決める</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 アリストテレス的に考えることとしての哲学 (2週)</li> <li>2 著作の運命 (1週)</li> <li>3 自然の分析 (3週)</li> <li>4 「形而上学」とは何だったのか (4週)</li> <li>5 心なき世界観 (2週)</li> <li>6 性格と人柄の倫理学 (3週)</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
西欧古代・中世表象文化論 Aを履修していることがきわめて望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
定期試験80点 + 授業内で課す小レポート 1回20点											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
(参考書) 内山勝利他編 『哲学の歴史 I』(中央公論新社)											
----- 西欧古代・中世表象文化論IB(2)へ続く -----											

西欧古代・中世表象文化論IB(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

授業内で事前に読むべき資料などの配付するので、予習しておくこと

**（その他（オフィスアワー等））**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本古典講読論I Read in Japanese Classics I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 長谷川 千尋					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也」とは藤原俊成の言葉であるが、歌人や連歌師は、『源氏物語』のどのような言葉・場面に魅力を感じ、その詩想を養ったのであろうか。このような観点から、文安六年（1446）、祐倫の手になる『山頂湖面抄』という源氏物語梗概書を読む。併せて『源氏物語』本文や、それを享受した作例にも触れ、巻ごとに源氏絵を参照する。</p>											
【到達目標】											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講義中に取り扱った『源氏物語』本文、及びその梗概書や享受作品の内容を理解し、説明できる。</li> <li>・ 歌人・連歌師による『源氏物語』享受の特色を理解し、説明できる。</li> </ul>											
【授業計画と内容】											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス：『山頂湖面抄』概説</li> <li>2. 桐壺</li> <li>3. 帚木・空蝉</li> <li>4. 夕顔・若紫</li> <li>5. 未摘花・紅葉賀</li> <li>6. 花宴・葵</li> <li>7. 賢木・花散里</li> <li>8. 須磨・明石</li> <li>9. 澪標・蓬生</li> <li>10. 関屋・絵合・松風</li> <li>11. 薄雲・朝顔</li> <li>12. 少女・玉鬢</li> <li>13. 初音・胡蝶</li> <li>14. 蛩・常夏</li> </ol>											
【履修要件】											
古文の読解にある程度習熟していることを前提として講義を進める。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
定期試験（筆記）により評価する。											
----- 日本古典講読論I (2)へ続く -----											

## 日本古典講読論I (2)

### [教科書]

使用しない  
プリント配布。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業前に『源氏物語』の当該巻を通読しておくことよい。  
講義内容の復習。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本古典講読論II Read in Japanese Classics II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 長谷川 千尋					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也」とは藤原俊成の言葉であるが、歌人や連歌師は、『源氏物語』のどのような言葉・場面に魅力を感じ、その詩想を養ったのであろうか。このような観点から、文安六年（1446）、祐倫の手になる『山頂湖面抄』という源氏物語梗概書を読む。併せて『源氏物語』本文や、それを享受した作例にも触れ、巻ごとに源氏絵を参照する。</p>											
【到達目標】											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義中に取り扱った『源氏物語』本文、及びその梗概書や享受作品の内容を理解し、説明できる。</li> <li>・歌人・連歌師による『源氏物語』享受の特色を理解し、説明できる。</li> </ul>											
【授業計画と内容】											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス：『山頂湖面抄』概説</li> <li>2. 篝火・野分</li> <li>3. 行幸・藤袴</li> <li>4. 真木柱・梅枝</li> <li>5. 藤裏葉・若菜上</li> <li>6. 若菜下・柏木</li> <li>7. 横笛・鈴虫</li> <li>8. 夕霧・御法</li> <li>9. 幻・匂宮・紅梅</li> <li>10. 竹河・橋姫</li> <li>11. 椎本・総角</li> <li>12. 早蕨・宿木</li> <li>13. 東屋・浮舟</li> <li>14. 蜻蛉・手習・夢浮</li> </ol>											
【履修要件】											
古文の読解にある程度習熟していることを前提として講義を進める。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
定期試験（筆記）により評価する。											
【教科書】											
使用しない プリント配布。											
----- 日本古典講読論II(2)へ続く -----											

## 日本古典講読論II(2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業前に『源氏物語』の当該巻を通読しておくことよい。  
講義内容の復習。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	中国社会論IIA Chinese Culture and Society IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人文科学研究所 助教 藤井 律之					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>テーマ：中国の歴史書 書経・春秋から三国志まで</p> <p>中国の歴史叙述には、それこそ長い歴史があるが、史書が独立した地位を獲得するにもやはり長い時間を必要とした。その大きな契機は司馬遷『史記』の登場である。</p> <p>本講義では『史記』を中心に据え、その前後の、中国における歴史叙述の淵源から、歴史書が旧来の図書分類を破壊する時期までを対象として、その期間における代表的な史書を紹介、検討する。</p>											
【到達目標】											
中国における歴史叙述の淵源と発展、紀伝体が成立するまでのプロセスを理解する。											
【授業計画と内容】											
基本的に以下のプランに従って講義を進める。											
第1回 中国の歴史書 第2回 史と歴史記録 第3回 書経 第4回 春秋経と三伝・国語(1) 第5回 春秋経と三伝・国語(2) 第6回 戦国策 第7回 史記(1) 春秋と太初改暦 第8回 史記(2) 紀伝体の登場 第9回 史記(3) 史記の原史料と編纂方法 第10回 漢書(1) 史記批判 第11回 漢書(2) その独自路線 第12回 東観漢記と漢紀 第13回 三国志 第14回 史部の成立 第15回 総括											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
定期試験（筆記）。											
----- 中国社会論IIA (2)へ続く -----											

中国社会論IIA (2)

**[教科書]**

授業中に指示する

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

授業中に指示する。

**(その他(オフィスアワー等))**

歴史はもちろんのこと、書物に関心のある方は是非どうぞ。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	中国社会論II B Chinese Culture and Society IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人文科学研究所 助教 藤井 律之					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>テーマ：群書治要の研究I</p> <p>群書治要とは、唐代に編纂された類書であるが、中国ではいったん失われ、日本に将来されたことによって現在まで伝承されてきたという、奇特なしょもつである。同書は唐の皇族の教育を目的としたもので、節略されてはいるものの、経・史・子部書を多数含む。</p> <p>本講義では、同書所収の経部書を取りあげ、その梗概を紹介し、あわせて収録箇所について検討する。</p>											
[到達目標]											
唐代における代表的な経書について知り、そうした典籍のいかなる部分が重視されていたのかを理解する。											
[授業計画と内容]											
<p>基本的に以下のプランに従って講義を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・群書治要とは</li> <li>・群書治要の編纂者たち</li> <li>・群書治要の流伝</li> <li>・経部部分の検討</li> <li>・総括</li> </ul>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
定期試験（筆記）											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
<p>（参考書）</p> <p>授業中に紹介する</p>											
[授業外学習（予習・復習）等]											
授業中に指示する。											
（その他（オフィスアワー等））											
<p>文献学や文化史に関心のある方は是非どうぞ。</p> <p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	西欧近現代表象文化論III A Culture and Its Representation in Modern Western Europe IIIA				担当者所属・ 職名・氏名	文学研究科 教授 家入 葉子					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>アングロ・サクソン人がブリテン島に移住してから現在に至るまでの英語の発達過程を学びます。また、『古英語・中英語初歩』から古英語テキストのいくつかを講読し、過去の英語を具体的に体験しながら、現代英語との比較を行います。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>英語の史的変化への理解を深め、時代の異なる英語を、翻訳等の助けを借りながら読む力を身につけることを目標とします。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>英語史についての基本的な知識を学ぶために『はじめての英語史』を読み、同時に『古英語・中英語初歩』の講読も行います。『はじめての英語史』については原則として講義形式で進め、『古英語・中英語初歩』については、受講者にも参加を求めています。</p> <p>その他、必要に応じて論文等の教材を追加することがあります。</p> <p>第1回 授業についての説明ほか 第2回～14回 インド・ヨーロッパ語としての英語、英語の発達に影響を与えた外面史、発音・綴り字・語形などを中心に、講義およびテキストの講読</p> <p>なお、西欧近現代表象文化論III Aでは、『はじめての英語史』は、主にその前半を扱います。また、授業の進行状況により、多少予定が変更になることがあります。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
授業への貢献度（20%）およびレポート（80%）によって評価を行います。											
<b>[教科書]</b>											
堀田隆一 『はじめての英語史』（研究社） 市河三喜・松浪有 『古英語・中英語初歩』（研究社）											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書）</p> <p>堀田隆一 『英語史で解きほぐす英語の誤解』（中央大学出版） R. Hogg &amp; D. Denison 『A History of the English Language』（CUP） 家入葉子 『ベーシック英語史』（ひつじ書房） <a href="http://www.iyeiri.sakura.ne.jp/students/index.htm">http://www.iyeiri.sakura.ne.jp/students/index.htm</a> にも参考情報あります。</p>											
----- 西欧近現代表象文化論III A(2)へ続く -----											

西欧近現代表象文化論ⅢA(2)

( 関連URL )

<http://www.iyeiri.sakura.ne.jp/>(このURLを定期的にチェックしてください。)

**[授業外学習(予習・復習)等]**

指定された教科書に目を通しておいってください。古英語テキストは、事前に予習をしてから授業に参加してください。

**(その他(オフィスアワー等))**

メールアドレスは、<http://www.iyeiri.sakura.ne.jp/students/index.htm>にあります。必要な場合は、メールでご連絡ください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	西欧近現代表象文化論III B Culture and Its Representation in Modern Western Europe IIIB				担当者所属・ 職名・氏名	文学研究科 教授 家入 葉子					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>アングロ・サクソン人がブリテン島に移住してから現在に至るまでの英語の発達過程を学びます。また、『古英語・中英語初歩』から中英語テキストのいくつかを講読し、過去の英語を具体的に体験しながら、現代英語との比較を行います。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>英語の史的変化への理解を深め、時代の異なる英語の特徴をおおまかに理解することを目標とします。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>英語史についての基本的な知識を学ぶために『はじめての英語史』を読み、同時に『古英語・中英語初歩』の講読も行います。『はじめての英語史』については原則として講義形式で進め、『古英語・中英語初歩』については、受講者にも参加を求めることがあります。</p> <p>その他、必要に応じて論文等の教材を追加することがあります。</p> <p>第1回 授業についての説明ほか 第2回～14回 英語の統語・語彙・方言などを中心に、講義およびテキストの講読</p> <p>なお、西欧近現代表象文化論III Bでは、『はじめての英語史』は、主にその後半を扱います。また、進行状況により、多少予定が変更になることがあります。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
<p>内容が西欧近現代表象文化論III Aの続きとなっていますので、できるだけ西欧近現代表象文化論III Aを受講した上で、本講義を受講するようにしてください。やむを得ない事情で西欧近現代表象文化論III Bからの受講になる場合は、『はじめての英語史』の前半部分を自習してから受講してください。</p>											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
<p>授業への貢献度（20%）およびレポート（80%）によって評価を行います。</p>											
<b>【教科書】</b>											
<p>堀田隆一 『はじめての英語史』（研究社） 市河三喜・松浪有 『古英語・中英語初歩』（研究社）</p>											
<b>【参考書等】</b>											
<p>（参考書） 堀田隆一 『英語史で解きほぐす英語の誤解』（中央大学出版） R. Hogg &amp; D. Denison 『A History of the English Language』（CUP） 家入葉子 『ベーシック英語史』（ひつじ書房） <a href="http://www.iyeiri.sakura.ne.jp/students/index.htm">http://www.iyeiri.sakura.ne.jp/students/index.htm</a> にも参考情報あります。</p>											
----- 西欧近現代表象文化論III B(2)へ続く -----											

西欧近現代表象文化論III B (2)

---

( 関連URL )

<http://www.iyeiri.sakura.ne.jp/>(このURLを定期的にチェックしてください。)

**[授業外学習 ( 予習・復習 ) 等]**

指定された教科書に目を通しておいってください。中英語テキストは、事前に予習をしてから授業に参加してください。

**( その他 ( オフィスアワー等 ) )**

メールアドレスは、<http://www.iyeiri.sakura.ne.jp/students/index.htm>にあります。必要な場合は、メールでご連絡ください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本語学文献講読論I Reading in the Document of Japanese Philology I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 佐野 宏					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
日本語の歴史記述の方法について概説し、基礎的な日本語史研究の知識を身につけることを目的とする。最初に日本語史研究の課題を掲げて概説し、その課題についての資料や論考を講読する。											
<b>[到達目標]</b>											
日本語史研究に関する基礎的な用語や問題点について、関連事項や関連作品とともに説明できること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
本講義は、各時代語の実際と概説、後期は分野別の日本語史研究について扱う。日本語史研究には日本文学史の知識が必須であるから、その時代の文学史についても概説を行う。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 日本語史について（導入：1回）</li> <li>2 上代語概説・上代文学史（3回）</li> <li>3 中古語概説・中古文学史（3回）</li> <li>4 中世語概説・中世文学史（3回）</li> <li>5 近世語概説・近世文学史（4回）</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
日本語史についての基礎知識が必要になるので、言学 を受講していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
講義期間の最終日に基礎的な事項の確認試験を行う（60%）。時折、講義中に小テスト（主として日本文学史の知識を問う予定である）を行うほか、授業への積極的な参加度（40%）を総合的に加味して評価する。											
<b>[教科書]</b>											
小野正弘 『ケーススタディ日本語の歴史』（おうふう）ISBN:4273032678											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書）											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
本講義は主として日本語史の枠組みと各時代の特徴を述べる。テキストとともに参考文献を熟読しておくこと。											
（その他（オフィスアワー等））											
木曜日の4限をオフィスアワーとする。ただし、会議などで不在の場合があるから、事前に相談すること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	西欧近現代表象文化論演習IIA Seminar on Culture and Its Representation in Modern Western Europe IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 池田 寛子					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>「アイルランドの詩歌、文化、歴史」をテーマとする。 アイルランドのノーベル賞詩人 W.B. Yeats (1865-1939) の作品をイギリスとアイルランドの歴史的、社会的背景に留意しながら精読する。朗読、映像、詩の解説書などの資料を適宜用い、詩人および作品の理解を深める。</p>											
【到達目標】											
濃く深い内容の英文をじっくり読むことによって英語の底力を育む。文学作品を通じて柔軟な思考力を養う。											
【授業計画と内容】											
<p>第一回:アイルランドとその詩歌の歴史を知るための基礎知識とW.B.イエイツ入門</p> <p>第二回目以降の演習は、受講者の希望に応じて以下の項目内容を適宜組み合わせるかたちとなる。必要なプリントを配布する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・イエイツの詩集と劇集から作品を選んで精読する。</li> <li>・ Fairy and Folktales of Ireland (『アイルランドの妖精物語と民話』)、The Celtic Twilight (『ケルトの薄明』)、“The Celtic Element in Literature”などを読み、初期のイエイツ作品の底流にある「ケルト」と「妖精信仰」の要素について理解を深める。</li> <li>・ 扱う文学作品や散文に関連した民話や民謡を読む。</li> <li>・ 授業で扱った詩や紹介した詩、またはそれ以外のアイルランドの詩歌からそれぞれの関心に応じて作品を選び、訳と語注を作成し、これについて発表する。</li> </ul>											
【履修要件】											
特になし											
----- 西欧近現代表象文化論演習IIA(2)へ続く -----											

## 西欧近現代表象文化論演習IIA(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

学期末レポート：演習で扱ったことをベースに自由にテーマを選び、レポートを作成、提出。詳細は授業で説明。

上記のレポートと演習への積極的な参加を総合的に判断して成績を出す。  
レポート(40点) 平常点(60点)の合計で採点する。

### [教科書]

授業でプリントを配布する。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業で扱う作品および英文資料を配布するので、これにあらかじめ目を通して演習に備え、また授業後に読み直すこと。

発表に備えた準備をすること。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーは金曜日の12時から12時半です。できれば前日までにメールで連絡をください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	西欧近現代表象文化論演習II B Seminar on Culture and Its Representation in Modern Western Europe IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 池田 寛子					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>「アイルランドの詩歌と歴史」をテーマとする。</p> <p>アイルランドのノーベル賞詩人シェイマス・ヒーニー (Seamus Heaney, 1939-2013) の著作を中心に扱い、ヒーニーの詩をアイルランドの詩歌をイギリスとアイルランドの歴史的、社会的背景に留意しながら精読する。朗読、映像、詩の解説書などの資料を適宜使い、詩人および作品の理解を深める。</p>											
【到達目標】											
濃く深い内容の英文をじっくり読むことによって英語の底力を育む。文学作品を通じて柔軟で独創的な思考力を養う。											
【授業計画と内容】											
<p>第一回:シェイマス・ヒーニーを取り巻くもの：アイルランドの詩歌の伝統について全体像を示し、ヒーニーとの関連でいくつかの詩歌を紹介する。</p> <p>第二回目以降の演習は、受講者の希望に応じて以下の項目内容を適宜組み合わせるかたちとなる。必要なプリントを配布する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ヒーニーの詩を一篇か二篇選び、作品とこれについてのエッセイを精読する。ヒーニーによる朗読を聴き、詩で使われた語彙や言い回しなどから、アイルランドの言語文化、伝統、歴史をたどる作業を受講者全員で行う。詩の理解に必要なアイルランドの歴史やフォークロアに関わる資料も読む。</li> <li>・ヒーニーの散文やエッセイ（『言葉の力』(The Government of the Tongueなど)を読む。</li> <li>・ヒーニーの詩を含めた北アイルランド問題に関わる詩をいくつか選んで読み、紛争と文学、社会と個人の関係についての考察を深める。</li> <li>・授業で扱った詩や紹介した詩、またはそれ以外のアイルランドの詩歌からそれぞれの関心に応じて作品を選び、訳と語注を作成し、その作品について自由な観点から発表する。</li> </ul>											
【履修要件】											
特になし											
----- 西欧近現代表象文化論演習II B (2)へ続く -----											

## 西欧近現代表象文化論演習ⅡB(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

演習で扱ったことをベースに自由にテーマを選び、レポートを作成、提出。詳細は授業で説明。レポートと演習への積極的な参加を総合的に判断して成績を出す。レポート(40点)平常点(60点)の合計で採点する。

### [教科書]

授業でプリントを配布する。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業で扱う作品および英文資料を配布するので、これにあらかじめ目を通して演習に備え、また授業後に読み直すこと。

発表に備えた準備をすること。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーは金曜日の12時から12時半です。できれば前日までにメールで連絡をください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>		西欧近現代表象文化論演習III B Seminar on Culture and Its Representation in Modern Western Europe IIIB				担当者所属・ 職名・氏名		人間・環境学研究科 教授 水野 眞理			
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
ドッベルゲンガー文学講読											
本演習では、文学・文化および周辺諸分野の資料を読む訓練を通じて、読解・分析能力を養う。											
今年度は19世紀米英の「分身小説」を読む。E.A.Poeの"William Wilson"(1839), R.L.Stevensonの"The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde"(1886)をメインテキストとし、ホフマン「大晦日の夜の冒険」(1815)、ドストエフスキー『二重人格』(1846)、アンデルセン「影法師」(1847)、エーヴェルス『プラークの大学生』(1930)、芥川龍之介「二つの手紙」(1917)、江戸川乱歩「猟奇の果」(1930)などもサブテキストとして合わせ読み、ゴシック小説のモチーフと近代的自我の関わりを探究する。											
【到達目標】											
英文学の重要なテキストの精読により語りの特徴を理解するとともに、英語で書かれた諸論文を読むことでこの作品が喚起するさまざまな批評的視点を獲得することを目標とする。											
【授業計画と内容】											
第1週 オリエンテーション 第2週～第13週 作品講読、発表 第14週～第15週 まとめ											
本作品は授業に先立って、作品内外の諸要素を調べてレジユメを作り、発表することを求めるので、授業外での作業は多いだろう。											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
演習科目であるので、授業への積極的参加と発表(50%)および期末試験(50%)を総合して評価する。継続的に出席できない人には向かないだろう。											
【教科書】											
授業中に指示する プリントも併用する。											
----- 西欧近現代表象文化論演習III B (2)へ続く -----											

西欧近現代表象文化論演習ⅢB(2)

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

授業に先立って、作品内外の諸要素を調べてレジユメを作り、発表することを求める。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーは木曜4限とする。事前にメールでアポイントメントをとりたい。(miram.uno@nifty.com)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	西欧近現代表象文化論演習IVA Seminar on Culture and Its Representation in Modern Western Europe IVA				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 桂山 康司					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>テーマ：英詩の諸相  具体的に、テキストに収められた作品、一つ一つを丹念に精読しながら英詩の表現の特質の変化を、社会背景や文化全般と関連づけて、考察する。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
英詩における名作を味読することを通じて、英詩の特質全般についての基礎知識を身につけると同時に、特に、リズムのもつ意味について、理解を深める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>本年度前期は、ウィリアム・ブレイク（1757-1827）の抒情詩を取り上げる。  第1回：導入。どの作品を読むかは、この授業において指示する。  第2～14回：作品の精読。毎回、1～2編ずつ、読み進める予定。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
期末試験の成績に、授業への積極的な参加等の日常の活動を加味して評価する。											
<b>[教科書]</b>											
William Blake 『Songs of Innocence and of Experience』 (Oxford Univ. Pr.) ISBN:0192810898											
<b>[参考書等]</b>											
<p>(参考書)  小泉博一他(編) 『イギリス詩を学ぶ人のために』 (世界思想社) ISBN:4790707997</p>											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
とりわけ、緻密な予習が肝要であることは言うまでもない。最も重要なことは、自らの読みを、理解が不十分であるということも含めて、前もってしっかり確認、意識して授業に臨むことである。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
最初の授業において、英詩を読む上で必要な基礎的事実について解説をする予定なので、受講を希望するものは必ず出席すること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	西欧近現代表象文化論演習IVB Seminar on Culture and Its Representation in Modern Western Europe IVB				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 桂山 康司					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
英詩の諸相 前期に引き続き、具体的に、テキストに収められた作品、一つ一つを丹念に精読しながら英詩の表現の特質の変化を、社会背景や文化全般と関連づけて、考察する。											
<b>[到達目標]</b>											
英詩における名作を味読することを通じて、英詩の特質全般についての基礎知識を身につけると同時に、特に、リズムのもつ意味について、理解を深める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
本年度後期は、エミリー・ディキンソン（1830-1886）の抒情詩を読む。 第1回：導入。どの作品を読むかは、この授業において指示する。 第2～14回：作品の精読。毎回、1～2編ずつ、読み進める予定。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
期末試験の成績に、授業への積極的な参加等の日常の活動を加味して評価する。											
<b>[教科書]</b>											
新倉俊一（注釈） 『The Poems of Emily Dickinson』（研究社）ISBN:4327011886											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 小泉博一他(編) 『イギリス詩を学ぶ人のために』（世界思想社）ISBN:4790707997											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
とりわけ、緻密な予習が肝要であることは言うまでもない。最も重要なことは、自らの読みを、理解が不十分であるということも含めて、前もってしっかり確認、意識して授業に臨むことである。											
（その他（オフィスアワー等））											
イギリス詩に対する予備知識は一切必要としない。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	西欧古代・中世表象文化論演習IIIA Seminar on Culture and Representation in Ancient and Medieval Europe IIIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 高谷 修					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
ダンテの La Divina Commedia を読む。											
<b>[到達目標]</b>											
ダンテの韻文が読解できるようになることを目指す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>昨年に引き続いて、ダンテの『神曲』を読む。彼はヨーロッパ中世最大の叙事詩人。La Divina Commediaは中世に屹立する偉大な作品といっても過言ではないだろう。この作品をCharles Singleton編集によるテキストを用いて精読し、&lt;神曲&gt;と称揚された世界に親しむ。</p> <p>今年度は、「煉獄篇」第 16 歌から読む予定。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
イタリア語初級を学習していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常の活躍(80%)とレポート(20%)による。											
<b>[教科書]</b>											
Charles Singleton (ed.) 『Dante: Inferno』 (Princeton University Press)											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
毎回30行を目安に読むので、予習をしてくること。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	西欧古代・中世表象文化論演習IIIB Seminar on Culture and Representation in Ancient and Medieval Europe IIIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 高谷 修					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
前期に引き続いて、ダンテの La Divina Commedia を読む。											
<b>[到達目標]</b>											
ダンテの韻文が読解できるようになることを目指す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
前期に引き続いて、ダンテの『神曲』を読む。彼はヨーロッパ中世最大の叙事詩人。La Divina Commediaは中世に屹立する偉大な作品といっても過言ではないだろう。この作品をCharles Singleton編集によるテキストを用いて精読し、<神曲>と称揚された世界に親しむ。											
<b>[履修要件]</b>											
イタリア語初級を学習していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常の活躍(80%)とレポート(20%)による。											
<b>[教科書]</b>											
Charles Singleton (ed.) 『Dante: Inferno』 (Princeton University Press)											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
毎回30行を目安に読むので、予習をしてくること。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国家・社会法システム論演習ⅢA Seminar on Law and Social System IIIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 見平 典					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>本演習では、憲法や司法に関する幅広い問題について、多角的・学際的な理解を得ることを目標とする。そのために、主にアメリカの憲法・司法に関する憲法学・司法政治学・法社会学の文献を、日本との比較を意識しながら講読する。政治化の進んだアメリカの憲法・司法システムは、様々な点において日本と対照的であるため、アメリカのシステムを理解することは、日本のシステムを理解し、オルタナティブを構想していく上でも有益である。また、日米の憲法や司法の比較を通して、両国の政治・社会・文化の相違や特徴についても浮き彫りになるであろう。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>憲法や司法に関する諸現象を多角的な視点から認識し、評価できる能力を獲得することを目標とする。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p><b>【第1回】</b> オリエンテーションの回として、授業の進め方や、授業の準備・報告の方法について説明する。</p> <p><b>【第2回 - 第14回】</b> 前期（ⅢA）では、まず上記テーマに関連する日本語文献を講読し、導入的な知識を獲得した後、基礎的な英語文献を講読する。各回とも、事前に指名された担当者の文献に関する報告後、全員が参加して議論を行う。</p> <p>ただし、以上は予定であり、受講者数や受講生の関心・背景的知識に応じて変更する場合がある。</p> <p><b>【第15回】</b> まとめの回として、これまでの議論を評価・総括する。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点（出席、報告内容、討論への貢献度）により、評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
----- 国家・社会法システム論演習ⅢA(2)へ続く -----											

国家・社会法システム論演習III A(2)

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

各回とも、指定された文献を読んだ上で、授業に臨んで下さい。また、日頃から新聞やニュース番組等を通して、法・政治・社会に関する幅広い問題について知見を拓けるように心掛けて下さい。

**(その他(オフィスアワー等))**

法や司法に関心のある方はもちろん、政治・社会に関心のある方、アメリカに関心のある方をはじめ、様々なバックグラウンドの方を歓迎します。皆さんと議論できることを楽しみにしております。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	中国文化論演習IIA Seminar on Chinese Culture IIA				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 道坂 昭廣					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
中国古典文（文言）の読解力を養成するとともに、中国古典文学研究の基礎的方法を身につける。											
[到達目標]											
楊守敬『日本訪書志』を読み、東アジア古典文化における、日本の位置について考察する。											
[授業計画と内容]											
楊守敬『日本訪書志』の読解を通して、日中の文化交流、書誌学、中国典籍など様々な問題について考える。 担当者を決め、授業までに読解と注釈を準備する。授業では、そのレジメをもとに参加者が討論する。											
[履修要件]											
中国語を履修していることが望ましい。 中国古典文学・漢文学について基礎的な知識があることが望ましい。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業における発表など、平常点による。											
[教科書]											
プリント配布。											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
担当者は、授業前にレジメを作成し、提出する必要がある。参加者は、担当者が作成したレジメを読み、授業において、討論に参加しなければならないので、十分な予習が必要である。 担当者は、授業における討論を経て修正したレジメを提出しなければならない。											
（その他（オフィスアワー等））											
授業には、自分の担当以外の部分についても予習したうえで、出席すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	中国文化論演習IIB Seminar on Chinese Culture IIB				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 道坂 昭廣					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
楊守敬『日本訪書志』を読む。当時の日中の文化交流や東アジア古典文化における日本の位置について考察する											
[到達目標]											
『日本訪書志』の読解を等して、中国古典文化、日中文化交流、書誌学などの基本的知識を身につける 漢文読解力を身につける											
[授業計画と内容]											
各項目について担当者を決め、訳注を作成し、授業で発表する。参加者はその訳注について、討論を行う。											
[履修要件]											
中国語を履修していることが望ましい。 中国古典文学・漢文学について基礎的な知識を持っていることが望ましい。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業における発表など、平常点による。											
[教科書]											
プリント配布											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習(予習・復習)等]											
担当者は、授業前にレジメを作成し、提出する必要がある。参加者は、担当者が作成したレジメを読み、授業において、討論に参加しなければならないので、十分な予習が必要である。 担当者は、授業における討論を経て修正したレジメを提出しなければならない。											
(その他(オフィスアワー等))											
授業には、自分の担当以外の部分についても予習したうえで、出席すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	西欧古代・中世表象文化論演習 I A Seminar on Culture and Representation in Ancient and Medieval Europe IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 高谷 修					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
ギリシア悲劇を読む											
古典ギリシア語を学習した学生のためのギリシア語中級講座という位置づけで、昨年に引き続き、ソフォクレスの『オイディポス王』を読む。古典ギリシア語に親しみ、ソフォクレスを楽しむことを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
ギリシア悲劇の韻文が読めるようになることを目指す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
先を急がず、festina lente で読み進めたい。毎回、まず学生が読んで訳し教師が解説するという方法をとる。今年度は463 行から読み始める予定。											
<b>[履修要件]</b>											
古典ギリシア語を学習していること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常の活躍(80%)とレポート(20%)による。											
<b>[教科書]</b>											
R. D. Dawe, ed. 『Sophocles: Oedipus Rex』 (Cambridge Greek and Latin Classics)											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
慣れるまではゆっくり読むが、慣れるに従い速度を上げたい。毎回よく予習をしてこること。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	西欧古代・中世表象文化論演習 I B Seminar on Culture and Representation in Ancient and Medieval Europe IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 高谷 修					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
ギリシア悲劇を読む											
古典ギリシア語を学習した学生のためのギリシア語中級講座という位置づけで、ソフォクレスの『オイディポス王』を読む。古典ギリシア語に親しみ、ソフォクレスを楽しむことを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
ギリシア悲劇の韻文が読めるようになることを目指す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
前期に引き続いて読む。先を急がず、festina lente で読み進めたい。毎回、まず学生が読んで訳し教師が解説するという方法をとる。											
<b>[履修要件]</b>											
古典ギリシア語を学習していること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常の活躍(80%)とレポート(20%)による。											
<b>[教科書]</b>											
R. D. Dawe, ed. 『Sophocles: Oedipus Rex』 (Cambridge Greek and Latin Classics)											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
慣れるまではゆっくり読むが、慣れるに従い速度を上げたい。毎回よく予習をしてこること。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	中国社会論演習IA Seminar on Chinese Society IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 辻 正博					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
唐初に編纂された『隋書』を選読する。唐朝が隋代史をどのように描こうとしたのか、そこに込められたバイアスはどのようなものかに注意して読み解いてほしい。											
<b>[到達目標]</b>											
史料を正確に読解し、語句に対する注釈を的確に作成する能力を身につける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業の進め方は、おおむね以下の手順に従う。 テキストの音読（訓読または現代漢語による） 訳注原稿の検討（質疑応答） 訳注原稿の修正 これについても、初回の授業時に詳しく説明する。											
<b>[履修要件]</b>											
後期科目（中国社会論演習 B）との連続受講が望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席・発表内容・受講態度などを勘案して、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
必要なテキストは、授業時に配布します。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 各自愛用の漢和辞典を毎回持参すること。（電子辞書ではなく「紙の辞書」を持ってくること。）											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
分担の有無にかかわらず、必ず予習してくること（難解語句、出典など）。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィス・アワーについては、特に曜日・時間を定めていません。授業時以外に直接話をしたい学生は、  tsuji.masahiro.4m@kyoto-u.ac.jp  に連絡して日時を調整すること。（学生番号、氏名を明記してメールしてください。）  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	中国社会論演習IB Seminar on Chinese Society IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 辻 正博					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
唐初に編纂された『隋書』を選読する。唐朝が隋代史をどのように描こうとしたのか、そこに込められたバイアスはどのようなものかに注意して読み解いてほしい。											
<b>[到達目標]</b>											
史料を正確に読解し、語句に対する注釈を的確に作成する能力を身につける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業の進め方は、おおむね以下の手順に従う。 テキストの音読（訓読または現代漢語による） 訳注原稿の検討（質疑応答） 訳注原稿の修正 これについても、初回の授業時に詳しく説明する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席・発表内容・受講態度などを勘案して、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
必要なテキストは、授業時に配布します。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 各自愛用の漢和辞典を毎回持参すること。（電子辞書ではなく、「紙の辞書」を持ってくること。）											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
分担の有無にかかわらず、必ず予習してくること（難解語句、出典など）。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィス・アワーについては、特に曜日・時間を定めていません。授業時以外に直接話をしたい学生は、  tsuji.masahiro.4m@kyoto-u.ac.jp  に連絡して日時を調整すること。（学生番号、氏名を明記してメールしてください。）  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	現代社会論演習IA Seminar on Theory on Contemporary Societies IA				担当者所属・ 職名・氏名	こころの未来研究センター 教授 広井 良典					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
「持続可能な福祉社会 / 定常型社会」という社会像を意識しつつ、ローカルからグローバルにおよぶ現代社会の諸課題について、理念・哲学と政策・社会システムの架橋、あるいは「人間についての探究」と「社会に関する構想」の総合化を重視しながら考究する。											
<b>[到達目標]</b>											
現代社会における諸課題あるいは人間という存在について、原理にさかのぼった考察を行いつつ、同時にそれを具体的な政策・社会システムと結びつけ、オリジナルな構想や提言に展開できる能力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
上記の観点から、現代社会論に関わる書物や論文を読み、議論をする。また、現代社会論にかかわる関心事について受講者に報告してもらう。具体的なテーマと取り上げる書物や論文については、受講者と相談の上、決める。											
<b>[履修要件]</b>											
特にないが、積極的に発表、および議論に参加すること											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
毎回の出席・報告やレポート等による											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
課題テキストを読みレポートを作成すること及び自らの関心のあるテーマについてのレジюме等の作成。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	現代社会論演習IB Seminar on Theory on Contemporary Societies IB				担当者所属・ 職名・氏名	こころの未来研究センター 教授 広井 良典					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
「持続可能な福祉社会 / 定常型社会」という社会像を意識しつつ、ローカルからグローバルにおよぶ現代社会の諸課題について、理念・哲学と政策・社会システムの架橋、あるいは「人間についての探究」と「社会に関する構想」の総合化を重視しながら考究する。											
<b>[到達目標]</b>											
現代社会における諸課題あるいは人間という存在について、原理にさかのぼった考察を行いつつ、同時にそれを具体的な政策・社会システムと結びつけ、オリジナルな構想や提言に展開できる能力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
上記の観点から、現代社会論に関わる書物や論文を読み、議論をする。また、現代社会論にかかわる関心事について受講者に報告してもらう。具体的なテーマと取り上げる書物や論文については、受講者と相談の上、決める。											
<b>[履修要件]</b>											
特にないが、積極的に発表、および議論に参加すること											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
毎回の出席・報告やレポート等による											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
課題テキストを読みレポートを作成すること及び自らの関心のあるテーマについてのレジюме等の作成。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	公共政策論演習III A Seminar on Public Policy III A				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 宇佐美 誠					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
現実の公共政策について、自立した仕方で分析・評価・提言を行う能力を高めるため、環境政策・環境問題に関連する範囲で自由テーマの発表を行う。3回生は学術論文等の要約と検討を行い（文献紹介）、4回生は卒業論文研究等について報告を行う（研究報告）。文献紹介・研究報告は、環境政策論・環境政治学・環境法・環境経済学・環境社会学・環境倫理学等、環境問題・環境政策に関連する社会科学・人文学の諸分野のいずれかに属していればよい。本科目は、大学院地球環境学舎の大学院生との共同演習であり、留学生の参加者も多いので、日・英二ヶ国語方式で進行する。履修者は、発表を通じて自らのテーマについて研究能力を高められるだけでなく、環境に関連する多様な学問分野や研究テーマに接することができ、さらには世界各地から集まった留学生を含む大学院生たちと交流できる。											
<b>【到達目標】</b>											
現実の環境政策・環境問題について、自立した仕方で分析・評価・提言を行う能力を向上させる。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
文献紹介の対象や研究報告の主題は、指導教員による研究指導を受けた上で、履修者が自由に選択する。演習での口頭発表は、日本人学生は日本語で行うが、パワーポイント資料を英文で作成するか、英文配布資料を別途準備することが強く推奨され、また出席者からの英語での質問に対しては英語で応答する。留学生は発表の言語を日・英の二ヶ国語から自由に選べるが、日本語を選択した場合には上記の条件に従う。											
<b>【履修要件】</b>											
後期に開講される公共政策論演習IIIBとの連続履修が望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
毎回出席を前提として、発表時のパワーポイント資料・口頭発表、毎回の自由討論における発言の質・量をすべて勘案した平常点により評価する。											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
----- 公共政策論演習III A(2)へ続く -----											

## 公共政策論演習ⅢA(2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

指導教員による研究指導を受けた上で、文献紹介の対象や研究報告のテーマを選択し、発表用のパワーポイント資料を準備する。

### (その他(オフィスアワー等))

- ・本科目の履修を希望する場合には、速やかに担当教員に電子メールで申し出て、第1回授業の日時・場所を尋ねた上で、第1回授業に必ず出席する。担当教員の電子メール・アドレスは、後掲のサイト内に掲載されている。
- ・研究指導を受ける場合や相談がある場合には、必ず事前に電子メールで面談予約を行う。
- ・本演習に参加する大学院生が所属している大学院地球環境学舎の地球環境政策論分野(宇佐美研究室)については、次のサイトを参照。  
<http://www.envpolicy.ges.kyoto-u.ac.jp/index.html>

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本語学文献講読論II Reading in the Document of Japanese Philology II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 佐野 宏					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
日本語の歴史記述の方法について概説し、基礎的な日本語史研究の知識を身につけることを目的とする。最初に日本語史研究の課題を掲げて概説し、その課題についての資料や論考を講読する。											
<b>[到達目標]</b>											
日本文学史の観点を含めて、日本語史の知識がどのように自覚されきたかという、日本語それ自体の対象化の歴史という観点から、日本語史を俯瞰できること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
本講義は、分野別の日本語史研究について扱う。日本語史研究には、日本文学史の知識が必須であるから、その都度関連する時代の文学史についても概説を行う。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 日本語史研究の方法（導入を含めて3回）</li> <li>2 日本語史の諸問題 音韻史（2回）</li> <li>3 日本語史の諸問題 文法史（3回）</li> <li>4 日本語史の諸問題 表記史（2回）</li> <li>5 日本語史の諸問題 語構成論（2回）</li> <li>6 日本語史の記述研究の課題（2回）</li> </ol>											
各時代の日本語の具体的な現象を対象として現在の研究を紹介しつつ、資料と論考を講読する形で講義する。なお最後に日本語史の記述研究の課題を受講生とともに考える。											
<b>[履修要件]</b>											
言学 を受講していることが望ましい。また日本語学文献講読論 と関連しているので、あわせて受講されたい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
講義期間の最終日に基礎的な事項の確認試験を行う（60%）。時折、講義中に小テスト（主として日本文学史の知識を問う予定である）を行うほか、授業への積極的な参加度（40%）を総合的に加味して評価する。											
<b>[教科書]</b>											
小野正弘 『ケーススタディ日本語の歴史』（おうふう）ISBN: 4273032678											
----- 日本語学文献講読論II(2)へ続く -----											

## 日本語学文献講読論II(2)

### [参考書等]

(参考書)

乾安代他 『日本古典文学史』 (双文社) ISBN:4881640429

### [授業外学習(予習・復習)等]

主として日本文学史のテキストを使いながら、日本語史を講義する。前期での知識を具体的に連結するものである。受講者には、次回は ということに触れると、講義の最後に述べるので、その について関連する事項を下調べしておいくことと、前期の内容と照らし合わせて、自らの知識を関連づけるように復習すること。

### (その他(オフィスアワー等))

木曜日4限をオフィスアワーとする。ただし、会議などで不在の場合があるから、事前に相談すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	公共政策論Ⅰ Public Policy I				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 佐野 亘					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>公共政策においても、問題を発見し、それに対する対策をたて、その対策を実施するプロセスを適切に管理・運営することが重要となる。本講義では、特に現実の政治・行政過程に着目し、よりよい公共政策を実現するうえで、実際上いかなる困難や問題が存在するかについて検討したい。本講義を通じて、受講者は、政策過程全体についての理解を深めるとともに、「政策の失敗」がなぜどのように起こるのかについて、自分なりに考察することができるようになることが望まれる。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>本講義を受講することにより、公共政策のいわゆるPDCAサイクルについて理解するとともに、そうした理解を現実の政策課題にあてはめて考えることができるようになる。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．公共政策におけるPDCAサイクル</li> <li>2．現状認識</li> <li>3．問題発見</li> <li>4．分析</li> <li>5．課題設定</li> <li>6．立案（誰が行政サービスを提供するか：民間委託）</li> <li>7．立案（誰が行政サービスを提供するか：NPO）</li> <li>8．立案（不確実性への配慮）</li> <li>9．立案（インセンティブシステムの有効性）</li> <li>10．決定</li> <li>11．実施</li> <li>12．評価</li> <li>13．政治と分析</li> <li>14．政治制度の根本的改善？</li> <li>15．まとめ</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
通常の試験による。											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
----- 公共政策論Ⅰ (2)へ続く -----											

## 公共政策論Ⅰ (2)

### [参考書等]

(参考書)

足立幸男 『公共政策学とは何か』 (ミネルヴァ書房)

クリストファー・フッド 『行政活動の理論』 (岩波書店)

### [授業外学習 (予習・復習) 等]

日頃から新聞などでさまざまな社会問題や政策課題に触れておくとともに、その背後にある政策過程のあり方についても注意しておくこと。また、授業のあとには、授業中に示された参考書などを用いて、授業の内容をまとめなおしておくこと。

### (その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	公共政策論 II Public Policy II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 浅野 耕太					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
社会の様々な不確実性を前提に、政策効果を定量的に捉え、分析・評価するために必要となる基本的な統計学の考え方や手法を学び、政策の妥当性を検証する力を身につける。											
<b>【到達目標】</b>											
統計学の基礎的概念とそれを用いた政策評価の手法を修得し、幅広い公共政策の評価に応用できるようになる。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
基本的に以下の授業計画に従って講義を進める。ただし講義の進みぐあい、時事問題への言及などに対応して順序や同一テーマの回数を変えることがある。											
第1回	政策分析と統計学										
第2回	確率思考 - 記述統計と統計的推測について -										
第3回	条件付確率とベイズ推論 - OJシン普森裁判 -										
第4回	仮説検定の論理 - 科学的推論の新機軸 -										
第5回	確率変数と大数の法則 - ギャンブルの真実 -										
第6回	正規分布と中心極限定理 - もうひとつの真実 -										
第7回	政策効果把握のためのカイ二乗検定										
第8回	政策効果比較のためのスチューデントの t 検定										
第9回	回帰分析入門(1) - 単純線形回帰 -										
第10回	回帰分析入門(2) - 重回帰 -										
第11回	回帰分析入門(3) - 回帰分析の統計的推測 -										
第12回	観測データと実験データ - 社会実験と自然実験 -										
第13回	政策分析のための因果モデル										
第14回	演習と総括										
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
授業期間中に行うクイズ(回数未定)で評価する。											
<b>【教科書】</b>											
浅野 耕太 『政策研究のための統計分析』(ミネルヴァ書房) ISBN:978-4-623-05663-7											
<b>【参考書等】</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
----- 公共政策論 II (2)へ続く -----											

公共政策論Ⅰ(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

授業において演習問題や課題を示すので、次回までに解答しておくこと。

**（その他（オフィスアワー等））**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	文明構造論IVA Structure of Civilizations IVA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 大川 勇					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
トーマス・マンという「非政治的人間」がナチ支配下のドイツで亡命を余儀なくされたのはなぜか ヒトラーの権力掌握以後に書かれたマンのエッセイ/講演を読み解くことで、民主主義とファ シズム、人文主義とナチズムの関係について考える。											
[到達目標]											
ナチズムに抵抗した文学者の思考を追い、人文主義の光と影について理解を深める。											
[授業計画と内容]											
トーマス・マンの『リヒャルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』『ドイツとドイツ人』『ゲーテを語 る』を輪読する。授業では、担当者がレジюмеを作成して発表し、その発表をもとに全員で議論す る。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
レジюме発表とレポートによる。											
[教科書]											
トーマス・マン 『リヒャルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』（岩波文庫）ISBN:4-00-324348-x トーマス・マン 『ドイツとドイツ人』（岩波文庫）ISBN:4-00-324347-1 トーマス・マン 『ゲーテを語る』（岩波文庫）ISBN:4-00-329430-0											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
発表者はレジюмеを用意し、それ以外の参加者も、発表のテーマについての予備知識を得ておく。 （その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	文明構造論IVB Structure of Civilizations IVB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 大川 勇					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
トーマス・マンという「非政治的人間」がナチ支配下のドイツで亡命を余儀なくされたのはなぜか マン文学における政治思想を考察した最新の研究書を読み、民主主義とファシズム、人文主義 とナチズムの関係について考える。											
[到達目標]											
ナチズムに抵抗した文学者の思考を追い、人文主義の光と影について理解を深める。											
[授業計画と内容]											
速水淑子『トーマス・マンの政治思想 失われた市民を求めて』（2015）を輪読する。授業では、 担当者がレジユメを作成して発表し、その発表をもとに全員で議論する。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
発表とレポートによる。											
[教科書]											
速水淑子『トーマス・マンの政治思想 失われた市民を求めて』（創文社）ISBN:978-4-423- 71081-4											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
発表者はレジユメを用意し、それ以外の参加者も、発表のテーマについての予備知識を得ておく。 （その他（オフィスアワー等）） オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学IVA Japanese Philology and Literature IVA				担当者所属・ 職名・氏名	関西大学 文学部 教授 乾 善彦					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>文字・ことば・絵 あらたな文字生活史の構想</p> <p>ことばの歴史を考えると、文字資料はわれわれに与えられた唯一の資料である。しかし、文字がどのように「ことば」をあらわしているかについては、表意か表音かといった区別以外に、それほど意識されていなかったのではないか。また、20世紀言語学の基礎を築いたソシュールの言語観では、書記の唯一の存在理由は「ことばを書きあらわすこと」であり、文字はことばを書きあらわすための記号ということになる。しかし、歴史的にみて、文字はことばを書きあらわすためだけにあったのではない。そんな疑問から出発して、ことばと文字との関係について考え、さらに文字と絵との関係を視野にいれて、日本語の歴史記述の中に、あらたな「文字生活史」という観点を構想してみたい。</p>											
【到達目標】											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字と「ことば」との基本的概念を理解して、日本語の書記に関する客観的な議論ができるようになること。</li> <li>・日本語の歴史についての、みずからの歴史観を構築すること。</li> <li>・文献資料の特性を学び、文献資料についての理解を深めること。</li> </ul>											
【授業計画と内容】											
<p>基本的に以下の項目について、講義を進める。しかしながら、日々提供される新しい資料や課題について、それを優先するために、課題を変更することがある。歴史は常に動いているからである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「言語」にとっての、「文字」あるいは「書記」とは。(1～3週)</li> <li>2. 日本語研究史上の「書記」。(4～5週)</li> <li>3. 漢字のしくみと日本語における漢字の機能。(6～7週)</li> <li>4. 「絵」と「文字」の共存資料。(8～9週)</li> <li>5. 「ことば」の表記と「絵」との関係。(10～14週)</li> <li>6. 「文字生活史」という視点(15週)</li> </ol>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
<p>レポート(学期末)100%、以下の観点から総合的に評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・レポートの課題を適切に設定できること。</li> <li>・課題を解決するための適切な方法が採用されていること。</li> <li>・文献資料について適切な扱いがなされていること。</li> <li>・オリジナリティーがあること。</li> </ul>											
【教科書】											
授業中に指示する											
----- 日本語学・日本文学IVA(2)へ続く -----											

日本語学・日本文学IVA (2)

**[参考書等]**

(参考書)

金水敏・乾善彦・渋谷勝己 『シリーズ日本語史4 日本語史のインタフェース』 (岩波書店) ISBN: 978-4-00-028130-0 (第二章・第三章)

高田博行、渋谷勝己、家入葉子編 『歴史言語社会学入門』 (大修館書店) ISBN:978-4-469-21350-8 (第五章)

**[授業外学習(予習・復習)等]**

第一時間目に、全体のことについて説明し、その他、適宜、授業中に指示する。

**(その他(オフィスアワー等))**

さまざまな情報については、授業中に適宜指示する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学IVB Japanese Philology and Literature IVB				担当者所属・ 職名・氏名	関西大学 文学部 教授 乾 善彦					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>字・ことば・絵 あらたな文字生活史の構想</p> <p>ことばの歴史を考えると、文字資料はわれわれに与えられた唯一の資料である。しかし、文字がどのように「ことば」をあらわしているかについては、表意か表音かといった区別以外に、それほど意識されていなかったのではないか。また、20世紀言語学の基礎を築いたソシュールの言語観では、書記の唯一の存在理由は「ことばを書きあらわすこと」であり、文字はことばを書きあらわすための記号ということになる。しかし、歴史的にみて、文字はことばを書きあらわすためだけにあったのではない。そんな疑問から出発して、ことばと文字との関係について考え、さらに文字と絵との関係を視野にいれて、日本語の歴史記述の中に、あらたな「文字生活史」という観点を構想してみたい。</p>											
【到達目標】											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字と「ことば」との基本的概念を理解して、日本語の書記に関する客観的な議論ができるようになること。</li> <li>・日本語の歴史についての、みずからの歴史観を構築すること。</li> <li>・文献資料の特性を学び、文献資料についての理解を深めること。</li> </ul>											
【授業計画と内容】											
<p>基本的に以下の項目について、講義を進める。しかしながら、日々提供される新しい資料や課題について、それを優先するために、課題を変更することがある。歴史は常に動いているからである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「言語」にとっての「文字」と「絵」（復習）。（1～2週）</li> <li>2. 古代の絵と文字との融合資料。（3～4週）</li> <li>3. 絵による情報添加資料の諸相。（5～7週）</li> <li>4. 絵巻・絵本の表現性の諸相。（8～10週）</li> <li>5. 文字を取り巻く環境。（11～13週）</li> <li>6. 絵の中に描かれた文字。（14週）</li> <li>7. あらたな文字生活史の構想（まとめ）。（15週）</li> </ol>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
<p>レポート（学期末）100%、以下の観点から総合的に評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・レポートの課題を適切に設定できること。</li> <li>・課題を解決するための適切な方法が採用されていること。</li> <li>・文献資料について適切な扱いがなされていること。</li> <li>・オリジナリティーがあること。</li> </ul>											
【教科書】											
使用しない											
----- 日本語学・日本文学IVB(2)へ続く -----											

日本語学・日本文学IVB(2)

**[参考書等]**

(参考書)

金水敏・乾善彦・渋谷勝己 『シリーズ日本語史4 日本語史のインタフェース』 (岩波書店) ISBN: 978-4-00-028130-0 (第二章・第三章)

高田博行、渋谷勝己、家入葉子編 『歴史言語社会学入門』 (大修館書店) ISBN:978-4-469-21350-8 (第五章)

**[授業外学習(予習・復習)等]**

第一時間目に概略を説明し、その他、適宜、授業中に指示する。

**(その他(オフィスアワー等))**

さまざまな情報については、適宜、授業中に指示する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	文明構造論IA Structure of Civilizations IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 江田 憲治					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>本講義では、東アジア近現代を対象領域とし、近代当初にあって東アジア世界がいかなる構造的変革を見たかを確認した上で、東アジアとくに中国がどのように西洋文明を受容し、またこれを変容させたか、それが現代の社会状況といかなる連続性を持つのか、について考察する。</p> <p>東アジア、とくに中国の歴史過程について史料と研究にもとづいた批判的理解を可能にすることが目的である。</p> <p>なお、講義形式の授業のほか、適宜、受講者が従来の研究論文を要約して受講者が報告する発表形式の授業をも行う。</p>											
【到達目標】											
東アジア、とくに中国の歴史過程と現状について、資料と先行研究にもとづいて考察する視座と方法を獲得し、批判的に理解する。											
【授業計画と内容】											
第1回	ガイダンス（授業の概要・方針などの説明）										
第2回	東アジア世界の西洋文明受容	日本・中国・朝鮮の比較（1）									
第3回	東アジア世界の西洋文明受容	日本・中国の比較（2）									
第4回	中国における民主主義の受容	変法運動(1)									
第5回	中国における民主主義の受容	変法運動(2)									
第6回	東アジア「近世」から「近代」へ	日清戦争前夜									
第7回	東アジア「近世」から「近代」へ	日清戦争とその歴史的意義									
第8回	中国における民主主義の受容	辛亥革命(1)									
第9回	中国における民主主義の受容	辛亥革命(2)									
第10回	中国における社会主義の受容	国家社会主義									
第11回	中国における社会主義の受容	アナキズム									
第12回	中国における社会主義の受容	マルクス主義									
第13回	日本における侵略思想の展開	日中戦争をもたらしたもの									
第14回	総括										
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
出席状況とレポート。											
----- 文明構造論IA(2)へ続く -----											

文明構造論IA(2)

**[教科書]**

授業中に指示する

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

あらかじめ資料を配付する場合はこれを読んだ上で出席すること

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>		文明構造論IB Structure of Civilizations IB			担当者所属・ 職名・氏名		人間・環境学研究科 教授 江田 憲治				
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>本講義では、東アジア近現代を対象領域とし、近代当初にあって東アジア世界がいかなる構造的変革を見たかを確認した上で、東アジアとくに中国がどのように西洋文明を受容し、またこれを変容させたか、それが現代の社会状況といかなる連続性を持つのか、について考察する。</p> <p>東アジア、とくに中国の歴史過程について史料と研究にもとづいた批判的理解を可能にすることが目的である。</p> <p>なお、講義形式の授業のほか、適宜、受講者が従来の研究論文を要約して受講者が報告する発表形式の授業をも行う。</p>											
【到達目標】											
東アジア、とくに中国の歴史過程と現状について、資料と先行研究にもとづいて考察する視座と方法を獲得し、批判的に理解する。											
【授業計画と内容】											
第1回	ガイダンス（授業の概要・方針などの説明）										
第2回	近世東アジア世界の構造	「帝国」をめぐる(1)									
第3回	近世東アジア世界の構造	「帝国」をめぐる(2)									
第4回	近世東アジア世界の構造	「朝貢体制」とは何か？(1)									
第5回	近世東アジア世界の構造	「朝貢体制」とは何か？(2)									
第6回	近世東アジア世界の国際関係	日・朝の「交隣」関係									
第7回	近世東アジア世界の国際関係	秀吉の朝鮮侵略									
第8回	近世東アジア世界の国際関係	「平和」の回復									
第9回	近世東アジア世界の国際関係	「通信使」の時代									
第10回	近世日本における外国文化摂取	儒教・蘭学・洋学									
第11回	近世日本における東アジア観	「優位意識」と「侵略」思想(1)									
第12回	近世日本における東アジア観	「優位意識」と「侵略」思想(2)									
第13回	東アジア「近世」から「近代」へ	「征韓論」の登場									
第14回	総括										
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
出席状況とレポート											
----- 文明構造論IB (2)へ続く -----											

文明構造論IB (2)

**[教科書]**

授業中に指示する

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

資料を配付する場合は、かならず読んだ上で出席すること。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	国家・社会法システム論IA Law and Social System IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 那須 耕介					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
法多元主義（国家法システムに統合されない多様な法のあり方）の諸相をたどります。この作業を通じて、法を国家法に限定してとらえてきた近代法思想の意義と限界について、検討を加えたいと思います。											
<b>[到達目標]</b>											
まずは近代国家体制以前の社会、および今日のグローバル化社会の中に、国家法の枠に収まらない多様な法の存在と様式があるという事実、またそれぞれの可能性と難点・課題とを認識することをめざします（あわせて、そもそも近代法の体系があくまでも国家法を軸として形成されてきた理由についても考察します）。その上で、この事態の法理論上の意義、特に法が、一貫して人間社会の多様性と統合性、自由と規律の要であり調整弁であったことへの認識を深めたいと考えています。あわせて、従来不可避の趨勢として語られることの多かったグローバル化現象を積極的に評価しつつも相対化してとらえる視点を見出したいと思います。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
法制史に見る法の一元性と多元性 前近代的法の多元性とその現代的問題 グローバル化の中の機能的法多元主義 法理論的考察（統合性 / 多元性の統合的理解に向けて） 政治理論的考察（グローバリズムへのもう一つの視座）											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
期末にレポートを課します。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
毎年、授業担当者自身にとって未知未開拓の領域を扱う講義です。課題の発見と解決とが同時進行的、即興的に進められる、イキのいい講義をめざしています。模索と試行錯誤の過程そのものを楽しんでいただければ幸いです。逆に、完璧に準備され、わかりやすく整理され、おいしく味付けされた話しか聞きたくない、という方には、あまりおすすめできません。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	社会経済システム論IIIB Theory of Socio-Economic System IIIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 大黒 弘慈					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
現代社会の変容を捉えるためには、遠回りに見えても理論的な分析基準をもつことが不可欠である。ここでは資本制システムの基軸をなす原理を、方法論的、理論的、思想史的側面から多角的に検討する。経済学の基礎的ディシプリンの習得を目指すとともに、資本主義の現代的展開をも広く射程に収める。											
<b>[到達目標]</b>											
資本主義の基礎的な仕組みを理解するとともに、通説を疑う姿勢を身につける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下のような課題について、1課題あたり1～2週の時間を取って検討する予定である。あるいは年度に応じて2～3の課題を集中的にとりあげることもある。社会経済システム論IIIAと合わせて経済学原理が習得できることを目指す。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 経済学の方法 (経済学の目標、経済学の方法、原理・段階・現状分析)</li> <li>2. 商品 (価値形態論、交換過程論、物象化論)</li> <li>3. 貨幣 (価値尺度、流通手段、蓄蔵貨幣)</li> <li>4. 資本 (商人資本、金貸資本、産業資本)</li> <li>5. 資本の生産過程 (労働・生産過程、価値形成・増殖過程、生産方法の発展)</li> <li>6. 資本の流過程 (資本循環と流通費用、資本回転、剰余価値の流通)</li> <li>7. 資本の再生産過程 (単純再生産、蓄積の現実的過程、再生産表式)</li> <li>8. 利潤 (剰余価値率の利潤率への転化、一般的利潤率、利潤率低下の法則)</li> <li>9. 地代 (差額時代第一形態、第二形態、絶対地代)</li> <li>10. 利子 (貸付資本、商業資本、利子生み資本)</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
社会経済システム論 A (隔年開講) を履修することが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点評価 (出席状況、報告内容、授業内発言) と、学期末レポートにより、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書)											
マルクス 『資本論』 (国民文庫)											
宇野弘蔵 『経済原論』 (岩波文庫)											
大黒弘慈 『マルクスと贖金づくりたち：貨幣の価値を変えよ 理論篇』 (岩波書店)											
----- 社会経済システム論IIIB(2)へ続く											

社会経済システム論IIIB(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

『資本論』を各自読み進めることが望ましい。

**（その他（オフィスアワー等））**

daikoku.kouji.8a\*kyoto-u.ac.jp

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>		日本語学・日本文学III A Japanese Philology and Literature III A				担当者所属・ 職名・氏名		人間・環境学研究科 教授 須田 千里			
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
芥川龍之介は日本を代表する短編小説作家である。この授業では、代表作を中心にその成立過程や材源を探るとともに、モチーフやテーマを考察し、精緻な読解を目指す。併せて、受講生の批判意識を深め、研究の手法を学ぶ。なお、後期の日本語学・日本文学IIIB履修を推奨する。											
<b>[到達目標]</b>											
芥川龍之介に関する研究内容の把握が出来ること、従来の評価や論点を知った上で、自分の考えを論理的に述べられるようになること。他の受講生の多様な意見を受け入れ、適宜意見交換をしながらさらに自分の論点を深められること。クラス全体で、重層的に考えを発展していけること。批判的な考え方が出来ること。説得性と独自性を備えたレポートを書くことができること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
芥川龍之介の研究において受講生の批判意識を深め、研究の手法を学ぶべく、毎回作品や講義内容に関する質問、意見、感想などを書いて貰う。教員は、それを踏まえて講義を行い、成立事情や語句の意味を解明し、作品の発想基盤、構成、主題を追究していく。 学生は、教員の講義内容がより深く理解できるように、各自作品本文を十分読み込んだ上で授業に出席するとともに、自宅において、質問や意見を用紙に記入し、授業の際に提出する。 全体の授業内容を踏まえて受講生全員でレポートを書く。なお、理解の程度にあわせて進度や内容を調整することがある。											
第1回 ガイダンス。芥川龍之介の生涯と作品 第2回～14回 「羅生門」「地獄変」「奉教人の死」「忠義」「偷盗」「さまよへる猶太人」「るしへる」「じゅりあの・吉助」「おぎん」。 第15回 レポート提出。 第16回 フィードバック(レポートの講評)											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
質問・意見の表明5割、レポート5割。											
<b>[教科書]</b>											
プリントを配布することがある。											
----- 日本語学・日本文学III A(2)へ続く -----											

日本語学・日本文学ⅢA(2)

[参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

教員の講義内容がより深く理解できるように、各自作品本文を十分読み込んだ上で授業に出席するとともに、自宅において、質問や意見を用紙に記入し、授業の際に提出する。

(その他(オフィスアワー等))

オフィス・アワーは特に定めないが、講義時間外に直接話したい学生は、人環HPよりメールアドレスを検索し、希望日時を第三希望までと、学生番号、氏名を明記してメールすること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	日本語学・日本文学III B Japanese Philology and Literature IIIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 須田 千里					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>谷崎潤一郎と泉鏡花は、いずれも日本近代文学を代表する耽美派作家である。この授業では主としてその代表作を取り上げ、作品内容の理解・注釈・先行論文の読解による新たな作品像の構築を目指す。教室で意見交換することによって、お互いの知見を高めていきたい。</p> <p>なお、前期の日本語学・日本文学IIIAの履修を推奨する。</p>											
【到達目標】											
<p>谷崎潤一郎と泉鏡花に関する研究内容の把握が出来ること、従来の評価や論点を知った上で、自分の考えを論理的に述べられるようになること。他の受講生の多様な意見を受け入れ、適宜意見交換をしながらさらに自分の論点を深められること。クラス全体で、重層的に考えを発展していけること。批判的な考え方が出来ること。説得性と独自性を備えたレポートを書くことができること。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>谷崎潤一郎と泉鏡花の研究において受講生の批判意識を深め、研究の手法を学ぶべく、毎回作品や講義内容に関する質問、意見、感想などを書いて貰う。教員は、それを踏まえて講義を行い、成立事情や語句の意味を解明し、作品の発想基盤、構成、主題を追究していく。</p> <p>学生は、教員の講義内容がより深く理解できるように、各自作品本文を十分読み込んだ上で授業に出席するとともに、自宅において、質問や意見を用紙に記入し、授業の際に提出する。</p> <p>全体の授業内容を踏まえて受講生全員でレポートを書く。なお、理解の程度にあわせて進度や内容を調整することがある。</p> <p>第1回 ガイダンス。谷崎潤一郎の生涯と作品  第2回～第7回 谷崎潤一郎「刺青」「乱菊物語」「春琴抄」「少将滋幹の母」。  第8回 泉鏡花の作品と生涯。  第9回～14回「化銀杏」「薬草取」「続銀鼎」「紅玉」。なお、教科書収録の佐藤春夫の詩、徳田秋声「町の踊り場」を取り上げる場合もある。  第15回 レポート提出。  第16回 フィードバック(レポートの講評)</p>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
質問・意見等の表明5割、レポート5割。											
----- 日本語学・日本文学III B (2)へ続く -----											

日本語学・日本文学ⅢB(2)

**[教科書]**

須田・三品・外村・大木・荒井編 『谷崎と鏡花』（おうふう）  
谷崎潤一郎 『春琴抄』（新潮文庫）ISBN:978-4-10-100504-1  
谷崎潤一郎 『少将滋幹の母』（新潮文庫）ISBN:978-4-10-100509-6

**[参考書等]**

（参考書）  
授業中に紹介する

**[授業外学習（予習・復習）等]**

教員の講義内容がより深く理解できるように、各自作品本文を十分読み込んだ上で授業に出席するとともに、自宅において、質問や意見を用紙に記入し、授業の際に提出する。

**（その他（オフィスアワー等））**

オフィス・アワーは特に定めないが、講義時間外に直接話したい学生は、人環HPよりメールアドレスを検索し、希望日時を第三希望までと、学生番号、氏名を明記してメールすること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	公共政策論演習IIIB Seminar on Public Policy IIIB				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 宇佐美 誠					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>現実の公共政策について、自立した仕方で分析・評価・提言を行う能力を高めるため、環境政策・環境問題に関連する範囲で自由テーマの発表を行う。3回生は学術論文等の要約と検討を行い（文献紹介）、4回生は卒業論文研究等について報告を行う（研究報告）。文献紹介・研究報告は、環境政策論・環境政治学・環境法・環境経済学・環境社会学・環境倫理学等、環境問題・環境政策に関連する社会科学・人文学の諸分野のいずれかに属していればよい。本科目は、大学院地球環境学舎の大学院生との共同演習であり、留学生の参加者も多いので、日・英二ヶ国語方式で進行する。履修者は、発表を通じて自らのテーマについて研究能力を高められるだけでなく、環境に関連する多様な学問分野や研究テーマに接することができ、さらには世界各地から集まった留学生を含む大学院生たちと交流できる。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
現実の環境政策・環境問題について、自立した仕方で分析・評価・提言を行う能力を向上させる。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>文献紹介の対象や研究報告の主題は、指導教員による研究指導を受けた上で、履修者が自由に選択する。演習での口頭発表は、日本人学生は日本語で行うが、パワーポイント資料を英文で作成するか、英文配布資料を別途準備することが強く推奨され、また出席者からの英語での質問に対しては英語で応答する。留学生は発表の言語を日・英の二ヶ国語から自由に選べるが、日本語を選択した場合には上記の条件に従う。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
前期に開講される公共政策論演習IIIAとの連続履修が望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
毎回出席を前提として、発表時のパワーポイント資料・口頭発表、毎回の自由討論における発言の質・量をすべて勘案した平常点により評価する。											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
----- 公共政策論演習IIIB(2)へ続く -----											

## 公共政策論演習III B(2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

指導教員による研究指導を受けた上で、文献紹介の対象や研究報告のテーマを選択し、発表用のパワーポイント資料を準備する。

### (その他(オフィスアワー等))

- ・本科目の履修を希望する場合には、速やかに担当教員に電子メールで申し出て、第1回授業の日時・場所を尋ねた上で、第1回授業に必ず出席する。担当教員の電子メール・アドレスは、後掲のサイト内に掲載されている。
- ・研究指導を受ける場合や相談がある場合には、必ず事前に電子メールで面談予約を行う。
- ・本演習に参加する大学院生が所属している大学院地球環境学舎の地球環境政策論分野(宇佐美研究室)については、次のサイトを参照。  
<http://www.envpolicy.ges.kyoto-u.ac.jp/index.html>

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	実解析 A Real Analysis A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 足立 匡義					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>本講義では、現代の解析学の基礎をなすルベーク積分の理論について学ぶ。微分積分学において既にリーマン積分を学び、項別積分定理や項別微分定理などを通じて積分と極限との順序交換の可能性を見てきているが、条件として課されることの多い関数列の一致収束性は、実際に応用する場面では確かめやすいものになっているとは限らない。実は、リーマン積分の拡張であるルベーク積分を導入することにより、順序交換可能性の判定条件はより簡便になる。これはルベーク積分の利点の一つである。このように実用面でも利点の多いルベーク積分の理論を概観するのが主な目的である。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>ルベーク積分の利点を理解し、例えば積分と極限の順序や、重積分の積分順序など、その交換可能性を実際に判定できるようにする。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>以下の各項目について講述する。各項目には【 】に表記した週数を充てる予定であるが、受講者の理解の状況などを考慮し、必要に応じて増減させることがある。</p> <p>(1) リーマン積分とルベーク積分の概観【1週】  (2) カラテオドリの測度論【1～2週】  (3) カラテオドリの方法によるルベーク測度の導入【1～2週】  (4) 可測関数【1～2週】  (5) ルベーク積分の定義とその性質【1～2週】  (6) 積分の収束定理【1～2週】  (7) リーマン積分とルベーク積分との関係【1週】  (8) 直積測度とフビニの定理【2～3週】</p>											
<b>[履修要件]</b>											
<p>微分積分学、線形代数学（数学基礎AB、微分積分学AB、線形代数学AB）を履修していること。</p>											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>平常点（20％）と学期末のレポート（80％）により評価する。平常点の評価は出席状況による。</p>											
<b>[教科書]</b>											
<p>使用しない</p>											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書）  伊藤清三 『ルベーク積分入門』（裳華房）ISBN:978-4785313043  藤田宏・吉田耕作 『現代解析入門』（岩波書店）ISBN:978-4000078122</p>											
----- 実解析 A (2)へ続く -----											

実解析 A (2)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

理解を助けるために参考書を読むなど、復習に努めること。

(その他 (オフィスアワー等) )

微分方程式論、確率論及びその関連分野を扱う際の基礎をなす理論を取り扱う。「集合と位相」、「確率論基礎」、「数理現象論AB」、「実解析B」も履修することが望ましい。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	実解析 B Real Analysis B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 足立 匡義					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>本講義では、現代の解析学において重要な役割を果たしているフーリエ解析学を題材に取り上げ、中でもフーリエ変換に焦点を当てる。フーリエ変換の特徴の一つとして、定数係数微分作用素を、多項式を掛ける掛け算作用素に変換する機能を持つことが挙げられる。この機能は、基本解の構成、解の滑らかさの評価など、微分方程式の研究における様々な場面で用いられており、その有用性ゆえにフーリエ変換は微分方程式の研究において欠くことのできない強力な道具となっている。フーリエ変換の特徴を、ソボレフ空間という関数空間を通じて、関数解析学の立場から概観するのが主な目的である。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>フーリエ変換の基礎理論の中でルベーク積分論がどのように役立っているかを理解し、その運用ができるようにする。また、ルベーク空間やソボレフ空間などの関数空間や、フーリエ変換などの線形作用素の、関数解析学的取り扱いの有用性を理解する。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>以下の各項目について講述する。各項目には【 】に表記した週数を充てる予定であるが、受講者の理解の状況などを考慮し、必要に応じて増減させることがある。</p> <p>(1) ルベーク空間【1～2週】  (2) 急減少関数とそのフーリエ変換【2～3週】  (3) 緩増加超関数とそのフーリエ変換【1～2週】  (4) ソボレフ空間の基本的性質【2～3週】  (5) 補間理論・分数階ソボレフ空間【4～5週】</p>											
<b>[履修要件]</b>											
<p>微分積分学、線形代数学（数学基礎AB, 微分積分学AB, 線形代数学AB）を履修していること。また、関数論、ルベーク積分論の基礎事項について学んでいることが望ましい。</p>											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>平常点（20%）と学期末のレポート（80%）により評価する。  平常点の評価は出席状況による。</p>											
<b>[教科書]</b>											
<p>使用しない</p>											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書）  谷島賢二 『ルベーク積分と関数解析』（朝倉書店）ISBN:978-4254116069  宮島静雄 『ソボレフ空間の基礎と応用』（共立出版）ISBN:978-4320018280  熊ノ郷準 『偏微分方程式』（共立出版）ISBN:978-4320011052</p>											
----- 実解析 B (2)へ続く -----											

## 実解析 B (2)

小川卓克 『非線型発展方程式の実解析的方法』 (丸善出版) ISBN:978-4621065143

### [授業外学習 (予習・復習) 等]

理解を助けるために参考書を読むなど、復習に努めること。

### (その他 (オフィスアワー等))

微分方程式論及びその関連分野を扱う際の基礎をなす理論を取り扱う。「集合と位相」、「数理現象論AB」、「実解析B」、「函数論」も履修することが望ましい。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	数理科学特論III Topics in Mathematical Science III				担当者所属・ 職名・氏名	白眉センター 助教 丸山 善宏					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
4月以降に掲示する。											
<b>[到達目標]</b>											
4月以降に掲示する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
4月以降に掲示する。											
<b>[履修要件]</b>											
4月以降に掲示する。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
4月以降に掲示する。											
<b>[教科書]</b>											
4月以降に掲示する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 4月以降に掲示する。											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
4月以降に掲示する。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	数理科学ゼミナール Seminar in Mathematics and Informatics				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 木坂 正史					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>数学の学び方の中で最も標準的なものは輪講である。輪講とは本や論文を1つ決め、その内容を参加者で順番に発表し合うことによって学んでいく方法である。数理科学ゼミナールでは1つの本を実際に輪講形式で学ぶことで、早い時期に輪講形式を体験し、これに慣れることを目的とする。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>輪講形式によって自身で理解してきたことを正しく分かりやすく発表し、また適切な質問・議論をすることで輪講に積極的に参加できるようになることを目標とする。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>テキストを1冊指定し、それを輪講形式で読んでいく。テキストは第1回目に参加者と協議の上決める予定である。内容の候補としては例えば「力学系理論の初歩（線型微分方程式）や「位相空間論」がある。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
<p>テキストや発表の順番等を決めるため、第1回から必ず出席すること。</p>											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>出席と発表の内容によって総合的に評価する。</p>											
<b>[教科書]</b>											
未定											
<b>[参考書等]</b>											
<p>(参考書) 授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
<p>各回の発表者は正しく分かりやすい発表をするために、十分に予習して準備すること。また発表に当たっていないときは各自でテキストを読んで自分なりに理解し、分からない内容について適切な質問ができるようにしておくこと。</p>											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
<p>数学以外でも物理をはじめ、理系の学問一般において輪講形式で学ぶのは標準的な方法であるので数学以外を目指す学生の参加も歓迎する。</p>											
<p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	環境構成論II Theory and History of Environmental Construction II				担当者所属・ 職名・氏名	非常勤講師 川崎 修良					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
「景観」は視覚的に捉えられる環境と考えることができるが、その意味内容は時々の社会の価値観や美意識、あるいは捉える者の立場や対象とする範囲によって異なる。現代社会において地域政策の課題となった「景観」について、その課題意識の成立過程及び、制度の推移を時々の社会背景と関連付けながら解説し、現在の景観政策の課題と展望について検討する。											
【到達目標】											
1) 景観形成に関する歴史的な制度の推移とその社会背景について理解する。 2) 現代の都市計画における景観形成の課題と意義を理解する。											
【授業計画と内容】											
1景観とは何か(3週) 1.1「景観」についての考え方：テクスチャーの景観関係性の景観、文化的景観、イメージとしての景観 1.2景観形成の目的と意義：何のために景観を形成するのか 1.3景観形成の手法と課題：どのように景観を形成するのか 2日本の景観保全政策の経緯(8週) 2.1戦前都市計画における「美観」の考え方 2.2高度成長期の国土政策と戦後の都市計画法改正 2.3文化遺産としての景観：古都保存法、伝統的建造物群保存地区 2.4地域性と景観：景観条例の制定とその展開 2.5都市の全体像と景観：市町村マスタープランの成立 2.6財産権と景観権：国立マンション訴訟 2.7景観法の成立とその背景 2.8人間の生活と景観：文化的景観の考え方 3景観形成における課題(3週) 3.1都市の機能と景観：都市計画と景観計画 3.2地域のイメージとコミュニティ：景観計画の策定プロセス 3.3地域政策の中の景観形成 4まとめ(1週)											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
授業中に課す小レポート(20点)と、期末のレポート(80点)によって評価する。											
-----環境構成論II(2)へ続く-----											

## 環境構成論II(2)

### [教科書]

必要な資料は授業中に適宜配布する。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業中に参考文献を示す。本授業を理解し、到達目標を達成するためには参考文献に当たり、積極的に予習・復習する姿勢が望まれる。

### (その他(オフィスアワー等))

質問等は講義終了後に講義室にて受け付ける。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	文化行為論 A Cultursl practices A				担当者所属・ 職名・氏名	人文科学研究所 教授 田中 雅一					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
文化行為論は日常実践に焦点を絞る文化・社会人類学である。そして日常実践を複数の権力が作用するアリーナととらえることで、「未開」、宗教、環境、暴力、ジェンダー、セクシュアリティなどの諸概念を再考する。											
<b>[到達目標]</b>											
一見普遍的と思われる価値観の相対的な性格、あるいは文化・社会依存的な性格について理解を深め、私たちを取り巻く社会状況についての批判的な視点を獲得することを目指す。今年度は、ジェンダー・セクシュアリティ、エスニシティなどに関わる暴力や事件を取り扱う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
最初に現代人類学の状況を概括し、異文化を理解することの意義を考える。その後は、暴力、トラウマなどに注目し、民族、文化、ジェンダー・セクシュアリティが交錯する領域をテーマとする。 1-2週)文化人類学の変貌、ジェンダーとセクシュアリティ 3-4週)売春/セックスワークと女性への暴力 5-6週)性的暴力 7-8週)ホロコースト/ショア 9-10週)基地問題 沖縄と環太平洋地域 11-13週) 負の世界遺産とダークツーリズム 14週) トラウマと社会的苦悩 15週) まとめ											
<b>[履修要件]</b>											
文化人類学に関するほかの講義を受けていることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点、とくに小レポートと授業内での発言を評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する 各テーマについては授業中に資料を配布し、参考文献を紹介する。											
----- 文化行為論 A (2)へ続く -----											

## 文化行為論 A (2)

### ( 関連URL )

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~shakti/>(田中雅一のホームページ)

### [授業外学習 ( 予習・復習 ) 等]

授業では映像作品の上映や討論が中心となるため、関連する文献や配布資料を授業の前後に読んでおくこと。

### ( その他 ( オフィスアワー等 ) )

使用する映像資料の中には心身にきわめて不快な影響をおよぼすシーンが多出するものも含まれています。鑑賞するかどうか、また上映中の退出は本人の判断に任せます。

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~shakti/> 田中雅一のホームページ

オフィスアワーは特に設けない。問い合わせやアポイントは [shakti@zinbun.kyoto-u.ac.jp](mailto:shakti@zinbun.kyoto-u.ac.jp) で受けつける。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	文化行為論 B Cultursl practices B				担当者所属・ 職名・氏名	人文科学研究所 准教授 石井 美保					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語

### 【授業の概要・目的】

文化行為論は、人々の日常的実践に焦点を当てた文化・社会人類学である。この講義では、各自が関心をもつ文化人類学のテーマについて受講者が発表を行い、参加者全員でのディスカッションと、講師による解説を中心に授業を進める。

受講者は授業を通して人類学的なテーマに親しむだけではなく、発表とディスカッションを通してテキストの読解能力を深め、フィールドワークの方法等を積極的に身につけることが期待される。また、たとえば2015年度はアクティビズムと人類学的介入の問題、2016年度はナショナリズムとアイデンティティ、およびマテリアリティと記憶をめぐる問題が中心テーマとなったように、出席する受講生の問題関心に即して授業のサブ・テーマが自発的に構成されていくことも、本授業の特色である。

### 【到達目標】

現代人類学の重要なテーマを学習するとともに、発表とディスカッションの場で、それぞれの受講生の問題関心に沿ったテーマを積極的・多角的に探求することを通して、「日常」や「ふつう」とされる価値観を相対化する視点を身につけることができる。

また、この授業では受講生同士がディスカッションを通して互いの問題関心や意見を知り、同世代の鋭い思考や行動力・探究力に触れることで、互いに刺激し合うことを目標としている。そのため、ゼミでは受講生の積極的な発言を期待する。

### 【授業計画と内容】

最初の複数回の授業では、講師が人類学的思考の基礎とフィールドワークの方法論を概説する。以降の授業では、受講者がそれぞれ（場合によっては複数で）テーマを定めて研究発表とディスカッションを行う。

参考までに、これまでの発表テーマ（受講生が取り上げた民族誌的テキストのテーマ）の一部を以下に挙げる。

- ・京都におけるオカルティズムと物語化の作用
- ・マルクス主義と人類学
- ・公害をめぐる記憶と物質性
- ・沖縄における豚の消費と民俗カテゴリー
- ・葬儀の近代化とユタの役割
- ・インドにおける「不可触民」問題
- ・先住民族、アクティビズムと人類学的介入
- ・シンクレティズム
- ・開発とジェンダー
- ・憑きもの
- ・イスラエル/パレスチナ紛争と移動の経験
- ・巡礼考
- ・人と動物の人類学
- ・アナキスト人類学
- ・死の儀礼
- ・「近代的個人」と憑依現象
- ・伝統の創造
- ・シャマニズムとパースペクティヴィズム
- ・国際結婚とアイデンティティ形成
- ・アフリカ農村におけるモノの交換と関係の可視化
- ・人類学における生物性と自然
- ・人類学とオルタナティブ経済論
- ・映像人類学と捕鯨論
- ・ランドスケープ論
- ・管理社会の人類学 ほか

### 【履修要件】

文化行為論 A を履修していることが望ましい。

## 文化行為論 B (2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

出席 ( 50% )、授業での発表 ( 50% )

### [教科書]

授業中に指示する

### [参考書等]

( 参考書 )  
授業中に紹介する

### ( 関連 URL )

<http://www.mihoishiianthropology.com/>  
<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/zinbun/members/ishii.htm>

### [授業外学習 ( 予習・復習 ) 等]

次回の授業で用いられるテキストを必ず事前に読んで、自分なりの質問やコメントを考えておくこと。

### ( その他 ( オフィスアワー等 ) )

質問等は [mishii\(at\)zinbun.kyoto-u.ac.jp](mailto:mishii@zinbun.kyoto-u.ac.jp) まで。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	地域空間論 Region, Space, and Environment IV				担当者所属・ 職名・氏名	お茶の水女子大学 教授 水野 勲					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
2011年3月の福島第一原発で起こった4機の過酷事故は、社会科学全般の問い直しを迫る人類史的な出来事であり続けています。このことを関心の中心において、本講義では、地理的不均等発展はどのようなメカニズムで起こるのかをテーマとします。原発が立地する地域は国内の「周辺地域」であり、その「周辺地域」はどのような政治経済的過程を通じて作られたのかという問題に、関連してくるからです。地理的不均等発展をもたらした資本主義の空間経済を、「経済」の概念を広義のものに拡張しながら理論的に考察します。											
【到達目標】											
原発の過酷事故という現実社会の大きな課題の解決のために、既存の経済学、経済地理学の理論や概念をひとつひとつ再検討し、専門分化した社会科学の諸学問に閉じこもらない能力を養う。											
【授業計画と内容】											
下記の内容を中心に授業をおこなう。ただし、取り上げる項目や順序については変更する場合がある。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. カタストロフとしての原発事故</li> <li>2. 経済への地理学的アプローチ：貧困について</li> <li>3. 「市場」の地理学的構造</li> <li>4. 「経済」の概念の広義化</li> <li>5. 地理的不均等発展の歴史地理</li> <li>6. 商品・貨幣・資本の生産と「空間の生産」</li> <li>7. 資本主義経済における古典的立地論の位置づけ</li> <li>8. P.クルーグマンとA.プレッドの産業集積論の差異</li> <li>9. 経済学における物理的アナロジーと科学主義</li> <li>10. 規模の経済、収穫逓増、地域独占</li> <li>11. エネルギーとエントロピーの経済地理学（1）資源論</li> <li>12. エネルギーとエントロピーの経済地理学（2）廃棄論</li> <li>13. 新自由主義の空間経済</li> <li>14. 経済空間の中の国家</li> <li>15. 授業のまとめ</li> </ol>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
授業への積極的な参加と貢献（30点）、授業期間中に実施するコメントペーパー（計30点）、授業終了後に課すレポート（40点）により評価する。											
【教科書】											
授業中に指示する											
----- 地域空間論 (2)へ続く -----											

## 地域空間論 (2)

---

### [参考書等]

(参考書)

デヴィッド・ハーヴェイ 『資本の<謎>』(作品社) ISBN:9784861823664  
玉野井芳郎 『エコノミーとエコロジー』(みすず書房) ISBN:9784622016250  
国会事故調 『国会事故調報告書』(徳間書店) ISBN:9784198634865

### [授業外学習(予習・復習)等]

経済学の標準的な教科書と上であげた参考書をあわせて熟読するという経験を、おすすめします。  
(視聴率や発行部数の多い)大手メディアで目立たず伝えられるニュース、さらに日刊紙、週刊誌、  
地方メディア、独立メディア、外国メディア、個人ブログ、ツイッターなどを幅広く目を通すよう  
にしてください。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	ユーラシア文化複合論 B Complex Studies of Eurasian Cultures B				担当者所属・ 職名・氏名	東南アジア地域研究研究所 准教授 帯谷 知可					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>「中央ユーラシア研究の現在」          ここでは「中央ユーラシア」とはおおむねかつてソ連に属した中央アジアと南コーカサス（南カフカース）の国々、すなわちウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン（キルギス）、タジキスタン、トルクメニスタン、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジアの領域を指すこととする。この地域は、古代からの遊牧民の活躍、テュルク化とイスラーム化の進展、さらには非ロシア・非スラヴ地域として長らくロシア帝国・ソ連体制のもとにあったことなど、共通の歴史的経験をもつ。この授業では、1991年のソ連解体以降、それぞれの形で社会主義体制からの脱却と新たな国家・社会の再編が試みられている、この興味深い地域の現在をよりよく理解するための視座を提供することを目的として、ソ連解体以降の研究動向を紹介しながら、近現代史と現代の問題群を往還する。個別の事例としては中央アジア、特にウズベキスタンに重点を置く。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
ソ連体制のもとでの社会主義時代とソ連解体後の独立国としてのポスト社会主義時代を経験している中央ユーラシア文化の基盤を理解し、合わせてそれに関するソ連解体後の新しい研究潮流の概要を理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>この授業では、次のように、5つの大きなトピックを立て、順次講義を進めていくこととする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 中央ユーラシアという地域</li> <li>(2) ソ連解体後の新たな研究の流れ</li> <li>(3) 中央ユーラシアとロシア</li> <li>(4) 社会主義という歴史的経験</li> <li>(5) ソ連解体後のグローバルな意味をもつ課題（特にイスラーム復興の問題を中心に）</li> </ul> <p>これら各々について1-3回の講義を予定する。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席点30%、期末のレポート70%の割合で評価を行う。期末レポートは文献を指定し、それについて論じる形式とする。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
----- ユーラシア文化複合論 B(2)へ続く -----											

## ユーラシア文化複合論 B(2)

### [参考書等]

(参考書)

小松久男他編 『中央ユーラシアを知る事典』 (平凡社) ISBN:978-4-582-12636-5 (中央ユーラシア全般に関する読む事典)

宇山智彦編 『中央アジアを知るための60章』 (明石書店) ISBN:978-4-7503-3137-9 (中央アジア地域研究入門の必読書)

北川誠一ほか編 『コーカサスを知るための60章』 (明石書店) ISBN:978-4750323015 (コーカサス地域研究入門の必読書)

帯谷知可 『朝倉世界地理講座大地と人間の物語 5 中央アジア』 (朝倉書店) ISBN:978-4-254-16795-5 (近年の日本の中央ユーラシア地域研究の成果がわかりやすく示されている)

岩崎一郎他編 『現代中央アジア論 変貌する政治・経済の深層』 (日本評論社) ISBN:4-535-55318 (大学生向けの政治・経済分野の教科書、ただし絶版)

(関連URL)

<http://www.jacas.jp/>(日本中央アジア学会(関連する主要学会のひとつ))

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>(北海道大学スラブ研究センター(中央ユーラシア関連の情報多))

### [授業外学習(予習・復習)等]

・予習・復習双方のために、授業期間中に、参考書情報にあげた『中央アジアを知るための60章』および『コーカサスを知るための60章』を通読すること。

・復習として、授業で出てきた固有名詞等につき、参考書情報にあげた『中央ユーラシアを知る事典』その他を参照することによって、より詳細な知識を得るようにすること。

(その他(オフィスアワー等))

連絡はこちらへ [obiya@cias.kyoto-u.ac.jp](mailto:obiya@cias.kyoto-u.ac.jp)

授業内で関連の日本語参考文献一覧を配布しますので、自分の関心にそくしてその中から選び、できるだけたくさん読んでください。授業では、聞きなれない固有名詞がたくさん出てくることになると思います。それに溺れてしまわないよう、『中央ユーラシアを知る事典』やネットなどを積極的に活用し、復習してください。また、折々地図を見るとよいと思います。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	文化交渉複合論 A Cultural Encounters in Mediterrane and Middle Eastern Societies in the Middle Ages A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 勝又 直也					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
中世ユダヤ人が生み出したヘブライ文学の精読を通して、マイノリティであったユダヤが、ギリシヤ、イスラーム、ヨーロッパといったマジョリティ文化とどのように関わっていたのかを考察する。											
<b>[到達目標]</b>											
1．一神教の元祖であるユダヤ教に関する基本的知識を習得する。 2．マイノリティとしてのユダヤ教文明とマジョリティとしてのキリスト教文明やイスラーム文明との関わりについて学ぶことにより、宗教と文化交流との複雑な関係性について考察する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
1) ユダヤ教やユダヤ学の紹介、概論(第1回～第3回) 2) ユダヤ学の基本文献(聖書、タルムード、ミドラシュなど)の講読(第4回～第9回) 3) 中世ヘブライ語で書かれた典礼詩や世俗詩、マカーマと呼ばれる物語集などの講読(第10回～第15回)											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
通常の講義での議論への参加(50%)、およびレポート(50%)により評価する。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
配布される講読用テキストの入念な予習が必須である。											
(その他(オフィスアワー等))											
katsumata.naoya.5c@kyoto-u.ac.jpにて、質問を受け付ける。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	東アジア比較芸能論 B Comparative Studies of North-East Asian B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 赤松 紀彦					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
中国の伝統演劇は、元雜劇、宋元南戲、明清伝奇と数多くの作品を生み出し、演じられるものとしての演劇としてだけではなく、文学作品としても、文学史の中で独自の位置を占めてきた。こうした伝統演劇の清代における代表的作品として、孔尚任『桃花扇』を取り上げて、その魅力を明らかにしてゆく。											
<b>[到達目標]</b>											
中国伝統演劇史について理解を深めつつ、中国文学史における戯曲作品が持つ、他のジャンルには見られない特徴について考察できるようにする。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第十齣 修札 第十一齣 投轄 第十二齣 辭院 第十三齣 哭主 第十四齣 阻奸 第十五齣 迎駕 以上の各齣を、たんねんに読み解いてゆく。											
<b>[履修要件]</b>											
現代中国語ならびに中国古典文学についての十分な知識があること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点により評価。何回か訳注を作成して発表してもらう。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する テキストはプリントを配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
演劇のテキストを読み解くにあたっては、他の文学作品とは異なる点も多く、語彙や語法といった点でも難解なものがしばしばあらわれるので、積極的に予習をする必要がある。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワー：水曜午後1時～5時(A124研究室) メールアドレス：akamatsu.norihiko.3x@kyoto-u.ac.jp											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	地域空間論II A Region, Space, and Environment IIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 山村 亜希					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語

### [授業の概要・目的]

いかなる現在の景観も、長きにわたる自然環境と人間社会との相互作用を通じて生成されたものである。たとえ歴史的建造物や遺跡が眼前に残っていても、景観にはその地域固有の歴史と地理が刻印されている。このような歴史地理学の視角を前提として、本授業では、現在の城下町・港町由来の地域景観の中に歴史地理の痕跡を見出し、その特性を考える。

本授業は、現代の地域の「前史」を単なる知識として知ることをゴールとするものではない。本授業の目的は、現代の諸地域がどのような個性（特性）を持っているのか、その地域性の形成要因・メカニズムとは何かといった、地域の基層を「発見」することにある。

本授業では、 戦国～近世初期の都市景観を復原し（景観復原図の作成）、 その後の（主に近代以降の）景観変化を地図上で見出し（新旧地形図の読図）、 現地を歩いて、現在を規定する過去の空間構造と地域性を考察する（巡検・景観観察）。この3点は、歴史地理学のオーソドックスな方法であるが、ただ漫然と現地を歩くだけでは気づくことのできない、現代の地域性を見出すための正攻法であろう。

以上より、本授業では、畿内・その近国の戦国～近世初期（16～17世紀）の城下町・港町数カ所を事例として、 景観復原図の作成・ 読図・ 巡検の方法で、その後身である現代の都市景観にアプローチする。 については、文献史料や絵図等の歴史資料を具体的に提示し、その史料批判を講義するので、それをふまえて、受講生自身が景観復原図を作成する。さらに、その復原図を元に、戦国～近世初期の歴史的意義や地域的特性について、講義を行う。 については、明治から大正、昭和、平成の地形図をもとに、受講生が読図を行い（人数に応じてグループで）知見を発表する。それを総括しつつ、空間構造の変遷と立地環境の変化について、講義を行う。これらをふまえて、休日の午後を使って、実際に現地に赴いて、 の巡検を行う。

このように本授業は、完全な講義ではなく、実習的要素が多い。地図を作り、読み、歩くという人文地理学の基礎的な3つの実践を通じて、歴史地理学の醍醐味と諸地域の空間構造の多様性を実地で学んで欲しい。

### [到達目標]

歴史地理学の基本の視角を理解し、 文献・絵図・発掘調査等の多様な資料を適切に活用した実証的な景観復原と、 読図、景観比較、 巡検といった地理学的実践ができるようになる。それとともに、人文地理学の発想力・想像力を身につける。

### [授業計画と内容]

各地の発掘調査の成果や巡検先の博物館の特別展・企画展、授業の進捗状況に応じて、順番の変更や対象地の変更の可能性もある。

第1回：授業の概要説明、歴史地理学の視角と方法

第2～7回：琵琶湖の港町と城下町：坂本から大津へ、大津から膳所へ

\* 5/21（日）午後 巡検

第8～13回：丹波の戦国・近世城下町：八木から亀山（亀岡）へ

\* 7/9（日）午後 巡検

第14回 まとめ

第15回 フィードバック

## 地域空間論II A(2)

### 【履修要件】

特になし

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

期末レポート（40%）

平常点：出席、景観復原図作成、読図、巡検への取り組み（60%）

### 【教科書】

使用しない

### 【参考書等】

（参考書）

授業中に紹介する

### 【授業外学習（予習・復習）等】

授業で指示する景観復原図の作成、新旧地形図の読図は、授業時間内に終えられなかった場合、翌週までの宿題となる。巡検の感想やそこで抱いた疑問に対する調査を、自分で撮影した写真を含めてまとめて提出してもらい、復習をしてもらう。巡検までに、指示した参考文献等を読んでくると理解が深まり、予習となる。

### （その他（オフィスアワー等））

5月21日(日)と7月9日(日)の巡検は、授業の一環なので、受講生は予定を事前に確保し、参加すること。巡検に係る交通費・入館料等と遠足用レクリエーション保険料（1回につき50円程度）は自己負担である。現地では、交通安全に十分気をつけることはもちろんだが、念のため、各自で生協の学生総合共済等、各自が加入している保険の情報を確認しておくこと。

授業では、毎回A3サイズの大判の地図を複数枚配布し、指示に従って着色・記入しながら講義を進める。赤・青・黄色・緑の最低4色以上の色鉛筆（消しゴムで消せるものがベター、色鉛筆のセットが便利）と、文字を書き込むことのできる色ペンを複数本準備し、毎回持参する。中学・高校で使用した地図帳を持参するのがベター。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	地域空間論II B Region, Space, and Environment IIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 山村 亜希					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語

### [授業の概要・目的]

歴史地理学は過去を扱う地理学である。その方法の一つに、歴史資料（文献史料・地図資料・考古資料・伝承等）を地図化するというものがある。歴史資料を地理情報に変換して地図化することは、資料の解釈や評価の可能性を大きく広げることに役立つ。さらに、歴史資料を地図の中に位置づけると、資料に描かれた地域が、単なる舞台としての役割以上を持っていたことに気づくだろう。つまり、その地域が本来持っていた地域構造（地域性）や、過去の自然・人文環境の影響である。それは、現代の地域を考える上で、新たな視点を与えてくれる。

歴史地理学は、地域環境や景観を叙述した歴史資料（テキスト）を歴史的文脈の中で正確に読み（講読）、その中の地理情報を地図化し（復原図の作成）、その後の地域構造の展開を把握した上で（新旧地形図の読図）、現地を詳細に歩き、景観を観察して（巡検）、歴史資料と現在の地域構造の関連を考える。本授業は、この～の視点と方法を身につけることを目的とする。

講読対象とするテキストの候補は、（１）織田信長の同時代の伝記の『信長公記』と、（２）宣教師フロイスの日本滞在録である『フロイス日本史』である。いずれも16世紀の戦国時代の日本を描く。前半に『信長公記』を扱うが、受講生の関心や専門、難度に応じて、現代語訳のある『フロイス日本史』に変更する可能性もある。

『信長公記』には、信長の出身地である尾張はもちろん、信長の転戦した三河、美濃、伊勢、近江、京都等についての戦国末期の景観が、断片的ながら描出されている。このテキストに叙述された多様で豊かな情報を、地図に照らして歴史地理学の方法で「見える」化すれば、織田信長の軍事行動、戦略、家臣団の構造、戦国末期の合戦の展開、村落や都市と戦国大名との関連、城下町建設・経営の具体像、戦国末期の自然環境などについて、新たな発見もできるだろう。戦国のダイナミックな歴史を生き生きと叙述する『信長公記』は、比較的読みやすい。現代語訳本も多々出版されており、講読の参考になる。本授業の焦点は、講読よりも地図の活用にあるので、歴史資料にこれまで触れた経験がない人でも、臆せず受講してほしい。

『フロイス日本史』は、日本に到達した宣教師が、九州、山口、都（京都）、堺、安土などを訪れ、信長を含めた権力者との関わりを叙述する。キリスト教的価値観による過剰な表現もみられるものの、16世紀ヨーロッパでの知識人による異国日本の認識がよく分かる一級資料である。現代語訳もあるので、『信長公記』よりも読みやすい。

本授業では、受講生がテキストを分担して、講読、復原図の作成、読図し、その成果をレジュメとしてまとめて発表する。それについて、全員で討論を行い、修正・補足点や同時代の地理情報について講義を行う。その上で、より詳細に復原図を作成できる地域について、休日に半日程度の巡検を行う（オプション）。

このように本授業は、実習的要素を多く含む。人文地理学のオーソドックスな方法（作図、読図、巡検）に加えて、歴史地理学の基礎をなす講読のトレーニングを積むことで、歴史地理学の面白さを経験してほしい。

### [到達目標]

歴史地理学の基本的な視角を理解し、文献講読、景観復原図の作成、地形図の読図、巡検といった、基本的な方法を実践できるようになる。また、これらの実践を通じて、地理学的想像力・発想力を豊かに持つようになる。

### [授業計画と内容]

授業の進行具合や受講生の人数、関心により、巡検対象地は変更する可能性がある。

## 地域空間論II B (2)

- 第1回 概要説明、発表の担当分け  
第2回 桶狭間の合戦の地理：事例として講義  
第3～14回 講読、発表  
\* 12/17 (日) 清須or安土巡検 (予定、変更の可能性あり。初回で日程決定)  
第15回 総括

### 【履修要件】

特になし

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

期末レポート40%  
平常点 (出席、発表、読図・討論・巡検への参加) 60%

### 【教科書】

使用しない

### 【参考書等】

(参考書)  
授業中に紹介する

### 【授業外学習 (予習・復習) 等】

担当分の発表を準備したり、次回テキストを読んでから授業に臨むことが予習となる。講義で示した関連文献を読むこと、巡検のまとめを作成することが復習となる。

### (その他 (オフィスアワー等))

授業では、毎回A3サイズの大判の地形図を配布し、着色・記入して読図・討論の素材とする。そのため、赤・青・黄色・緑の最低4色以上の色鉛筆 (消しゴムで消せるものがベター、色鉛筆のセットが便利) と、文字を書き込むことのできる色ペンを複数本準備し毎回持参すること。中学・高校で使用した地図帳を持参するのがベター。

巡検は、授業の一環なので、受講生はできるだけ日程を事前に確保し参加してほしい。巡検に係る交通費・入館料等と遠足用レクリエーション保険料 (1回につき50円程度) は自己負担である (保険やJRの団体割引交通費を申請した場合は、事前に徴収する)。現地では、交通安全に十分気をつけることはもちろんだが、念のため、生協の学生総合共済等の各自が加入している保険の情報を確認しておく。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	地域空間論III A Region, Space, and Environment IIIA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小方 登					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
地理情報をコンピュータで処理・表示するためのモデル化についてその原理を講じる。地理情報処理の実例として衛星画像の処理・分析を主に取り上げる。地形図が利用できない地域でも利用できる衛星画像は、グローバルなスケールで有効な地理情報ソースとして位置づけることができる。コンピュータを利用した実習も含む。											
<b>【到達目標】</b>											
地理情報をコンピュータで処理・表示するためのモデル化および衛星画像の処理・分析への理解の増進を目標とする。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>1) 地理情報のモデル化 地表の現実ないし地図の内容をコンピュータで扱うためのモデルとして、ベクトルモデルとラスターモデルの2つを取り上げ、それぞれの特質について説明する。コンピュータで地形を処理・分析するために、ラスターモデルに基づく格子DEM ( Digital Elevation Model ) が適していることなどについて考察する。</p> <p>2) リモートセンシングの原理と応用 ラスターモデルに基づく地理データの例として、衛星画像を取り上げる。衛星画像の利用はリモートセンシングに含まれるが、その原理について、それが電磁波の観測に基づくことなどを説明する。また大気・地表・海洋の観測など、応用分野ごとの特徴について考察する。</p> <p>3) 衛星による地球観測 地球観測衛星の運用方法について説明する。地球観測衛星の光学センサー、合成開口レーダーについて解説し、さらに近年利用可能になった高解像度衛星の性能について紹介する。さらにデータの入手方法について説明する。</p> <p>4) 衛星画像の分析と表示 コンピュータを利用した衛星画像の応用は、地表の土地被覆についての処理・分析が中心だが、それらについて紹介する。衛星画像の複数バンドを用いた合成色表示植生分布の指標化、最尤法に基づく土地被覆分類の原理を説明した上で、コンピュータを用いた実習を行う。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
期末レポートによる。											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
<b>【参考書等】</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
----- 地域空間論III A (2)へ続く -----											

地域空間論ⅢA(2)

---

( 関連URL )

<http://www.hgeo.h.kyoto-u.ac.jp/ogata/>(小方研究室ホームページ)

[授業外学習(予習・復習)等]

メディアセンターの端末や自宅のパソコンにおいて、授業で扱う内容を実行することができるので必要に応じて予習・復習を行うこと。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーは、月曜11:00~12:30である。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	地域空間論III B Region, Space, and Environment IIIB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小方 登					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
地形データ（DEM）や空中写真・衛星画像の遺跡探査や歴史景観復原などへの応用事例を取り上げ、講じる。このような研究を外国で行う場合、地形図や空中写真等のデータの入手性に制約されがちであったが、近年はグローバルなデータも利用可能となったので、中国やシルクロード地域を対象地域として重点的に取り上げる。											
<b>【到達目標】</b>											
地形データ（DEM）や空中写真・衛星画像の遺跡探査や歴史景観復原などへの応用についての理解の増進を目標とする。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>1) 1995年に公開された米国偵察衛星写真（CORONA衛星写真）の仕様について説明し、応用可能性を検討する。この衛星写真は高解像度であるほか、撮影時期が古い（1960年代）という点でも利用価値の高いものである。</p> <p>2) 中東地域に典型的にみられるテル（遺丘）の景観について、CORONA衛星写真を利用した既往研究を紹介し、検討する。</p> <p>3) 地中海地域におけるフェニキア・ポエニ（カルタゴ）文化に基づく都市の都市の立地とプランについて検討する。これらは海上貿易に基礎をおいていたので、立地のポイントは港湾にあった。これらの都市が、ローマ帝国にどのように引き継がれたかについても考察する。</p> <p>4) 中央アジアのオアシスに見られる都市・集落遺跡を検討する。都市・軍事施設や灌漑施設（用水路）の痕跡のあり方について考察する。世界の乾燥地域に展開するオアシスの存在形態は、地形などを反映して地域ごとに多様である。中央アジアのシルクロード地域では、山脈の山麓に連なる扇状地の形態を取るものが多い。扇状地オアシスの水利システムについて、廃墟となった水路跡を衛星画像上で検討することなどを通して考察する。</p> <p>5) 渤海国の都城などを事例として、7～9世紀の東アジア都城に見られる共通の特徴（日本の平城京・平安京に見られる条坊制など）について検討する。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
期末レポートによる。											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
----- 地域空間論III B (2)へ続く -----											

地域空間論III B (2)

( 関連URL )

<http://www.hgeo.h.kyoto-u.ac.jp/ogata/>(小方研究室ホームページ)

[授業外学習 ( 予習・復習 ) 等]

必要に応じて，授業内容の復習を行うこと。

( その他 ( オフィスアワー等 ) )

オフィスアワーは，月曜11：00～12：30である。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	環境構成論III Theory and History of Environmental Construction III				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 増井 正哉					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語

#### [授業の概要・目的]

いわゆる町づくり・村づくりにおいて、景観の保存・整備を中心に据えた取組が、世界各地で見られるようになってきた。日本の都市計画・地域計画において、とくに「景観」の重要性が指摘されるようになったのは1970年代からであるが、「景観法」など、実際にその制度的メニューが整備されてくるのは今世紀に入ってからである。「文化的景観」に代表される、景観に対する新しい見方/考え方も広く知られるようになってきている。ただ、その一方では、各地から「景観問題」が変わりなく聞こえてくる現状があり、積極的な保存整備の結果として地域の特徴が失われてしまった例も少なくない。

この授業では、「生業と景観」、「民族性・地域性と景観」、「景観の歴史的重層性」など、景観保全と整備に関する実践的取組のなかで、また建築学・都市計画学等の関連領域において議論されている今日的課題について紹介し、保全・整備の制度設計のあり方を考えていく。

#### [到達目標]

- ・ 景観の保存・整備における今日的テーマについて理解する。
- ・ 都市・集落の景観形成のプロセスを理解する。
- ・ 都市・集落の景観形成が、維持管理のシステムとどのように関わっているかを理解する。
- ・ 地域再生・活性化における景観整備・保全の位置づけについて理解する。

#### [授業計画と内容]

- 第1回目 都市・集落の景観形成プロセスと景観整備・保存・再生の今日的課題
- 第2回目 生業と景観形成(1)
- 第3回目 生業と景観形成(2)
- 第4回目 儀礼と景観形成(1)
- 第5回目 儀礼と景観形成(2)
- 第6回目 生活景の再評価(1)
- 第7回目 生活景の再評価(2)
- 第8回目 景観の歴史的重層性(1)
- 第9回目 景観の歴史的重層性(2)
- 第10回目 景観における地域性・民族性とその保存・継承(1)
- 第11回目 景観における地域性・民族性とその保存・継承(1)
- 第12回目 防災・減災と景観形成
- 第13回目 景観形成と維持管理の制度設計(1)
- 第14回目 景観形成と維持管理の制度設計(2)
- 第15回目 試験

フィードバックの方法は別途連絡します。

## 環境構成論III(2)

### 【履修要件】

特になし

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

試験（50点）、中間のレポート（40点）、授業への積極的な参加（10点）により評価する。

### 【教科書】

授業中に指示する

- ・授業で使う資料は、KULASISを通じて配布する。

### 【参考書等】

（参考書）

授業中に紹介する

### 【授業外学習（予習・復習）等】

- ・授業時、次回分の参考文献・webサイト等を指示するので、目を通しておくこと。
- ・各回ごとに、授業内容に関連する事例と文献を紹介する。復習し、第15回目の試験の準備をしておくこと。

### （その他（オフィスアワー等））

- ・オフィスアワー（KULASISに掲示）の来室、メールでの相談を歓迎します。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	環境構成論IV Theory and History of Environmental Construction IV	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 中嶋 節子
---------------	--	-----------------	--------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

「景観」は人間の営みの結果として立ち現れる。建築物や土木構築物によって構成される市街地景観はもちろんのこと、それらを取り巻く、あるいはそれらの中に取り込まれる山や森林、河川といった自然景観もまた、それぞれの時代の生活や社会、思想を映し出すものとして存在する。ここでは、わが国において景観がいかに扱われ、そしていかに変容してきたのかについて、建築史、都市計画史、造園史、景観工学などの視点から歴史的にたどり、その性格を分析することで、生活環境としての「景観」の意味を考究する。とりわけ、近代における「景観」の意識変化、まなざしの転換を、西洋文化との出会い、近代化と風景観との関係、近代都市計画の影響などから検討する。

#### [到達目標]

われわれをとりまく環境の歴史とその構成の意味を理解することで、環境の未来を考える基礎的知識を獲得する。また、現在の環境を分析・考察する視座と方法論を学ぶ。

#### [授業計画と内容]

以下の内容について講義する。ただし、内容は前後することがある。

- 1．生活の表出としての山並み景観 - 京都の山並みの中世・近世
- 2．つくられた山並み景観 - 京都の山並み近代
- 3．つくられた名所・まもられた名所
- 4．イメージされる風景・景観
- 5．日本における風景論の系譜
- 6．新しい風景観の誕生
- 7．都市計画における景観保護の推移
- 8．景観工学の視点から
- 9．記憶の再生（災害・戦災復興を契機として）
- 10．現代における風景の創造

講義内容に関係する見学会を1～2回行う予定。履修人数によって変更の可能性あり。

見学会 近代的景観の創出 見学会 京都の近代化

#### [履修要件]

特別な予備知識は必要としない。都市や歴史に興味があることが要件となる。

#### [成績評価の方法・観点及び達成度]

授業への参加姿勢と小レポート、期末レポートで評価する。

## 環境構成論IV(2)

### [教科書]

使用しない  
毎回の授業でレジュメと資料を配布する。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業で扱う場所やテーマについて、現地を実際に訪れて理解を深めていただきたい。

### (その他(オフィスアワー等))

積極的な授業参加と発言を期待する。質問等の機会については個別に対応する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	社会人類学演習 A Seminar of Social Anthropology A	担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 准教授 岩谷 彩子
---------------	---	-----------------	------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

文字の発明から、印刷技術やデジタル技術の進歩にいたるまで、メディアは人類の思考様式に多大な影響を与えてきた。一方で、声（音）や身ぶりといった、身体と直結するコミュニケーションの様式は、有史以来人類にとって重要な相互行為の次元を形成してきており、そのような身体知の解明がますます求められつつある。本講義では、人類が用いる複数のコミュニケーションの様式の違いと思考様式の現代的な様相について、関連する文化人類学的な文献を購読することで探求する。

#### [到達目標]

- ・文字、図像、映像、音を単なる表象の乗り物としてではなく、それ自体が人類の思考の枠組みを形成するメディアとしてとらえること。
- ・「声の文化」と「文字の文化」とを二項対立的にとらえるのではなく、それらの相関関係と重層性について考察すること。

#### [授業計画と内容]

講読を予定している著作は、  
W-J・オングの『声の文化と文字の文化』（藤原書店）と  
ティム・インゴルドの『ラインズ 線の文化史』（左右社）である。  
各章を分担して全員で読みすすめ、授業では各章に関する議論を行う。  
おおまかな内容は以下のとおりである。

- 1．声としてのことば
- 2．近代における声の文化の発見
- 3．声の文化とはなにか（1）
- 4．声の文化とはなにか（2）
- 5．書くことによる意識構造の変化（1）
- 6．書くことによる意識構造の変化（2）
- 7．印刷文化
- 8．声の文化と記憶
- 9．発話と音楽
- 10．軌跡・ラインを引くということ
- 11．横断するということ
- 12．系譜をたどる
- 13．線描と記述
- 14．直線になったライン

なお、随時関連する内容の他の文献紹介や研究報告を担当教員が行う。

## 社会人類学演習 A(2)

### [履修要件]

文化人類学・社会人類学関係の講義を少なくとも一つ履修していることが望ましい。

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

出席回数、担当章の発表内容、討論への参加態度を総合して、評価する。

### [教科書]

W-J・オング 『声の文化と文字の文化』（藤原書店）  
ティム・インゴルド 『ラインズ 線の文化史』（左右社）

### [参考書等]

（参考書）

Lefebvre, Henri 『Rhythmanalysis』（Continuum）  
アンドレ・ルロワ＝グーラン 『身ぶりと言葉』（ちくま学芸文庫）  
菅原和孝 『ことばと身体 『言語の手前』の人類学』（講談社選書メチエ）

### [授業外学習（予習・復習）等]

各自が報告する章のみならず、他の章や講義で参照する文献に目を通し、授業中の議論に積極的に参加すること。

### （その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	社会人類学演習 B Seminar of Social Anthropology B				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 准教授 岩谷 彩子					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
本講義では、「情動論的展開 (affective turn)」とも呼ばれる、情動への新たな理論的関心の高まりを、人類学の文脈で再検討することを目的とする。情動は身体的反応をともなって形成され、人々の世界に対する認識や評価を左右するが、その多様な側面から、いまだ多くの理論的な課題を抱えている。本講義では情動について提出されてきた理論的な課題について、情動をめぐる理論的な文献と具体的な民族誌の講読を通して考察していくことを目指す。											
<b>[到達目標]</b>											
情動をめぐる理論的な関心を、具体的な民族誌的なデータや受講生の日常生活の事例を通して探求する方途をつかむこと。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業は、講義と文献購読によって進められる。以下のテーマにしたがって提示される文献を分担して精読する。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 情動と人類学</li> <li>2. 情動とは何か</li> <li>3. 情動と身体</li> <li>4. 情動ともの</li> <li>5. 情動と空間</li> <li>6. 情動をめぐる民族誌 ( 1 )</li> <li>7. 情動をめぐる民族誌 ( 2 )</li> <li>8. 情動をめぐる民族誌 ( 3 )</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
文化人類学・社会人類学関係の講義を少なくとも一つ、1回生時に履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況、文献報告、討論への参加度合を総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書)											
ジョセフ、ルドゥー 『エモーショナル・ブレイン 情動の脳科学』 (東京大学出版会)											
菅原和孝 『感情の猿 = 人』 (弘文堂)											
ダマシオ、アントニオ 『感じる脳 情動と感情の脳科学 よみがえるスピノザ』 (ダイヤモンド社)											
西井涼子 『情動のエスノグラフィ 南タイの村で感じる *つながる *生きる』 (京都大学学術出版											
社会人類学演習 B (2)へ続く											

社会人類学演習 B (2)

会)  
信原幸弘・太田紘史 『新・心の哲学III 情動篇』 (勁草書房)  
ロサルド、レナート 『文化と真実 社会分析の再構築』 (日本エディタースクール出版部)  
Clough, P.T. 『The Affective Turn: Theorizing the Social』 (Duke University Press)  
Gregg, M. and Seigworth, G.J. 『The Affect Theory Reader』 (Duke University Press)

**[授業外学習 (予習・復習) 等]**

各自が報告する文献のみならず、講義で参照する文献にはできるだけ目を通し、講義に臨むこと。

**(その他 (オフィスアワー等) )**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	生態人類学演習 A Seminar of Ecological Anthropology A				担当者所属・ 職名・氏名	アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授 高田 明					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
生態人類学は、人々の生活を環境の諸要素との緊密な相互関係の総体として把握することを目指している。本演習では、生態人類学およびその関連分野（文化人類学、言語人類学、生態心理学、生態学など）の文献を題材とした討論を行うことを通じて、これから環境認識、環境の利用、環境に対する権利について研究していくための論点を整理する。2017年度は、昨年度に引き続き、ほぼ同時代（19世紀後半～20世紀前半）に活躍した2人の哲学者、Henri BergsonとWilliam Jamesの邦訳文献を集中的に検討することを通じて、現在の生態人類学の底流となっている経験論について考える											
<b>[到達目標]</b>											
人々の生活と環境の関係について研究していくための多様なアプローチについて学び、それをふまえて自らの関心を追究する基礎的な力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下のような課題書籍(BはBergson, JはJamesによる書籍)とその関連文献について、それぞれ2～3週の授業をする予定である。トピックについては、受講生の関心を考慮して適宜調整する。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 笑い(B)：初版1900</li> <li>2. プラグマティズム(J)：初版1907</li> <li>3. 創造的進化(B)：初版1907</li> <li>4. 多元的宇宙(J)：初版1909</li> <li>5. 思想と動くもの(B)：初版1934(1903-23の論文・講演集)</li> <li>6. 純粹経験の哲学(J)：初版1912</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
主として授業中の報告による。討論の内容・積極性を重視する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業中に指示する文献を読んで、他の受講者に説明してもらう機会を設ける予定である。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	生態人類学演習 B Seminar of Ecological Anthropology B				担当者所属・ 職名・氏名	アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授 山越 言					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>「私」の属する「われわれ」は、時と場合により「人類」「ヒト」「XX国民」「男性/女性」「常民」「近代人」など、複層的に定義されて用いられている。いっぽうこの「われわれ」概念は、同様に複層的な「他者」との境界に位置する存在（人工生命・ロボット・古人類・類人猿・「在日・ゲイ/レズビアン・鬼/山人・「未開人」など）によって不断に脅かされてもいる。本演習では、このような「われわれ」をめぐる諸言説について、人類学およびその関連分野（認知心理学・考古学・霊長類学・エスニシティ論・フェミニズム研究・民俗学等）の文献や小説・映画などを題材に討論し、理解を深める。</p>											
【到達目標】											
<p>独自の発想に基づいた「われわれ」論を展開することで、概念枠組みを使い、疑い、発展させることを実践的に学ぶ。また、他の参加者の枠組みを批判・批評することを通して、対話的・建設的な議論に慣れ親しむ。 そのような討論を通じて、文化人類学やその周辺分野における最新のトピックを理解する。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>以下のような課題について、1課題あたり1～5週の討論をする予定である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1．文化人類学における我々と他者（ロマン主義、アニミズム、トーテミズム、構造主義人類学、トリックスター論、巡礼・旅行記）</li> <li>2．認知心理学・認識哲学における我々と他者（ロボット工学、他我問題、不気味の谷、クローン人間、心の理論）</li> <li>3．進化人類学における我々と他者（人とチンパンジーの間、言語・宗教・芸術の起源、人獣共通感染症、動物の権利運動）</li> <li>4．民俗学における我々と他者（妖怪論、常民・山人、鬼・山伏、異人論）</li> <li>5．その他（サイボーグ・フェミニズム、エスニシティ論、オリエンタリズム、想像の共同体、木は法廷に立てるか、登山・探検、宮崎アニメ）</li> </ol>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
討論への参加の内容・積極性を平常点評価する。											
【教科書】											
資料は適宜配布する。											
【参考書等】											
（参考書） 授業中に紹介する											
----- 生態人類学演習 B (2)へ続く -----											

生態人類学演習 B (2)

( 関連URL )

<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/member/yamakoshi.html>

[授業外学習 ( 予習・復習 ) 等]

日常的な知的関心や問題意識に基づいて討論を行います。特段の予習等は必要ありません。

( その他 ( オフィスアワー等 ) )

積極的な授業参加、発言を高く評価する。

オフィス・アワーは特に定めないが、講義時間外に直接連絡を取りたい学生は、山越 ( yamakoshi@jambo.africa.kyoto-.ac.jp ) までメールすること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	地域空間論演習 Seminar on Region, Space, and Environment I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 小島 泰雄					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>「地域を考える」とは、どのような知的営為なのだろうか。地理学が培ってきた方法や技法の習得を通して、地域に着目する意味と意義について理解を深めることが、この授業の目的である。具体的な地域（2011年度は「亀岡市」、2012年度は「宇治市」、2013年度は「久御山町」、2014年度は「長岡京市」、2015年度は「城陽市」、2016年度は「八幡市」）を定めて、受講生が協同して調査研究を行うことで、地域を考える多様なアプローチに触れる。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>地理学の地域調査について、基本的な方法を習得できる。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>授業はゼミ・演習の形式で行う。 以下の項目について、1課題あたり1-3週の授業をする予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地図を読む/書く</li> <li>・地誌などの文献を利用する</li> <li>・統計を分析する</li> <li>・巡検を行う</li> <li>・論文を使う</li> <li>・地誌に関する発表をする</li> <li>・受講者で共同して報告書を作成する</li> </ul>											
<b>[履修要件]</b>											
<p>ゼミナール形式で行われることから、毎回出席できることを前提とする。また、対象地域を訪問する1日巡検には、できるだけ参加すること。 全学共通科目の地理学関連科目および学部科目「地域空間論」を履修していることが望ましい。 三回生前期での履修を標準とするが、他の学年での履修も可能である。</p>											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>授業への参加度（出席、課題への対応、最終レポート）によって評価する。</p>											
<b>[教科書]</b>											
<p>使用しない</p>											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書） 授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
<p>授業では口頭発表とディスカッションを行うことから、自らのテーマについて準備をして授業に臨むこととなる。また最終レポートとして提出されたものを、受講生の共同報告書にまとめて製本し、受講生と協力を得た行政担当者等に配布する。</p>											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
<p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	地域空間論演習II Seminar on Region, Space, and Environment II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 山村 亜希					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>京大構内（本部・吉田南・西部・医学部・北部）や京大周辺（吉田・岡崎）の明治・大正期と現代の地形図を比較し、地域の変遷・成り立ちを考えるとともに、身近な場所のフィールドワークを行う。</p> <p>京大構内に関しては、既に他の授業で行った本部構内の記念物調査例を参考に、北部と医学部構内において、記念物（石碑・銅像・記念樹・庭園等）を探して、全て地図化する。それら一つ一つの歴史や由来を分担して調査し、レポートにまとめて発表する。それらの分布を全てまとめて地図化し、全体の意味を討論して考えたい。</p> <p>吉田・岡崎に関しては、町中を歩きながら、寺社や記念物、地蔵、道標などを地図化し、構内と同様にその歴史や由来を調査して、レポートにまとめて発表する。特に、黒谷の金戒光明寺の墓地については、墓石の時代幅や様式も多様で、墓石の地図化をふまえて、成り立ちを重点的に考える。</p> <p>このように本授業は、実際の景観を歩き、詳細に観察しながら、今に生きる過去の景観の痕跡を地図化し、その意味を現場で考えるトレーニングとしたい。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
身近な景観の中に歴史の痕跡を発見する視点や方法が身につく。景観と歴史・文化の関係について学び、京都を新たな視点で見直すことができるようになる。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
第1回 授業の概要説明、発表順の調整 第2～13回 京大構内・京大周辺の景観調査と地図化、発表 第14回 まとめ 第15回 フィードバック											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席、レジュメと発表、討論での発言と議論を総合的に判断して評価する。											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
----- 地域空間論演習II(2)へ続く -----											

## 地域空間論演習II(2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

新旧地形図の対照や景観実地調査について、授業時間内に終わらなかった場合は、宿題となる。最低2回のレポートの作成が予習・復習に相当する。

### (その他(オフィスアワー等))

初回授業で予定を調整するので、初回授業には必ず参加のこと。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	地域空間論演習III Seminar on Region, Space, and Environment III				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小方 登					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
地理学の学術研究に関連して、研究論文の購読やデータの処理・分析を通して、理論と応用を学ぶ。											
<b>[到達目標]</b>											
地理学的なものの見方、考え方を獲得するとともに、文理の枠を超えた学問のあり方について理解を深めることを目標とする。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
例年、ゼミ形式で授業を行っており、研究論文の紹介やデータ分析結果の報告などを、各自が発表する形で進めている。しかし、総合人間学部の特質により、受講する学生の関心分野は多様である。地理学が扱う研究対象もまた、自然・人文の多岐にわたる。従って、対象とする主題は受講生の関心に応じて臨機応変に設定したい。 たとえば、コンピュータ上で衛星画像や地形データ（DEM）を利用して、地形と土地利用の間の関係を分析するなどのテーマを設定し、各受講者が独自に研究する。日本においては、起伏の多い土地（山地）が森林で覆われているのが特徴であるが、外国の場合どうであるかといったテーマが考えられよう。 文献（書籍や論文）の形で存在する既存の研究成果を把握することは、どの学問分野でも研究の基本であるので、文献探索・利用の方法について授業の最初に指導する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
ゼミでの発表、発表内容に基づくレポートによる。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
ゼミで行う発表の準備と、発表後のまとめを行うことが必須である。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーは月曜11：00～12：30です。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	文化交渉複合論演習 A Seminar : Cross-Cultural Relations in Arts A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 勝又 直也					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>ヘブライ語は、古代では一神教の元祖であるユダヤ教の聖書の言語として、中世では各国でマイノリティとして生きるユダヤ人の共通語として、現代ではイスラエルの国語として用いられている言語です。</p> <p>どの時代のことを学ぶにも、現代ヘブライ語から習得するのが早道です。</p> <p>この授業では、現代ヘブライ語の初級を学びます。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
現代ヘブライ語の初歩を、読む、書く、話す、聞くという側面から、総合的に習得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>イスラエルのウルパンで使われているヘブライ語の学習テキストを使用します。原則として、毎週1課、進めていきます。</p> <p>前期の目標：1課～15課</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
毎週の授業への積極的な参加（80％）と、小テスト（20％）で評価します。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書）</p> <p>授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
毎回宿題をしっかりとやってくる必要があります。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
katsumata.naoya.5c@kyoto-u.ac.jpにて、質問を受け付ける。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	文化交渉複合論演習 B Seminar : Cross-Cultural Relations in Arts B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 勝又 直也					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>ヘブライ語は、古代では一神教の元祖であるユダヤ教の聖書の言語として、中世では各国でマイノリティとして生きるユダヤ人の共通語として、現代ではイスラエルの国語として用いられている言語です。</p> <p>どの時代のことを学ぶにも、現代ヘブライ語から習得するのが早道です。</p> <p>この授業では、現代ヘブライ語の初級を学びます。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
現代ヘブライ語の初歩を、読む、書く、話す、聞くという側面から、総合的に習得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>イスラエルのウルパンで使われているヘブライ語の学習テキストを使用します。原則として、毎週1課、進めていきます。</p> <p>後期の目標：16課～30課</p>											
<b>[履修要件]</b>											
前期の文化交渉複合論演習 A を履修している、あるいは同レベルの現代ヘブライ語を習得していること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
毎週の授業への積極的な参加（80％）と、小テスト（20％）で評価します											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書）</p> <p>授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
毎回宿題をしっかりとやってくる必要があります。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
katsumata.naoya.5c@kyoto-u.ac.jpにて、質問を受け付ける。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	東アジア比較芸能論演習 A Seminar on Comparative Studies of North-East Asian A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 赤松 紀彦					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
中国明代の白話小説を読む。白話小説とは、語り物に由来する、当時の白話すなわち話し言葉を有力な表現手段とした小説をいう。日本でもよく知られたものに、《水滸伝》、《西遊記》などの長篇作品があるが、この授業では、話本と呼ばれる短編小説を読み進める。											
<b>[到達目標]</b>											
明代白話小説は、江戸時代には我が国でも大いにもてはやされた。そうした作品を実際に読み解くことによって、中国における古典小説についての知識を深める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
《警世通言》所収の<白娘子永鎮雷峰塔>を取り上げる。 第1、2回：中国小説史の概説と、白話小説の特徴についての紹介 第3回以降：担当者により、毎回訳注を作成して発表してもらいながら、授業をすすめる。											
<b>[履修要件]</b>											
現代中国語ならびに中国古典文学についての十分な知識があること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点による。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
毎回、訳注を作るが、とくに担当者はたんねんに準備する必要がある。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィス・アワー：水曜午後1時～5時(A124研究室) メールアドレス：akamatsu.norihiko.3x@kyoto-u.ac.jp											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	東アジア比較芸能論演習 B Seminar on Comparative Studies of North-East Asian B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 赤松 紀彦					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
中国明代の白話小説を読む。白話小説とは、語り物に由来する、当時の白話すなわち話し言葉を有力な表現手段とした小説をいう。日本でもよく知られたものに、《水滸伝》、《西遊記》などの長篇作品があるが、この授業では、話本と呼ばれる短編小説を読み進める。											
<b>[到達目標]</b>											
明代白話小説は、江戸時代には我が国でも大いにもてはやされた。そうした作品を実際に読み解くことによって、中国における古典小説についての知識を深める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
中国の伝統演劇は、元雜劇、宋元南戲、明清伝奇と数多くの作品を生み出し、演じられるものとしての演劇としてだけではなく、文学作品としても、文学史の中で独自の位置を占めてきた。こうした伝統演劇作品の代表作の一つとして、清の孔尚任による『桃花扇』をとりあげ、たんねんに読みすすめる。											
<b>[履修要件]</b>											
現代中国語ならびに中国古典文学についての十分な知識があること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点による。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
毎回、訳注を作るが、とくに担当者はたんねんに準備する必要がある。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィス・アワー：水曜午後1時～5時(A124研究室) メールアドレス：akamatsu.norihiko.3x@kyoto-u.ac.jp											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	環境構成論実習II Practical Seminar on Environmental Construction II				担当者所属・ 職名・氏名	和歌山大学教授 小野 健吉					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金5	授業 形態	実習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>「都市計画マスタープラン」と「景観計画」は、共に都市の景観形成を方針付ける性格を持つ。前者は多様な都市機能を含めた総合的な観点から、後者は景観形成に特化した観点から策定されるが、都市の様々な構成要素の関係によって構成される「景観」の性質上、都市の全体像は景観形成と大きく関わってくる。両計画立案段階のプロセスと議論の推移を元に、両計画が市街地環境の形成と保全に果たす役割を考える。また、同一自治体の関連計画の比較、異なる自治体間の同一計画の比較を通して、自治体の意思決定のプロセスと市民参加の役割を考える。</p>											
[到達目標]											
<p>1)行政文書より適切な情報を抽出し、課題に沿った要点を他のメンバーと共有する。 2)市街地環境の形成における都市計画と景観計画の役割を理解する。 3)行政計画の決定に際する市民参加の意義を理解する。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>1. イントロダクション(3週) 1)授業の進め方と準備・発表の方法を周知する。出席者の担当部分を決定する。 2)課題の背景となる制度及び、自治体計画行政について概説する。 3)京都市を題材に、課題の進め方について例示を行う。 2. 課題演習(4から14週) 分担自治体に関する行政文書の調査収集とプレゼンテーション。担当自治体の資料を収集し情報として整理する。その内容をわかりやすく解説するとともに、自身の分析、意見や感想も加える。 3. 演習総括(15週)</p>											
[履修要件]											
環境構成論 を履修していることが望ましい。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業への積極的参加(出席、討論)(30点)と課題(70点)によって評価する。											
[教科書]											
重要文献は授業中に指示する											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習(予習・復習)等]											
演習課題に取り組むにあたって、授業外の時間に資料の収集、整理、分析等を行うことが求められる。											
(その他(オフィスアワー等))											
質問等は講義終了後に講義室にて受け付ける。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	環境構成論実習III Practical Seminar on Environmental Construction III				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 増井 正哉					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	実習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>テーマ：歴史的環境の保存活用計画の作成</p> <p>歴史的環境の保存と活用は、地域の再生・活性化にあたって、当たり前ツールとなってきた。実際、各地でその取組と成果が見られる。行政的なメニューも出そろってきた。ただ、その一方では、様々な形で継承されてきた歴史遺産（歴史的環境の構成要素）の再評価が十分ではなく、新しい整備事業のなかで価値が失われてしまう例や、有形・無形の歴史遺産相互の関連づけが行われず、活用が適切に行われていない例が数多く見られる。この実習では具体的な歴史的市街地・集落を対象を設定し、対象地区における歴史遺産の再評価の方法、遺産相互の関係性に重点をおいた活用のあり方に重点を置きながら、保存活用計画を作成する。この年度は、古代中世の遺跡を地区内にもつ奈良の歴史的集落の調査・計画作成を予定している。</p>											
【到達目標】											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史遺産の評価手法を理解する。</li> <li>・具体的な保存活用計画を作成するプロセスを理解する。</li> <li>・地区の特性と課題を抽出する能力を身につける。</li> <li>・自治体へのプロポーザルレベルのプレゼンテーション能力を身につける。</li> </ul>											
【授業計画と内容】											
<p>第1回           オリエンテーション</p> <p>第2～4回       関連事例研究 受講生が1～2地区を担当</p> <p>第5～9回       当該地区に関する調査・研究 1, 2回の現地調査</p> <p>第10～14回    保存活用計画の検討 現地での補足調査を含む</p> <p>第15回        保存活用計画のプレゼンテーション 対象地区での実施を検討中</p> <p>第16回        フィードバック 別途指示するフィードバック時間に実施する。</p>											
【履修要件】											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スタート時点では、とくに歴史遺産（遺跡・建築・景観等）に関する知識、関連する調査技術は必要ではない。</li> <li>・同じく、スタート時点ではプレゼンテーションツール（パワーポイント等）の知識が必要ではないが、最終回までに使えるように自習をすすめる。</li> </ul>											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価方法 最終プレゼンテーション（50%）、中間の提出物とプレゼンテーション（50%）</li> </ul>											
----- 環境構成論実習III(2)へ続く -----											

## 環境構成論実習Ⅲ(2)

### [教科書]

授業中に指示する

### [参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

- ・ 計画作成のステージごとに課題(関連資料収集、計画素案作成等)を与える。
- ・ 内容は毎回の実習時に指示する。

### (その他(オフィスアワー等))

- ・ オフィスアワー(KULASISに掲示)の来室、メールでの相談を歓迎します。
- ・ 学外での実習(奈良県下を予定)にあたっては、交通費が発生します。受講生の負担となります。
- ・ 学生教育研究災害保険等の傷害保険に加入してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	環境構成論実習IV Practical Seminar on Environmental Construction IV				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 中嶋 節子					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	実習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
建築史，都市史，造園史，都市工学，美術史などの諸分野における都市景観，形態をめぐる論考を講読し，「景観」の生成の契機，社会的・文化的背景，その変容について考察する。加えて現地見学を行い，現在の都市に歴史的痕跡を見出すことで，現在に至る景観変容の過程を把握する。景観形成の歴史的な理解は，現在の景観問題を考える前提として重要である。											
<b>【到達目標】</b>											
われわれをとりまく環境の歴史とその構成の意味を理解することで，環境の未来を考える基礎的知識を獲得する。また，現在の研究の到達点と，課題を把握する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
授業開始時に提示する著書あるいは論文について以下の課題を行う。											
課題1 分担論文に関するプレゼンテーション 担当論文の内容をわかりやすく解説するとともに，関係する資料や論文，著書等を紹介する。また自身の分析，意見や感想も加える。 配布するレジュメの作成 レジュメの内容：内容の要約と解説＋関係する資料・論文・著書 プレゼンテーション 1 論文あたり1時間程度を予定 写真，図面，絵画資料などヴィジュアルな資料を盛り込む											
課題2 レポート作成 授業中に指示する内容について期末までにレポートを作成する。  内容に関する見学会を1～2回開催する。											
<b>【履修要件】</b>											
環境構成論 を履修していることが望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
授業への参加姿勢（出席・発言）と課題1、課題2によって評価する。											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
----- 環境構成論実習IV(2)へ続く -----											

環境構成論実習IV(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

授業で扱う論文・著書をあらかじめ読み込んでおく。また、授業で扱う場所やテーマについて、現地を実際に訪れて理解を深める。

**（その他（オフィスアワー等））**

積極的な授業参加と発言を期待する。事業外の資料作成、論文講読、フィールドワークが必須である。質問等の機会については個別に対応する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：東洋史入門 Introductory Seminar: Primary Asian History				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 太田 出					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
アジア史（東洋史）の基礎的な知識を身につけ、また自分の言葉で発表・表現ができるよう練習することを目的とする。具体的には、受講生全員に『世界史リブレット』（山川出版社）1冊を読んでもらい、レジュメを作成、30～40分ほどで簡単な内容と読後感を発表してもらい、さらに30～50分ほど質疑応答を行う。質疑応答にはしっかり応えられるよう発表者には下調べ・準備が求められる。											
<b>[到達目標]</b>											
先行研究を正確に読み込んで整理したうえでレジュメを作成し、自分の言葉で発表・報告する技術をみがく。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
基本的には毎回1、2名程度の受講生に発表してもらう（受講生の人数によって異なる）。『世界史リブレット』（山川出版社）は歴史のみならず、政治、外交、軍事など幅広い分野を対象としているから、発表担当者の受講生にはしっかり読んで報告してもらおう。他の受講生は質疑応答の際、積極的な発言・議論・問題提起が期待される。受講生の積極的な取り組みが求められる。 テキスト：『世界史リブレット』（山川出版社）シリーズ											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点50%とレポート50%で総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する プリントして配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
受講生のうち発表担当者はテキストを熟読したうえでレジュメの作成・配布が求められる。担当者以外も興味のある内容ならば、関連書籍を予習してくるとより良い。											
（その他（オフィスアワー等））											
東洋史入門として基礎的な知識を身につけることから始めるので、将来東洋史に挑戦してみたいと考えている学生諸君の履修を希望する。 履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：地域地理学 Introductory Seminar: Regional Geography				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小島 泰雄					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>テーマ：地域を共感的に理解する 中国をフィールドとして</p> <p>地域は多様で重層的である。その多様性は、近代には地理教育として学びの対象に据えられた。そしてグローバル化が進展する現在、世界はフラット化するという楽観論とは裏腹に、地域の持つ意味、そして地域を理解する意味はむしろ増大している。地域地理学は地域を調べ、考え、そして伝えることに取り組んできたが、この授業では、地域地理学の基本的な方法について、中国をフィールドとして、作業とディスカッションを軸にゼミナールを行う。そして「共感的理解」とは何か、どうやって共感的理解にそこにたどり着くか、を考えてゆく。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域地理学の基本的な方法を習得する。</li> <li>・ 中国に対する理解を深める。</li> <li>・ ディスカッションする力、プレゼンテーションする力をつける。</li> </ul>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>ゼミナール形式で、授業は進められる。毎回提示される課題に関して、資料の収集や分析といった作業、あるいは口頭発表とそれをめぐるディスカッションを行う。受講生には中国に関する自らの興味関心を解明してゆくことが求められ、作業や発表の成果を最終的にレポートとしてまとめることになる。</p> <p>つぎのような課題が提示される。1課題あたり1～2週の授業を行う予定。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 「共感的理解」をめぐるディスカッション</li> <li>(2) 図書館で本を探す</li> <li>(3) 新聞記事を探し紹介する</li> <li>(4) 統計を使う</li> <li>(5) 主題図を描く</li> <li>(6) 論文を読む</li> <li>(7) ネットで情報を収集する</li> <li>(8) 個人のテーマを決めて発表する</li> <li>(9) 総合討論とレポートの提出</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
地理学および地域空間論に関する講義科目（種類は問わない）とあわせて履修することが望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
<p>平常点評価。</p> <p>出席・作業・発表・レポートによって、総合的に評価する。</p>											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
----- 基礎演習：地域地理学 (2)へ続く -----											

## 基礎演習：地域地理学 (2)

---

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業ごとに課題が提示されるので、次回授業までにそれに取り組む。  
授業の最終段階では口頭発表とレポート作成が課題となるので、中国に関して何をテーマとするか、自ら考えてゆくことが求められる。

### (その他(オフィスアワー等))

ゼミナール形式で行うことから、毎回出席できることを前提とする。それは、自らの作業・発表だけでなく、他の受講生の作業を見たり、発表を聞いて質疑を交わすことが、ゼミナールの重要な過程となるからである。

学部科目として履修する総合人間学部生は初回授業に出席すること。教室の収容人数を超えた場合には、履修動機により履修許可者を決める。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：地理情報 Introductory Seminar: Geographic Information				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 小方 登					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>地理情報処理およびコンピュータ・マッピングの応用。          現実の地理データに基づいて、コンピュータ・グラフィックスを用いた図化と分析の実習を行う。          mapRaster2, MANDARAなどの無料もしくは安価に利用できるソフトを利用し、地形・土地利用・          衛星画像・人口・経済指標などの各種地理データをコンピュータにより分析する。</p>											
[到達目標]											
地理情報の処理および表示について基礎習得を目標とする。											
[授業計画と内容]											
<p>§ 1．現実世界の地理的現象をコンピュータで扱うための、空間データモデルについて考察する。          具体的には、ベクトル・モデルとラスター・モデルと取り上げて、両者を比較する。          § 2．ベクトル・データとして保持される行政区域界のデータと、各行政区ごとの人口・経済指標          などの統計データを組み合わせて、空間モデルの適用や統計地図の作成・表示を行う。各自が対象          地域・統計データを選び、地図化して考察した結果をレポートする。          § 3．ラスター・データとして保持される地形データ（Digital Elevation Model : DEM）を利用して、          計量地形学的分析（斜面・曲率の算出）や鳥瞰図の表示を行う。          § 4．現在インターネット上でどのような地理データが利用できるかレビューし、それらの作成過          程などについて考察する。地形・土地被覆についてのグローバルな地理データを利用し、各自が興          味を持っている地域についての地誌をレポートする。</p>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席状況および課題提出											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
（関連URL） <a href="http://www.hgeo.h.kyoto-u.ac.jp/ogata/">http://www.hgeo.h.kyoto-u.ac.jp/ogata/</a> (小方研究室ホームページ)											
[授業外学習（予習・復習）等]											
ゼミナールで利用するソフトウェアは自宅でも利用可能なので、担当教員のホームページを参照し つつ、必要に応じ予習・復習すること。											
（その他（オフィスアワー等））											
ゼミナールにおいては、毎回の出席が不可欠である。オフィスアワーは、月曜11:00～12:30であ る。履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：歴史地理学 Introductory Seminar: Historical Geography				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 山村 亜希					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>本授業は、全国各地の現在と過去の地形図の比較を通じて、地域の特性を発見する視点と方法を学ぶ読図の入門ゼミである。授業では、明治・大正、昭和、平成の様々な時期の地形図を、受講生それぞれが選ぶ。それらを着色しながら比較し、地域の特性とその変化について、発表を行う。地図を読むと、それぞれの地域の成り立ちから現在の社会問題まで、地域の様々な姿が浮き彫りになる。地図帳や地形図を眺めるのが好き、旅行で知らない風景に出会えるのが好きといった地理好きの人には、この授業で読図の面白さをより深く知ってもらいたい。一般的には入手が難しい明治・大正期や昭和期の古い地形図を、発表の数だけ入手できるのも、この授業のメリットである。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
地形図の読図力、空間から物事を発想・推定する力、現実の景観の中に地域の特性や歴史を見出す観察眼と好奇心を涵養する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業の進度・受講生の関心に合わせて、一部変更する可能性あり。											
第1回 授業の概要説明 第2～4回 地形図の比較と読図（作業・討論） 第5～14回 新旧地形図を読む（発表・討論） 最終回 フィードバック											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
期末レポート30%、平常点（出席状況、作業、発表、コメントペーパーの提出等）70%											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
各自で対象地域を一つ選んで、地形図の読図を元にした発表をしてもらうので、地形図の準備から着色、分析などの作業が予習に相当する。発表の時に出的意見をもとに、さらに分析や調査を深めて文章化し、期末レポートとして作成してもらうことが復習となる。											
（その他（オフィスアワー等））											
総合人間学部の学生は、別途選抜を行うので、総合人間学部便覧のシラバスを確認のうえ、第1回授業に出席してください。授業では、色鉛筆（12色セットが望ましい、複数色は必要）を用いて作業を行うので、持参すること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：文化人類学調査法 Introductory Seminar: Cultural Anthropological Research				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 風間 計博					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>20世紀初頭以降、フィールドワークは、文化人類学において必須の資料収集方法として定着してきた。本演習は、文化人類学のフィールドワーク法を体得するための準備段階に位置づけられる。そのため、受講生の特徴や進捗状況に合わせて、以下を組み合わせることになる。</p> <p>1) 日本語で書かれた民族誌や方法論を輪読し、担当者が発表する。2) 受講生が自ら発見した身近な問題や現象について発表し、どのような調査を行うことが可能か議論する。3) 実践的なフィールドワークの計画を企画立案して発表する。4) 実際に現地に赴いて予備調査を行い、収集資料をまとめて発表・議論したうえで企画案をまとめる。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>受講学生それぞれが、自らの問題関心に基づいて、フィールドワークのための準備作業を行い、学期末までに実現可能な調査計画を立てることを目標とする。また、自らの発想や思考を具体的に発表し、活発に議論できるようになることを目指す。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>1. フィールドワークとはどのようなものか、方法論や問題点について参加者が議論する。状況に応じて、授業で提示する民族誌を輪読する。担当者は、要点をまとめたレジюмеを配布して発表し、討論を行う。現代社会における人類学的フィールドワークの状況を把握することを目的として、農山漁村の生活、祭事、病院や養老院、工場、学校、実験室を対象とした論文や本を読む。</p> <p>2. 受講生が発見した身近な問題について、いかに人類学の問題として調査することが可能か議論する。受講生各自が、京都市内や近隣地域等における具体的なトピックを見つけ出すことを試みる。</p> <p>3. 受講生各自の興味関心に沿ったフィールドワークの対象、テーマ、方法に関する企画を立案し、口頭発表する。事前に、調査対象やテーマに関わる文献の収集して読解するほか、可能ならば現地に足を運んで予備調査を行う。</p> <p>4. 企画案について、参加者が相互にコメントし、議論を通じて問題設定や調査方法を精緻化する。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
履修学生は、後期開講の「文化人類学調査演習」を履修することが望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
授業参加への積極性、情報をまとめたプレゼンテーション、議論での発言、発表レジюмеを基に評価する。											
----- 基礎演習：文化人類学調査法(2)へ続く -----											

## 基礎演習：文化人類学調査法(2)

### [教科書]

使用しない

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

フィールドワークに関わる文献を熟読する。また授業の性格上、自らの関心テーマに関して、授業時間外に積極的に文献研究や情報収集を行う必要がある。準備がある程度整った段階で自主的に予備調査を行う。

### (その他(オフィスアワー等))

自ら積極的に調査する意欲が必要である。世界の出来事、身近な現象に興味をもち、疑問に基づいて課題を設定し、自ら解決するために創意工夫する態度が望まれる。また、人類学に関係する講義科目が多数開講されているので、併せて履修することを推奨する。

フィールドワークを行う場合、かかる費用は受講生の負担となる。調査に先立ち、学生教育研究災害傷害保険に加入しておくこと。

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：社会人類学調査法 Introductory Seminar: Social Anthropological Research				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 准教授 岩谷 彩子					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
社会人類学の調査方法であるフィールドワークの意義と方法論を、講義と関連文献の購読、受講者の関心に基づいたフィールドワークの企画立案・実施、フィールドワークの実施、調査結果の分析とまとめ、を通して理解する。											
<b>【到達目標】</b>											
フィールドワークの手法によって、社会や現象の分析ができるようになる。 効果的なデータ分析とプレゼンテーションの手法を習得する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
1．フィールドワークと社会理論 2．フィールドの選択と研究設問の設定 3．インタビューとナラティブ・アプローチ（1） 4．インタビューとナラティブ・アプローチ（2） 5．文献調査の重要性 6．エスノグラフィーを書く（1） 調査者のポジションナリティをめぐって 7．エスノグラフィーを書く（2） 引用の作法 8、9．フィールドワークの立案 10．予備調査 11．予備調査についての報告 12．本調査 13．本調査についての報告 14．レポートをまとめる 構成・データ分析・文献目録											
<b>【履修要件】</b>											
他の人類学に関する講義を受講していることが望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
授業への出席が前提となる。講義内での受講生の報告（40％）、各自が企画・立案したフィールドワークにもとづくエスノグラフィー（60％）で評価する。											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
----- 基礎演習：社会人類学調査法(2)へ続く -----											

## 基礎演習：社会人類学調査法(2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

講義で提示される関連文献の購読と、自らの問いにもとづきフィールドワークを企画立案・実施し、調査結果をまとめることが求められる。

### (その他(オフィスアワー等))

- ・フィールドワークは、受講生の実費で行う。
- ・プレゼンテーションにあたっては、パワーポイントが使えることが望ましい。
- ・授業中、疑問点などは積極的に質問すること。

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	東アジア比較思想論 A Comparative Studies of East Asian Thought A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小倉 紀蔵					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
【授業のテーマ】朝鮮思想史入門 【授業の概要・目的】朝鮮半島の思想を歴史的に概観する。神話から現代までにいたる思想史である。主に儒教・仏教の話が多くなるが、ハンや東学やキリスト教、北朝鮮の主体（チュチェ）思想や韓国の民主化思想などについても語る。											
<b>[到達目標]</b>											
朝鮮半島の思想の概要に関して、歴史的な流れを整理して理解できるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下の項目に関してそれぞれ2～3回の授業で扱う。 1 檀君神話から三国時代 2 高麗時代 3 朝鮮時代（儒教） 4 朝鮮時代（儒教以外） 5 植民地時代 6 大韓民国の思想 7 朝鮮民主主義人民共和国の思想											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点：40% 期末レポート：60%											
<b>[教科書]</b>											
使用しない プリントを配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
日本語で読める参考文献を授業時に紹介するので、朝鮮半島の哲学・思想・文学にできるだけ触れる機会を持ち、隣国の人びとの世界観を理解する。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	ポストコロニアル思想文化論 A Studies on Postcolonial Thoughts and Cultures A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 岡 真理					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>「Exile 序説」をテーマに、Exile 追放、亡命、流浪 とは、人間にとっていかなる経験なのか、考察する。</p> <p>20世紀は「難民の世紀」と呼ばれたが、2017年現在、世界は、空前の大量難民の時代を迎えている。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）によれば、故郷を追われた者たちの数は6500万、うち国外難民となっている者たちは2100万に及ぶ。戦争、飢餓、迫害で、これだけの数の者たちが、Exile の生を生きている。Exile とは、人間にとって例外状況でありながら、現代世界においてそれは、この惑星に生きる人間のひとつの ありふれた 生のありようとなってしまっている。Exile について考えるとは、「難民」について考えることであり、「国民」「祖国」「国民国家システム」等々、現代世界を成り立たしめているさまざまな概念について考えることである。この授業では、Exile という観点から人間の生を再考することで、現代世界のありようを問い直したい。</p>											
【到達目標】											
人間の生にExile という観点から光を当てることで、現代世界とそこに生きる人間について新たな視野・知見・理解を獲得する。											
【授業計画と内容】											
Edward Said のエッセイ,'Reflections on Exile'を精読する。											
<p>エドワード・サイードが自らを「難民」と呼んだことはない。 だが、イスラエル建国にともなう民族浄化によって、故郷エルサレムを奪われ、アメリカ人として故郷を訪ねることはできても、パレスチナ人としてそこに住まうことはできない彼は、離散パレスチナ人の一人として、Exile を生きる存在であり、その彼が、知識人の責務として、Exile について語るのは、必然であったろう。 授業では、このエッセイを精読しつつ、そこに込められたサイードの思想を通して、Exile の経験が、現代世界においてもつ意味について考える。 7頁の短い文章である。 毎回、半頁ずつ読み進めていく。</p> <p>参加者は全員、毎回、当該箇所を日本語に翻訳し提出する。</p>											
【履修要件】											
特になし											
----- ポストコロニアル思想文化論 A(2)へ続く -----											

## ポストコロナル思想文化論 A(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

授業への積極的参加度、課題への取り組み方および期末レポートで総合的に判断する。  
成績評価の基準については、授業中に指示する。

### [教科書]

プリントを配布する。

### [参考書等]

(参考書)

ガッサーン・カナファーニー 『ハイファに戻って/太陽の男たち』 (河出書房新社)

エドワード・サイド 『パルスチナとは何か』 (岩波書店)

中村一成 『思想としての朝鮮籍』 (岩波書店)

参考文献は多岐にわたるので、授業中、随時、指示する。

### [授業外学習(予習・復習)等]

参加者は、事前にテキストの当該箇所を読み、日本語訳を作成し授業で提出する。

その際に、疑問に思ったこと、考察したことを、授業における討論で発言する。

また、授業を通して疑問に思ったこと、考えたことを、次回、翻訳を提出する際に書きくわえても良い。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	地域空間論 I A Region, Space, and Environment IA				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小島 泰雄					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
中国農村における空間と社会が、どのような関係を形成してきたのかをめぐって、地理学の視圏に軸足を置いて講義を進める。江蘇、河南、四川などで行ってきたフィールド調査に基づいて、中国農村の生活空間とその多様性を実態的に考えてゆく。											
<b>[到達目標]</b>											
地理学における生活空間論に関する基本的事項を理解する。 中国農村について理解を深める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下のテーマをめぐって授業を行う。 1つのテーマあたり2 - 3週の授業を行う予定である。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．村落・行政村</li> <li>2．定期市・市場町</li> <li>3．市場圏・郷</li> <li>4．通婚圏</li> <li>5．広域の生活空間</li> <li>6．中国農村の基層空間</li> <li>7．生活空間論</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
全学共通科目の地理学関連科目を履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
主に期末のレポートにより評価を行い、授業への参加度を加味する。授業への参加度は授業時のディスカッションによって測る。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業の内容について、授業中に紹介した文献や論文を参考としながら、自らの興味関心に応じて発展的な学習を展開する。期末レポートにその成果を反映することとなる。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	地域空間論 I B Region, Space, and Environment IB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小島 泰雄					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
都市と農村の関係について、中国を対象として考える。 現代中国においては都市と農村が截然と分けられてきたが、それがいかに形成・変容されてきたかについて、主に地理学的な視角から具体的に検討してゆく。											
<b>[到達目標]</b>											
現代中国についての理解を深める。 地理学における都市農村関係の研究法について理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下のテーマをめぐって授業を行う。 一つのテーマについて、2 - 3週の授業をする予定である。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．都市人口</li> <li>2．戸籍制度</li> <li>3．タンウェイと都市</li> <li>4．住宅制度改革</li> <li>5．土地改革と集団化</li> <li>6．非集団化</li> <li>7．郷鎮企業</li> <li>8．農民工</li> <li>9．都市と農村</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
全学共通科目の地理学関連科目を履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
主に期末のレポートにより評価を行い、授業への参加度を加味する。授業への参加度は授業時のディスカッションによって測る。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業の内容について、授業中に紹介した文献や論文を参考としながら、自らの興味関心に応じて発展的な学習を展開する。期末レポートにその成果を反映することとなる。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	学部特殊講義IV B Special topics for undergraduate course IVB				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 助教 藤原 学					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木4	授業 形態	特殊講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
建築は、それを取り巻く経済社会的状況はもちろんのこと、文化的な影響を受けて建造される。本講義は、建築造形に埋め込まれたこうした社会的意味を読み解く能力の習得を目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
西洋建築と日本建築の基礎知識を習得することが第一の目標であり、それを用いて建築空間の体験を自分のことばで論理的に表現しうる視点と概念を習得することが第二の目標である。さらにこれらを踏まえ、建築を通じて歴史文化的諸問題を考えることができるようになることが本講義の到達目標である。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>第1回目はイントロダクションを行う。</p> <p>第2回目は日本近代の住宅の変遷を概観し、建築図面の読み取り方と平面構成（間取り）の社会性について説明する。</p> <p>第3回目以降は次の3つの主題について授業を行う予定であるが、受講生の理解の度合いや関心に応じて多少変動することもある。</p> <p>（1）西洋建築と日本建築の造形的特徴（8回程度） 西洋と日本の宗教建築（キリスト教教会や社寺）を事例に、建築の歴史的展開を概観しながら、それらがなぜ「聖なる空間」としての意味を持ち得ているかを考える。</p> <p>（2）日本近代の建築と都市計画（2回程度） 昭和初期に流行した「帝冠様式」と呼ばれる建築と、関東大震災の復興計画を事例として、日本近代の建築および都市計画の特徴と問題点を概説する。</p> <p>（3）建築の記号性と場所性（2回程度） 慰霊施設を事例として、建築物の記号性と場所性について原論的に考察する。</p> <p>なお、各主題で具体的に採り上げる建築物については第1回目の授業で紹介する。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>平常点（30%）；授業の要点についての小テストを数回行う。また、授業への主体的参加を考慮する。</p> <p>期末レポート（70%）；1）授業で採りあげた建築を一つ選び、その意味をまとめる。2）それを踏まえ、自分が興味を持つ建築について、その社会的意味をまとめる。 レポートは説明の論理性だけでなく、その表現方法も評価の対象とする。</p>											
----- 学部特殊講義IV B (2)へ続く -----											

学部特殊講義IV B (2)

**[教科書]**

使用しない

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

授業で採りあげる建築物のなかには初めて見聞するものも少なくないはずである。それらについて(あるいは知っていると思っていたものについても)、積極的に関心を持ってみずから調べる(たとえばインターネットを利用して、授業時に配布した資料以外の図面や写真を探してイメージを補うなど)などの復習を行うことが望ましい。

**(その他(オフィスアワー等))**

建築学の専門知識は必要としないが、美術、歴史、文学等知的好奇心旺盛な学生を歓迎する。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	テキスト生成文化論 A Studies of Cultural Poetics A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 塩塚 秀一郎					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
この講義は、近現代のフランス文学を題材にし、言葉の織物としてのテキストが生みだされる仕組みや過程、環境を、さまざまな角度から眺め、検討することを目的とする。とりあげるテキストをキーワードによって特徴づけるならば、「笑い」「遊戯」「実験」「逸脱」などになるだろう。シュルレアリスムの先駆者たちから同時代の動向までを概観し、ルネサンス期のラブレー以来、フランス文学の底流をなしているながら、伝統的文学史では傍流に追いやられていた一つの系譜を把握する。具体的には、ヴェルヌ、ルーセル、ブルトンからレリス、クノー、コレージュ・ド・パタフィジックなど、笑いや実験性に彩られた作品や人物を、一回完結のかたちで取りあげる。											
【到達目標】											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 笑い、遊戯、実験といった精神が、いかにして現状への批判として機能し、あらたな価値の創出に寄与してきたかを理解する。</li> <li>・ フランスやヨーロッパにおける文学・美術の大きな流れを理解する。</li> <li>・ テキストの一節を深く読み、一読して得られる以上の深い理解を得るための手つきを習得する。</li> </ul>											
【授業計画と内容】											
第1回：イントロダクション 第2回：フランソワ・ラブレー：目録となまの世界の再発見 第3回：ジュール・ヴェルヌ：現代の神話 第4回：ロートレアモン：近代の閉塞を打ち破るデタラメさ 第5回：レーモン・ルーセル：奇想と素朴さ 第6回：シュルレアリスム：他者との出会い 第7回：レーモン・クノーの「知恵の三部作」 第8回：『地下鉄のザジ』における「真理の不在」 第9回：パタフィジックの精神：ジャリとヴィアン 第10回：ウリポの言語遊戯 第11回：ジョルジュ・ペレック：制約と実存 第12回：カルヴィーノ：読書論、都市論、文明論 第13回：フランソワ・ボン： 実験 の新たな展開 第14回：総括 第15回：予備日											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
レポート（50%）および出席状況（50%）により、到達目標の達成度を基準に評価する。											
----- テキスト生成文化論 A(2)へ続く -----											

テキスト生成文化論 A(2)

**[教科書]**

毎回、参考資料を配付する。

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

各回で取り上げられた文献をその都度一部であっても実際に読んでみることを望ましい。

**(その他(オフィスアワー等))**

70shotsuka@gmail.com(\*を@に置きかえ)までメールで連絡してください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	東アジア文化交渉論A Cultural Interaction in East Asia A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 太田 出					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
中国近世の訴訟と地域社会。  明清時代を対象とする中国近世の法制史研究では、近年、地域社会において実は訴訟を起こすこと自体がかなり身近なものであり、「健訟」（盛んに訴訟を行う）と呼ばれるような状況が現出していたことが明らかにされている。本講義では、明清時代の裁判機構、法典、裁判文書について概要を説明した後、明清時代の裁判の性格をめぐる議論を整理しながら、地域社会の秩序形成を紛争と調停、判決の性格といった視点から捉えなおしてみる。史料としては、基本法典のほか、行政最末端の地方官庁レベルの裁判史料、さらに司法官が自らの名裁きを誇示するために出版した判決集＝判牘を用いることにする。											
<b>【到達目標】</b>											
中国近世の法と裁判について基本的な事項を理解するとともに、古典漢文や中国語史料の読み方・使い方を学び、自ら史料分析を行う能力を養う。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
第1回：ガイダンス 第2回：明清時代の裁判機構 第3回：明清時代の法典 第4回：明清時代の裁判文書（一） 中央#27284案と地方#27284案 第5回：明清時代の裁判文書（二） 判牘 第6回：明清時代の紛争と調停 第7回：明清時代の判決の性格 第8回：明清時代の人々にとって訴訟はどれくらい身近なものだったか？ 第9回：誰が訴状を書いたか？ 代書 第10回：当時、弁護士はいたか？ 訟師 第11回：訴訟関係者はどのようにして呼び出されたか？ 胥吏・衙役 第12回：訴訟関係者はどこに宿泊したか 歇家 第13回：州県行政から見た裁判と徴税 第14回：明清時代の訴訟と地域社会 第15回：期末試験 第16回：フィードバック											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席状況50%、期末試験50%で総合的に判定する。											
<b>【教科書】</b>											
授業中にレジユメを適宜配布する。											
----- 東アジア文化交渉論A (2)へ続く -----											

東アジア文化交渉論A (2)

---

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

授業中に参考すべき論文や図書を紹介するから、それらを予習として読んだうえで授業に参加するか、あるいは復習として授業後に読んで欲しい。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	東アジア文化交渉論B Cultural Interaction in East Asia B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 太田 出					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
東・東南アジアにおける国民国家の形成と船上生活漁民について、文献史料とフィールドワークから考えてみる。内水面や外洋で漂泊・漁撈する船上生活漁民は、東・東南アジアの歴史学・文化人類学の重要な研究対象とされてきた。彼らは日本列島をはじめ、朝鮮半島、中国、香港、ベトナム、マレーシア、フィリピン、インドネシアなど広範囲に分布していた。本授業では、これら船上生活漁民の実態を中国、日本を中心に文献史料を用いつつ歴史的に明らかにし、かつ彼らの現在についてもフィールドワークを用いながら検討してみたいと思う。陸上の民とは異なる水上の民の生活・信仰・社会を追うことで、人類の文化の多様性について理解を深めてもらいたい。											
【到達目標】											
東西文化交渉の媒介的な役割を果たした船上生活漁民の実態について基礎的な知見を身につけるとともに、船上生活漁民の共同性、彼らと国家との関わりについて理解する。											
【授業計画と内容】											
第1回：ガイダンス 第2回：東・東南アジア研究と「漂海民」研究 第3回：歴史学における文献史料とフィールドワーク 第4回：中国の船上生活漁民（1） 前近代の文献史料中に見える船上生活漁民 第5回：中国の船上生活漁民（2） 犯罪者、被差別民としての船上生活漁民 第6回：中国の船上生活漁民（3） 近代の到来と国家による掌握 第7回：中国の船上生活漁民（4） 市場町の魚行との経済的関係 第8回：中国の船上生活漁民（5） 漁業的社会主义改造と陸上がり 第9回：中国の船上生活漁民（6） 生き続ける「伝統」的紐帯 第10回：日本の船上生活漁民（1） エブネ、エフネ、エンブ 第11回：日本の船上生活漁民（2） 広島県豊島を事例に 第12回：東南アジアの船上生活漁民（1） Orang-laut、Mawken 第13回：東南アジアの船上生活漁民（2） Bajau 第14回：近代国民国家の領海問題と漁民 第15回：おわりに											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
授業中に行う小レポート、平常点、定期試験などによって総合的に評価を行なう。											
----- 東アジア文化交渉論B(2)へ続く -----											

東アジア文化交渉論B(2)

**[教科書]**

レジュメを授業中に適宜配布する。

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

授業中に参考すべき論文や図書を紹介するから、それらを予習として読んだうえで授業に参加するか、あるいは復習として授業後に読んで欲しい。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	文化人類学方法 A Methodology of Cultural Anthropology A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 風間 計博					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>文化人類学の研究では、フィールドワークによる資料収集が不可欠である。  本演習では、フィールドワークの方法、資料収集に関わる実践的問題をとりあげ、資料分析の定性的方法、定量的方法の実際を学ぶ。  個々の履修生の問題関心に沿って、具体的事例を検討しながら進める。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>フィールドワークを実施する準備段階として、事前の関連文献の収集、統計資料や地域情報収集の実践的方法を習得する。さらに、研究計画の立て方、フィールドにおける資料収集の方法を学んだうえで、最終的には、文献資料やフィールドで得た資料の整理・分析の能力を養うことを目標とする。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>既存の民族誌研究を参照しながら、資料収集の方法、調査における倫理的諸問題、収集資料の取り扱いと分析について、履修生による主体的な参加によって追究していく。履修者には必要に応じて、自らの問題関心について口頭発表してもらう。  主なトピックは下記の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 調査地選定の方法、調査地への入り方、資料収集の実際</li> <li>2) 調査地における問題関心の深化と資料整理</li> <li>3) 調査後の資料分析</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
<p>担当教員を指導教員として卒業論文を執筆する予定の学生は必修とする。</p>											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>授業への参加態度、意欲、発表や議論の質によって総合的に評価する。</p>											
<b>[教科書]</b>											
<p>使用しない</p>											
<b>[参考書等]</b>											
<p>(参考書) 授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
<p>授業に先立ち、自主的に資料収集を行って整理したうえで、レジュメ等にまとめて授業に持参する。授業後には、指摘を受けた箇所を見直し、不足していた資料を補い、分析方法を修正する必要がある。</p>											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
<p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	文化人類学方法 B Methodology of Cultural Anthropology B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 風間 計博					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>文化人類学の研究にフィールドワークは必須である。          本演習では、フィールドワークにおける収集資料の分析から考察、さらに民族誌記述を行うまでの過程を学ぶ。人類学における既存の理論的問題を、いかに具体的な資料の分析結果とつぎ合わせる事が可能か、具体的事例に基づいて考える。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>実際にフィールドワークにおいて収集した資料を整理・分析・考察する方法を実践的に学び、民族誌を書く能力を習得する。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>近年、文化人類学でとりあげられたトピックを参照しながら、民族誌研究のあり方を考える。とくに、個々の履修生の問題関心に沿って、各自の集めた具体的な資料を分析・考察して口頭発表を行い、さらに精緻に文章化していく方法論を追究する。</p> <p>1) 文献資料の収集と理論的問題へのアプローチ          2) 具体的な収集資料の分析と理論的問題への架橋          3) オリジナルな考察への発展          4) 民族誌執筆の実際</p>											
<b>[履修要件]</b>											
<p>担当者を指導教員として卒業論文を執筆する予定の学生は必修である。</p>											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>授業への参加態度と意欲、発表や発言等を総合して判断する。</p>											
<b>[教科書]</b>											
<p>使用しない</p>											
<b>[参考書等]</b>											
<p>(参考書)          授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
<p>授業外の時間にフィールドワークを行い、自ら資料整理・分析・考察を行ってレジュメを作成して授業に出席する。授業中に受けたコメントに応じて、必要箇所を修正し、民族誌記述を自主的に行う。</p>											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
<p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	社会人類学方法 A Methodology of Social Anthropology A				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 准教授 岩谷 彩子					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
社会人類学の基礎的な理論にもとづき、受講生がフィールドワークや文献資料によって得た資料を分析し、論文にまとめる方法を取得することを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 論文の構成、文献検索・引用のやり方を習得し、論文執筆の基本的な方法を身につける。</li> <li>・ 定量分析・定性的分析、ナラティブ・アプローチ、フィールドワークの手法、民族誌の記述方法などを、社会人類学の諸理論とともに習得する。</li> </ul>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業は、受講生の研究発表、文献紹介、討議によって進行する。受講生は、人類学分野における卒業論文作成を視野に、自らの論文執筆計画や関連する先行研究についてのレビューの口頭発表を行う。以下、扱われる可能性が高い研究主題を順不同で列挙する。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「わざ」の習得と身体</li> <li>2. 移民社会を支える踊り</li> <li>3. ストリートで生み出されるアート</li> <li>4. メディアと宗教</li> <li>5. 「もの」から見る人間世界</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
岩谷を指導教員として卒業論文を執筆する予定の学生は必修。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
プレゼンテーションと討論への積極的関与によって評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業で参照した文献には目を通す。											
(その他(オフィスアワー等))											
本科目の履修と並行して、問題関心に沿ったフィールドワークを立案・計画し、調査を開始することが望ましい。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	社会人類学方法 B Methodology of Social Anthropology B				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 准教授 岩谷 彩子					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
社会人類学の基礎的な理論にもとづき、受講生がフィールドワークや文献資料によって得た資料を分析し、論文にまとめる方法を取得することを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 論文の構成、文献検索・引用のやり方を習得し、論文執筆の基本的な方法を身につける。</li> <li>・ 定量分析・定性的分析、ナラティブ・アプローチ、フィールドワークの手法、民族誌の記述方法などを、社会人類学の諸理論とともに習得する。</li> </ul>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業は、受講生の研究発表、文献紹介、討議によって進行する。受講生は、人類学分野における卒業論文作成を視野に、自らの論文執筆計画や関連する先行研究についてのレビューの口頭発表を行う。以下、扱われる可能性が高い研究主題を順不同で列挙する。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人の移動と場所への帰属意識</li> <li>2. グローバリゼーションと公共空間の変容</li> <li>3. 都市の公共空間にみる包摂と排除</li> <li>4. ノスタルジアのエスノグラフィー</li> <li>5. 喪失の想起、喪失の語り</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
岩谷を指導教員として卒業論文を執筆する予定の学生は必修。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
プレゼンテーションと討論への積極的関与によって評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業で参照した文献には目を通す。											
(その他(オフィスアワー等))											
本科目の履修と並行して、フィールドワークを遂行したうえで、資料分析・卒論執筆を精力的に進めることが必要である。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	東アジア比較思想論演習 A Seminar on Comparative Studies of East Asian Thought A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小倉 紀蔵					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
【授業のテーマ】東アジア思想・文化論文作成指導 【授業の概要・目的】東アジア思想・文化に関する研究の方法論を習得し、実際に論文を執筆するための様々な指導をする。具体的には、毎回、学生が論文内容の発表をしてそれに対する質疑応答、論評を参加者全員で行う。											
【到達目標】											
東アジアの思想・哲学・文化分野における質の高い研究・論文とはいかなるものなのかについて理解し、先行研究を調べ尽くしたうえで、自分独自のオリジナルな見解を生み出すことのできる土台を養う。											
【授業計画と内容】											
この授業には学部生、修士課程学生、博士後期課程学生が一緒になって参加する。各自それぞれのテーマ、内容を発表し、全員でそれに関して議論する。一人の発表につき、一人の司会者、一人の指定討論者を設定するが、質疑応答と議論は全員で行う。 第01回 論文テーマ・内容のチェック。発表の順序、司会者などを決める 第02回～第14回 論文発表および論評、討論 第15回 全体のまとめ											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
論文作成の進行上における発表（60％）と討論の内容（40％）を評価する。											
【教科書】											
使用しない											
【参考書等】											
（参考書） 授業中に紹介する											
【授業外学習（予習・復習）等】											
自分の研究発表だけでなく、他の学生の研究についても細心の関心を持つこと。そのことによって自分の研究がさらに磨かれるはずである。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	東アジア比較思想論演習 B Seminar on Comparative Studies of East Asian Thought B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小倉 紀蔵					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>【授業のテーマ】日韓関係の哲学</p> <p>【授業の概要・目的】日本と韓国との関係を、哲学的に考察してみる。これまで日韓関係の分析といえば、政治学、国際関係論、経済学、社会学、歴史学などからのアプローチが主流であった。しかし、それらとは異なる、メタレベルからのアプローチがいまや必要なのではないか。人間観や社会観の根底を再考するために / 再考することにより、日韓関係を見つめ直すことが必要なのではないか。</p>											
【到達目標】											
日本と朝鮮半島の関係を、哲学的レベルで思考できるようになる。											
【授業計画と内容】											
<p>以下の内容を各項目につき 2 - 3 回の授業で扱う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 歴史を認識するとはいかなる行為か</li> <li>2 支配 / 被支配とはなにか</li> <li>3 国家、民族、社会、人間などの境界とはなにか</li> <li>4 ゆるし・和解とはなにか</li> <li>5 差別とはどういうことか</li> <li>6 同じ / 異なるとはどういうことか</li> </ol>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
平常点：40% 期末レポート：60%											
【教科書】											
使用しない プリントを配布する。											
【参考書等】											
(参考書) 授業中に紹介する											
【授業外学習(予習・復習)等】											
日本語、韓国語、英語で読める参考文献を授業時に紹介するので、日韓関係の事実的な側面を正確にインプットしつつ、それを多方面から深く考察する。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	ポストコロニアル思想文化論演習 A Seminar on Postcolonial Thoughts and Cultures A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 岡 真理					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>「ポストコロニアルの思想と文化」をテーマに演習をおこなう。  具体的には、パレスチナ問題について論じたテキストの精読を通して、現代世界に生きる人間の普遍的な思想的課題として「パレスチナ問題」について学ぶとともに、植民地主義、記憶、レイシズム、ネイション、国民国家システム、難民、ジェンダー等の問題について学びます。</p>											
【到達目標】											
<p>パレスチナ・イスラエル問題とその歴史について基礎的知識を身につけ、同時に、パレスチナ問題の考察を通して、ポストコロニアルの視座から現代世界を理解します。  テキストは基本、英語なので、英語論文の精読を通して、英文の読解力ならびに、パレスチナ問題について英語で論じることのできる基礎的な英語力も養います。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>アフマド・サアディの論文「カタストロフ、記憶、アイデンティティ パレスチナ・アイデンティティの構成要素としてのナクバ」(Ahmad Sa'di "Catastrophe, Memory and Identity: Al-Nakba as a Component of Palestinian Identity)を全員で精読します。  毎回、担当者がレジюмеを作り、発表を行い、そのあと全員で、テキストの内容について議論します。</p> <p>また、今年、東エルサレム、ヨルダン川西岸地区、ガザ地区の占領開始から50年目であり、1967年の占領問題についても重点的に扱う予定です。</p>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
授業への積極的参加度、課題への取り組み方、および期末レポートで総合的に判断します。成績評価基準の詳細については授業中に指示します。											
【教科書】											
随時、プリントを配布します。											
【参考書等】											
(参考書) 広河隆一『パレスチナ新版』(岩波書店) 奈良本英佑『パレスチナの歴史』(明石書店) エドワード・サイド『パレスチナ問題』(みすず書房) ガッサーン・カナファーニー『ハイファに戻って/太陽の男たち』(河出書房新社)											
----- ポストコロニアル思想文化論演習 A(2)へ続く -----											

ポストコロナル思想文化論演習 A (2)

-----  
その他参考書については、授業中に随時、指示します。

**[授業外学習（予習・復習）等]**

担当者は、自分が担当するテキストの内容について、レジユメを作り、授業で発表する。担当者以外の者たちは、テキストを読み、授業で議論すべき論点について整理しておく。

**（その他（オフィスアワー等））**

授業は、受講者による発表を中心におこないます。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	ポストコロニアル思想文化論演習 B Seminar on Postcolonial Thoughts and Cultures B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 岡 真理					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
パレスチナ問題をはじめ、ポストコロニアルの思想文化をテーマに、各自、自身の研究テーマを設定し、研究をおこなう。											
<b>[到達目標]</b>											
研究の仕方を学び、研究力を養います。 具体的には、ポストコロニアルの問題系を理解し、そこから自分で考究すべき「問い」を見つけ、テーマを設定し、複数の文献を参照して、分析・考察を展開し、論じる力を身につけます。 また、そうした研究を通して、現代世界についての理解を深めます。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
「思想としてのパレスチナ」をテーマに、参加者は、各自の関心に基づいてテーマを定め、個人研究をおこない、適宜、発表し、期末にそれをレポートにまとめます。  後期第1回目の授業で、参加者は研究テーマを発表してください。 参加人数にもよりますが、毎回、1人ないし2人が研究内容について発表を行い、期末のレポート作成に向け、研究指導を行います。											
<b>[履修要件]</b>											
留学等、特別な事情がない限り、前期の演習を履修し、パレスチナ問題の基礎を学んでいること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
授業への積極的参加度、発表、および期末レポートから総合的に判断します。 成績評価基準の詳細については、授業中に指示します。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する 適宜、紹介します。											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
後期1回目の授業でそれぞれ、研究テーマについて発表してもらうので、前期に学んだことをもとに夏休み中に、関心のある問題についていろいろと本などを読み、研究テーマを事前に決めておいてください。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	環境人類学演習 A Seminar of Environmental Anthropology A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 風間 計博					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
文化人類学に関連する領域から英文の書籍を選んで、履修生が輪読して議論する。担当者が自ら選択した章を要約し、関連文献を照会しながら、疑問点や問題点を抽出して考察した上で発表する。今期は、近年発展してきた脳科学と文化を関連付ける神経人類学（neuroanthropology）の書籍を採りあげる。											
<b>【到達目標】</b>											
文化人類学に関連する英文の読解力を高めるとともに、概念や理論の把握を目指す。さらに、文章の要約、論理的思考、議論の能力を実践的に習得する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>人類学は本来、生物としてのヒトと文化的な存在としての人間というふたつの局面を見据えなければ、成り立たない学問である。神経人類学は、こうした人類学の特徴を正面から捉えようとする新しい領域である。この領域では、生物を機械論的に把握するのではなく、その柔軟性や可塑性を重視する。そして、文化に最も関連深い器官である脳や神経系の研究を、社会・文化人類学の議論に取り込もうと試みている。読解を予定しているのは、下記の書籍である。</p> <p>Lende, D.H. &amp; G. Downey, eds. 2012, The Encultured Brain: An Introduction to Neuroanthropology. The MIT Press.</p> <p>本書の内容の一部を以下に抜粋して示す。</p> <p>Part I. On the encultured brain</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Primate social cognition, human evolution, and niche construction</li> <li>• Evolution and the brain</li> </ul> <p>Part II. Case studies on human capacities, skills, and variation</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• From habits of doing to habits of feeling</li> </ul> <p>Part III. Case studies on human problems, pathologies, and variation</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• War and dislocation: A neuroanthropological model of trauma among American veterans with combat PTSD</li> <li>• Collective excitement and lapse in agency</li> </ul>											
<b>【履修要件】</b>											
文化人類学関連の授業を少なくとも1つ、履修していることが望ましい。担当者を主指導教員として卒業論文を書く場合には必修である。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席、発表の質、議論への参加や貢献等を総合して評価する。											
----- 環境人類学演習 A (2)へ続く -----											

## 環境人類学演習 A (2)

### [教科書]

必要個所については、プリントを配布する。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

事前にテキストを読み、関連文献を当たったり、用語の下調べを行う必要がある。発表者は、内容要約を行い、レジユメを作成する。授業後、テキストを読み返して理解を深める。グループで担当する場合には、事前に議論を進めておくこと。

### (その他(オフィスアワー等))

積極的な授業への参加が望まれる。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	環境人類学演習 B Seminar of Environmental Anthropology B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 風間 計博					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
文化人類学およびその関連領域から英文の単行本を選び、履修生が輪読して議論する。個人で担当部分の要約をまとめ、疑問点や問題点、さらなる考察結果を発表する。今期は、社会性（sociality）に関わる新たな人類学的著作をとりあげる。											
<b>【到達目標】</b>											
文化人類学に関連する英文の読解能力を高めるとともに、概念や理論の把握を目指す。さらに、文章の要約、論理的思考、議論の能力を実践的に習得する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
人間存在について考えるうえで、社会性（sociality）を無視することはできない。この概念は、人文・社会科学においてきわめて多様に用いられてきた。授業でとりあげる書籍では、さらにラディカルな拡張を試みている。アジア・アフリカ、欧米等、世界各地の事例に基づきながら、動物やモノを社会性の枠組みに取り込む。具体的には、景気停滞、気候変動、心理療法、技術革新やロボット工学等の諸問題に人間が関与し対峙するとき、社会性という概念が、いかなる方向に拡張するか、人類学における理論的可能性を問い直すことになる。											
Long, N.J & H.L. Moore, eds. 2013, Sociality: New Directions. Berghahn Books.											
本書の内容の一部は下記の通りである。（数字は章に対応していない。）											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Avatars and robots: The imaginary present and the socialities of the inorganic</li> <li>2. Sociality and its dangers: Witchcraft, intimacy and trust</li> <li>3. Group belonging in trade unions: Idioms of sociality in Bolivia and Argentina</li> <li>4. Utopian sociality. Online</li> <li>5. Doing, being and becoming: The sociality of children with autism in activities with therapy dogs and other people</li> <li>6. The art of slow sociality: Movement, aesthetics and shared understanding</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
文化人類学に関連する授業を少なくとも1つ、履修していることが望ましい。担当を主指導教員として卒業論文を書く場合には、必修である。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席、発表の質、授業への参加と議論への貢献によって総合的に判断する。											
----- 環境人類学演習 B (2)へ続く -----											

## 環境人類学演習 B (2)

### [教科書]

必要部分は、プリントで配布する。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

事前にテキストを読み、関連文献に当たり、用語の下調べをしておく。発表者は、内容要約を行い、レジユメを作成する。授業後には、テキストを読み直して理解を深める。グループで担当する場合には、事前に議論を進めておくこと。

### (その他(オフィスアワー等))

積極的な授業への参加が望まれる。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	テキスト生成文化論演習A Seminar on Studies of Cultural Poetics A	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 塩塚 秀一郎
---------------	--	-----------------	---------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

### [授業の概要・目的]

レーモン・クノーの小説『ルイユから遠くはなれて』（Raymond Queneau, Loin de Rueil, 1944）を、日本語訳により全体像を把握しつつ、毎回精読すべき箇所を選んでフランス語原典で講読する。この小説は「白昼夢の小説」と呼ばれるとおり、夢見がちな主人公のジャック・ロモーヌが、ままたらぬ人生を生きつつも、そのあらゆる段階で、夢見る人生やありえたはずの人生を想像する、という内容を持っている。「夢想・憧れ」と「現実」の対立をテーマとする小説であり、フィクションの意義や機能を問い返すメタフィクションとして読むことも可能である。また、映画館、郊外、知恵、強迫観念など、興味深いテーマが繰り返し現れることから、これらの観点から小説全体を捉え直すことも試みたい。

### [到達目標]

- ・多少とも複雑な構文、豊かな語彙で書かれたフランス語小説を、文法の知識を駆使して、正確に読み解く力を養う。
- ・木を見て森を見ずの弊害に陥ることなく、小説全体と細部の読みを有意義に結びつける技術を修得する。

### [授業計画と内容]

事前に各回数名の分担者を決め講読の形式で授業を進める。分担箇所の量は、フランス語学習歴や能力に応じて、柔軟に決める。また、参加学生の負担が多くなりすぎないように、適宜教員も講読の分担に参加する（受講者が少ない場合は、毎回半分近くを教員が担当することも考えている）。

レーモン・クノー『ルイユから遠くはなれて』は全10章から構成される小説なので、原則として1回の授業で（翻訳も活用しつつ）1章分を進むこととし、内容が濃く分量も多い数章については1章分に2回の授業をあてることとする。

#### 第1回：イントロダクション

レーモン・クノーや『ルイユを遠くはなれて』に関する概説。授業の進行、評価などについての説明。

第2回～第14回：第1章から第10章までの講読。原文で精読する箇所の選定については、教員が指定することも、学生の希望をつのることもある。

第15回：まとめ 13回にわたる精読の成果をまとめ、残された課題や疑問点について全員で議論する。

### [履修要件]

フランス語初級文法を終えていること。フランス語の簡単な文章を読んだ経験があること。

## テキスト生成文化論演習A(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

平常点（出席状況・分担箇所への取り組み方）と期末のレポートによって評価する（それぞれ5：5）。

### [教科書]

Raymond Queneau 『Loin de Rueil』（Gallimard (folio)）ISBN:9782070368495

### [参考書等]

（参考書）

レーモン・クノー 『ルイユから遠くはなれて』（水声社）ISBN:9784891768669（この翻訳書は教員の側で5冊分用意し、精読箇所の担当者を優先して貸し与えるつもりですが、個人で購入すればより自由に勉強できるはずです。）

### [授業外学習（予習・復習）等]

分担の予習・準備をきちんとしてくること（日本語訳を参照してもよいので、なぜそのような訳になっているのか、単語の意味を調べ、文法を解析し、説明できるようにしておく）。また、分担箇所について、当該の章や小説全体との関連でコメントがつけられることが望ましい。

### （その他（オフィスアワー等））

分担箇所がある場合の無断欠席は出席者全員に迷惑になるのでやめていただきたい。  
教員への連絡は70shotsuka@gmail.com(\*を@に置きかえ)までメールでおこなってください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	テキスト生成文化論演習B Seminar on Studies of Cultural Poetics B	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 塩塚 秀一郎
---------------	--	-----------------	---------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

### [授業の概要・目的]

レーモン・クノーの小説『わが友ピエロ』(Raymond Queneau, *Pierrot mon ami*, 1942)を、日本語訳により全体像を把握しつつ、毎回精読すべき箇所を選んでフランス語原典で講読する。この小説の舞台は、礼拝堂に隣接する遊園地に設定されている。人間の二面性のうち、礼拝堂が 聖 を体現し、遊園地が 俗 を体現しているのである。礼拝堂と遊園地の勢力争いによって表現された、聖と俗の、死と生のせめぎ合いは、遊園地の火災焼失事件をきっかけとして、推理小説風の展開を見せ始める。推理小説における 謎 や 真実 を問い返す メタミステリー としての読解、呑気で飄々とした主人公が体現する 知恵 (コジェーヴ)をめぐると読解、1930年代のパリに実在した遊園地 ルナ・パーク に焦点を当てた文化史的読解など、さまざまな角度から、この魅力的な小説を読み解いていきたい。

### [到達目標]

- ・多少とも複雑な構文、豊かな語彙で書かれたフランス語小説を、文法の知識を駆使して、正確に読み解く力を養う。
- ・木を見て森を見ず の弊害に陥ることなく、小説全体と細部の読みを有意義に結びつける技術を修得する。

### [授業計画と内容]

事前に各回数名の分担者を決め講読の形式で授業を進める。分担箇所の量は、フランス語学習歴や能力に応じて、柔軟に決める。また、参加学生の負担が多くなりすぎないように、適宜教員も講読の分担に参加する(受講者が少ない場合は、毎回半分近くを教員が担当することも考えている)。

レーモン・クノー『わが友ピエロ』は全8章+エピローグから構成される小説なので、原則として1回の授業で(翻訳も活用しつつ)1章分を進むこととし、内容が濃く分量も多い数章については1章分に2回の授業をあてることとする。

#### 第1回：イントロダクション

レーモン・クノーや『わが友ピエロ』に関する概説。授業の進行、評価などについての説明。

第2回～第14回：第1章から第8章、エピローグまでの講読。原文で精読する箇所の選定については、教員が指定することも、学生の希望をつのることもある。

第15回：まとめ 13回にわたる精読の成果をまとめ、残された課題や疑問点について全員で議論する。

### [履修要件]

フランス語初級文法を終えていること。フランス語の簡単な文章を読んだ経験があること。

## テキスト生成文化論演習B(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

平常点（出席状況・分担箇所への取り組み方）と期末のレポートによって評価する（それぞれ5：5）。

### [教科書]

Raymond Queneau 『Pierrot mon ami』（Gallimard (folio)）ISBN:9782070362264

### [参考書等]

（参考書）

レーモン・クノー 『わが友ピエロ』（水声社）ISBN:9784891768652（この翻訳書は教員の側で5冊分用意し、精読箇所の担当者を優先して貸し与えるつもりですが、個人で購入すればより自由に勉強できるはずです。）

### [授業外学習（予習・復習）等]

分担の予習・準備をきちんとしてくること（日本語訳を参照してもよいので、なぜそのような訳になっているのか、単語の意味を調べ、文法を解析し、説明できるようにしておく）。また、分担箇所について、当該の章や小説全体との関連でコメントがつけられることが望ましい。

### （その他（オフィスアワー等））

分担箇所がある場合の無断欠席は出席者全員に迷惑になるのでやめていただきたい。  
教員への連絡は70shiotsuka@gmail.com(\*を@に置きかえ)までメールでおこなってください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	東アジア文化交渉論演習B Seminar on Cultural Interaction in East Asia B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 太田 出					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
中国・日本・台湾などを中心とする東アジアの東西文化交渉 今年には特に海洋に着目する に関わる文献（研究書、論文、史料）を講読する。受講生は必ず予習し、担当者はレジュメを作成して参加すること。この授業を通じて、東アジアの東西文化交渉に関する総合的な知識を養い、文献史料の読解力を身につけるとともに、文献史料をどのように扱うかといった実証的な分析力をも養うことを目的としている。											
[到達目標]											
東アジアの東西文化交渉に関する文献史料の読解力を養う。東西文化交渉に関する総合的な知識を身につける。											
[授業計画と内容]											
授業中にはテキストとする文献（具体的には受講生と相談のうえ決定する）を輪読してもらう。一つ一つの語句にこだわりながら解釈していくと同時に、多くの文章を読むことで東アジアの東西文化交渉に関わる諸文献に慣れてもらいたい。 第1回：ガイダンス 第2回～第4回：ビル・ヘイトン『南シナ海 アジアの覇権をめぐる闘争史』 （以下すべて予定） 第5回～第9回：矢吹晋『南シナ海 領土紛争と日本』 第9回～第11回：葉駿主編『侯朝海伝』 第12回～第14回：陳冠任著『萌動、遞（女+亶）与突破：中華民国漁権発展史』 第15回：まとめ											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点で評価する。											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
毎週、授業には必ず予習・復習をしてのぞむこと。予習していない場合には欠席と見なすので注意して欲しい。											
（その他（オフィスアワー等））											
東アジアの東西文化交渉、特に海洋をめぐる問題について基礎的な知識から始めるので、東アジアの海洋問題について考えてみたい学生の積極的な参加を期待する。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	細胞生理学ゼミ A Seminar A for Cell Physiology				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 石原 昭彦					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月1	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>体を構成する細胞・組織・器官の基本的な構造や働きについて学習することを目的とする。そのために、関係する先行論文を講読したり、組織標本を使用して細胞の具体的な仕組みや働きを理解する。特に、血液細胞、筋細胞の機能と構造について考察することにより、それらの細胞や組織が健康・体力の維持や増進、病気の発症や予防にどのような関わりを持っているのかを考える。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>体を構成する細胞・組織・器官の構造や働きを理解する。それらを勉強することにより、疾病の発生や運動による適応のメカニズムを知ることができる。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>下記の内容について授業を行う。スライド、VTR、組織標本などを使用して授業を行う。授業の内容は下記の通りである(1課題あたり1~3週の授業を予定)。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 細胞の構造：細胞の基本的な構造について考える。(1回) 核、ミトコンドリア、細胞膜など細胞を構成する要素について解説する。</li> <li>2. 細胞の機能：細胞の基本的な働きについて考える。(2~3回) 静止・活動電位、能動輸送など細胞の機能を維持する要因について解説する。</li> <li>3. 血液細胞：血液細胞の構造と働きについて考える。(2~3回) 赤血球、白血球、血小板の特性を解説する。免疫機能について説明する。</li> <li>4. 筋細胞：筋細胞の構造と働きについて考える。(3回) 骨格筋の筋細胞を各タイプ(I, IIA, IIB, IIC)に分類してそれぞれの特性を解説する。</li> <li>5. 骨細胞：骨細胞の構造と働きについて考える。(3回) 破骨細胞、造骨細胞の特性を解説する。</li> <li>6. まとめ：全体のまとめを行う。(2回)</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席率(50点)とレポート(50点)により評価する。											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
----- 細胞生理学ゼミ A (2)へ続く -----											

## 細胞生理学ゼミ A (2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

次回の授業には、前回の授業の内容が関係している。したがって、前回の授業の内容を復習して理解しておくことが大切である。

### (その他(オフィスアワー等))

授業に関する質問等は、第1週目の授業時に受ける。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	細胞生理学ゼミ B Seminar B for Cell Physiology				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 石原 昭彦					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月1	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>体を構成する細胞の基本的な構造や働きについて学習することを目的とする。そのために、関係する先行論文を購読したり、組織標本を使用して細胞の具体的な仕組みを理解する。特に微小重力の宇宙環境など環境の変化に対する細胞の可塑性について考察することにより、細胞の相互作用、特異性や適応能力を考える。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>神経・筋の適応能力を学習して、生活の中での健康・体力の維持・増進に役立てることをねらいとする。特に微小重力の宇宙環境など環境の変化に対する細胞の可塑性について考察する。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>下記の内容について授業を行う。スライド、VTR、組織標本などを使用して授業を行う。授業の内容は下記の通りである(1課題あたり2～3週の授業を予定)。</p> <p>1．細胞の適応能力：細胞の基本的な適応能力について考える。(2回) 細胞の形態、機能、代謝的な性質とその適応能力について解説する。</p> <p>2．神経細胞の可塑性：環境の変化に対する神経細胞の可塑性について考える。(1～2回) 高気圧・低気圧、低温・高温、低濃度酸素・高濃度酸素、加重力・無重力への曝露による神経細胞の可塑性について解説する。</p> <p>3．筋細胞の可塑性：環境の変化に対する筋細胞の可塑性について考える。(3回) 高気圧・低気圧、低温・高温、低濃度酸素・高濃度酸素、加重力・無重力への曝露による筋細胞の可塑性について解説する。</p> <p>4．骨細胞の可塑性：環境の変化に対する骨細胞の可塑性について考える。(3回) 高気圧・低気圧、低温・高温、低濃度酸素・高濃度酸素、加重力・無重力への曝露による骨細胞の可塑性について解説する。</p> <p>6．神経細胞、筋細胞、骨細胞の関係：神経細胞、筋細胞、骨細胞が環境などの変化に対してどのような相互関係を維持して適応していくのかを考える。(2～3回)</p> <p>7．まとめ：全体のまとめを行う。(2回)</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席率(50点)とレポート(50点)により評価する。											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
----- 細胞生理学ゼミ B (2)へ続く -----											

## 細胞生理学ゼミ B (2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

次回の授業には、前回の授業の内容が関係している。したがって、前回の授業の内容を復習して理解しておくことが大切である。

### (その他(オフィスアワー等))

授業に関する質問等は、第1週目の授業時に受ける。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	細胞生理学 Cell Physiology				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 石原 昭彦					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
細胞の基本的な構造や働きを解剖学的・生理学的な観点から説明する。細胞がどのように情報を受取り、どのように伝達するのかを理解する。神経細胞と筋細胞を代謝的、機能的な特性が異なるユニットに分類して、それぞれのユニットの特徴を解説する。											
<b>[到達目標]</b>											
細胞の基本的な構造や働きを解剖学的・生理学的な観点から理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
1 課題あたり1～2週の授業を行う予定である。 1. 静止電位と活動電位 2. 細胞体とシナプス 3. 神経線維のサイズと伝導速度 4. 神経支配比 5. 神経・筋単位の構造と機能 6. 神経・筋単位と発育・発達 7. 神経・筋単位と老化 8. 神経・筋単位の可塑性 9. まとめ											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席率(30点)、レポート(20点)、および試験(50点)により総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
次回の授業には、前回の授業の内容が関係している。したがって、前回の授業の内容を復習して理解しておくことが大切である。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
授業に関する質問等は、第1週目の授業時に受ける。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	言語認知論 Cognition and Language				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 谷口 一美					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
認知言語学の観点から、ことばの意味の拡張・変化といった動的側面について考察することにより、言語と認知との相互作用への理解を深める。											
<b>[到達目標]</b>											
認知言語学の基本的な考え方を習得し、ことばの意味の多様性を適切に観察・分析することができる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
この授業では、ことばの意味や用法が変化し、言語システムの中に定着し取り込まれていく過程とメカニズムについて、認知言語学の観点から幅広く考察していく。以下の内容やキーワードについて、各2週前後の授業で扱う予定。											
<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 意味変化の要因：メタファーとメトニミー</li> <li>(2) ことばの多義性と意味ネットワーク</li> <li>(3) イメージ・スキーマと多義性</li> <li>(4) 身体性基盤</li> <li>(5) 使用基盤モデル</li> <li>(6) 文法構文にみられる用法の拡張</li> <li>(7) 意味の漂白化と儀礼化</li> </ul>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
学期末に筆記試験を行う予定(70%)。授業への参加状況を加味し(30%)、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業でプリントを配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業中に示した参考文献を参照するなどして理解を深めると共に、課題に自主的に取り組むこと。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	計算と位相 Topology and Computation				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 立木 秀樹					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>3方向から見て立方体と同じように正方形に見える立体をイマジナリーキューブという。この講義では、イマジナリーキューブ、および、イマジナリーキューブをもとに作られたパズルやオブジェを入り口にして、立体の幾何学、4次元の幾何学、フラクタルおよびその基礎となる位相概念、群論を用いた数え上げなどの数学的な概念、3次元のコンピュータグラフィックスの基礎について学ぶ。</p> <p>立体図形そのものやその対称性などの理解に加えて、立体という具体的なものを通して、情報分野にも役に立つ幾何的なイメージや数理的手法を学ぶ。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>立体図形の性質を理解し、立体に対する考察能力が高まる。</p> <p>対称性を計る道具である群論、無限の繰り返しの極限であるフラクタルや、その基礎となる位相概念などの数学的概念を理解し、3次元立体のコンピュータでの表現に関する基礎的な理解を得る。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>以下の項目について、1～2時間ほどの時間を使いながら解説を行う</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イマジナリーキューブと立体の幾何</li> <li>2. 立体の対称性やボロノイ分割、タイリングなどの組み合わせ的構造</li> <li>3. 群論と、群論を用いた立体の数え上げ</li> <li>4. 立体の対称性の分類と、準正多面体</li> <li>5. 距離空間と位相空間</li> <li>6. フラクタルと不動点定理</li> <li>7. 4次元の幾何と3次元との関係</li> <li>8. 立体のコンピュータでの表現とその操作</li> <li>9. Zome ツールを用いた立体工作（時間があれば）</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
レポートにより評価する。											
----- 計算と位相(2)へ続く -----											

## 計算と位相(2)

### [教科書]

使用しない

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

日頃から、身の回りにある立体の対称性などに興味をもってほしい。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	生活習慣と生体機能障害 Lifestyle and Human Body Dysfunction	担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 林 達也
---------------	---	-----------------	-----------------

配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

林が担当する「健康科学I」の講義内容を、最新の知見の紹介や文献の抄読を織り交ぜ、医学的考察やディスカッションを加えながらより深く学習することを目的とする。「健康科学I」とともに本講義を履修することで、生活習慣病に関する基本的な教養知識のより明確な把握が可能である。

#### [到達目標]

糖尿病、高血圧症、脂質異常症、肥満症、骨粗鬆症など、日常のライフスタイルがその発病や進行に大きく影響する「生活習慣病」に関して、なぜ生活習慣がこれらの疾患の誘引となるのか、どのような病態を示すのか、どのように予防対策をたてるべきか、罹患した場合はどのように治療を行うのかについて理解する。

#### [授業計画と内容]

以下のトピックスを各1～2回の授業で説明する。ただし、授業の進み具合や最近の話題などに対応して新規にトピックスを追加したり、順序を入れ替えることがある。

体重測定記録を利用した減量法（計るだけダイエット）  
 沖縄県の平均寿命の変化（沖縄クライシス）  
 メタボリックシンドロームと動脈硬化症の危険因子  
 健康食ガイドライン Food Pyramid  
 健康増進機器としての自転車  
 有酸素運動・筋力トレーニングの健康科学的意義  
 日本の若年女性の「痩せすぎ」傾向とその弊害  
 食事制限と運動の寿命延長効果  
 喫煙による健康障害と禁煙補助薬  
 健康づくりに適した走り方（スロージョギング）  
 ロコモティブシンドロームと骨・関節・筋肉の重要性  
 日本の「管理職」の健康状態  
 血縁者から健康法を学ぶ  
 なぜ元気な若者が熱中症になるのか

フィードバック方法は別途連絡する。

#### [履修要件]

生活習慣病の予防や治療に興味のある学生であること。  
 林担当の「健康科学」を履修していることが望ましい（必須ではない）。

## 生活習慣と生体機能障害(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

平常点(50点)とレポート(50点)の総合判定。レポートは独自の工夫が見られるものについては高い点を与える。

### [教科書]

参考資料を授業中に配付,あるいは指示する。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に資料を配付。

### [授業外学習(予習・復習)等]

基本的に予習は不要であり、講義内容の復習のみでよい。

### (その他(オフィスアワー等))

質問は授業時間以外にはメールにて受け付ける。オフィスアワーに面談する際も事前にメールにて連絡すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	生活習慣と生体機能障害 Lifestyle and Human Body Dysfunction				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 林 達也					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語

### [授業の概要・目的]

林が担当する「健康科学I」の講義内容を、最新の知見の紹介や文献の抄読を織り交ぜ、医学的考察やディスカッションを加えながらより深く学習することを目的とする。「健康科学I」とともに本講義を履修することで、生活習慣病に関する基本的な教養知識のより明確な把握が可能である。

### [到達目標]

糖尿病、高血圧症、脂質異常症、肥満症、骨粗鬆症など、日常のライフスタイルがその発病や進行に大きく影響する「生活習慣病」に関して、なぜ生活習慣がこれらの疾患の誘引となるのか、どのような病態を示すのか、どのように予防対策をたてるべきか、罹患した場合はどのように治療を行うのかについて理解する。

### [授業計画と内容]

#### 授業計画と内容

以下のトピックスを各1～2回の授業で説明する。ただし、授業の進み具合や最近の話題などに対応して新規にトピックスを追加したり、順序を入れ替えることがある。

体重測定記録を利用した減量法（計るだけダイエット）  
 沖縄県の平均寿命の変化（沖縄クライシス）  
 メタボリックシンドロームと動脈硬化症の危険因子  
 健康食ガイドライン Food Pyramid  
 健康増進機器としての自転車  
 有酸素運動・筋力トレーニングの健康科学的意義  
 日本の若年女性の「痩せすぎ」傾向とその弊害  
 食事制限と運動の寿命延長効果  
 喫煙による健康障害と禁煙補助薬  
 健康づくりに適した走り方（スロージョギング）  
 ロコモティブシンドロームと骨・関節・筋肉の重要性  
 日本の「管理職」の健康状態  
 血縁者から健康法を学ぶ  
 なぜ元気な若者が熱中症になるのか

フィードバック方法は別途連絡する。

### [履修要件]

生活習慣病の予防や治療に興味のある学生であること。  
 林担当の「健康科学」を履修していることが望ましい（必須ではない）。

## 生活習慣と生体機能障害(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

平常点(50点)とレポート(50点)の総合判定。レポートは独自の工夫が見られるものについては高い点を与える。

### [教科書]

参考資料を授業中に配付,あるいは指示する。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に資料を配付。

### [授業外学習(予習・復習)等]

基本的に予習は不要であり、講義内容の復習のみでよい。

### (その他(オフィスアワー等))

質問は授業時間以外にはメールにて受け付ける。オフィスアワーに面談する際も事前にメールにて連絡すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	神経生理学の基礎 Basic Neurophysiology				担当者所属・ 職名・氏名	情報学研究科 講師 細川 浩					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
脳は、神経細胞により高度に組織化された器官である。脳は、外部・内部環境の変動を感覚器などを用いてとらえ、それを適切に処理することができる。この際、脳はどのようにして外界の状況を把握し、どのように処理していくのかを学ぶ。鍵となる概念を学び、さらにその最先端を概観する。											
<b>[到達目標]</b>											
脳科学 神経科学を学んでいく上での神経生理学の基礎について修得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
下記の外部環境因子の変動に対する生体のホメオスタシス維持反応について講義を行う。環境の変化を読み取る仕組みと、その環境変化に対して起こる生体応答に関して、生理学、分子生物学の立場から解説する。特に外部温度変化に対して神経系がどのように応答するのかを解説する。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1、 温度</li> <li>2、 水分</li> <li>3、 栄養</li> <li>4、 酸素</li> <li>5、 光</li> <li>6、 病原菌</li> <li>7、 化学物質</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
期末試験											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業後に復習をしてください											
(その他(オフィスアワー等))											
生物を学んでこなかった人や、文系の人を対象にしています。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	英語教育方法論 Methodology in English Education				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 田地野 彰					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>言語と教育との有機的関連性を視野に入れながら、言語と教育にかかわる諸課題を、理論と実践の両面から探求する。</p> <p>主として、言語教育理論、教育環境論、教育方法論、学習者論、履修課程設計論、教材開発論、評価論について総合的観点から考察する。具体的には、カリキュラム開発、教授法、学習方略、動機づけ、語彙教育、教育文法等に関する諸課題について考究する。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
英語教育研究分野における最新の研究成果に基づいた議論を通して英語教育方法論に関する諸課題を総合的・俯瞰的に考察できるようになる。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>以下のような課題について、1課題あたり1～2週の授業をする予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語カリキュラム開発論</li> <li>・英語教育方法論</li> <li>・英語教育論（高等教育）</li> <li>・英語教育論（中等教育）</li> <li>・英語教育論（初等教育）</li> <li>・英語教育論（社会言語学の観点から）</li> <li>・英語教育論（言語習得論の観点から）</li> <li>・英語教材開発論</li> <li>・英語教育評価論</li> <li>・英語教育学習者論</li> <li>・フィードバック</li> </ul> <p>なお、受講者には、少なくとも一つの課題について関連研究の成果をまとめて報告することが期待されている。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
平常点と学期末レポートにより総合的に評価する（割合はそれぞれ50%程度）。なお、平常点には予習に基づく議論や授業中の発言・発表などが含まれる。											
<b>【教科書】</b>											
<p>授業中に指示する</p> <p>ELT JournalやTESOL Journalなど、英語教育分野における代表的な国際誌の掲載論文を教材として使用する予定。</p>											
----- 英語教育方法論(2)へ続く -----											

## 英語教育方法論(2)

---

### [参考書等]

(参考書)

Tajino, A., Stewart, T. and Dalsky, D. (Eds.) 『Team Teaching and Team Learning in the Language Classroom: Collaboration for Innovation in ELT』 (Routledge, Oxford, U.K.) ISBN:978-1138857650 (研究室にて貸出可能です。)

田地野 彰 『<意味順>英作文のすすめ』 (岩波書店) ISBN:978-4005006762 (学習文法・文法指導についての参考図書として使用する予定。)

大津由紀雄 (編著) 『学習英文法を見直したい』 (研究社) ISBN:978-4327410803 (学習文法について様々な視点から論じている。参考図書して使用する予定。)

Yoshida, T., Imai, H., Nakata, Y., Tajino, A., Takeuchi, O. & Tamai, K. 『Researching Language Teaching and Learning: An Integration of Practice and Theory』 (Peter Lang, Bern, Switzerland.) ISBN:978-3-03911-534-1 (英オックスフォード大学主催の英語教育セミナーで発表された最新の授業研究成果を紹介予定。)

### [授業外学習(予習・復習)等]

指定された論文を毎回読んでくれることが期待されている。なお、論文リストは授業中に配布予定。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィス・アワーは、水曜日 12:10-12:50。(事前にメールにて連絡のこと。)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	英語コミュニケーション論 Introduction to CALL				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 PETERSON, Mark					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	英語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
This course is designed to provide an introduction to key concepts and research in the field of computer assisted language learning (CALL).											
<b>【到達目標】</b>											
This course will provide students with an understanding of the key concepts and issues associated with the use of new technologies in language education.											
<b>【授業計画と内容】</b>											
This course will focus on providing an overview of the technological, theoretical and pedagogical issues raised by the application of computer technology in language education. In this context, areas such as pedagogy, technology and second language acquisition theory will also be investigated with the aim of providing students with a through understanding of the impact of computer technologies on second language learning and teaching. Moreover, on completion of this course students will be able to effectively apply new knowledge regarding CALL in their teaching. Areas covered will include software evaluation, CALL authoring, courseware management, data driven learning and computer mediated communication (CMC).											
<b>【履修要件】</b>											
Undergraduate students											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
This course has two main requirements, regular attendance and submission of a paper (due by the end of the semester) focusing on an aspect of CALL. Examples of suitable topics include:  evaluation of a CALL software package critical review of a CALL web site critical review of a CALL article or book creation of and rationale for a CALL task feedback on participation in a CALL activity  Assessment will be based on the above factors.											
<b>【教科書】</b>											
Mark Peterson 『Computer Games and Language Learning』 ( Palgrave Macmillan ) ISBN:978-1-137-00516-8											
<b>【参考書等】</b>											
( 参考書 ) Chapelle, C 『English language learning and technology』 ( John Benjamins ) Levy, M. 『Computer assisted language learning: Concept and conceptualization』 ( Oxford University Press )											
----- 英語コミュニケーション論(2)へ続く -----											

英語コミュニケーション論(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

Preread the recommended texts.

**（その他（オフィスアワー等））**

Office hour is by appointment.

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	数理現象論 A Applied Analysis A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 清水 扇丈					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
線形放物型方程式に対する最大 $L_p$ 正則性は、非線形、特に非線形項に線形項の最高階の微分が含まれる準線形の放物型方程式に対して、その時間局所適切性を証明するための協力的な手段の一つである。本講義では、この20年間にその解明が進展してきた、Banach空間値の放物型方程式に対する最大 $L_p$ 正則性を、H-無限演算法に基づき論ずることを目的とする。											
【到達目標】											
最大 $L_p$ 正則性についての基礎概念を理解し、準線形放物型偏微分方程式の初期値問題や初期値一境界値問題の解法として応用できるようになること。また、最大 $L_p$ 正則性の学修に必要な関数解析、半群理論、フーリエ解析、調和解析の基本概念を習得すること。これらの概念は準線形放物型方程式の解法に留まらず、解析諸分野の根底をなすものでもある。											
【授業計画と内容】											
第1回 角型作用素 第2回 Dunford関数演算 第3回 時間微分作用素 第4回 解析半群 第5回 有界純虚数冪作用素 第6回 有界H-無限演算作用素 第7回 トレース空間－実補間空間と埋め込み 第8回 R-有界性 第9回 作用素値Fourier掛け算作用素と最大 $L_p$ -正則性 第10回 R-有界角型作用素 第11回 R-有界H-無限演算作用素 第12回 R-有界角型作用素 第13回 一般領域における最大 $L_p$ -正則性 第14回 非線形問題への応用											
【履修要件】											
微分積分学 A・B、線形代数学 A・B を履修していること。 関数解析、フーリエ解析の予備知識があることが望ましい。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
レポート試験の成績（70％）平常点評価（30％）。 平常点評価には、出席状況と小レポートの評価を含む。											
----- 数理現象論 A (2)へ続く -----											

## 数理現象論 A (2)

### [教科書]

使用しない

### [参考書等]

(参考書)

J, Pruess, G. Simonett 『Moving interfaces and quasilinear parabolic evolution equations』 ( Monographs in Mathematics 105, Birkhaeuser ) ISBN:978-3-319-27697-7

八木厚志 『放物型発展方程式とその応用 (上) (岩波数学選書)』 (岩波書店) ISBN:978-4-00-007595-4

伊藤清三・黒田成俊・藤田宏 『関数解析 (岩波基礎数学選書)』 (岩波書店) ISBN:4-00-007810-0

R. Denk, M. Hieber, J. Pruess 『R-boundness, Fourier multipliers and problems of elliptic and parabolic type』 (Memoirs of AMS166 No.788) ISBN:0065-9266

### [授業外学習 (予習・復習) 等]

理解を深めるためには復習は重要です。

### (その他 (オフィスアワー等) )

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	数理現象論 B Applied Analysis B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 上木 直昌					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
様々な分野でランダムな現象を記述する為に使われている確率微分方程式を数学的に厳密に扱う方法について述べる。											
<b>[到達目標]</b>											
確率微分方程式の基礎概念を理解し、更に応用が出来るようになること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下の項目について、各項目あたり2～3週の講義を行う予定である。受講者の理解の状況を適切に見極め、必要な場合には説明や課題を追加するなどにより、受講者が一定のレベルに達するように配慮する。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ブラウン運動、ウィーナー空間 コルモゴロフの拡張定理と連続性定理</li> <li>2. 確率積分</li> <li>3. マルチンゲール 条件付き平均、任意抽出定理、マルチンゲール不等式、確率積分の連続性</li> <li>4. 確率微分方程式の解の存在と一意性</li> <li>5. 伊藤の公式</li> <li>6. 確率微分方程式の応用 シュレディンガー作用素、数理ファイナンス等</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
微分積分学AB、線形代数学ABの知識を前提とする。また微分積分学続論II、実解析A、集合と位相も履修することを推奨する。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポート試験の成績(80%) 平常点評価(20%) 平常点評価には、出席状況、2～3回の小レポートの評価を含む。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) エクセンドール 『確率微分方程式』(丸善出版) ISBN:978-4621061763 西尾真喜子 『確率論』(実教出版) ISBN:978-4407021899											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
各授業後に内容の復習をすることが大切です。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	運動の生理学 Physiology of Behavior	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 神崎 素樹
---------------	----------------------------------	-----------------	--------------------

配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

### [授業の概要・目的]

本講義では、身体動作の生理学について学習する。

- (1) 筋収縮の生理学
- (2) 神経・筋の情報伝達・自律神経系の働き
- (3) エネルギー供給機構
- (4) 糖代謝・乳酸の代謝
- (5) 加圧トレーニングとスロートレーニング

これら講義から、我々の運動（あるいは動作）がどのような制御則に基づいているのか？それはどのような生理学的機序なのか？そしてその複雑な制御則がどのような意味があるか？について学習する。

### [到達目標]

自らの身体の理を理解し、その知識をもとに日常生活あるいはスポーツ活動に実践することを目標とする。

### [授業計画と内容]

#### (1) 筋収縮の生理学

マクロな視点から筋の形の生理学的意義を理解する。ミクロな視点から筋がどのようにして収縮 - 弛緩しているか、そのためにはどのような制御機構が働いているか、について学習する。これに関しては2週の授業を行う予定である。

#### (2) 神経・筋の情報伝達

骨格筋を支配する運動神経細胞は、体内のさまざまな部位からの入力情報をもとにその出力を決定する。ここでは、これらの入力がどのように変換され出力に反映されるか、複数の入力がどのように総合され、その情報がどのように筋活動に結びつくかについて学習する。これに関しては2週の授業を行う予定である。

#### (3) エネルギー供給機構

骨格筋の活動には、エネルギーを供給し続けることが必要である。連続的なエネルギー供給機構を理解する。これに関しては1週の授業を行う予定である。

#### (4) 糖代謝

生活習慣病予防のためには、筋での糖代謝について深く理解することが必要である。また、スポーツの競技力向上のためにも糖代謝を理解するが必要である。骨格筋の糖代謝について学習する。これに関しては1週の授業とする。

#### (5) 乳酸の代謝

乳酸は疲労物質と考えられているが、それは間違いである。乳酸はエネルギー源である。乳酸が疲労物質でないこと、身体運動にとって乳酸は重要であることを学習する。これに関しては1週の授業とする。

#### (6) 自律神経系の働き

身体運動中に心拍数を測定してみると、運動強度にほぼ比例して心拍数は上昇する。運動時に限ら

-----  
運動の生理学(2)へ続く

## 運動の生理学(2)

ず、このようなストレス時にみられる呼吸循環系のダイナミックな反応は自律神経を介してもたらされる。心拍数の一拍毎の変動から自律神経活動に関する情報が得られる。ここでは、心拍数の変動から自律神経系の働きについて学習する。これに関しては1週の授業を行う予定である。

### (7) 有酸素トレーニング、加圧トレーニング、スロートレーニング

脂肪燃焼を目的とした各種トレーニングについて理解する。加圧トレーニングやスロートレーニングは筋力および筋量を効率的かつ効果的に向上させることができる。さらに、効率的に脂肪を燃焼させることもでき、生活習慣病予防にも効果的である。これらトレーニングの生理学的メカニズムおよびその効用について学習する。これに関しては6週の授業を行う予定である。

### 【履修要件】

特になし

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

平常点とテスト（最終週に実施する）により評価する。

### 【教科書】

前日までにクラスに授業の資料をアップロードするので、ダウンロードしたものを授業に持ってくる。

### 【参考書等】

（参考書）

### 【授業外学習（予習・復習）等】

特になし

### （その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	運動の生理学 Physiology of Behavior	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 神崎 素樹
---------------	----------------------------------	-----------------	--------------------

配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

**[授業の概要・目的]**

本講義では、身体動作の生理学について学習する。

- (1) 筋収縮の生理学
- (2) 神経・筋の情報伝達・自律神経系の働き
- (3) エネルギー供給機構
- (4) 糖代謝・乳酸の代謝
- (5) 加圧トレーニングとスロートレーニング

これら講義から、我々の運動（あるいは動作）がどのような制御則に基づいているのか？それはどのような生理学的機序なのか？そしてその複雑な制御則がどのような意味があるか？について学習する。

**[到達目標]**

自らの身体の理を理解し、その知識をもとに日常生活あるいはスポーツ活動に実践することを目標とする。

**[授業計画と内容]**

(1) 筋収縮の生理学

マクロな視点から筋の形の生理学的意義を理解する。ミクロな視点から筋がどのようにして収縮 - 弛緩しているか、そのためにはどのような制御機構が働いているか、について学習する。これに関しては2週の授業を行う予定である。

(2) 神経・筋の情報伝達

骨格筋を支配する運動神経細胞は、体内のさまざまな部位からの入力情報をもとにその出力を決定する。ここでは、これらの入力があるどのように変換され出力に反映されるか、複数の入力があるどのように総合され、その情報がどのように筋活動に結びつくかについて学習する。これに関しては2週の授業を行う予定である。

(3) エネルギー供給機構

骨格筋の活動には、エネルギーを供給し続けることが必要である。連続的なエネルギー供給機構を理解する。これに関しては1週の授業を行う予定である。

(4) 糖代謝

生活習慣病予防のためには、筋での糖代謝について深く理解することが必要である。また、スポーツの競技力向上のためにも糖代謝を理解するが必要である。骨格筋の糖代謝について学習する。これに関しては1週の授業とする。

(5) 乳酸の代謝

乳酸は疲労物質と考えられているが、それは間違いである。乳酸はエネルギー源である。乳酸が疲労物質でないこと、身体運動にとって乳酸は重要であることを学習する。これに関しては1週の授業とする。

(6) 自律神経系の働き

-----  
運動の生理学(2)へ続く

## 運動の生理学(2)

身体運動中に心拍数を測定してみると、運動強度にほぼ比例して心拍数は上昇する。運動時に限らず、このようなストレス時にみられる呼吸循環系のダイナミックな反応は自律神経を介してもたらされる。心拍数の一拍毎の変動から自律神経活動に関する情報が得られる。ここでは、心拍数の変動から自律神経系の働きについて学習する。これに関しては1週の授業を行う予定である。

### (7) 有酸素トレーニング、加圧トレーニング、スロートレーニング

脂肪燃焼を目的とした各種トレーニングについて理解する。加圧トレーニングやスロートレーニングは筋力および筋量を効率的かつ効果的に向上させることができる。さらに、効率的に脂肪を燃焼させることもでき、生活習慣病予防にも効果的である。これらトレーニングの生理学的メカニズムおよびその効用について学習する。これに関しては6週の授業を行う予定である。

### 【履修要件】

特になし

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

平常点とテスト（最終週に実施する）により評価する。

### 【教科書】

前日までにクラスに授業の資料をアップロードするので、ダウンロードしたものを授業に持ってくる。

### 【参考書等】

（参考書）

### 【授業外学習（予習・復習）等】

特になし。

### （その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	英語学習指導論 Theories of English Language Learning and Teaching				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 中森 誉之					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
英語を学習していく際に学習者が直面する諸課題を多面的に考察しながら，効果的かつ効率的な英語指導について検討します。基礎から発展まで，幅広い視座と深い見識を身につけることを目的とします。来年度は，英語の言語知識（音声・文字とつづり・語彙・構造・運用）の学習と指導について考察します。											
【到達目標】											
この授業では，現在までの自らの英語学習経験を振り返りながら，言語技能（聴解・発話・読解・作文）の学習と指導について体系的に考究していきます。訳読・翻訳技術に傾斜しない，認知科学に根ざした最新の考え方を提供します。段階的な言語処理能力育成の観点から語彙と文法をとらえ4技能との関係性を追究していきます。											
【授業計画と内容】											
1．英語の理解と表出過程：外国語処理能力育成に向けて（第1章） 2．技能間の関係性，技能指導の順序性（第2章） 3．聴解(Listening)の学習と指導（第3章） 4．発話(Speaking)の学習と指導（第4章） 中間試験：音声領域の学習指導について 5．読解(Reading)の学習と指導（第5章） 6．作文(Writing)の学習と指導（第6章） 7．統合技能の育成に向けた指導，語彙の位置付け（第7章） 8．統合技能の育成に向けた指導，文法の位置付け（第8章） 期末試験：4技能の関係性と段階的な学習指導について  * 内容に応じて複数回の授業時間を当てます。											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
授業中に実施する数回の論述試験の成績を合計し，100点満点換算し，本学の評価基準で判定します。評価は，知識の定着度と論証能力（説得性・論理性・明解性）に基づきます。試験を受けられなかった場合は，必ず代替課題を提出してください。代替課題の提出がない場合は，欠席分の点数は零点として計算して評定を出します。											
----- 英語学習指導論(2)へ続く -----											

## 英語学習指導論(2)

### [教科書]

中森誉之 『学びのための英語指導理論 - 4技能の指導方法とカリキュラム設計の提案』（ひつじ書房）

### [参考書等]

（参考書）

中森誉之 『学びのための英語学習理論 - つまずきの克服と指導への提案』（ひつじ書房）（偶数年度のこの授業で使用しています。）

Takayuki Nakamori 『Chunking and Instruction The Place of Sounds, Lexis, and Grammar in English Language Teaching』（Hituzi）ISBN:978-4894764040（大学院で使用しています。）

中森誉之 『外国語はどこに記憶されるのかー学びのための言語学応用論』（開拓社（言語・文化選書37））ISBN:978-4758925372（最新の知見を取り入れた分かりやすい読み物。推奨文献。）

中森誉之 『外国語音声の認知メカニズムー聴覚・視覚・触覚からの信号』（開拓社）（外国語音声学習（聞く・話す）について最新の知見を提案）

Takayuki Nakamori 『Foreign Language Learning without Vision: Sound Perception, Speech Production, and Braille』（Hituzi）（大学院で使用しています。）

### [授業外学習（予習・復習）等]

授業形態は講義形式です。教科書を用いて説明を行います。受講者による発表や討論，演習などは時間上の制約により，残念ながら行うことができません。

### （その他（オフィスアワー等））

私は日本の英語教育の理論的基盤を構築する仕事をしています。語彙・文法の位置付けや，音声の学習指導に関しては，現職教員向けの講座でも広く知見を還元しています。英語教育関係の進路を志望する方，英語教育を経験・勘・思い付きではなく最新・最先端の学術的な視点から客観的に見つめ直したい方，塾や家庭教師で英語を教えている方，言語習得論を考究したい方，その他純粋に興味関心がある皆さんの受講を歓迎します。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	情報数学I Mathematics for Informatics I				担当者所属・ 職名・氏名	非常勤講師 山田 修司					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>情報科学として必要な数学の一分野である，グラフ理論について講義を行う。          グラフは，物と物との関係，繋がりなどを表す図形であり，例えば路線図や人間関係図など，実社会で広く用いられているものである。          授業の目的は次の通りである。          グラフの数学的定義や定理を理解できる。          グラフの実践的な応用とそのアルゴリズムについて習得する。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
グラフの基本的な概念と定理，またアルゴリズムを理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>以下のようなトピックについて，それぞれ2-4週で講義する予定である．</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. グラフの定義および用語，部分グラフ，付加・削除・縮約，頂点の次数，同型なグラフ，単純グラフの一覧表，完全グラフおよび補グラフ</li> <li>2. 道，回路・サイクル，二部グラフ，オイラー回路，ハミルトンサイクル，切断辺・切断点・ブロック，木，根つき木，全域木，全域木の数え上げ</li> <li>3. 平面グラフ・平面的グラフ，双対グラフ，オイラーの公式，正多面体グラフ，非平面的グラフ</li> <li>4. 頂点彩色，彩色多項式，辺彩色</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
文系・理系は問わない．特別な予備知識は仮定しない．											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>上で示したトピックに関連するレポート課題および最後の授業で行う簡単な試験によって理解度を評価する．          試験 80%，レポート課題 20%</p>											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
<p>(参考書)          授業中に紹介する          必ずしも入手しなくてよい</p>											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
プリントを配布するので予習復習をすること											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	情報数学II Mathematics for Informatics II				担当者所属・ 職名・氏名	非常勤講師 山田 修司					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>情報科学で有用な初等整数論および数え上げ論について、いくつかの具体例とトピックとを交えながら講義を行う。</p> <p>この授業の目的は次の通りである。</p> <p>初等整数論の剰余類について理解し、その計算および応用が出来る。</p> <p>数え上げの理論を用いて、離散的な事象の数え上げが出来る。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
初等整数論を用いた暗号，誤り訂正符号などを理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業を前半と後半に大きく分けて、次のような内容についてそれぞれ講義を行う予定である。											
[前半]											
整数の剰余計算，ユークリッドの互除法，フェルマーの小定理，中国剰余定理，RSA暗号，ハミング符号											
[後半]											
順列，組み合わせ，置換（対称群），ポリアの定理											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>上で示したトピックに関連するレポート課題および最後の授業で行う簡単な試験によって理解度を評価する。</p> <p>試験 80%，レポート課題 20%</p>											
<b>[教科書]</b>											
山田修司 『Mathematicaで楽しむ数理科学』（牧野書店）ISBN:4795201285											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書）											
授業中に紹介する											
必ずしも入手しなくてよい											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
復習をしっかりとすること											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	言語構造論 Language and its Structure				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 藤田 耕司					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
現代理論言語学の主要アプローチの1つである生成文法について概説する。生成文法は人間固有の生物学的形質としての言語能力について、その設計・発達・進化の解明を目指す。これまでどのような研究が行われ、何が分かり、何が問題として残っているかについての理解を深める。さらに、近年の生物言語学・進化言語学の発展についても言及し、これらの基本について学ぶ。											
<b>[到達目標]</b>											
生成文法の特に原理・パラメータモデルからミニマリスト・プログラムへの流れについて知見を深めるとともに、言語能力の生物学的基盤や起源・進化についての研究動向を理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下のトピックについてそれぞれ1～2回の講義を行う。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Language as a biological trait</li> <li>2. Linguistics as human biology</li> <li>3. Generative Grammar: From Standard Theory to Minimalism</li> <li>4. Fundamental properties of human language</li> <li>5. Syntax and lexicon</li> <li>6. Modular architecture of the human mind/brain revisited</li> <li>7. Understanding language evolution</li> <li>8. The Merge-only hypothesis</li> <li>9. Motor control origin of Merge</li> <li>10. Approaching biological/evolutionary adequacy (Biolinguistics 2.0)</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
「言語科学」など言語学の入門クラスを受講済みであるか、現代言語学の基礎的な知識を持っていることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
成績評価は平常点（出席状況や小テスト）30%と定期試験70%に基づく。											
<b>[教科書]</b>											
中村・金子・菊地 『生成文法の新展開 ミニマリスト・プログラム』（研究社出版）ISBN:978-4327421557											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 講義用資料をKULASISから配布するので各自で持参すること。											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
教科書にあらかじめ目を通し、疑問点などを整理した上で講義に参加すること。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	言語機能論 Language and its Functions	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 守田 貴弘								
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語

### [授業の概要・目的]

この授業のテーマは「言語を獲得して、ヒトにできるようになったこととは何なのか」という問いと、この問いに対して言語学という学問がいかに向き合うべきであるかという問題を探求することである。意味論と語用論、さらには、これらに関連する哲学的アプローチを参照しながら、「結局のところ、言語を使って我々は何をしているのか」「科学とされる言語学には何が可能で、何を目的とするものなのか」という問題について考え、受講生自身が（暫時的なものでも構わないが）答えを導き出すことを目的とする。

### [到達目標]

- ・言語を使って行われる思考や伝達行為の重層性を理解し、それが引き起こす学問上の困難について自分で説明できるようになる。
- ・言語学の意味論および語用論で行われている議論の概要および言語の機能的側面に対して科学的にアプローチすることの難しさを理解し、言語学の枠内でどのような探求方法が可能なのか、自分なりのアイデアを提示することができるようになる。

### [授業計画と内容]

ある人には言いたいことがよく伝わるのに、別の人にはまったく通じない、といったもどかしい体験が誰にもあるはずである。そのもどかしさの原因を解き明かすための学問として言語学が候補に挙がるわけだが、言語学だけでは太刀打ちできそうにもない。他の学問分野も参照しつつ、自らの経験に即して考えていく必要がありそうである。

本講義では、以下のトピックとの関連で言語の機能を考えていく。

1. 言語と言語もどきの境界(1)～定義
2. 言語と言語もどきの境界(2)～言語学の主要分野
3. 言語のありか(1)～生物学の一部として捉える必要性
4. 言語のありか(2)～観念の合成として考える
5. 言語のありか(3)～記憶と計算
6. 社会的産物としての側面(1)～伝達行為
7. 社会的産物としての側面(2)～ジェスチャー起源の問題1
8. 社会的産物としての側面(3)～ジェスチャー起源の問題2
9. ことばで共有されるもの、されないもの(1)～知覚はどこまで優位か
10. ことばで共有されるもの、されないもの(2)～記号発達
11. ことばで共有されるもの、されないもの(3)～私にしか分からない思い
12. ことばで共有されるもの、されないもの(4)～相貌論
13. 科学の要請と経験的事実
14. まとめ

## 言語機能論(2)

### [履修要件]

言語科学IまたはIIを履修済みであることが望ましい。

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

平常点30%，期末レポート70%。平常点は授業中にときどき書いてもらうエッセイ，翌週までの課題，および授業への貢献度で評価する。成績評価は本学評価基準に準ずる。

### [教科書]

定めない。必要な場合は適宜プリントを配布するか、KULASISを通じて配布する。

### [参考書等]

(参考書)

Tomasello, M. 『A Natural History of Human Thinking』 (Harvard University Press) ISBN:978-0674724778

Scott-Phillips, Th. 『Speaking Our Minds: Why Human Communication is Different, and How Language Evolved to Make It Special』 (Palgrave MacMillan) ISBN:978-1137334565

野矢茂樹 『心という難問』 (講談社) ISBN:978-4062200783

### [授業外学習(予習・復習)等]

期末レポートは講義で扱った問題から1つを選択し、問題の内容をまとめるとともに、自身のアイデアを示すといった内容で課題提示する予定である。参考書として紹介されたもののいくつかを読んだ上でレポートを作成できるように準備すること。

### (その他(オフィスアワー等))

- ・講義科目ではあるが、履修生の積極的な発言を歓迎する。
- ・講義は板書とスライド等を組み合わせて行う。
- ・オフィスアワー，連絡先等についてはKULASISにて確認のこと。メールでの質問は随時受けつける。オフィスアワー以外の時間であってもアポイントメントの相談は可能。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	言語比較論 Comparative Language Studies				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 齋藤 治之					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
比較言語学の方法の習得を目指し、同時に言語変化の法則性とそのメカニズムを追及する。さらに、言語理論史に関する知識を深める。											
<b>【到達目標】</b>											
印欧語の比較方法を学ぶことにより言語の比較方法一般を習得する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>印欧語の世界を視野に収めながら、ことばの普遍性・体系性を明らかにすることを目標とする。史的言語学の諸分野（音論、形態論、統語論等の諸領域）を対象に、言語体系の普遍的な法則性を探るべく、通時的考究を進める。比較言語学的方法と併せて、言語の理論的考究による種々の成果を踏まえ、言語学的方法論上の問題についても考察する（第1～5回）。言語類型論なアプローチ等により、ことばの諸相を考究することによって、多様性の背後に見え隠れする言語の普遍的特質を追求する（第6～10回）。以上のような立場から、言語体系の法則性・言語変化のメカニズムを探り、そのあり方を解明することを通して、言語の本質に迫る（第11～14回）。</p> <p>今年度はインド・ヨーロッパ語比較研究の概説を下記の項目に関して行う：</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1．インド・ヨーロッパ語比較研究の歴史</li> <li>2．インド・ヨーロッパ語の分類</li> <li>3．インド・ヨーロッパ語の音韻</li> <li>4．インド・ヨーロッパ語の形態</li> <li>5．インド・ヨーロッパ語の統語</li> <li>6．インド・ヨーロッパ語の語彙</li> <li>7．インド・ヨーロッパ語族と他の語族</li> <li>8．まとめ</li> </ol> <p>各項目につき2回前後の授業で取り組む予定である。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
平常点（出席点）・レポート等の総合評価による。											
<b>【教科書】</b>											
使用しない プリントを準備して配布する。											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） James Clackson 『Indo-European Linguistics』（Cambridge University Press）ISBN:978-0-521-65367-1											
----- 言語比較論 (2)へ続く -----											

## 言語比較論 (2)

---

### [授業外学習（予習・復習）等]

授業内容と関連する文献を自分で読むことが必要である。

### （その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの有無についてはKulasisを参照してください

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	運動のしくみ Mechanism of Movement				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 久代 恵介					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>身体の動きがつくられ、上手くなるしくみを学ぶ。          運動の指令は大脳皮質の運動野から出力され、脊髄を經由して筋を収縮させる。運動の結果は感覚器によりフィードバックされ、中枢において評価と修正がなされる。これによりヒトは身体を上手く制御し、目的の行為を達成させている。本講義ではこれらの一連のしくみについて、神経科学、運動科学、スポーツ心理学の観点より解説する。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
本講義を通して、運動が上手くなるための基礎知識習得を目指す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
1) 脳神経系の概略 2) 脊髄から運動指令が出力されるしくみ 3) 脳において運動プログラムが生成されるしくみ 4) 小脳による運動学習機能 5) 運動の知覚と眼球運動 6) 空間知覚に関与する中枢神経系機構 7) 運動学習に関する諸理論 (各項目につき1~2週間程度扱う)											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
試験の成績による。ただし、毎回の授業最後に提出する質問で加点する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
前回までの内容を十分に理解しておくこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	運動のしくみ Mechanism of Movement				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 久代 恵介					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>身体の動きがつくられ、上手くなるしくみを学ぶ。          運動の指令は大脳皮質の運動野から出力され、脊髄を經由して筋を収縮させる。運動の結果は感覚器によりフィードバックされ、中枢において評価と修正がなされる。これによりヒトは身体を上手く制御し、目的の行為を達成させている。本講義ではこれらの一連のしくみについて、神経科学、運動科学、スポーツ心理学の観点より解説する。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
本講義を通して、運動が上手くなるための基礎知識習得を目指す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
1) 脳神経系の概略 2) 脊髄から運動指令が出力されるしくみ 3) 脳において運動プログラムが生成されるしくみ 4) 小脳による運動学習機能 5) 運動の知覚と眼球運動 6) 空間知覚に関与する中枢神経系機構 7) 運動学習に関する諸理論 (各項目につき1～2週間程度扱う)											
<b>[履修要件]</b>											
履修希望者が多数の場合は、抽選により履修制限を行う。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
試験の成績による。ただし、毎回の授業最後に提出する質問で加点する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
前回までの内容を十分に理解しておくこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	脳情報学 Neuroinformatics				担当者所属・ 職名・氏名	情報学研究科 教授 神谷 之康					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
脳や心のはたらきを理解する上で有用な数理的アプローチを概説する。脳の情報表現や情報処理を理解する上で重要な基礎的な数理概念や情報科学の手法を解説し、脳を数理的にモデル化する多様なアプローチを紹介する。											
<b>【到達目標】</b>											
脳研究を行う上で重要な概念や方法、とくに、情報理論、信号処理、統計的機械学習、ニューラルネットワーク、ブレイン・デコーディング等について理解し、脳機能の理解に必要な数理的素養を高める。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
下記のテーマについて、1テーマあたり2 - 3週の予定で実施する： (1) 脳の信号処理 (2) 脳の情報理論 (3) 統計的機械学習とニューラルネットワーク (4) ブレイン・デコーディング (5) ブレイン・マシン・インターフェース											
<b>【履修要件】</b>											
微積分学、線形代数学、統計学の基礎を習得していることが望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
毎回実施する小テストの成績により評価する。											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
(参考書) Dayan, P. & Abbott, L. F. 『Theoretical Neuroscience: Computational and Mathematical Modeling of Neural Systems』 (MIT Press) MacKay, D. 『Information Theory, Inference, and Learning Algorithms』 (Hardback) Goodfellow, I., Bengio, Y., and Courville, A. 『Deep Learning』 (MIT Press) Huettel, S.A. Song, A.W., and McCarthy, G. 『Functional Magnetic Resonance Imaging』 (Sinauer Associates)											
----- 脳情報学(2)へ続く -----											

## 脳情報学(2)

( 関連URL )

<http://kamitani-lab.tumblr.com/post/152153243056/guide-to-study-at-kamitani-lab>(神谷研究室ホームページ)

[授業外学習 ( 予習・復習 ) 等]

授業中に配布する資料やオンラインの資料を利用して予習・復習を行う。

( その他 ( オフィスアワー等 ) )

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	精神保健福祉概論 Mental Health and Welfare				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 船曳 康子					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
精神保健は、今や、脱施設化、つまり地域社会における共生が重要視されてきている。そのこころの健康を維持するための基本知識と取り組みについて、解説していく。自身や周囲のメンタルヘルスに加え、学校や職場や家族という単位でも役立つよう、また、社会福祉や精神保健関係の仕事に携わることになった場合にも役立つ知識を提供する。											
<b>【到達目標】</b>											
実社会における施策は、現状を踏まえながら、時々刻々と更新されていく。その実情についていきながら、今後の方向性について考え、提案していく土台を作ること为目标とする。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
以下の内容について、それぞれ1～2週に分けて、授業を行う。 1.授業の概要説明と精神保健福祉とは 2.メンタルヘルスに関わる職種の説明 3.人の認知・精神機能とは 4.認知・精神機能の測定方法1：心理・発達検査 5.認知・精神機能の測定方法2：脳機能検査 6.神経発達症者に対する取り組み：発達障害者支援法とこれから 7.ひきこもり対策・依存対策 8.児童虐待対策/育児不安 9.災害時のこころのケア支援体制/支援者のメンタルヘルス 10.犯罪被害者のメンタルヘルス/更生保護制度 11.地域生活支援（支援機関、自助活動、人権擁護） 12.職業支援 13.社会保障 14.まとめ											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
授業内容に沿った小テスト											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 精神保健福祉白書編集委員会 『精神保健福祉白書』（中央法規） 『精神保健福祉士』（ミネルヴァ書房）											
----- 精神保健福祉概論(2)へ続く -----											

精神保健福祉概論(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

関連する参考書を読む、時事問題に目を通すなど

**（その他（オフィスアワー等））**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	精神保健福祉概論 Mental Health and Welfare				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 船曳 康子					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
精神保健は、今や、脱施設化、つまり地域社会における共生が重要視されてきている。そのこころの健康を維持するための基本知識と取り組みについて、解説していく。自身や周囲のメンタルヘルスに加え、学校や職場や家族という単位でも役立つよう、また、社会福祉や精神保健関係の仕事に携わることになった場合にも役立つ知識を提供する。											
<b>【到達目標】</b>											
実社会における施策は、現状を踏まえながら、時々刻々と更新されていく。その実情についていきながら、今後の方向性について考え、提案していく土台を作ること为目标とする。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
以下の内容についてそれぞれ1～2週に分けて、授業を行う。 1.授業の概要説明と精神保健福祉とは 2.メンタルヘルスに関わる職種の説明 3.人の認知・精神機能とは 4.認知・精神機能の測定方法1：心理・発達検査 5.認知・精神機能の測定方法2：脳機能検査 6.神経発達症者に対する取り組み：発達障害者支援法とこれから 7.ひきこもり対策・依存対策 8.児童虐待対策/育児不安 9.災害時のこころのケア支援体制/支援者のメンタルヘルス 10.犯罪被害者のメンタルヘルス/更生保護制度 11.地域生活支援（支援機関、自助活動、人権擁護） 12.職業支援 13.社会保障 14.まとめ											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
授業内容に沿った小テスト											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 精神保健福祉白書編集委員会 『精神保健福祉白書』（中央法規） 『精神保健福祉士』（ミネルヴァ書房）											
----- 精神保健福祉概論(2)へ続く -----											

精神保健福祉概論(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

関連する参考書を読む、時事問題に目を通すなど

**（その他（オフィスアワー等））**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	言語教育政策論 Language policy				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 西山 教行					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
外国語学習・教育を規定し、またそれに影響を及ぼす社会文化的文脈とは何か、そのような文脈において言語教育を決定する意思としての言語政策とは何か、などの課題を中心に討究し、異文化間性、言語政策、社会言語学などの視座を総合的に理解する。具体的には、ヨーロッパの言語教育政策を中心に、言語政策研究の手法と課題を考究する。											
【到達目標】											
ヨーロッパにおける言語教育政策の発展と現状についての理解を深める。											
【授業計画と内容】											
欧州評議会の言語政策について考察する。次のような項目に従って講義を行う。											
第1回 ガイダンス											
第2回 言語政策とは何か，コーパスとステータス											
第3回 欧州連合(EU)の言語政策（1）リングア計画からレオナルド，ソクラテス計画まで											
第4回 欧州連合(EU)の言語政策（2）21世紀における多言語主義の展開											
第5回 欧州評議会の言語政策1（創設から1975年まで）											
第6回 欧州評議会の言語政策2（1975年から現在まで）											
第7回 「ヨーロッパ言語教育政策ガイド」について，第1章											
第8回 「ヨーロッパ言語教育政策ガイド」について，第2章											
第9回 「ヨーロッパ言語教育政策ガイド」について，第3章											
第10回 「ヨーロッパ言語教育政策ガイド」について，第4章											
第11回 「ヨーロッパ言語教育政策ガイド」について，第5章											
第12回 「ヨーロッパ言語教育政策ガイド」について，第6章											
第13回 フランス植民地帝国におけるフランス語普及について 第14回 フランス植民地帝国に おけるフランス語普及について 第15回 フランス植民地帝国におけるフランス語普及について											
【履修要件】											
ヨーロッパ統合の歴史についてその概要を把握していることが望ましい。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
出席(20%)，レポート(80%)による総合評価を行う。											
【教科書】											
授業中に指示する プリントを配布する。											
【参考書等】											
（参考書） 授業中に紹介する カルヴェ 『言語政策とは何か』白水社，文庫クセジュ（必読書）											
----- 言語教育政策論(2)へ続く -----											

言語教育政策論(2)

( 関連 URL )

<http://www.flae.h.kyoto-u.ac.jp/~nishiyama/>(西山教行研究室)

[授業外学習 ( 予習 ・ 復習 ) 等]

カルヴェ 『言語政策とは何か』を前もって読んで下さい。

( その他 ( オフィスアワー等 ) )

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	システム脳科学 Systems Neuroscience				担当者所属・ 職名・氏名	こころの未来研究センター 教授 小村 豊					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
我々の日常生活のすみずみに、多彩な認知機能が及んでいることに、着眼する。記憶・予測から意思・意識にいたるまで、認知活動の本質的な側面を、ニューロサイエンスの視座にたって捉える。脳の働きを理解するためには、ニューロン・神経回路・脳領域というマルチスケールの生理特性を知る必要がある。そのために、動物からヒトに至る、様々な研究知見を整理して、それらを包摂する動作原理を明らかにするシステム脳科学の技法を学んでもらいたい。											
<b>[到達目標]</b>											
重要な研究や最新のトピックスを紹介し、それらの結果を吟味すると同時に、今後の発展性・日常生活との関連性についても、議論する。脳の構造と機能を複合的に理解し、ゼミでの積極的議論と自らのテーマにフィードバックすることで、企画立案・研究推進する力も涵養できるだろう。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1回：オリエンテーション。 第2回以降：システム脳科学に関する最新の研究や重要トピックスを議論する。 ゼミに参加するメンバーで、論文・総説などの紹介をローテートしていく。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、論文紹介、議論の状況などをもとに評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) Eric Kandel 『Principles of Neural Science, Fifth Edition』 (McGraw-Hill)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
事前にトピックが知らされたら、関連論文などを一読し、当日の議論に備える。											
(その他(オフィスアワー等))											
脳や心に興味のある方をお待ちしています。 また、計算科学や人工知能に興味のある方も歓迎です。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	システム脳科学演習 Systems Neuroscience				担当者所属・ 職名・氏名	こころの未来研究センター 教授 小村 豊					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
我々の日常生活のすみずみに、多彩な認知機能が及んでいることに、着眼する。記憶・予測から意思・意識にいたるまで、認知活動の本質的な側面を、ニューロサイエンスの視座にたって捉える。脳の働きを理解するためには、ニューロン・神経回路・脳領域というマルチスケールの生理特性を知る必要がある。そのために、動物からヒトに至る、様々な研究知見を整理して、それらを包摂する動作原理を明らかにするシステム脳科学の技法を学んでもらいたい。											
<b>[到達目標]</b>											
重要な研究や最新のトピックスを紹介し、それらの結果を吟味すると同時に、今後の発展性・日常生活との関連性についても、議論する。脳の構造と機能を複合的に理解し、ゼミでの積極的議論と自らのテーマにフィードバックすることで、企画立案・研究推進する力も涵養できるだろう。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1回：オリエンテーション。 第2回以降：システム脳科学に沿った演習を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、演習などをもとに評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) Eric Kandel 『Principles of Neural Science, Fifth Edition』 ( McGraw-Hill )											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
事前にトピックが知らされたら、関連論文などを一読し、当日の演習に備える。											
(その他(オフィスアワー等))											
脳や心に興味のある方をお待ちしています。 また、計算科学や人工知能に興味のある方も歓迎です。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	機械学習の基礎 Foundation of Machine Learning	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 櫻川 貴司
---------------	---	-----------------	---------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

**[授業の概要・目的]**

機械学習の基本的な考え方とアルゴリズムについて、いくつかの手法に関し解説する。計算機の処理容量と速度の向上に加え、グローバルなネットワークの整備と各種センシング技術の発展により、ますます大量のデータが取得可能になりつつある。また様々な統計的な機械学習の手法が開発されたことで、そういったデータを用いて或る意味知的な情報処理を行える範囲が広がりつつある。結果として今後社会的にも重要な影響を与えると考えられる機械学習について原理的な基礎の部分を理解する。

**[到達目標]**

数学的な最適化と機械学習の基本アルゴリズムの関係について理解する。  
様々な問題に機械学習の手法を応用する基本的な考え方を身につける。

**[授業計画と内容]**

(授業計画と内容)

A. 講義の概要の説明と準備

(以下は一部省略・変更や順序の入れ替えの可能性あり)

B. 機械学習の手法でよく使われるものかなりの部分が学習アルゴリズムの本質的部分に数学的な最適化のアルゴリズムを用いている。以下の内容について数学的な最適化の理論とそれらを利用する機械学習を対比しながら解説する。

数学的な最適化の理論とアルゴリズムの例

1. 凸関数の最適化・2次関数の最適化
2. 繰り返し演算による単調な最適化
3. 非凸関数の確率的最適化

機械学習の例

1. サポートベクタ機械
2. 強化学習
3. ニューラルネットワーク

C. 必ずしも最適化と直接関係しない(かもしれない)機械学習の手法

D. 機械学習の適用例

E. ムーアの法則などの経験則を見て今後の技術的発展を推測する。技術的特異点(いわゆるシンギュラリティ)が訪れるとして、計算機やネットワークの技術へのその影響(想像を交えた考察)

F. 授業中の一部の時間を利用して、例えば以下のようなテーマについて受講者を交えた討論を行う予定である。

- ・ 今後どのように機械学習が発展し、使われていくか。
- ・ 技術的特異点が訪れると仮定して、その前後以降における様々な分野への技術的な影響の考察

## 機械学習の基礎 (2)

### 【履修要件】

線形代数、微分積分学などの基礎的な数学科目、情報基礎・プログラミング演習などの計算機関係の基礎科目を履修済みか同時に履修していて、それらと同等の内容を理解し、プログラムをある程度書けることが望ましい。

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

2回または3回のレポートによる(プログラミングを一部含む可能性あり)。また討論を行った場合、主張や論議について評価し、良い場合には加点する。

### 【教科書】

授業中に指示する

### 【参考書等】

(参考書)  
授業中に紹介する

### (関連URL)

<http://www.stdio.h.kyoto-u.ac.jp/~sakura/ml>((予定))

### 【授業外学習(予習・復習)等】

授業に関連した課題を解いてくること。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	人工知能 Artificial Intelligence				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 特定講師 DE BRECHT, Matthew					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
近年、人工知能の能力が飛躍的に進歩しており、一般社会への実用的な応用が増加している。また、様々な研究分野では膨大な実験データを解析する手法として人工知能の有効性が注目されている。この授業では、人工知能を実現するために用いられる様々な手法を解説し、最近の応用例と成果を紹介する。											
<b>[到達目標]</b>											
人工知能に関する基本知識を取得し、将来自身で応用できるように具体的なアルゴリズムを学ぶ。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
下記のトピックについて講義する（時間により変更する場合がある）。											
1) 分類・回帰 2) データ・クラスタリング 3) スパース性と次元削減 4) 強化学習 5) ニューラルネット 6) リカレントニューラルネット 7) 深層学習											
<b>[履修要件]</b>											
線形代数、微分積分など数学の基本的な知識を持ち、プログラミングできることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
数回の演習課題やレポートにより評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業の内容を復習し、演習課題を提出すること。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本語教育論 Japanese Language Education	担当者所属・ 職名・氏名	関西学院大学 総合政策学部 牲川 波都季
---------------	---------------------------------------	-----------------	----------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### 【授業の概要・目的】

外国人を対象とした日本語教育について、社会・政策的背景とともに方法と理念の変化を振り返る。対象時期は主に戦後から現代までであり、1980年代末以降からごく最近までの研究・政策的動向を詳細に検討する。

日本語教育の方法や考え方、背景を通史的に追うため、日本語教育に初めて触れる者であっても方法論の多様性を概観できる。

授業は、履修生による論文・記事についての紹介発表と議論、それに関する講義という形式で実施する。また、学期末には、各自でテーマを決めレポートの執筆と発表検討会を行う。受講生各人の問題関心と結びつけながら、日本語教育の未来を展望することをめざす。

#### 【到達目標】

- ・通史的に日本語教育の方法論を振り返ることで、その多様性を概括的に理解できる。
- ・各時代の日本の外国人受入のあり方について、基礎的な知識を得る。
- ・やや専門的な論文・記事について、要旨と意見を発表できるようになる。
- ・過去の日本語教育の方法論を批判的に検討できるようになる。
- ・自身の外国語教育・学習経験を相対化できるようになる。

#### 【授業計画と内容】

- 第1回 オリエンテーション 日本語教育とは何か
- 第2回 植民地・占領地の日本語教育 「日本語＝日本精神」の普及
- 第3回 ～1950年代初め 敗戦後の日本語教育 日本人・日本文化再興の夢
- 第4回 ～1960年代初め 日本語教育学の始動 外国人留学生の受け入れ
- 第5回 ～1970年代初め 日本人の日本語の復活 高度経済成長と日本人論
- 第6回 ～1980年代前半 日本人化をめざす日本語教育 海外への文化普及の組織化
- 第7回 前半の総括
- 第8回 ～2000年代半ば 多様化する学習者と日本語教育(1) 留学生10万人計画、改正出入国管理及び難民認定法
- 第9回 ～2000年代半ば 多様化する学習者と日本語教育(2) 適応主義、学習者中心主義
- 第10回 現代 日本語教育を取り巻く政策状況 グローバル人材育成、留学生30万人計画
- 第11回 未来 日本語教育の未来(1) 複言語・複文化主義の可能性と限界
- 第12回 未来 日本語教育の未来(2) 労働者としての外国人
- 第13回 後半の総括
- 第14回 レポートの提出・発表
- 第15回 レポートの提出・発表

#### 【履修要件】

特になし

## 日本語教育論 (2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

発表・議論（40点）、授業コメント（10点）、レポート（30点）、出席状況（20点）により、100点満点で評価する。  
ただし、5回以上欠席した場合は単位を与えない。

### [教科書]

適宜プリントを配布する。

### [参考書等]

（参考書）

牲川波都季『戦後日本語教育学とナショナリズム 「思考様式言説」に見る包摂と差異化の論理』  
（くろしお出版）ISBN:978-4874245453

（関連URL）

<http://segawa.matrix.jp/>(担当者の研究内容を紹介しています。)

### [授業外学習（予習・復習）等]

#### 【予習】

- ・論文・記事の読解
- ・論文・記事についての発表準備（配布資料作成を含む）

#### 【復習】

- ・毎回の授業内容の復習
- ・レポートの執筆

（その他（オフィスアワー等））

質問などはメールで連絡してください。メールアドレスは、初回授業時に知らせます。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：言語政策入門 Introductory Seminar: An Introduction to Language Policy				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 西山 教行					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
言語政策とは、社会と言語の関係を考察する分野である。国家などは言語そのもの（コーパス）に介入することもあれば、言語の地位（ステータス）に介入し、ある言語を公用語と定めることあれば、定めないこともある。このような観点から、言語政策がどのような制度や考え方のもとに実施されているのかを理解する。											
<b>[到達目標]</b>											
言語政策の概要に関する理解を深める。また具体的な各国がそれぞれどのような言語政策を進めているのかを事例を通じて学ぶ。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
前半では教科書の発表と討論を中心に行い、後半では受講者が各国の言語政策についての発表を行う。以下の項目を学習する。											
第1章 言語政策の起源（概念の誕生とその適応範囲など）											
第2章 多言語状況の類型化（ファergソンとスチュワート，フェイスロド，ショダンソン）											
第3章 言語計画の道具（言語整備，言語環境，言語法）											
第4章 一言語への働きかけ（中国，フランス語，マリ，トルコ，ノルウェーのケース）											
第5章 諸言語間の関係への働きかけ（タンザニア，インドネシア，スイス，フランス語，マグレブのケース）											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
授業での発表並びにレポートによる。											
<b>[教科書]</b>											
ルイ＝ジャン・カルヴェ 『言語政策とは何か』（白水社（文庫クセジュ））											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書）											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
教科書を予習する。パワーポイントを利用した個別発表の場合は、参考文献を指示する。これらの準備のため、授業外学習が必要である。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	情報処理の方法と演習 B Exercises in Information Processing B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 櫻川 貴司					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金1	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>&lt;2年に一回の開講&gt;          計算機及びネットワークのハードウェア構成と基本ソフトウェアの運用方法を実際に運用を行うことにより学ぶ。また、計算機の理論的演習も必要に応じて行う。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>計算機システムのハードウェアの概要を理解する。          サーバーの運用方法の基本を理解する。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>計算機のハードウェアとソフトウェアの成り立ちを、実際に計算機を分解組み立てし、ネットワークを構成して接続し、基本ソフトウェアをインストールして運用することによって学ぶ。具体的には以下の項目に付いて理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. コンピュータのハードウェアのあらまし</li> <li>2. 作業の方法と安全のための注意</li> <li>3. 分解・組み立ての実際</li> <li>4. OSのインストールとネットワークの設定</li> <li>5. サーバソフトウェアの種類と例</li> <li>6. サーバソフトウェアのインストールと設定・運用の基本</li> <li>7. セキュリティの保持</li> </ol> <p>この授業では情報処理の教育研究を行っている。受講者のうちそれに参加を希望する者は、経済的負担なしにドットコムマスターADVANCE(下記URL参照、通常はある程度勉強しないと合格しない)の資料を配布され、試験を受験することとなる。合格者のうち希望者は資格取得者として無料で登録される。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
情報学概論ABなどの計算機関係の基礎科目を履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
計算機の運用方法についての実技と発表による。また、レポートの成績を加味する場合がある。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
----- 情報処理の方法と演習 B(2)へ続く -----											

## 情報処理の方法と演習 B (2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### (関連URL)

<http://www.stdio.h.kyoto-u.ac.jp/~sakura/houhuto-enshuu/>(授業のホームページ)  
<http://www.com-master.jp/grade/advance.html>(ドットコムマスターADVANCEの説明ページ)

### [授業外学習(予習・復習)等]

初回の授業での配布資料を見てハードウェアについて自宅学習を行う必要がある。教育研究参加者はドットコムマスターの勉強を行う必要がある。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	細胞生理学実験 Experiment for Cell Physiology				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 石原 昭彦					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3,4	授業 形態	実験	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
細胞の適応能力(可塑性)についての生理学的な実験について、人を被験者として、また実験動物を用いて行う。環境の変化に伴う筋細胞と神経細胞の適応に焦点を絞って実験を行う。											
<b>[到達目標]</b>											
細胞の有する適応能力(可塑性)に関する生理学的な特性を理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>実験動物を用いて神経、筋、骨、内臓などの各組織の摘出、凍結、薄切、染色を行う。その後、組織標本の観察を行う。</p> <p>ヒトを用いて生体の適応能力(可塑性)に関係した実験を行う。環境の変化によって代謝および機能的な特性がどのように変化するかを検討する。血中の酸素飽和度、酸化ストレス度、抗酸化力、血圧、心拍数、呼吸数、皮膚温、血流量などの変化についても検討する。</p> <p>研究室で作成した実験マニュアルを配布して、それに従って実験を進める。1課題あたり2～3週の授業を行う予定である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 実験動物の解剖・組織摘出・凍結保存</li> <li>2. 組織標本の作製・観察</li> <li>3. 酸素飽和度測定等の理解と実習</li> <li>4. 血流測定等の理解と実習</li> <li>5. 酸化ストレス度と抗酸化ストレス度の理解と実習</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
授業では、マウス・ラットを使用した動物実験を行う。したがって、実験動物の体重測定、血圧測定、採血などを行う。実験動物の取り扱いや動物からの採血などが苦手な場合は履修を避けること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席率(30点)、レポート(20点)、テスト(50点)により総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
次回の授業には、前回の授業の内容が関係している。したがって、前回の授業の内容を復習して理解しておくことが大切である。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
授業に関する質問等は、第1週目の授業時に受ける。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	運動療法実験 Experiment on Preventive Exercise Medicine				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 林 達也					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	実験	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
有患者や高齢者、障害者の病態改善、機能改善のための運動療法や生活習慣改善に関して、実際の運動療法や生活習慣介入を自らが体験することによって、これらの健康医学的意義を理解する。											
<b>[到達目標]</b>											
運動療法や生活習慣介入の実地体験を通じて、健康維持・増進を目的とした運動や生活習慣についての基本的見識を習得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
本授業は7月末～8月上旬に1週間程度の集中授業として実施する（詳細は7月上～中旬に履修者にKULASISを通じて連絡する）。											
履修人数が少ない場合（およそ5名以内）、病院や保健所、高齢者施設などを訪れて学外実習を行い、実際に行われている運動療法や生活習慣介入を体験する。履修人数がそれより多い場合、運動療法や生活習慣介入にかかわっている専門職を講師として招き、学内にて実習を行う。											
平成28年度は学内にて実習を行った。											
テーマ：「高齢者・有患者の“元気さ”を目指して」											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者・有患者の“元気さ”を支える人々について（林達也）</li> <li>・精神疾患を持つ方の日常～生活習慣病予防のために必要な身体活動量～（道端明子 国際高等教育院）</li> <li>・運動器障害の予防とリハビリテーション（本田寛人 豊岡病院日高医療センター）</li> <li>・心臓疾患を持つ方のこころとからだのケア（梅田陽子 国際高等教育院）</li> <li>・医療機関で行う生活習慣病患者の運動指導（今井優 医療法人財団康生会康生会クリニック）</li> <li>・地域に根差した高齢者福祉と介護支援～通所介護の場合～（本浪尚 有限会社デイジーヒル）</li> </ul>											
<b>[履修要件]</b>											
あらかじめ林担当の「健康科学」「生活習慣と生体機能障害」「応用運動医科学ゼミ」を履修して生活習慣病に関する基本的知識を学習しておくことが望ましい（必須ではない）。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点（運動実技・ディスカッション・質疑応答への積極的参加、授業中に実施するミニレポート）によって単位認定を行う。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に資料を配付。											
----- 運動療法実験(2)へ続く -----											

## 運動療法実験(2)

### [参考書等]

(参考書)

授業中に資料を配付。

### [授業外学習(予習・復習)等]

実習スケジュールに応じて授業中に指示するが、基本的に予習・復習は不要である。

### (その他(オフィスアワー等))

注意！シラバス作成の時点では平成28年度の実習スケジュールが確定していません。履修届けを出すにあたって、具体的な授業日や時限を知りたい場合は、メール等にて担当教員(林)に直接問い合わせてください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	数理科学論講究 Reserch in Mathematical Science				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 足立 匡義					
配当 学年	4回生	単位数	8	開講年度・ 開講期	2017・ 通年集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
数理情報論関係の卒業研究を行うために必要な知識・技法を講読や演習によって学ぶ。											
<b>[到達目標]</b>											
数理情報論関係の卒業研究をまとめられるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
履修学生と相談の上決定する。参考までに各指導教員の専門分野を示しておく：											
足立・・・偏微分方程式論 上木・・・確率解析 木坂・・・力学系理論（特に複素力学系） 清水・・・偏微分方程式論 角・・・ランダム複素力学系、フラクタル 櫻川・・・計算機科学 立木・・・実数などの連続性と計算，計算可能性解析学，プログラミング言語の理論，Java 言語 日置・・・情報科学											
<b>[履修要件]</b>											
数理情報論関係の卒業研究の基礎となるべき科目を十分な数だけ履修している必要がある。その上で担当教員と面接し，教員が履修可能と判断すれば履修が認められる。卒業研究を伴わない履修は受け付けられない。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況および，講読内容の理解と発展の到達度などによる。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業中に指示する。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	数理科学論講究 Reserch in Mathematical Science				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 上木 直昌					
配当 学年	4回生	単位数	8	開講年度・ 開講期	2017・ 通年集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
数理情報論関係の卒業研究を行うために必要な知識・技法を講読や演習によって学ぶ。											
<b>[到達目標]</b>											
数理情報論関係の卒業研究をまとめられるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
履修学生と相談の上決定する。参考までに各指導教員の専門分野を示しておく：											
足立・・・偏微分方程式論 上木・・・確率解析 木坂・・・力学系理論（特に複素力学系） 清水・・・偏微分方程式論 角・・・ランダム複素力学系、フラクタル 櫻川・・・計算機科学 立木・・・実数などの連続性と計算，計算可能性解析学，プログラミング言語の理論，Java 言語 日置・・・情報科学											
<b>[履修要件]</b>											
数理情報論関係の卒業研究の基礎となるべき科目を十分な数だけ履修している必要がある。その上で担当教員と面接し，教員が履修可能と判断すれば履修が認められる。卒業研究を伴わない履修は受け付けられない。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況および，講読内容の理解と発展の到達度などによる。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業中に指示する。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	数理科学論講究 Reserch in Mathematical Science				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 清水 扇丈					
配当 学年	4回生	単位数	8	開講年度・ 開講期	2017・ 通年集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
数理情報論関係の卒業研究を行うために必要な知識・技法を講読や演習によって学ぶ。											
[到達目標]											
数理情報論関係の卒業研究をまとめられるようになる。											
[授業計画と内容]											
履修学生と相談の上決定する。参考までに各指導教員の専門分野を示しておく：											
足立・・・偏微分方程式論 上木・・・確率解析 木坂・・・力学系理論（特に複素力学系） 清水・・・偏微分方程式論 角・・・ランダム複素力学系 櫻川・・・計算機科学 立木・・・実数などの連続性と計算，計算可能性解析学，プログラミング言語の理論，Java 言語 日置・・・情報科学											
[履修要件]											
数理情報論関係の卒業研究の基礎となるべき科目を十分な数だけ履修している必要がある。その上で担当教員と面接し，教員が履修可能と判断すれば履修が認められる。卒業研究を伴わない履修は受け付けられない。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席状況および，講読内容の理解と発展の到達度などによる。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
授業中に指示する。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	数理科学論講究 Reserch in Mathematical Science				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 木坂 正史					
配当 学年	4回生	単位数	8	開講年度・ 開講期	2017・ 通年集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
数理情報論関係の卒業研究を行うために必要な知識・技法を講読や演習によって学ぶ。											
[到達目標]											
数理情報論関係の卒業研究をまとめられるようになる。											
[授業計画と内容]											
履修学生と相談の上決定する。参考までに各指導教員の専門分野を示しておく：											
足立・・・偏微分方程式論 上木・・・確率解析 木坂・・・力学系理論（特に複素力学系） 清水・・・偏微分方程式論 角・・・ランダム複素力学系、フラクタル 櫻川・・・計算機科学 立木・・・実数などの連続性と計算，計算可能性解析学，プログラミング言語の理論，Java 言語 日置・・・情報科学											
[履修要件]											
数理情報論関係の卒業研究の基礎となるべき科目を十分な数だけ履修している必要がある。その上で担当教員と面接し，教員が履修可能と判断すれば履修が認められる。卒業研究を伴わない履修は受け付けられない。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席状況および，講読内容の理解と発展の到達度などによる。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
授業中に指示する。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	数理科学論講究 Reserch in Mathematical Science				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 櫻川 貴司					
配当 学年	4回生	単位数	8	開講年度・ 開講期	2017・ 通年集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
数理情報論関係の卒業研究を行うために必要な知識・技法を講読や演習によって学ぶ。											
<b>[到達目標]</b>											
数理情報論関係の卒業研究をまとめられるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
履修学生と相談の上決定する。参考までに各指導教員の専門分野を示しておく：											
足立・・・偏微分方程式論 上木・・・確率解析 木坂・・・力学系理論（特に複素力学系） 清水・・・偏微分方程式論 角・・・ランダム複素力学系、フラクタル 櫻川・・・計算機科学 立木・・・実数などの連続性と計算，計算可能性解析学，プログラミング言語の理論，Java 言語 日置・・・情報科学											
<b>[履修要件]</b>											
数理情報論関係の卒業研究の基礎となるべき科目を十分な数だけ履修している必要がある。その上で担当教員と面接し，教員が履修可能と判断すれば履修が認められる。卒業研究を伴わない履修は受け付けられない。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況および，講読内容の理解と発展の到達度などによる。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業中に指示する。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	数理科学論講究 Reserch in Mathematical Science				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 立木 秀樹					
配当 学年	4回生	単位数	8	開講年度・ 開講期	2017・ 通年集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
数理情報論関係の卒業研究を行うために必要な知識・技法を講読や演習によって学ぶ。											
[到達目標]											
数理情報論関係の卒業研究をまとめられるようになる。											
[授業計画と内容]											
履修学生と相談の上決定する。参考までに各指導教員の専門分野を示しておく：											
足立・・・偏微分方程式論 上木・・・確率解析 木坂・・・力学系理論（特に複素力学系） 清水・・・偏微分方程式論 角・・・ランダム複素力学系、フラクタル 櫻川・・・計算機科学 立木・・・実数などの連続性と計算，計算可能性解析学，プログラミング言語の理論，Java 言語 日置・・・情報科学											
[履修要件]											
数理情報論関係の卒業研究の基礎となるべき科目を十分な数だけ履修している必要がある。その上で担当教員と面接し，教員が履修可能と判断すれば履修が認められる。卒業研究を伴わない履修は受け付けられない。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席状況および，講読内容の理解と発展の到達度などによる。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
授業中に指示する。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	数理科学論講究 Reserch in Mathematical Science				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 日置 尋久					
配当 学年	4回生	単位数	8	開講年度・ 開講期	2017・ 通年集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
数理情報論関係の卒業研究を行うために必要な知識・技法を講読や演習によって学ぶ。											
<b>[到達目標]</b>											
数理情報論関係の卒業研究をまとめられるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
履修学生と相談の上決定する。参考までに各指導教員の専門分野を示しておく：											
足立・・・偏微分方程式論 上木・・・確率解析 木坂・・・力学系理論（特に複素力学系） 清水・・・偏微分方程式論 角・・・ランダム複素力学系、フラクタル 櫻川・・・計算機科学 立木・・・実数などの連続性と計算，計算可能性解析学，プログラミング言語の理論，Java 言語 日置・・・情報科学											
<b>[履修要件]</b>											
数理情報論関係の卒業研究の基礎となるべき科目を十分な数だけ履修している必要がある。その上で担当教員と面接し，教員が履修可能と判断すれば履修が認められる。卒業研究を伴わない履修は受け付けられない。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況および，講読内容の理解と発展の到達度などによる。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業中に指示する。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	数理科学論講究				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 角 大輝					
配当 学年	4回生	単位数	8	開講年度・ 開講期	2017・ 通年集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
数理情報論関係の卒業研究を行うために必要な知識・技法を講読や演習によって学ぶ。											
[到達目標]											
数理情報論関係の卒業研究をまとめられるようになる。											
[授業計画と内容]											
履修学生と相談の上決定する。参考までに各指導教員の専門分野を示しておく：											
足立・・・偏微分方程式論 上木・・・確率解析 木坂・・・力学系理論（特に複素力学系） 清水・・・偏微分方程式論 角・・・ランダム複素力学系、フラクタル、エルゴード理論 櫻川・・・計算機科学 立木・・・実数などの連続性と計算，計算可能性解析学，プログラミング言語の理論，Java 言語 日置・・・情報科学											
[履修要件]											
数理情報論関係の卒業研究の基礎となるべき科目を十分な数だけ履修している必要がある。その上で担当教員と面接し，教員が履修可能と判断すれば履修が認められる。卒業研究を伴わない履修は受け付けられない。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席状況および，講読内容の理解と発展の到達度などによる。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
授業中に指示する。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	応用運動医科学ゼミ Seminar on Applied Exercise Medicine	担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 林 達也
---------------	---	-----------------	-----------------

配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	-------	----------	-----

### [授業の概要・目的]

日常的な運動習慣はさまざまな「健康増進効果」を有することが知られている。運動には、呼吸循環機能や筋力・筋持久力、柔軟性など体力的指標の向上のみならず、肥満症、高血圧症、糖尿病、脂質異常症、動脈硬化症、骨粗鬆症といった「生活習慣病」の予防・症状改善効果が期待できる。本授業では、中高齢者や有患者が健康増進目的や疾患改善目的に運動を行う際に、どのようなリスクがあり、それに対してどのように対処すべきかについての学習を行う。本授業でとりあげるテーマは、運動不足になりがちな現代社会において、健康を損なわず快活に運動するための教養知識としても重要である。

### [到達目標]

過度な運動、不適切な運動によって生じる健康障害について焦点をあてる。以下のような事例について、不測の事態がなぜ生じたか、どうすれば防げるかについて理解する。

「三重県伊勢市で「7人のメタボ待 内臓脂肪を斬(き)る!」と題して市幹部らが減量に挑戦する企画に、市長らとともに参加していた同市健康福祉部の男性課長(47)が、運動中に倒れ死亡していたことが17日、分かった。伊勢署などによると、課長は休暇中の14日午前9時10分ごろ、Tシャツと短パン姿で自宅近くの路上に倒れているのを通行人に発見されたが、既に死亡していた。死因は虚血性心不全で、ジョギングかウォーキング中だったとみられる。この企画は生活習慣病予防をPRするため市長が発案。メタボリック症候群の疑いのある幹部7人が、保健師から食生活や運動のアドバイスを受け、減量に挑んでいた。課長は腹囲が100センチあり、「10センチ減」を目標としていたが、保健師に急激な減量をいさめられていたという。(2007/08/17 Sankei Web)」

### [授業計画と内容]

以下のトピックスを各2~3回の授業で取り上げる。ただし、授業の進み具合や最近の話題などに対応して新規にトピックスを追加したり、順序を入れ替えることがある。

授業テーマ：

- ・中高齢者・有患者が運動することの功と罪
- ・運動前のメディカルチェック
- ・目的に応じた運動処方
- ・運動の効果の判定
- ・トピックス：夏期の運動と熱中症、突然死を防ぐAED(自動体外式除細動器)、Locomotive Syndrome(運動器症候群)とその対策、など。

フィードバック方法は別途連絡する。

## 応用運動医科学ゼミ(2)

### 【履修要件】

あらかじめ林担当の「健康科学」ないしは「生活習慣と生体機能障害」を履修して生活習慣病に関する基本的知識を学習しておくことが望ましい(必須ではない)。運動の生活習慣予防・改善効果とそのリスク、運動の具体的な実施法について、高い学習意欲を持った学生の受講が望まれる。

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

平常点(50点)とレポート(50点)の総合判定。レポートは独自の工夫が見られるものについては高い点を与える。

### 【教科書】

参考資料を授業中に配付,あるいは指示する。

### 【参考書等】

(参考書)  
授業中に資料を配付。

### 【授業外学習(予習・復習)等】

授業全般に関する予習は不要であるが、自分の発表担当課題についての準備は必須である。

### (その他(オフィスアワー等))

質問は授業時間以外にはメールにて受け付ける。オフィスアワーに面談する際も事前にメールにて連絡すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	分子運動医科学ゼミ Seminar on Molecular Exercise Medicine				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 林 達也					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>日常の習慣的運動がもたらす健康増進効果がどのようなメカニズムに由来しているのか、最近の内      外の研究成果の紹介を含めて分子医学的観点から概説する。近年、日常の身体活動やスポーツを分      子の視点から解析する試みが急速に進歩を遂げている。本ゼミへの参加によって「運動」という人      間の基本的な活動をミクロの目で観察する教養的知識を得ることが可能である。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>生活習慣病、特に世界的に患者数が急増している2型糖尿病に焦点をあて、運動はどのような機序      でこれらの病態を予防・改善するのか、効果的に予防・改善する運動の方法とはどのようなものか、      食品や薬剤によって運動の効果は影響を受けるのかなどのトピックスを、生体を構成するミクロ（      分子）の視点から理解する。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>以下のトピックスを各1～2回の授業で取り上げる。ただし、授業の進み具合や最近の話題などに対      応して新規にトピックスを追加したり、順序を入れ替えることがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・糖尿病ではなぜ血糖値が高くなるのか</li> <li>・1型糖尿病と2型糖尿病</li> <li>・運動はなぜ血糖値を下げるのか（運動とインスリンとの違い）</li> <li>・運動による骨格筋糖代謝の変化：糖輸送担体GLUT4とそのトランスロケーション</li> <li>・運動時に活性化されるシグナル伝達分子AMPキナーゼ</li> <li>・インスリン抵抗性が運動によって改善するメカニズム</li> <li>・運動の急性効果（1回の運動の効果）と慢性効果（積み重ね効果）</li> <li>・運動類似の作用を誘導する機能性食品やその成分</li> <li>・骨格筋電気刺激による代謝活性化 など</li> </ul> <p>フィードバック方法は別途連絡する。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
<p>基礎的事項から説明するので、理系学生、文系学生に関わらず受講可。また、履修に先立って、生      理学や生物学、分子医学に関する予備知識も不要である。ただし、生活習慣病と運動との関連につ      いて、高い学習意欲を持った学生の受講が望まれる。</p>											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
<p>平常点（50点）とレポート（50点）の総合判定。レポートは独自の工夫が見られるものについ      ては高い点を与える。</p>											
----- 分子運動医科学ゼミ(2)へ続く -----											

## 分子運動医科学ゼミ(2)

### [教科書]

参考資料を授業中に配付，あるいは指示する。

### [参考書等]

(参考書)

授業中に資料を配付。

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業全般に関する予習は不要であるが、自分の発表担当課題についての準備は必須である。

### (その他(オフィスアワー等))

質問は授業時間以外にはメールにて受け付ける。オフィスアワーに面談する際も事前にメールにて連絡すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	運動制御ゼミA motor control A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 神崎 素樹					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火4	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
運動制御、運動生理学、神経生理学、バイオメカニクスに関する実験を行い、実験の目的の立て方、適切な実験方法、解析、結果の出力、考察の仕方を学ぶ。											
<b>[到達目標]</b>											
ヒトを用いた実験テクニックを取得することを目標とする。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
(1) 筋の形を知る：超音波診断装置を用い、ヒトの筋・腱の構造（筋線維長、筋線維角度、腱の長さ）を可視化する。これら筋・腱の構造が筋力を発揮したときにどのように変化するか？を定量する。											
(2) 筋の活動を知る：筋電図法を用い、力発揮時における筋への電氣的活動を取得する。また、電気刺激法により、電氣的活動と運動出力との関係について定量する。											
(3) 立位時の身体の動揺を知る：高精度の床反力計を用い、静止立位時の微少な身体の揺れを定量する。											
(4) 歩行動作を知る：ハイスピードカメラを用い、歩行動作中の身体各セグメントの変化を定量する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点で評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
特になし。											
<b>(その他（オフィスアワー等）)</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	運動制御ゼミB motor control B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 神崎 素樹					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
運動制御、運動生理学、神経生理学、バイオメカニクスに関する実験を行い、実験の目的の立て方、適切な実験方法、解析、結果の出力、考察の仕方を学ぶ。 運動制御ゼミBではAよりも運動課題を複雑かつ測定項目が多くなる。											
<b>[到達目標]</b>											
ヒトを用いた実験テクニックおよび解析方法を取得することを目標とする。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>(1) 動的動作中の筋の形を知る：超音波診断装置を用い、歩行時の腓腹筋の筋・腱の動態を測定する。同時に筋電図法により腓腹筋とヒラメ筋の活動を取得し、歩行動作中の筋の電氣的活動と力学的活動を比較検討する。</p> <p>(2) 反射を知る：電気刺激法と筋電図法を用い、単シナプス反射および長潜時反射を取得する。これら反射が筋疲労によりどのように変化するか？を定量する。</p> <p>(3) 筋線維の電氣的活動を知る：ワイヤー電極法により、電極を筋に埋め込み、筋線維一本の活動電位を取得する。</p> <p>(4) 立位時の身体各セグメントの動揺を知る：高精度の床反力計および高解像度レーザー変位計を用い、立位時の足部・下腿部・大腿部・体幹の微少な動揺を取得し、立位時の各セグメントの振る舞いを定量する。</p> <p>(5) 三次元動作を知る：三次元モーションキャプチャーシステムを用い、いろいろな動作（投げる・跳ぶ・打つ・踊るなど）を三次元に捉える。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点で評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
特になし											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	生命科学基礎ゼミ Seminar on Life Science				担当者所属・ 職名・氏名	情報学研究科 講師 細川 浩 情報学研究科 助教 前川 真吾					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>生命科学は、医学や生物学をはじめ生物をとりまくさまざまな学問分野の基礎となりうる。生物は細胞から構成されており、細胞内のDNAやタンパク質といった小分子が協調的に機能することで、様々な機能を発揮している。細胞の構成要素、遺伝の基礎原理、発生過程を講義・考察することにより、現在の生物学を俯瞰する。さらに受講者が討論することで理解を深めることを目的とする。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
生物学系の論文を読むための基礎技術とプレゼンテーションの基礎技術を習得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>最初の2-3回の時間を使い、このゼミのテーマと目的を話す。また、以下の生命科学の基礎についてのトピックを解説を行いながら議論する。</p> <p>細胞の基本機能 遺伝メカニズムの基礎 細胞内小分子の構造と機能 生物が形作られていく仕組み</p> <p>その後、受講する学生が、興味深いトピックを選び、背景もふくめてその内容を発表する。その際、発表内容を受講者全員で議論・考察する。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>出席と発表による。 出席50%、発表50%です。</p>											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
<p>(参考書) 授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
発表の前に予習をしてください											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
<p>生物を勉強したことのない人も対象にしています。</p> <p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	視覚認識論ゼミ A Seminar on Visual Cognition A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 齋木 潤					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>視覚による認識の過程の科学的な研究に必要な研究テーマの設定、実験のデザイン、データの分析、結果の解釈などの過程を、分野の最先端の研究を進めている大学院生やポスドクの研究に関するディスカッションに参加することにより学ぶことを目指す。</p> <p>現在進行中の研究の進捗報告とそれに関するディスカッションを通して、講義では得られない、実際に研究を行う上で必須となるスキルに対する理解を深め、自身の研究の高度化を図ることが期待できる。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>研究を行ううえで必要となる問題の設定の仕方、リサーチクエストを具体的な研究に落とし込む方法、データの批判的な評価の仕方などを現実の研究に関するディスカッションを通じて身に付けることができる。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>原則として、大学院生、卒論生、ポスドクの研究進捗報告とそれに関するディスカッションを行い、討論に参加するとともに、少なくとも1回自身の研究あるいは、興味のある論文などについての発表を行う。</p> <p>第1回：授業についてのオリエンテーション、参加者の確認と、発表スケジュールの調整。</p> <p>第2回以降：スケジュールに従って学生の研究発表と討論。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
視覚認識論を履修していることが望ましい。（必須ではない）											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況、ゼミでの討論への参加状況、発表状況をもとに評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書） 授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
特になし											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
<p>第1回の授業時に発表のスケジュールを決めるので必ず出席すること。何らかの事情で出席できない場合は事前に連絡すること。事前連絡なく第1回の授業に出席しない場合は履修を認めない。</p> <p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	視覚認識論ゼミ B Seminar on Visual Cognition B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 齋木 潤					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>視覚による認識の過程の科学的な研究に必要な研究テーマの設定、実験のデザイン、データの分析、結果の解釈などの過程を、分野の最先端の研究を進めている大学院生やポスドクの研究に関するディスカッションに参加することにより学ぶことを目指す。</p> <p>現在進行中の研究の進捗報告とそれに関するディスカッションを通して、講義では得られない、実際に研究を行う上で必須となるスキルに対する理解を深め、自身の研究の高度化を図ることが期待できる。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>研究を行ううえで必要となる問題の設定の仕方、リサーチクエスチョンを具体的な研究に落とし込む方法、データの批判的な評価の仕方などを現実の研究に関するディスカッションを通じて身に付けることができる。</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>原則として、大学院生、卒論生、ポスドクの研究進捗報告とそれに関するディスカッションを行い、討論に参加するとともに、少なくとも1回自身の研究あるいは、興味のある論文などについての発表を行う。</p> <p>第1回：授業についてのオリエンテーション、参加者の確認と、発表スケジュールの調整。</p> <p>第2回以降：スケジュールに従って学生の研究発表と討論。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
視覚認識論を履修していることが望ましい。(必須ではない)											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況、ゼミでの討論への参加状況、発表状況をもとに評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
特になし											
(その他(オフィスアワー等))											
<p>第1回の授業時に発表のスケジュールを決めるので必ず出席すること。何らかの事情で出席できない場合は事前に連絡すること。事前連絡なく第1回の授業に出席しない場合は履修を認めない。</p> <p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	視覚科学実験 A Vision Science Laboratory A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 齋木 潤 人間・環境学研究科 助教 山本 洋紀					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4,5	授業 形態	実験	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
視覚科学研究に必須となる行動実験の基本的な手法を学ぶことを目的とする。視覚刺激を作成し、モニタに正しく提示するために必要な手続きを実習を通して学ぶとともに、実験の実施に必要な条件設定、呈示のランダム化、刺激のカウンタバランスなどの基本的な手法の解説と実習を行う。また、これらの作業に必須となるプログラミング言語の初歩を学び、簡単な行動実験を一人で作成できるようになることを目指す。											
<b>[到達目標]</b>											
視覚科学研究において不可欠な、刺激作成と心理実験プログラムの基本的な技術を身に付ける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業の前半では、視覚刺激の作成とモニタの校正の手法、後半では、実験のデザイン、カウンタバランス、データの取得などの手法を実習する。											
第1回：オリエンテーション。授業の概要の説明（齋木・山本） 第2回：実習の準備。プログラミング言語MATLABの概説（山本） 第3 - 6回：視覚刺激作成、モニタ校正実習（山本） 第7 - 10回：実験デザイン、プログラム制御実習（齋木） 第11 - 14回：簡単な行動実験プログラム作成、データ収集・分析（齋木・山本）											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、及び実習での平常点											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
プログラミングの実習を含むので、進捗などに応じて復習が必要となる。											
（その他（オフィスアワー等））											
実習科目であるため、受講希望者が多い場合は、視覚科学研究室への配属を希望する学生を優先する。授業実施時限以外での実習が相当程度必要となる。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	視覚科学実験 B Vision Science Laboratory B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 齋木 潤 人間・環境学研究科 助教 山本 洋紀					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時間	水4,5	授業 形態	実験	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
視覚科学研究に必須となる行動実験のより発展的な手法を学ぶことを目的とする。視覚科学実験Aで学んだ基本的な実験手法をさらに発展させることにより、卒業研究に必要となるレベルの研究手法を獲得することを目指す。また、視覚科学実験Aでは扱っていなかったデータ解析の基本的な手法についても実習を行う。卒業論文作成に必要な研究のスキルを獲得することが期待される。											
<b>[到達目標]</b>											
視覚科学研究において不可欠な、刺激作成と心理実験プログラムの基本的な技術を身に付ける。視覚科学実験Aで学んだことを発展させ、卒業論文の研究につながるレベルのスキルの獲得を目指す。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業の序盤では、データ解析手法の基礎を実習し、中盤から後半では、学んだ手法を利用して参加者各自の興味に応じた行動実験をデザインし、実施する。第6回以降は、全体での実習ではなく個別の実験プロジェクトとなる。第14回に研究成果発表の実習を行う。											
第1回：オリエンテーション。授業の概要の説明（齋木・山本） 第2 - 5回：データ解析手法の基礎（齋木） 第6 - 10回：実験計画、デザイン、刺激、プログラム作成（齋木・山本） 第11 - 13回：データ収集、データ解析（齋木・山本） 第14回：研究成果発表会（齋木・山本）											
<b>[履修要件]</b>											
視覚科学実験Aを履修していること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席と平常点											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業時間以外のプログラム作成などの作業が必要となる。											
（その他（オフィスアワー等））											
視覚科学実験Aを履修していない場合は、既修者に相当する実験手法やプログラミングスキルがあると判断できる場合に限り履修を認める。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	記憶神経科学ゼミA Seminar of Neuroscience on Human Memory A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 月浦 崇					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月3	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
ヒト記憶に重要な脳領域である側頭葉内側面（海馬・海馬傍回）や前頭前野などの働きを中心に，ヒト記憶やその周辺の心理過程（情動や社会的認知，加齢など）に関連する最新の脳機能イメージング（fMRI等）研究を紹介・解説することによって，ヒト記憶を担う脳メカニズムを理解することをめざす．											
<b>[到達目標]</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヒト記憶機能を担う脳内機序を理解する</li> <li>・脳機能イメージングの解析手法を丁寧にフォローすることで，多様な解析方法の実際を理解する</li> <li>・プレゼンテーションを通して，相手に「伝わる」発表とはどのようなものか，どのような資料を作成すれば良いのかを理解する</li> <li>・英語論文を詳細に読み解くことを通し，科学論文の読み方を習得する</li> </ul>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>受講生による研究目的に関連した研究論文の紹介・解説を中心に実施する．研究方法やその結果を単純に理解するだけでなく，自分の研究と照らし合わせて論文のストーリーに対して批判的な見方をできるように力を養う．</p> <p>参加者には，毎回事前に演習で紹介する論文・総説をメールで連絡する．</p> <p>第1回：オリエンテーションおよび論文紹介ローテーションの決定</p> <p>第2回以降</p> <p>第1回で決定したローテーションにしたがって，論文・総説の内容紹介とそれに関する討論を行う．</p>											
<b>[履修要件]</b>											
「認知神経心理学A」または「認知神経心理学B」を受講していることが望ましいが，必須ではない．また，担当教員の研究室に属することを希望する学生には，できる限り受講されることを希望する．											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況，発表の内容，ディスカッションへの参加状況によって評価する．											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業の前に論文を配布するので，少なくとも抄録だけでも一通り目を通した上で参加することを希望する．											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については，KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	記憶神経科学ゼミ B Seminar of Neuroscience on Human Memory B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 月浦 崇					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月3	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
ヒト記憶に重要な脳領域である側頭葉内側面（海馬・海馬傍回）や前頭前野，およびその周辺の心理過程（情動や社会的認知，加齢など）に関連する扁桃体や大脳基底核などの機能に着目し，最新の脳機能イメージング（fMRI等）研究や脳損傷患者に対する神経心理学的研究を紹介・解説することによって，ヒト記憶を担う脳メカニズムを理解することをめざす。											
<b>[到達目標]</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヒト記憶機能を担う脳内機序を理解する。</li> <li>・脳機能イメージングの解析手法を丁寧にフォローすることで，多様な解析方法の実際を理解する</li> <li>・プレゼンテーションを通して，相手に「伝わる」発表とはどのようなものか，どのような資料を作成すれば良いのかを理解する。</li> <li>・英語論文を詳細に読み解くことを通し，科学論文の読み方を習得する。</li> </ul>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>受講生による研究目的に関連した研究論文の紹介・解説を中心に実施する。研究方法やその結果を単純に理解するだけでなく，自分の研究と照らし合わせて論文のストーリーに対して批判的な見方をできるように力を養う。</p> <p>参加者には，毎回事前に演習で紹介する論文・総説をメールで連絡する。</p> <p>第1回：オリエンテーションおよび論文紹介ローテーションの決定</p> <p>第2回以降</p> <p>第1回で決定したローテーションにしたがって，論文・総説の内容紹介とそれに関する討論を行う。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
「認知神経心理学A」または「認知神経心理学B」を受講していることが望ましいが，必須ではない。また，将来教員の研究室に属することを希望する学生は，できる限り受講することを希望する。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況，発表の内容，ディスカッションへの参加状況によって評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業の前に論文を配布するので，少なくとも抄録だけでも一通り目を通した上で参加することを希望する。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については，KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	神経機能論実験B Experimental Practice in Neurobiology B				担当者所属・ 職名・氏名	情報学研究科 講師 細川 浩 情報学研究科 助教 前川 真吾					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3,4	授業 形態	実験	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
神経機能を分子レベルであきらかにするための基礎的な実験手法を学ぶ。神経機構を分子レベルで理解するための解析方法の学習を行う。											
<b>[到達目標]</b>											
基本的な分子生物学実験の技術を修得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
神経系の機能はイオンチャネルをはじめとする様々なタンパク質の協調作用によって担われている。例えばイオンチャネルは、温度、接触、浸透圧、フェロモン、味などさまざまな刺激の受容に関わる。タンパク質の機能解析を行うために必要な遺伝子組換えの手法について、この実習を通して、適必要に応じて修得する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席とレポートによる。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業の最初に資料を配布しますので、予習しておいてください											
(その他(オフィスアワー等))											
文系の人や、いままで神経系を学んでこなかった人も対象にしています。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	神経生理学基礎演習 Practice of Basic Neurophysiology				担当者所属・ 職名・氏名	情報学研究科 講師 細川 浩					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
脳・神経系を理解する上で、コンピュータによる学術情報の収集、データ収集、データ解析は不可欠である。この演習ではコンピュータを用いた神経生理学の解析手法、技術論文の書き方、プレゼンテーション技術を学ぶ。											
<b>[到達目標]</b>											
簡単なデータ解析技術とともに、技術論文の書き方、プレゼンテーション作成法を身につける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下の項目について、解説、演習を行いレポートを作成する。 分子生物学的手法 インターネットを用いた学術情報の収集 インターネットを用いたDNA、タンパク質データベースからの情報収集 コンピュータを用いたデータの解析 データを提示するための報告書作製技術											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席とレポートによる											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
時間内に演習課題が終わらない時は自習をしてください											
(その他(オフィスアワー等))											
文系の人や、いままで神経系を学んでこなかった人も対象にしています。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	言語構造論演習 Seminar on Language and its Structure				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 藤田 耕司					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>言語は音と意味を階層的統語構造を介して繋ぐシステムであり、この統語構造を構築する演算能力=シンタクスが人間固有の言語機構の中核的基盤をなしている。この統語演算能力をめぐる近年の生成文法・生物言語学研究の動向や新たな知見に触れ、理解を深めることがこの授業の目的である。</p>											
[到達目標]											
<p>人間言語とはどのような仕組みを持った認知能力であり(設計)、どのようにして個体発生(発達)と系統発生(進化)をとげるのかを理解する。また、自然主義に基づく科学的思考法に親しむ。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>上記の目的を念頭に、授業では英文で書かれた比較的平易な文献を数編精選して輪読する。主たるテーマとしては次のものを予定している。</p> <p>(1) 人間言語の基本特性 (2) 統語と意味のインターフェイス (3) 回帰的統語演算 (4) 言語能力の個体発生と系統発生</p> <p>とりあげる文献は、受講者の関心や背景知識を考慮の上、相談して決める。あらかじめ分担を指定するので、受講者は担当箇所について準備し、授業中にまとめて発表すること。内容の理解はもちろんであるが、専門的な英語文献を読みこなす能力を養い、自らが英語論文を執筆する際に留意すべき事項を学びとることも、この授業の狙いである。</p>											
[履修要件]											
<p>「言語構造論」を履修済みであるか、理論言語学に関する基礎的知識を有していることが望ましい。</p>											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>試験等を行わず、発表等を通じた授業への貢献度に基づいて評価する。</p>											
[教科書]											
<p>マテリアルを配布する。</p>											
[参考書等]											
<p>(参考書) 授業中に紹介する</p>											
[授業外学習(予習・復習)等]											
<p>自分が担当ではない回であっても、あらかじめマテリアルには目を通し、疑問点・不明点を整理してから授業に臨むこと。授業では他の人の発表について、積極的に質問を投げかける等して、活気のある演習クラスとなるように心がけて欲しい。</p>											
(その他(オフィスアワー等))											
<p>質問等はメールにて随時受け付ける。</p> <p>オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	言語機能論演習 Seminar : Language and its Functions				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 服部 文昭					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
輪読形式の授業で、言語の機能につき理解を深める。											
<b>[到達目標]</b>											
言語の機能についての基本的な諸問題を念頭に置きつつ、読解力を高め、専門領域での情報収集能力も身につけること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
2 回程度のイントロダクションに続いて、P. Muysken、D. Divjak、L. A. Jandaらの論考をモチーフにして、毎回、学生諸君の発表を中心にして、授業を進めてゆく。一編の論考に3回～4回で取り組む予定である。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点とレポート、小テストなどの総合評価を原則とする。総合評価における割合は、受講者の力量や取り組み方などを勘案し、有機的に判断する。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業中に指示する。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	言語認知論演習 Seminar on Cognition and Language				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 谷口 一美					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
認知言語学は、認知的作用（知覚、注意、推論、記憶など）と言語との関わりを重要視し、文法や意味のメカニズムを明らかにしようとする理論である。どのようにしてこれらの認知的作用が言語現象に反映されているか、身近な例を示しながら、認知言語学の基礎を学んでいきたい。											
<b>[到達目標]</b>											
認知言語学の基本的な考え方を習得し、言語と認知の関わりについて深い考察を行う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
授業では受講生の興味関心や履修状況に応じて、以下の中からテーマを取り上げる。それぞれ3-4週前後、授業を行う予定である。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 言語学と心理学の関わり (1)：図と地の分化</li> <li>2. 言語学と心理学の関わり (2)：視線と主観性</li> <li>3. カテゴリー化と言語 (1)：プロトタイプ・カテゴリー</li> <li>4. カテゴリー化と言語 (2)：抽象化とスキーマ</li> <li>5. イメージ・スキーマと言語の意味</li> <li>6. 意味の拡張：メタファーとメトニミー</li> <li>7. 文法構文と意味</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
学期末の試験またはレポート (70%)、授業への参加状況 (30%) から、総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業でプリントを配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業中に示した参考文献を参照するなどして理解を深めると共に、課題に自主的に取り組むこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	言語比較論演習 Seminar on Comparative Language Studies				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 齋藤 治之					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>言語学の方法の習得を目指し、同時に言語変化の法則性とそのメカニズムについて考究する。印欧語の世界を視野に収めながら、ことばの普遍性・体系性を明らかにすることを目標とする。史的言語学の諸分野（音論、形態論、統語論等の諸領域）を対象に、言語体系の普遍的な法則性を探るべく、通時的考究を進める（第1～5回）。比較言語学的方法と併せて、言語の理論的考究による種々の成果を踏まえ、言語学の方法論上の問題についても考察する（第6～10回）。言語類型論なアプローチ等により、ことばの諸相を考究することによって、多様性の背後に見え隠れする言語の普遍的特質を追求する（第11～14回）。以上のような立場から、言語体系の法則性・言語変化のメカニズムを探り、そのあり方を解明することを通して、言語の本質に迫る。</p>											
【到達目標】											
比較言語学の基本的な事柄を理解する。											
【授業計画と内容】											
<p>印欧語の世界を視野に収めながら、ことばの普遍性・体系性を明らかにすることを目標とする。史的言語学の諸分野（音論、形態論、統語論等の諸領域）を対象に、言語体系の普遍的な法則性を探るべく、通時的考究を進める。比較言語学的方法と併せて、言語の理論的考究による種々の成果を踏まえ、言語学の方法論上の問題についても考察する（第1～5回）。言語類型論なアプローチ等により、ことばの諸相を考究することによって、多様性の背後に見え隠れする言語の普遍的特質を追求する（第6～10回）。以上のような立場から、言語体系の法則性・言語変化のメカニズムを探り、そのあり方を解明することを通して、言語の本質に迫る（第11～15回）。</p> <p>今年度は比較言語学の方法をインド・ヨーロッパ語の例に基づき下記の項目に関して講義する：</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1．比較言語学の方法</li> <li>2．インド・ヨーロッパ語概説</li> <li>3．インド・ヨーロッパ語の音韻</li> <li>4．インド・ヨーロッパ語の形態</li> <li>5．インド・ヨーロッパ語の統語</li> <li>6．インド・ヨーロッパ語の語彙</li> <li>7．インド・ヨーロッパ語族と他の諸語族</li> <li>8．まとめ</li> </ol> <p>各項目につき2回前後の授業で取り組む予定である。</p>											
【履修要件】											
特になし											
----- 言語比較論演習 (2)へ続く -----											

## 言語比較論演習 (2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

平常点（出席）・レポートなどの総合評価による。

### [教科書]

授業中に指示する  
プリントを準備して配布する。

### [参考書等]

（参考書）

James Clackson 『Indo-European Linguistics』（Cambridge University Press）ISBN:978-0-521-65367-1  
特になし。

### [授業外学習（予習・復習）等]

授業と関連する文献を自分で読むことが必要である。

### （その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの有無についてはKULASISを調べてください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	プログラミング演習 (Lisp) Programming Practice (Lisp)				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 櫻川 貴司					
配当 学年	1-4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4,5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
プログラミング言語LISPによって記号処理の基礎的な演習を行う。LISPは、関数的プログラミングが可能で、人工知能などの研究にも使われている言語である。また、希望する学生は、演習の題材として記号論理を用いてさまざまな記号処理を行い、記号論理の復習とそこでの具体的な処理方法を学べる。											
【到達目標】											
再帰的データ構造とその探索、オブジェクト指向について基本を理解する。記号処理プログラムを書けるようになること。											
【授業計画と内容】											
以下のような課題について、1課題あたり1～2週の授業をする予定である(一部内容を割愛する場合がある)。											
0. オリエンテーション											
1. 式の評価											
2. 変数, 関数, 関数定義と再帰呼び出し											
3. S式の正確な定義, 二分木とリスト, 再帰的データ構造											
4. 記号論理の簡単な説明											
5. リストによるデータの表現											
6. リスト処理, 数式と論理式の処理											
7. オブジェクト指向											
8. 木の探索とMin-Max法											
コースの最初にUNIX(Linux)の使用方法、メールの送受信、WWWブラウザの使用方法を学び、受講の準備を行う。LISPには多数の方言が存在するが、本演習では、仕様がすっきりとまとまっているSchemeを使用する。											
【履修要件】											
メディアセンターのIDを取得し、ログインできること。受講者は計算機の基本的な使い方やリテラシーを身につけていることが望ましい。記号論理学についての演習を主に行うことを希望する履修者は、「数理論理学A」などを同時期までに履修することを勧める。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
毎回のレポートによって評価する。出席率も加味する場合がある。											
【教科書】											
授業中に指示する											
----- プログラミング演習 (Lisp) (2)へ続く -----											

## プログラミング演習 (Lisp) (2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### (関連URL)

<http://www.stdio.h.kyoto-u.ac.jp/~sakura/scheme/>(授業のホームページ)

### [授業外学習 (予習・復習) 等]

課題を授業中にこなせない場合には授業外で学習の必要がある。

### (その他 (オフィスアワー等))

希望者はBYOD方式で自分のノートPCにより演習を行うことも可能である。  
その場合、十分に充電したノートPCを持参すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	行動制御実験演習 Experimental Seminar for Behavioral Control				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 久代 恵介					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4,5	授業 形態	実験	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
ヒトは身体を運動させ目的の行為を達成させるが、一つひとつの運動はとても精巧に計画・制御されている。本実験演習では、ヒトの動きを計測・評価するにあたり必要となる基礎的な理論と手法を学ぶ。これらをもとに、ヒトの動きがじっくりと観察するとともに、卒業研究に円滑に以降するための技術を習得する。											
[到達目標]											
実験演習を通して、ヒトの動きの計測方法や分析方法を体得し、行動制御学研究の進め方を学ぶ。											
[授業計画と内容]											
本実験演習で行う内容は以下である。											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・表計算ソフトを用いた図と関数の作成</li> <li>・データ解析と統計処理</li> <li>・行動制御実験のソフトウェア作成</li> <li>・映像を用いた動作解析</li> <li>・生体への電気刺激法</li> <li>・マイコンボードを利用した計測ハードウェアの作製</li> </ul>											
( 課題の進捗により変更する場合もある )											
[履修要件]											
必須ではないが、ノートパソコンを持参することが望ましい。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席状況とレポートにより総合的に評価する。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
( 参考書 ) 授業中に紹介する											
[授業外学習(予習・復習)等]											
休まずに出席すること。前回までの内容を確実に習得しておくこと。											
( その他(オフィスアワー等) )											
履修希望者数が適正人数を越える場合は履修制限を行う。(無作為抽出により抽選)											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	プログラミング演習 (Haskell) Programming Practice (Haskell)				担当者所属・ 職名・氏名	龍谷大学 准教授 新井 潤					
配当 学年	1-4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金1,2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>Haskellを使用して関数型言語によるプログラミング手法を学ぶ。Haskellは、純粋関数型言語と呼ばれている。一般的なプログラミング言語では副作用と呼ばれる仕組みがないことを意味している。つまり、同じ入力(引き数)に対しては常に同じ出力(関数値)が得られる。それは数学でいうところの関数と同じである。</p> <p>一方、計算機は手続き的な動作を得意とする。そのため多くのプログラミング言語では手続き的な記述をするが、Haskellでは、より宣言的な記述が可能であり、人間の思考に近い形でプログラム可能である。但し、Haskellは手続き的な記述をする能力も持っているため、より広範な応用が可能である。</p> <p>他にも強力な型付けが可能であったり、並列処理など容易に記述できるなど様々な特徴を持っている。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
関数型言語によるプログラミングを通して、コンピュータを利用することを身につける。また、その裏側にある処理方法などからコンピュータそのものの仕組みを理解する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
以下のようなトピックについてそれぞれ1,2週の授業を行う予定である。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. プログラミング・パラダイム</li> <li>2. プログラムを書く</li> <li>3. 関数を定義する</li> <li>4. 自分自身を使った定義(再帰的定義)</li> <li>5. パターンマッチやガードによる定義</li> <li>6. 遅延評価</li> <li>7. 高階関数</li> <li>8. 純粋な関数とは(宣言的な記述)</li> <li>9. 型付け</li> <li>10. 代数的データ型及びリスト処理</li> <li>11. 入出力の制御(モナドについて)</li> <li>12. 並列・並行処理</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
本学の教育用計算機システムの利用アカウントがあり、利用のマナーを遵守できること。コンピュータの基本的な使い方を習得していることが求められる。プログラミングの経験はとくに必要としない。											
----- プログラミング演習 (Haskell) (2)へ続く -----											

## プログラミング演習 (Haskell) (2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

全部で10程度の課題についてレポートを出してもらい、その成果によって評価する。基礎的な課題について7割程度の達成度であれば単位を取得することが可能である。

### [教科書]

使用しない

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### (関連URL)

<http://www.stdio.h.kyoto-u.ac.jp/~jun/haskell/>(授業開始時まで開設する予定)

### [授業外学習(予習・復習)等]

基本的には、授業での学習を元に、各トピックに関連するさまざまなプログラムを実際に動かしてみることによって理解を深めることが重要である。また、可能であれば事前に、授業で学習する各トピックについて、書籍等に基づいて概念、用語などを調べたり、実際に簡単なプログラムを動かしてみることによって、演習にスムーズに取り組めるようにしておくことが望ましい。

### (その他(オフィスアワー等))

関連する科目: 数理論理学A,B(全学共通科目)、プログラミング演習(Lisp)(学部科目)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	脳情報学演習 Proseminar on neuroinformatics				担当者所属・ 職名・氏名	情報学研究科 教授 神谷 之康					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
神経科学や情報科学において理論的あるいは数理的に重要な概念を提示した論文から、受講者が関心のあるものを選択し、内容紹介を行う。ディスカッションを通して概念の理解を深める。											
<b>[到達目標]</b>											
脳科学研究における基本概念や数理的手法の理解を深めるとともに、文献調査やプレゼンテーションの能力を高める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1 - 2回：講師が論文リスト提示し、その背景について解説する。受講者の興味分野に応じて、担当トピックをと発表予定を決定する。 第3回以降：発表予定に従いプレゼンテーションとその内容に関するディスカッションを行う。発表者の理解が不十分であった点については、次回までの調査・報告を行い、担当トピックに責任を持つ。											
<b>[履修要件]</b>											
「脳情報学」を受講していること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況と発表・ディスカッション内容をもとに評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書)											
Dayan, P. & Abbott, L. F. 『Theoretical Neuroscience: Computational and Mathematical Modeling of Neural Systems』 (MIT Press)											
MacKay, D. 『Information Theory, Inference, and Learning Algorithms』 (Hardback)											
Goodfellow, I., Bengio, Y., and Courville, A. 『Deep Learning』 (MIT Press)											
Huettel, S.A. Song, A.W., and McCarthy, G. 『Functional Magnetic Resonance Imaging』 (Sinauer Associates)											
(関連URL)											
<a href="http://kamitani-lab.tumblr.com/post/152153243056/guide-to-study-at-kamitani-lab">http://kamitani-lab.tumblr.com/post/152153243056/guide-to-study-at-kamitani-lab</a> (神谷研究室ホームページ)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
担当トピックに関連する論文やオンラインの資料を収集し、質問やディスカッションに備える。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>		発達・心理アセスメント演習 Developmental Assessment Practice				担当者所属・ 職名・氏名		人間・環境学研究所 准教授 船曳 康子			
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>人の支援に関わる職種は増加しており、そのようなスキルを身につけた人材は随所で必要とされる。立場や職種は多岐にわたるが、支援の基本には大きな違いはなく、この基本を身につけることを目的とする。また、代表的な発達・心理検査につき、マニュアルや実際の検査キットを用いて、その用途と使い方について学ぶ。</p>											
【到達目標】											
<p>人が人を評価・助言する際の倫理と配慮を学びながら、各種検査手法について、実践を通して概略を把握し、カウンセラー、助言者、相談窓口対応の素地を養う。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>下記のような課題について授業を行う。各項目につき1-2回程度で扱う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各種困り事の相談（場面設定、傾聴、助言の仕方など）</li> <li>・各種専門家や関わるスタッフとの連携</li> <li>・守秘義務について</li> <li>・代表的心理・発達検査（下記は例）</li> </ul> <p>各種質問紙            バウムテスト、風景構成法、PF studyなどの心理検査            発達検査（新版K式、Bayley III発達検査）            WAIS-III、WISC-IV、WMS-R、ITPA等の認知検査            発達障害特性評価（MSPA）            自閉症評価ツール（ADOS、ADI-R）</p>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
参加状況により評価											
【教科書】											
使用しない											
----- 発達・心理アセスメント演習(2)へ続く -----											

発達・心理アセスメント演習(2)

[参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

健康心理学、精神機能論、精神保健福祉学概論などの、メンタルヘルスに関わるスタッフの基礎知識を履修し、個人情報や倫理について心得ていることが望ましい。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	言語教育政策論演習 Seminar on Language policy				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 西山 教行					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>この授業では言語教育政策を理解するために、超国家組織としてのEUの言語政策をとりあげる。</p> <p>クロード・トリュシヨの論文(Claude Truchot, Europe : l' enjeu linguistique, pp. 75-96, pp. 133-152)を講読し、組織運営のための言語体制の変遷に加えて、エラスムス計画に代表される言語教育政策を分析する。また欧州諸国ならびに国際機関による言語介入政策を論じる。ヨーロッパにおいては、学校教育における英語教育の発展の一方で、第2外国語教育への関心も完全に失われたわけではない。また欧州評議会の言語教育への介入も無視することはできない。</p> <p>クロード・トリュシヨは、英語学者、社会言語学者、ストラスブール大学名誉教授であり、これまでグローバル化における言語の役割、多国籍企業での言語の地位、ヨーロッパに於ける言語地政学、言語政策などを研究し、欧州評議会の言語政策についても専門家として協力をしている。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
ヨーロッパの言語政策の概要を把握し、言語教育政策の分析の手法を理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>ヨーロッパの言語政策の概要を把握し、言語教育政策の分析の手法を理解する。</p> <p>授業計画と内容</p> <p>授業では、受講者に訳文を提出してもらい、それを元に討論を進める。論文の章立ては次の通りである。</p> <p>5. 言語と超国家権力 ヨーロッパにおける超国家権力の構築 EUという組織の公用語と自由経済 言語知識に対するEU組織の介入</p> <p>8. ヨーロッパにおける言語政策の局面 言語使用への介入 学校教育における外国語教育の支配的傾向 多言語主義に向かって ヨーロッパ言語政策</p>											
<b>[履修要件]</b>											
フランス語中級まで履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席(20%)、レポート(80%)による総合評価を行う。											
----- 言語教育政策論演習 (2)へ続く -----											

## 言語教育政策論演習 (2)

### [教科書]

使用しない  
プリントを配布する。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する  
必要な文献は授業にて指示する。

(関連URL)

<http://www.flae.h.kyoto-u.ac.jp/>(西山教行研究室)

### [授業外学習(予習・復習)等]

出席にあたっては必ず予習をすること。およそ2ページを読んでおくこと。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	言語科学ゼミナールI Seminar in Linguistics I				担当者所属・ 職名・氏名	学術情報メディアセンター 教授 壇辻 正剛					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
(授業の概要・目的)											
この授業では言語科学に関するテーマに関連して、ゼミナール形式で理解を深めることを目的とする。言語学や言語科学から得られた知見を応用することによって、言語と文化や社会、教育などとの関わりにも目を向けて、ことばの諸側面に考察を加えることを目指す。											
<b>[到達目標]</b>											
言語や言語科学に関する基本的な知識を理解し、レポート課題や各自が興味を持った言語現象に関して考察を加え、議論を展開できるような能力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下の課題について、1課題当たり1～2週の授業を行なう予定である。											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語科学の基礎</li> <li>・言語科学の諸領域</li> <li>・言語の体系と構造</li> <li>・世界の諸言語と日本語</li> <li>・言語の通時的研究</li> <li>・言語の共時的研究</li> <li>・言語の比較と対照</li> <li>・対照言語学の領域</li> <li>・言語科学の応用</li> <li>・今後の課題と展望</li> </ul>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポート課題を課す予定であるが、平常のゼミ中での積極的な姿勢も考慮に入れる。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
予習よりもむしろ、ゼミで扱った項目に関してしっかり復習し、基本的な知見を身につけることに重点を置く。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	言語科学ゼミナールII Seminar in Linguistics II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 守田 貴弘					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
この授業では日本語および英語で書かれた言語学に関する論文を批判的に読み、議論の方法，データの扱い，論証の方法といった理論言語学に必要な基本概念と手法を身につけることを目的とする。											
<b>【到達目標】</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の関心のある言語学分野の用語を理解し，正しく使ったレポート（論文）が書けるようになる。</li> <li>・経験科学としての言語学で要求される議論の手法を踏まえて，自分の主張が展開できるようになる。</li> </ul>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>今年のテーマはダイクシスとし，以下の論文を輪読する（若干の変更の可能性あり．また，受講者の人数により扱う論文数は調整する）．初回授業はダイクシスに関する概論的講義を行うとともに，受講者それぞれの担当を決定する．担当者はそれぞれ論文内容をまとめたレジюмеを作り，授業内で順番に発表することになる．</p> <p>[1] Fillmore. Ch. 1966. Deictic Categories in the Semantics of 'Come'. Foundations of Language, 2, 219-227.  [2] 中澤恒子 (2002) 「『行く』と『来る』の到着するところ」生越直樹(編)『対照言語学』東京大学出版会，281-304.  [3] Shibatani. M. 2003. Directional Verbs in Japanese. Shay, E. and U. Seibert (eds.) Motion, Direction, and Location in Language. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 259-285.  [4] 坂原茂 (1995) 「複合動詞『Vて来る』」『言語・情報・テキスト』第2号，109-143.  [5] 澤田淳 (2009) 「移動動詞『来る』の文法化と方向づけ機能ー『場所ダイクシス』から『心理的ダイクシス』へ」『語用論研究』第11号，1-20.</p>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
授業中の発表（30%），授業参加（30%），および期末レポート（40%）によって評価する。											
<b>【教科書】</b>											
授業時にプリントを配布する。											
----- 言語科学ゼミナールII (2)へ続く -----											

## 言語科学ゼミナールII (2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業の前には、自分の担当ではなくても課題になっている論文は呼んだ上で授業に参加すること  
また、期末レポートに向けて必要な文献は教員の側でも紹介するが、各自で収集するように努めること。

### (その他(オフィスアワー等))

- ・質問等はメールにて随時受けつける。
- ・オフィスアワーについてはKULASISにて確認のこと。それ以外の時間であってもアポイントメントの相談は可能。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	言語科学ゼミナールIII Seminar in Linguistics III				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 河崎 靖					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
印欧語の世界を視野に収めながら、ことばの普遍性・体系性を明らかにすることを目標とする。史的言語学の諸分野（音論、形態論、統語論等の諸領域）を対象に、言語体系の普遍的な法則性を探るべく、通時的考究を進める。比較言語学的方法と併せて、言語の理論的考究による種々の成果を踏まえ、言語学的方法論上の問題についても考察する。言語体系の法則性・言語変化のメカニズムを探り、そのあり方を解明することを通して、言語の本質に迫る。											
<b>[到達目標]</b>											
言語学の諸分野を対象に、言語体系の全体像が把握できるよう考究を進める。世界の諸言語を視野に収め、ことばの普遍性・体系性が明らかになることを目標とする。ことばの諸相を考究することによって、多様性の背後に見え隠れする言語の普遍的特質を学ぶ。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
言語学の基本的な考え方について学ぶ。授業は下記の項目順に進める予定である。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．歴史言語学総論</li> <li>2．音・形態変化</li> <li>3．統語変化</li> <li>4．意味と語彙の変化</li> <li>5．語用論的变化</li> </ol>											
各項目につき3回前後の授業で取り組む予定である。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点・レポートにより総合的に判断する。											
<b>[教科書]</b>											
テキストはこちらで準備する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
授業中に課題を示し、家庭学習のテーマとする。											
(その他(オフィスアワー等))											
(その他(オフィスアワー等)) オフィスアワーについてはKulasisで確認してください。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	言語科学ゼミナールIV Seminar in Linguistics IV				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 服部 文昭					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月3	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
現代ロシア語の構造を研究する上での基本的な諸問題につき、理解を深めてゆく。											
<b>[到達目標]</b>											
現代ロシア語の構造を研究する上での基本的な諸問題を念頭に置きつつ、読解力を高め、専門領域での情報収集能力も身につけること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>動詞のアスペクト、名詞・形容詞の格、コピュラを含む構文といったテーマを中心に、取り組む予定である。</p> <p>具体的に述べれば、2回程度のイントロダクションに続いて、古典的なヴェンドラーの分類をめぐる問題、借用語である動詞と両体動詞との関係の問題、否定とアスペクトとの問題、動詞のアスペクトと目的語（その格）の問題などである。さらにまた、コピュラを含む構文の述部での名詞・形容詞の格の選択の問題も当然扱うが、その際に、格とアスペクトとの関係、近隣のスラヴ諸語との対照といった点にも目配りをしてゆきたい。各々のテーマに関して2回～3回の授業で取り組んでゆく予定である。</p> <p>単なる講義には終わらず、いくつかのカレントの論文を輪読する形式で進めてゆく。受講生諸君に割り当てる際には、本人の関心・興味と勉学・研究の進み具合を勘案の上、分担を決めようと考えているので、受講する諸君は積極的に参加して欲しい。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
ロシア語の読めることが望ましい（週に2回の授業で4セメスターは履修済みのレベルで）。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点とレポートなどの総合評価を原則とする。総合評価における割合は、受講者の力量や取り組み方などを勘案し、有機的に判断する。											
<b>[教科書]</b>											
プリント配布。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業中に指示する。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	発達行動学ゼミ Seminar for Behavioral Development				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 船曳 康子					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木3	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>どうしてあの人はあのようなことをするのだろう、と考えることはないだろうか。この問いこそが、行動学の基本であると考えている。行動は、思考、感情、判断など様々な認知側面の表出、つまり結果と考えられ、動物の場合、より単純、人間では複雑となりうる。結果でありながらも、事実となるものであり、学問としては、その確固たる部分から検証していくことが、背景の理解に着実につながることがよくある。また、この行動は、生物種によって、更に、発達によって特徴が変化しうる。以上を総合して、発達行動学として、人間を始め、生物の動的な理解を進める土台を学ぶことを目的とする。</p>											
【到達目標】											
ゼミのメンバーとの建設的な意見交換を通して、チーム議論のスキルの向上、そして、発達に伴って変化する行動観察の基本を身に付ける。											
【授業計画と内容】											
<p>初回にメンバーの発表順やテーマの範囲について議論する。1回につき1～2名の発表とする。2回目以降は、発表者に従って進める。</p> <p>こころの発達、行動学、精神機能のテーマのうち 論文抄読（英文、総説を推奨する） 教科書 トピック 研究提案 から、各学生が題材を選ぶが、発表内容の相談に応じる。 提案されたテーマに対して、メンバーは建設的な意見交換を行い、教員はファシリテートをしながら、関連する知識や情報の提供や紹介、また助言を行う</p>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
発表状況、授業内での発言											
【教科書】											
使用しない											
【参考書等】											
（参考書） 授業中に紹介する											
【授業外学習（予習・復習）等】											
発表者は、ゼミのメンバーが理解できるように準備する											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：視覚科学 Introductory Seminar: Vision Science				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 齋木 潤					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
講義形式の授業では伝えることの困難な「視覚科学」の研究の実際の現場に触れ、視覚による認識過程を科学的に研究する方法に関する知識を体験的に得ることを目指す。具体的には担当教員の研究室で行っている研究手法（行動実験、fMRI実験、脳波測定実験、眼球運動測定実験など）を取り上げ、実験現場への参与観察（実験協力者としての参加を含む）と、実験手法に関するチュートリアルとディスカッションを通して研究の実際を理解する。前期の基礎ゼミナールAでは、各研究手法による基本的な実験などを取り上げる。											
【到達目標】											
視覚に関する心理学実験を体験することにより、実験研究の基本的考え方を体験的に学ぶ。教科書的な知識と研究現場の関係、つながりを理解する。											
【授業計画と内容】											
第1回：オリエンテーション(必要な場合は履修制限) 第2回：視覚科学の研究手法の概説（レクチャー） 第3回：行動実験1（心理物理実験）実習 第4回：行動実験1（心理物理実験）解説とディスカッション 第5回：行動実験2（認知実験）実習 第6回：行動実験2（認知実験）解説とディスカッション 第7回：眼球運動測定実験 実習 第8回：眼球運動測定実験 解説とディスカッション 第9回：脳波測定実験 実習 第10回：脳波測定実験 解説とディスカッション 第11回：fMRI実験 実習 第12回：fMRI実験 解説とディスカッション 第13回：まとめ、質疑応答、全体のディスカッション 第14回：参加者のレポート発表											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
参加者は毎回の授業に出席しディスカッションに参加するとともに、テーマごとにコメントを提出する。また、授業の最後に、取り上げた研究手法の1つに関してレポートをまとめ提出する。レポートの内容は											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業内容のまとめ（研究手法についての知識の整理）</li> <li>・ その研究手法を用いた具体的な研究のアイデア</li> <li>・ その研究手法に関する意見（手法の限界、利点、改善点、など）</li> </ul>											
成績評価の方法 平常点 25% 発表・レポート 75%											
----- 基礎演習：視覚科学(2)へ続く -----											

基礎演習：視覚科学(2)

**[教科書]**

使用しない

**[参考書等]**

(参考書)  
授業中に紹介する

**[授業外学習(予習・復習)等]**

授業時間外にデータ収集や実習を行う場合がありうる。

**(その他(オフィスアワー等))**

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：神経心理学 Introductory Seminar: Neuropsychology				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 月浦 崇					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>脳の様々な疾患によってヒトの脳が損傷されると、様々なタイプの高次脳機能障害が起こる。しかしながら、脳損傷とそれによって引き起こされる特異的な認知機能の障害の理解は、症状が複雑であるために未だに十分に理解が進んでいないのが現状である。本基礎ゼミナールでは、脳の損傷によって起きる様々な高次脳機能の障害について、多くの症例を通してみることで、脳と心の関係性を理解し、考えることをめざす。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 脳の疾患によって起こる様々な高次脳機能の障害についての臨床的観点からの知識を習得する。</li> <li>・ ヒトのさまざまな認知機能が脳を媒体としてどのように表現されているのかについて、基礎科学としての認知神経科学についての理解を深める。</li> <li>・ 研究論文を読んでその内容をプレゼンすることで、プレゼンテーションの基本的素養を習得する</li> <li>・ 脳を介して心の働きを客観的に理解することを通じて、自らを客観的にみつめる力を体得する。</li> </ul>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>本ゼミナールでは、脳損傷患者を対象とした神経心理学的の症例に関する教科書を素材にし、毎回数症例を対象にして担当者にその内容をプレゼンしてもらい、それについて受講生皆で議論を行う本基礎ゼミナールを通して、脳損傷者による多彩な臨床症状を理解することで、認知機能の脳内機構を理解し、考える姿勢を習得する。</p> <p>本ゼミナールで扱う内容は以下のとおり。各章ごとに1～3回の授業を行う。内容や順番は目安であり、変更する可能性があります。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス (1週)</li> <li>2. 前頭葉 (2週)</li> <li>3. 側頭葉 (2週)</li> <li>4. 頭頂葉 (3週)</li> <li>5. 後頭葉 (2週)</li> <li>6. 大脳深部 (2週)</li> <li>7. 白質ほか (2週)</li> <li>8. まとめ (1週)</li> </ol> <p>フィードバック方法は別途連絡します。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
<p>原則的に、全学共通科目の講義科目の『神経心理学 もしくは 』を受講中もしくは受講済であること。なお、履修人数の制限を行う予定であり、履修人数を超えた場合の抽選には、本要件を考慮する。</p>											
----- 基礎演習：神経心理学(2)へ続く -----											

## 基礎演習：神経心理学(2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

出席状況と発表内容で評価する。ディスカッションへの参加の積極性も加味することがある。

### [教科書]

鈴木匡子 『症例で学ぶ高次脳機能障害：病巣部位からのアプローチ』（中外医学社）ISBN: 9784498228221（本ゼミナールでは、この教科書を購入していることを前提に進めます。少し高価ですが、購入をお願いします。購入が難しい場合には、別途相談してください。）

### [参考書等]

（参考書）

石合純夫 『高次脳機能障害学（第2版）』（医歯薬出版）ISBN:9784263213964  
河村満・高橋伸佳 『高次脳機能障害の症候辞典』（医歯薬出版）ISBN:9784263213315  
日本神経学会 『神経学用語集（改定第3版）』（文光堂）ISBN:9784830615375

### [授業外学習（予習・復習）等]

授業中に別途指示する。

### （その他（オフィスアワー等））

ゼミ形式の授業のため、履修制限を行う。履修制限の方法は別途指示する。  
第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：心の発達ゼミ Introductory Seminar: Neuropsychology				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 船曳 康子					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>人のこころは、生まれながらの性格、環境、様々な要因の影響を受けながら、人格が形成され、生涯発達していくと考えられている。各ライフステージにおける特徴、また個人の特徴も踏まえて、精神面の発達について学ぶ。</p> <p>各学生自身も様々な体験をしていると考えられる。一方で、多様な人、背景、考え方について、知見、時事問題、グループ討議を通して、幅広く認識し、今後に役立てていくことを目的とする。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
ゼミのメンバーとの建設的な意見交換を通して、人はそれぞれの特性を持って発達し、一様でない点と、共通する点について理解し、実生活に役立つようにする。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>初回にメンバーの発表順やテーマの範囲について議論する。</p> <p>1回につき1～2名の発表とする。</p> <p>2回目以降は、発表者に従って進める。</p> <p>心、精神発達、人格のテーマのうち 論文抄読（英文、総説を推奨する） 教科書 トピック から、各学生が題材を選ぶが、発表内容の相談に応じる。</p> <p>提案されたテーマに対して、メンバーは建設的な意見交換を行い、教員はファシリテートをしながら、関連する知識や情報の提供や紹介、また助言を行う</p>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
発表状況と授業内での発言											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
<p>（参考書） 授業中に紹介する</p>											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
発表者は、ゼミのメンバーが理解できるように準備する											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	基礎演習：身体運動の制御と学習 Introductory Seminar: Motor Control and Learning				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 久代 恵介					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>本セミナーでは、身体運動の制御と学習に関する初学者向け教科書を読み進めながら、身体運動が発現され、洗練されていくしくみと理論を学びます。身体運動が脳で作られるしくみ、作られた運動が骨格筋から出力されるしくみ、さらに、おこなわれた運動が評価・修正され運動学習が促進されるしくみと理論について、運動科学・スポーツ科学・神経科学分野の知見をもとに学んでいきます。本講義を通じて、普段われわれが経験的におこなっている日常の運動やスポーツの動作を、学術的な視点から捉え直します。</p>											
【到達目標】											
<p>本セミナーを通して、運動の制御と学習に関する基礎知識の習得を目指す。 普段経験的に体得しておこなっている身体運動について、学術的な観点から洞察する力を養う。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>教科書：運動行動の学習と制御 麓信義（編）杏林書院 を用いて進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 運動の学習と制御の方法</li> <li>2) 動作の観察：力学的観察と評価</li> <li>3) 動作の観察：生理学的観察とその意味</li> <li>4) 学習された運動行動の制御</li> <li>5) 運動と記憶</li> <li>6) 運動行動の理論</li> <li>7) 運動学習における付加的情報と注意</li> <li>8) 状況判断と運動行動</li> <li>9) 情報処理理論のオルタナティブ</li> <li>10) 残された検討課題</li> </ol> <p>上記の各章を受講生全員で分担し、毎回担当者が章の内容を発表する。担当教員がこれに解説を加える形式で授業を進める。</p>											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
出席状況と発表内容により総合的に評価する。											
----- 基礎演習：身体運動の制御と学習(2)へ続く -----											

基礎演習：身体運動の制御と学習(2)

**[教科書]**

麓信義（編）『運動行動の学習と制御』（杏林書院）  
上記教科書を購入することを前提に授業を進めます。

**[参考書等]**

（参考書）  
授業中に紹介する

**[授業外学習（予習・復習）等]**

発表者は十分に準備を行うこと。  
前回までの内容を理解しておくこと。

**（その他（オフィスアワー等））**

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第一回目の授業には必ず出席すること。  
それが難しい場合は事前に担当者と連絡を取ること（kushiro.keisuke.5n@kyoto-u.ac.jp）。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習 : Intro to Computation and Logic Introductory Seminar: Intro to Computation and Logic				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 特定講師 DE BRECHT, Matthew					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	英語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
Computers are a relatively recent invention, but they have drastically changed how modern humans live and think. However, few people really know what it means to "compute" something, or how we discovered the basic principles of computation. It turns out that the discovery of computation has its roots in the development of formal logic and a determination to find a rigorous foundations for mathematics about a century ago. In this course, we will introduce the students to formal logic and its relationship with computation. We will also introduce some of the main people involved with the various discoveries, and emphasize the historical background and motivations. The aim of the course is for students to not only gain a deeper understanding of computation, but also understand how it was discovered.											
<b>【到達目標】</b>											
The students will become familiar with logical reasoning, formal proofs, and the theory of computability. They will also become familiar with the historical background and motivations that led to these developments.											
<b>【授業計画と内容】</b>											
Below are some possible topics that we will cover during the course. The topics we cover will depend on the interests and abilities of the students.											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1) Propositional logic</li> <li>2) First-order Predicate logic (Frege)</li> <li>3) First-order Arithmetic (Peano)</li> <li>4) Set theory (Cantor)</li> <li>5) Paradoxes, foundations &amp; Hilbert's program (Russell, Hilbert)</li> <li>6) Intuitionism &amp; constructive mathematics (Brouwer)</li> <li>7) Incompleteness theorem (Godel)</li> <li>8) Lambda calculus, Church numerals, and arithmetic (Church)</li> <li>9) Turing machines and Turing completeness (Turing)</li> <li>10) Further topics (Curry-Howard correspondence)</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
Students are expected to actively participate in discussion, read material, and solve exercises in class. Evaluation will approximately be based on the following: class participation (30%), written and oral assignments (30%), final (40%)											
----- 基礎演習 : Intro to Computation and Logic(2)へ続く -----											

基礎演習 : Intro to Computation and Logic(2)

**[教科書]**

No textbook. Relevant materials will be distributed in class.

**[参考書等]**

( 参考書 )

The following books might be useful as references and background reading, but are not required. We will also look at some original papers, which will be handed out in class.

- 1) "Logic in Computer Science" by Michael Huth and Mark Ryan  
Publisher: Cambridge University Press (2004), ISBN: 978-0521543101
- 2) "A profile of mathematical logic" by Howard DeLong.  
Publisher: Dover Publications (2004), ISBN: 978-0486434759
- 3) "A Beginner's Guide to Mathematical Logic" by Raymond Smullyan. Publisher: Dover Publications (2014), ISBN: 978-0486492377
- 4) "Introduction to Mathematical Logic" by Elliott Mendelson.  
Publisher: Chapman and Hall (2015), ISBN: 978-1482237726
- 5) "Godel, Escher, Bach" by Douglas Hofstadter.  
Publisher: Basic Books (1999), ISBN: 978-0465026562

**[授業外学習 ( 予習・復習 ) 等]**

Students should review the course material after each class, and will have homework assignments.

( その他 ( オフィスアワー等 ) )

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	脳と心の計算論ゼミA Computation for Brain and Mind A				担当者所属・ 職名・氏名	こころの未来研究センター 教授 小村 豊					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
脳や心のはたらきを理解する上で有用な計算論的アプローチの習得を目指します。授業は、最新の論文や新しいトピックに関する論文紹介・解説と参加者による研究報告を交えたゼミナール形式で行います。											
<b>[到達目標]</b>											
知覚・行動から意思・意識にいたるまで、我々の日常に関わる認知をテーマにします。認知には、特有の構造を持っていることを、情報数理・計算論の観点から、理解します。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1回：オリエンテーション。 第2回以降：脳と心の計算論に関する最新の研究や重要トピックスを議論する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、論文紹介、議論の状況などをもとに評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
事前にトピックが知らされたら、関連論文などを一読し、当日の議論に備える。											
(その他(オフィスアワー等))											
脳や心に興味のある方をお待ちしています。 また、計算科学や人工知能に興味のある方も歓迎です。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	脳と心の計算論ゼミB Computation for Brain and Mind B				担当者所属・ 職名・氏名	こころの未来研究センター 教授 小村 豊					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
脳や心のはたらきを理解する上で有用な計算論的アプローチの習得を目指します。授業は、最新の論文や新しいトピックに関する論文紹介・解説と参加者による研究報告を交えたゼミナール形式で行います。											
<b>[到達目標]</b>											
知覚・行動から意思・意識にいたるまで、我々の日常に関わる認知をテーマにします。認知には、特有の構造を持っていることを、情報数理・計算論の観点から、理解します。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1回：オリエンテーション。 第2回以降：脳と心の計算論に関する最新の研究や重要トピックスを議論する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、論文紹介、議論の状況などをもとに評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
事前にトピックが知らされたら、関連論文などを一読し、当日の議論に備える。											
(その他(オフィスアワー等))											
脳や心に興味のある方をお待ちしています。 また、計算科学や人工知能に興味のある方も歓迎です。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	脳情報学ゼミA Seminar on neuroinformatics A				担当者所属・ 職名・氏名	情報学研究科 教授 神谷 之康					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
情報科学の手法を用いた脳研究法を実践的に習得するため、最新の論文や新しいトピックに関する論文紹介・解説と参加者による研究報告を交えたゼミナールを行う。											
<b>[到達目標]</b>											
研究や論文作成に必要な技術を最新の研究成果をベースに実践的に修得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1回：オリエンテーションと発表予定の決定。 第2回以降：発表予定に従い、論文紹介・解説と参加者による研究報告を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
微積分学、線形代数学、統計学の基礎を習得していること。「脳情報学」を受講していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況と発表・ディスカッション内容をもとに評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書)											
Dayan, P. & Abbott, L. F. 『Theoretical Neuroscience: Computational and Mathematical Modeling of Neural Systems』 (MIT Press)											
MacKay, D. 『Information Theory, Inference, and Learning Algorithms』 (Hardback)											
Goodfellow, I., Bengio, Y., and Courville, A. 『Deep Learning』 (MIT Press)											
Huettel, S.A. Song, A.W., and McCarthy, G. 『Functional Magnetic Resonance Imaging』 (Sinauer Associates)											
(関連URL)											
<a href="http://kamitani-lab.tumblr.com/post/152153243056/guide-to-study-at-kamitani-lab">http://kamitani-lab.tumblr.com/post/152153243056/guide-to-study-at-kamitani-lab</a> (神谷研究室ホームページ)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
担当トピックに関連する論文やオンラインの資料を収集し、質問やディスカッションに備える。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	脳情報学ゼミB Seminar on neuroinformatics B				担当者所属・ 職名・氏名	情報学研究科 教授 神谷 之康					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
情報科学の手法を用いた脳研究法を実践的に習得するため、最新の論文や新しいトピックに関する論文紹介・解説と参加者による研究報告を交えたゼミナールを行う。											
<b>[到達目標]</b>											
研究や論文作成に必要な技術を最新の研究成果をベースに実践的に修得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
第1回：オリエンテーションと発表予定の決定。 第2回以降：発表予定に従い、論文紹介・解説と参加者による研究報告を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
微積分学、線形代数学、統計学の基礎を習得していること。「脳情報学」を受講していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況と発表・ディスカッション内容をもとに評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) Dayan, P. & Abbott, L. F. 『Theoretical Neuroscience: Computational and Mathematical Modeling of Neural Systems』 (MIT Press) MacKay, D. 『Information Theory, Inference, and Learning Algorithms』 (Hardback) Goodfellow, I., Bengio, Y., and Courville, A. 『Deep Learning』 (MIT Press) Huettel, S.A. Song, A.W., and McCarthy, G. 『Functional Magnetic Resonance Imaging』 (Sinauer Associates)											
(関連URL)											
<a href="http://kamitani-lab.tumblr.com/post/152153243056/guide-to-study-at-kamitani-lab">http://kamitani-lab.tumblr.com/post/152153243056/guide-to-study-at-kamitani-lab</a> (神谷研究室ホームページ)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
担当トピックに関連する論文やオンラインの資料を収集し、質問やディスカッションに備える。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	スポーツ心理学セミナー：運動技能向上の現象と理論 Seminar of Sports Psychology: Phenomenon and Theory for Motor Skills.				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 久代 恵介					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
身体運動を上手に行うには、運動の発現に関わる身体の構造と機能を理解しておくことが有効である。本ゼミナールでは、スポーツ心理学分野の初学者向け教科書（洋書）を読み進めながら、運動の発現と制御に関する諸原理について理解を深めることを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
本ゼミナールを通して、運動の制御と学習に関する基礎知識の習得を目指す。 関連した英語文献を読み進めるための方法とスキルを培う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
Human Motor Control, 2nd edition, (Rosenbaum, D. A.), Academic Press, 2009 を読み進める。											
1) 運動の生理学的基礎 2) 運動の心理学的基礎 3) 歩行と姿勢制御 4) 眼球運動と注視 5) 上肢運動 6) 書字と絵画における運動制御 等											
上記の各章を2週間程度ずつ扱う。各章を受講生全員で分担し、毎回担当者が発表する。担当教員がこれに解説を加える形式で授業を進める。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席状況と発表内容により総合的に評価する。詳細は授業にて説明する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
発表者は十分に準備を行うこと。 前回までの内容を理解しておくこと。											
(その他(オフィスアワー等))											
第一回目の授業には必ず出席すること。それが難しい場合は事前に担当者と連絡を取ること( kushiro.keisuke.5n@kyoto-u.ac.jp )。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	自然史特論 Special Lecture on Natural History				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 教授 地球環境学舎 教授 人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 准教授 人間・環境学研究科 助教 人間・環境学研究科 助教	加藤 真 瀬戸口 浩彰 宮下 英明 市岡 孝朗 西川 完途 幡野 恭子 阪口 翔太				
配当 学年	3,4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 通年	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
分類学・系統学・生態学・行動学などのマクロ生物学の分野の古典的な研究や最先端の研究を紹介しつつ、一方で論文の読みあわせを行いながら、生物の自然史の理解を深める。											
<b>【到達目標】</b>											
自然史に関する基礎知識をえる。 最新の研究動向を把握する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
主に以下のようなテーマに沿った講義と論文講読を行なう。 1. 脊椎動物の分類と系統 2. 植物の分子系統解析 3. 生物の種間関係と、種間関係がもたらす種分化 4. 生物の個体群動態と調節機構 5. 熱帯雨林の生物群集と生態系 6. 生物の行動の進化 7. 藻類・微生物の分類・系統・生態・進化											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
平常点（出席、受講態度、ミニ試験、ミニレポートなど）											
<b>【教科書】</b>											
使用しない											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>【授業外学習（予習・復習）等】</b>											
講義中の指示にしたがって予習・復習を行うこと											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	物性基礎論II Physics of Matter II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 宮本 嘉久					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
物性物理の基礎である弾性論、流体力学、連続体力学の初歩について講義する。物体の変形や物体内での相互作用である力の記述から始めて、物理量の保存則である基礎方程式を中心に解説する。											
<b>[到達目標]</b>											
連続体力学の基礎を身につける。変形と応力の記述法を学び、保存量と基礎方程式の関係を理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下の項目について、各項目あたり2～4週の予定で進める。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 変形と応力：歪テンソルと応力テンソル</li> <li>2. 基礎方程式：保存方程式、運動方程式、エネルギー - 方程式</li> <li>3. 大変形の弾性力学</li> <li>4. 線形応答</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
物理学基礎論A、B、熱力学、統計物理学を履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポートなどにより評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
随時指示する。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワー - は特に定めない。質問、希望等があれば、miyamoto.yoshihisa.4z@kyoto-u.ac.jpにメール、または、075-753-6784に電話すること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	物質分析論 Analytical Chemistry for Environmental Materials				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 杉山 雅人					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
化学分析を行う際の基礎となる、化学平衡、イオン平衡、溶液内反応論などの分析化学の基礎と応用について講義する。											
<b>【到達目標】</b>											
分析化学の基本原理を修得する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
以下に示す項目について、講義する。 1. 質量作用の法則とデバイヒュッケル則 2. 酸塩基平衡 3. 緩衝溶液の理論と応用 4. 自然水中での酸塩基平衡、アルカリ度 5. 酸化還元平衡とネルンスト式 6. pH - 電位図 7. 沈澱平衡 8. 錯生成平衡 9. 溶媒抽出（分配平衡） 10. 有機試薬（構造と選択性） 11. ランベルト・ベールの法則と吸光光度分析 12. 定量分析の実際（検出限界、検量線、感度、精度、確度） 13. 原子スペクトル分析 14. クロマトグラフィー											
<b>【履修要件】</b>											
学共通科目の「基礎物理化学」、「基礎有機化学」を習得していることが望ましい。 分析化学に関する理解をさらに深めるため、本科目を習得したのちに「物質構造機能論演習A」を履修することが望ましい。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
定期試験とレポートによる。											
<b>【教科書】</b>											
藤永太一郎 編著 『基礎分析化学』（朝倉書店）											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 藤永太一郎、関戸栄一 訳 『イオン平衡』（化学同人） 姫野貞之、市村彰男 『分析化学』（化学同人）											
----- 物質分析論(2)へ続く -----											

物質分析論(2)

---

[授業外学習（予習・復習）等]

自宅学習のための課題を授業中に配布する。

（その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	細胞生物学 A Cell Biology A				担当者所属・ 職名・氏名	生命科学研究所 教授 千坂 修					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
細胞生物学を生化学との関わりを含めて学ぶ。											
<b>[到達目標]</b>											
生化学、分子生物学の知見についても復習しながら、細胞生物学を学ぶ。特論的話題を学ぶ前の細胞生物学の基礎を修得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
細胞生物学の研究手法 細胞の成分 細胞膜の構造と機能 細胞膜受容体 細胞小器官（小胞体、ゴルジ体、ミトコンドリア、液胞）と機能 細胞核の構造と機能 核膜孔複合体とその制御 クロマチンと遺伝子発現・エピジェネシス 各項目につき1～2回程度の講義を行う											
<b>[履修要件]</b>											
高校レベルの生物学、化学の知識の復習が望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
筆記試験と出席率による。											
<b>[教科書]</b>											
Alberts ら 『エッセンシャル細胞生物学原書第4版』（南江堂）ISBN:9784-524-261-994（第3版でも可）											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する 講義中に補充教材プリントを配布する。											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
高校レベルの生物学、化学の復習。											
（その他（オフィスアワー等））											
質問などはメールで予約して面談可。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	細胞生物学 B Cell Biology B	担当者所属・ 職名・氏名	生命科学研究所 准教授 吉村 成弘
---------------	---------------------------	-----------------	-------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### 【授業の概要・目的】

細胞内で進行する様々な生体反応を分子レベルで理解する。

特に下記の項目を集中的に扱う。

- ・タンパク質の構造と機能の関係
- ・核酸の高次構造形成の分子基盤
- ・分裂期染色体の形態変化に関する分子基盤

#### 【到達目標】

タンパク質の高次構造形成と動態の分子基盤を正しく理解する  
核酸の高次構造構築と分裂期における動態の分子基盤を正しく理解する  
分裂期における染色体および核の動態に関する分子基盤を理解する

#### 【授業計画と内容】

1. タンパク質の構造 1
2. タンパク質の構造 2
3. タンパク質の構造と機能 1
4. タンパク質の構造と機能 2
5. DNAの構造と性質 1
6. DNAの構造と性質 2
7. 染色体の構築原理と動態 1
8. 染色体の構築原理と動態 2
9. 染色体の構築原理と動態 3
10. 染色体の構築原理と動態 4
11. 分裂期染色体 1
12. 分裂期染色体 2
13. 分裂期における核の動態 1
14. 分裂期における核の動態 2
15. 分裂期における核の動態 3

#### 【履修要件】

生化学入門（旧生化学入門101および生化学入門102）を履修していることが望ましい。

#### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

出席点(50%)と授業内での発表内容(50%)

細胞生物学 B (2)

**[教科書]**

使用しない  
コメントなし

**[参考書等]**

(参考書)

Lodish他 『Molecular Cell Biology』 (FREEMAN) ISBN:978-0-7167-7601-7  
吉村成弘 『大学で学ぶ身近な生物学』 (羊土社) ISBN:978-4-7581-2060-9

**[授業外学習(予習・復習)等]**

特になし

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	生物多様性・生態学 Biodiversity Ecology				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 教授		加藤 真 市岡 孝朗			
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
地球にはどのような生物多様性があり、それがどのような変遷をとげてきたのか、生物多様性はどのように形作られ、どのように維持されているのか、生物多様性はどのような危機に直面しており、そのような危機から脱するためにはどのような方策が必要なのか、といったテーマに生態学の立場から答えることを目的としている。											
<b>[到達目標]</b>											
生物多様性とはどのようなものであり、どのように形成されたのか、そしてそれを保護することがなぜ大事なかが理解できるようになることをめざす。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下のようなテーマにそって講義を行なう。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 海の生物多様性</li> <li>2. 熱帯雨林の生物多様性</li> <li>3. 日本列島の生物多様性</li> <li>4. 生物多様性の歴史</li> <li>5. 種分化の機構</li> <li>6. 遺伝的多様性</li> <li>7. 生物の多様性が個体群動態に与える影響</li> <li>8. 生物多様性の危機</li> <li>9. 生物多様性の保護</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 加藤真 『生命は細部に宿りたまう - ミクロハビタットの小宇宙』 (岩波書店)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
『日本の生物多様性 - 自然と人との共生』(環境省自然環境局生物多様性センター刊)は、日本列島の実際の生物多様性について詳述されており、復習するのに有用である。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	物質機能論 Material Function				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 内本 喜晴					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
物質の機能、特に無機機能性材料の電気化学デバイスへの応用について概説する。											
<b>[到達目標]</b>											
次世代の環境・エネルギー問題の解決手法としての、電気化学エネルギー変換の理解が出来るようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
物質のもつ化学エネルギーと電気エネルギーの相互変換を行う電気化学デバイスの研究は、今後のエネルギー問題および環境問題を解決し、自然と人間の調和的共生を図る上で益々必要になる。電気化学デバイスの高性能化には、高機能性材料の開発が極めて重要な役割を担っている。電気化学デバイスに適用される無機機能性材料の機能発現原理について概説する。電気化学反応機構について、電解質溶液の考え方、平衡電気化学、溶液と電極の界面化学、電極反応速度論、電気化学測定法、電極の化学について学習する。デバイスに用いられる無機機能性材料につき、電子導電性、イオン導電性などの機能発現原理について講義し、燃料電池、電池を中心とした電気化学デバイスへの応用を最近のトピックスを交えて述べる。											
<b>[履修要件]</b>											
基礎物理化学A,Bを習得していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポート試験と出席率による。											
<b>[教科書]</b>											
参考書を補助教科書として使用する。その他、必要な資料は適時配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 大塚 利行、桑畑 進、加納 健司 『ベーシック電気化学』(化学同人) ISBN:4759808612											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
それぞれの講義の内容について、演習問題を行い、講義内容の定着を行う。											
(その他(オフィスアワー等))											
居室：人間・環境学研究科棟301号室 uchimoto.yoshiharu.2n@kyoto-u.ac.jp											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	物質構造論 Material Structure				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 田部 勢津久					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
物質，特に無機材料の結晶構造と物性,機能性の関係の基礎，およびエレクトロニクス，フォトンクス応用について解説する．現代文明・テクノロジーの基礎を支える先端材料・デバイスの基本原理への理解を深め，新材料開発のために必要な基礎学理を修得する．											
<b>[到達目標]</b>											
物質，特に無機材料の結晶構造と物性,機能性の関係の基礎，およびエレクトロニクス，フォトンクス応用，先端材料・デバイスの基本原理への理解を深め，新材料開発のために必要な基礎学理を修得する．											
<b>[授業計画と内容]</b>											
光エレクトロニクス（情報通信，処理，表示，記録技術，光電変換）の発展は，固体レーザ，誘電体結晶，光ファイバ，半導体，発光ダイオード，太陽電池等、様々な光機能性無機固体材料の開発とその性能向上によって支えられている．本講義ではまず，その光機能性発現の基礎となる無機物質を構成する原子の電子オービタル、無機結晶の構造を学ぶ．また結晶構造と機能の関係，諸物性特に光学的性質を決定する因子，および固体物質の作製方法などを学ぶ．											
<b>[履修要件]</b>											
基礎物理化学 A & B と基礎化学実験を履修していること，また無機化学入門 A & B を修得していることが望ましい．											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
定期試験と平常点による．											
<b>[教科書]</b>											
授業中にプリントを配布する．											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
授業内容と配布プリントに基づく復習を推奨する．											
（その他（オフィスアワー等））											
「課題演習：物質の構造と機能」を履修してモノづくりと物性測定を経験していると，内容理解と具体的イメージの助けになる．											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	分子構造論 Organic Structural Chemistry				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 小松 直樹					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
種々の有機化合物の反応をその構造と性質を含めて体系的に理解することを目的とする。本科目では特に、芳香族化合物、アルコール、エーテル、アルデヒド、ケトン等を取りあげて講義を進める。											
<b>[到達目標]</b>											
有機化合物を題材として、物質を構成する分子の構造と反応性とを統一的に理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下のテーマについて、1テーマあたり1～2週の授業をする予定である。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．ベンゼンの構造と芳香族性</li> <li>2．芳香族求電子置換反応</li> <li>3．アルコールの構造と性質</li> <li>4．アルコールの反応</li> <li>5．フェノールの構造と反応</li> <li>6．チオールの構造と反応</li> <li>7．エーテルの構造と反応</li> <li>8．エポキシドの構造と反応</li> <li>9．アルデヒド・ケトンの構造と性質</li> <li>10．カルボニル基の反応：求核付加反応</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
基礎有機化学A・B、構造有機化学入門、反応有機化学入門のいずれかを前もって履修していることが望ましい。また、分子反応論（後期）と連続して履修することを強く勧める。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
演習を十分実施しながら講義を進め、成績は出席、与えられた課題への取り組みとともに、定期試験で評価する。											
<b>[教科書]</b>											
J. McMurry 『マクマリー 有機化学 中 第8版』（東京化学同人）ISBN:9784807908103											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 希望があれば紹介する。											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
第1回目に授業予定を説明するので、それに従って予習をしてのぞむこと。また、授業時に課題を与えるので、それによって復習に努めること。 詳細は授業中に指示する。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	分子反応論 Chemistry of Organic Reactions				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 藤田 健一					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
分子構造論（前期）に引き続いて、種々の有機化合物の反応をその構造と性質を含めて体系的に理解することを目的とする。本科目では特に、カルボニル化合物、カルボン酸、カルボン酸誘導体、ニトリル、アミン等を取りあげて講義を進める。											
<b>[到達目標]</b>											
有機化合物を題材として、物質を構成する分子の構造と反応性とを統一的に理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
講義の具体的内容としては、以下を取り上げ、それらの構造的特徴とそれに由来する性質や反応について、命名法や反応機構を含めて解説する。各項目について、2～4週の授業を行う予定である。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1) カルボン酸とニトリル</li> <li>2) カルボン酸誘導体と求核アシル置換反応</li> <li>3) カルボニル基の置換反応</li> <li>4) カルボニル縮合反応</li> <li>5) アミンと複素環</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
本授業履修には、基礎有機化学、構造有機化学入門、反応有機化学入門のいずれかを前もって履修していることが望ましい。また、分子構造論（前期）と連続して履修することを強く勧める。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
演習を十分実施しながら講義を進め、成績は出席、レポート提出を重視して、定期試験で評価する。											
<b>[教科書]</b>											
マクマリー 『マクマリー有機化学第8版（中）及び（下巻の1部）』（東京化学同人）											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 希望があれば紹介する。											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
第1回目に授業予定を説明するので、それに従って予習をしておくこと。また、毎回の授業時にレポートを課すので、それによって復習に努めること。 詳細は授業中に指示する。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	フロンティア化学 Frontier of Chemistry		担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授	藤田 健一						
				人間・環境学研究科 助教	高橋 弘樹						
				人間・環境学研究科 助教	上田 純平						
				地球環境学舎 助教	坂本 陽介						
				人間・環境学研究科 助教	山本 旭						
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>科学技術の発展とともに、「化学」の研究対象はより細分化され、多岐にわたって私たちの生活を支えている。本授業では最先端の化学研究の紹介・解説を通じて、様々な分野における自然科学の知識や理解を深めるとともに、現代社会が抱える問題点に対して、「化学」がなし得る貢献や役割に関して講義する。</p>											
【到達目標】											
<p>化学を含めた自然科学という学問の重要性ならびに現代社会における貢献について理解するとともに、現在進められている最先端の研究内容に関する知識を得る。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>現代社会において「化学」が果たすべき役割を解説するとともに、環境化学・有機化学・無機化学・結晶化学・材料化学・大気化学・触媒化学といった化学の諸分野における最先端の研究についてリレー講義形式で紹介する。 以下の課題について、1課題あたり2～3週の講義を行う予定である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1．グリーンケミストリー：現代合成化学の課題</li> <li>2．結晶工学：結晶構造をデザインする</li> <li>3．光機能性無機材料：グリーンフォトンクスにむけて</li> <li>4．大気化学：大気質評価における課題</li> <li>5．触媒化学：固体表面上での分子のふるまい</li> </ol>											
【履修要件】											
特に定めないが、理系志望の学生の受講を期待する。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
出席率とレポートによる。											
【教科書】											
使用しない											
【参考書等】											
(参考書) 授業中に紹介する											
【授業外学習(予習・復習)等】											
<p>第1回目の授業時に予定表を配布し、リレー講義で扱う内容を概説する。それに従って予習をしておくことが望ましい。また、レポートを課すので、それをまとめることが復習となる。詳細は授業中に指示する。</p>											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	統計力学 Statistical Mechanics				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 森成 隆夫					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
物理学の基礎科目の一つである，統計力学を理解することを目標とする。物性物理学に関する応用例についても講義する。											
<b>[到達目標]</b>											
統計力学について学び，多体系を理解するための手法を習得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下の項目について、各項目あたり2～3週の予定で進める。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1．ミクロカノニカル分布とその応用</li> <li>2．カノニカル分布とその応用</li> <li>3．グランドカノニカル分布とその応用</li> <li>4．量子統計</li> <li>5．相転移と臨界現象</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
物理学基礎論A、B程度の基礎知識は必須である。熱力学や量子力学の基本的な内容を理解していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポートにより評価する。											
<b>[教科書]</b>											
森成隆夫 『熱・統計力学』（サイエンス社）（2017年3月出版予定）											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書）											
久保 亮五 『大学演習 熱学・統計力学』（裳華房，1998年）											
長岡 洋介 『統計力学』（岩波書店，2011年）											
田崎 晴明 『統計力学I，II』（培風館、2008年）											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
講義の内容を復習し，教科書や参考書にあげた演習書の問題を解くこと。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	物質反応論 Physical Chemistry				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 梶井 克純					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
化学結合論、構造化学および化学反応論について講義する。これらの応用として大気化学を扱い、化学基礎理論の理解を深める。											
<b>[到達目標]</b>											
シュレディンガーの波動方程式について理解する。簡単な例として、井戸型ポテンシャル、バネの振動および水素原子について理解する。単純な分子（等核2原子分子）の分子軌道について理解する。結合次数の概念を導入し、結合距離について理解する。素反応の速度式と、化学物質の時間変化を理解する。大気中のオゾンの生成機構について理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下に示す項目について講義する。 1 量子化学の基礎（2回） 2 水素原子（2回） 3 水素分子と等核2原子分子（2回） 4 化学結合論（2回） 5 分子構造（2回） 6 反応速度論（3回） 7 大気化学（2回）											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
定期試験、レポートおよび出席により評価する。											
<b>[教科書]</b>											
特に指定なし。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 特に指定なし。											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
核授業の最後に復讐を促す課題を提出し、授業の理解度を深めるよう努める。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	物質変換論 Material Conversion				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 吉田 寿雄					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
人間社会・環境に貢献する触媒化学の基礎と応用，及び関連の学問について講義する．											
<b>[到達目標]</b>											
主に不均一系の触媒化学の原理と現状について，概要を理解し説明できるようになること．											
<b>[授業計画と内容]</b>											
触媒は化学的物質変換に不可欠な物質であり，化学工業，環境保全におけるキーテクノロジーである．また，近年注目を集める光触媒は，エネルギー，環境分野での貢献が期待されている．本講義では，触媒・光触媒の歴史，基礎，応用について解説し，触媒の研究・開発を支える解析・評価技術についても講義する．											
第1回 化学と環境とエネルギー											
第2回 触媒・光触媒と環境とエネルギー											
第3回 触媒のしくみ											
第4回 金属触媒											
第5回 金属酸化物触媒・酸塩基触媒											
第6回 光触媒											
第7回 触媒のキャラクタリゼーション1 XRD，XAFS，XPS，UV											
第8回 触媒のキャラクタリゼーション2 ESR，NMR，吸着											
第9回 触媒のキャラクタリゼーション3 IR，顕微鏡											
第10回 均一系											
第11回 活躍する触媒											
第12回 活躍する光触媒											
第13回 最近の研究例1											
第14回 最近の研究例2											
第15回 まとめ											
<b>[履修要件]</b>											
化学や物理，物理化学等の一般的知識をある程度有していることが望ましい．											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
日常の小テストの結果，及び出席率により評価する． 定期試験は行わない．											
<b>[教科書]</b>											
山下弘巳・田中庸裕ら 『触媒・光触媒の科学入門』（講談社）											
----- 物質変換論(2)へ続く -----											

## 物質変換論(2)

### [参考書等]

(参考書)

田中庸裕・山下弘巳 『固体表面キャラクタリゼーションの実際』 (講談社)

### [授業外学習(予習・復習)等]

授業の後,教科書と配布資料を見て復習し理解を深めることが望ましい.

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	生体分子機能論I Molecular Aspects of Biological Function I				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 准教授 土屋 徹					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
生物を構成する多様な分子の構造、機能、代謝などについて理解することを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
生物および生命現象について、物質レベルで理解するための基礎知識を習得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下の内容について、3～5週の講義を行う予定である。											
1. 細胞の構成成分の構造と機能 核酸、タンパク質、糖質、脂質について構造と機能を解説する。											
2. 酵素反応 酵素反応の特異性、反応速度論について解説する。											
3. 代謝経路 主要な代謝経路である解糖系、TCA回路等について解説する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点と試験を基に総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
適宜資料を配付する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
復習により、講義内容を理解すること。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	生体分子機能論II Molecular Aspects of Biological Function II				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 宮下 英明					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
光合成反応は、地球生物圏の維持・恒常性に不可欠である。本講義では、地球生態系における光合成の重要性、光合成を行う生物の多様性、光合成の分子メカニズムとその多様性について論じる。											
<b>[到達目標]</b>											
地球生態系における光合成の重要性および光合成生物の多様性について理解する。また、光合成初期反応過程の分子メカニズムを理解することによって、生物のエネルギー生産の基礎となる水素イオンの濃度勾配（電気化学的ポテンシャル差）形成によるATP合成の仕組みを理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下の内容について講義する。											
1．光合成の誕生と地球生物圏の進化（2～3週）											
2．光合成をおこなう生物の多様性（4～5週）											
3．光合成の仕組み（4～5週）											
4．光合成と地球環境（1～2週）											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席率と期末試験による総合評価（ただし、期末試験をレポートに代えることがある）											
<b>[教科書]</b>											
プリントを配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
事前に配布した資料について予習・復習すること。 授業時間内に理解できなかった点等については、担当教員に質問するほか、図書館等で調べ理解すること。											
（その他（オフィスアワー等））											
問い合わせ等がある場合は、担当教員に電子メール等で問い合わせること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	分子細胞生物学特論 Molecular Cell Biology				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 生命科学研究科 教授 生命科学研究科 准教授 地球環境学舎 准教授 地球環境学舎 助教	宮下 英明 千坂 修 吉村 成弘 土屋 徹 神川 龍馬				
配当 学年	3,4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 通年	曜時限	月1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
分子生物学、細胞生物学の研究に必要な知識を身につける。											
<b>[到達目標]</b>											
分子細胞生物学の基礎知識を身につける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>本科目の授業は、リレー方式で実施する。各教員が5～6回の講義を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・光合成に関わる分子、光合成初期過程の分子メカニズム（宮下）</li> <li>・発生生物学分野の分子と細胞のカスケード反応（千坂）</li> <li>・染色体および核を構成するタンパク質の構造と機能（吉村）</li> <li>・光合成に関わる物質代謝と遺伝子工学（土屋）</li> <li>・生物進化、オルガネラ進化とその分子メカニズム（神川）</li> </ul> <p>開講スケジュール等については、初回講義（ガイダンス）の際に案内する。 開講曜時限については、担当教員と受講者との話し合いによって変更されることがある。</p>											
<b>[履修要件]</b>											
履修には全学共通科目（「生化学入門」およびバイオテクノロジー入門「先端生命科学を支える技術I, II）（もしくは同等の科目）を履修済みであることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポート試験と出席率による。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
配布資料ならびに講義中の指示にしたがって、予習・復習をおこなうこと。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	生物適応変異論I Variation and adaptation in animals I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 西川 完途					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
両生類を中心に動物界の構成員について、種および遺伝子レベルでの多様性（変異）の実態を紹介し、それが生じた要因（適応）を考察する。同時に、多様性の危機の実態と、保護・保全についても論じる。											
【到達目標】											
自然史、生物多様性、そして動物の環境適応について知識を深めて、進化的な観点から生物・自然について理解できるようになることを目指す。また、多様性保全の問題についての理解を深めて、近年、企業や社会で求められる環境リテラシーについても学ぶ。											
【授業計画と内容】											
以下のような授業スケジュールで講義する予定である。											
1 生命の起源と環境											
2 自然史とは											
3 生物の多様性											
4 種多様性 形態の多様性											
5 種多様性 生活史の多様性											
6 遺伝的多様性											
7 群集多様性											
8 多様性の消失 様々な原因											
9 多様性の消失 外来種問題											
10 多様性の消失 外来病原体問題											
11 多様性保全の実態 1											
12 多様性保全の実態 2											
13 社会と多様性											
14 自主テーマ作成											
15 自主テーマについての発表とまとめ											
【履修要件】											
特になし											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
出席点とレポート点。											
【教科書】											
使用しない											
----- 生物適応変異論I (2)へ続く -----											

## 生物適応変異論I (2)

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

前回の講義内容をふまえて、新しい回の講義を行うので、適時前回の復習を行うことが望ましい。特に、理解できなかった点や疑問については、自主的に図書館などの資料を活用し自ら勉強することが重要である。

### (その他(オフィスアワー等))

疑問点などは西川 (hynobius[a]zoo.zool.kyoto-u.ac.jp) までメールで連絡すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	課題演習：物質の構造と機能 Studies on Material Structure and Function		担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授	杉山 雅人						
	人間・環境学研究科 教授	田部 勢津久		人間・環境学研究科 教授	内本 喜晴						
				地球環境学舎 教授	梶井 克純						
				人間・環境学研究科 教授	吉田 寿雄						
				人間・環境学研究科 助教	上田 純平						
				地球環境学舎 助教	坂本 陽介						
				人間・環境学研究科 助教	山本 旭						
配当 学年	3,4回生	単位数	8	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月3,4,火3,4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語

**[授業の概要・目的]**

無機物質の構造、組成、性質、変化、機能に関する基礎的ならびに発展的実験を行う。このことによって、無機物質の化学に関する知識と実験技術を習得し、卒業研究を行う基礎を養う。

**[到達目標]**

無機物質の化学に関する知識ならびに実験技術を修得する。

**[授業計画と内容]**

実験の化学領域は大きく次の5つからなる。それらの各領域について、下記の実験テーマを1日～数日に渡って行う。

1. 分析化学・水圏化学
  - 秤量、測容器具の感度・精度・確度
  - 緩衝溶液の調製と緩衝能の測定、酸塩基滴定
  - 容量分析-塩化銀生成を利用する沈殿滴定
  - 重量分析-硫酸バリウム沈殿による硫酸イオンの定量
  - 原子吸光分析： アルカリ、アルカリ土類金属の定量
  - 吸光光度分析： リンモリブデン酸法によるリン酸の定量
  - イオンの吸着： 水酸化第二鉄沈殿へのリン酸イオンの吸着
  - 溶媒抽出法： オキシシン抽出による重金属イオンの濃縮分離
2. 電気化学
  - サイクリックボルタンメトリーによる評価
  - 対流ボルタンメトリーによる評価
  - 単極電位に関するNernst式の応用
  - 電気透析による電解質溶液の脱塩・濃縮
3. 物理化学・大気化学
  - 大気試料の調整
  - FTIRによる大気試料の同定と定量
  - 擬一次反応と2分子反応
  - 窒素酸化物とオゾンの反応
4. 材料化学
  - 溶融法によるガラスの作製
  - エルビウム含有ガラスの赤外可視変換蛍光測定
  - 励起準位電子占有率の温度依存性測定とBoltzmann定数の算出
  - 固体の紫外可視および赤外吸収スペクトル測定
  - ルビー単結晶の作成と蛍光スペクトル測定
  - 固相反応による希土類蛍光体結晶の作製
5. 触媒化学

----- 課題演習：物質の構造と機能(2)へ続く -----

課題演習：物質の構造と機能(2)

光触媒の合成と評価  
金属ナノ粒子の合成と評価

**【履修要件】**

全学共通科目として基礎物理化学 A・B、基礎有機化学 A・B、無機化学入門を、総合人間学部専門科目として物質分析論、物質機能論、物質構造論、物質反応論、物質変換論、物質構造機能論演習 A・B・C・D を修得している、あるいは併せて履修することが望ましい。

**【成績評価の方法・観点及び達成度】**

出席とレポートとによる。

**【教科書】**

それぞれの実験のために独自に作成した実験指針を配布する。

**【参考書等】**

(参考書)  
授業中に紹介する

**【授業外学習(予習・復習)等】**

自宅学習のために、それぞれの実験でのレポート作成と考察の課題を提示する。

**(その他(オフィスアワー等))**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

<b>授業科目名</b> <英訳>		<b>課題演習：分子の構造と機能</b> Studies on Synthesis, Reactions, and Structures of Organic Molecules				<b>担当者所属・職名・氏名</b>		人間・環境学研究科 教授 田村 類 人間・環境学研究科 教授 小松 直樹 人間・環境学研究科 教授 津江 広人 人間・環境学研究科 教授 藤田 健一 人間・環境学研究科 助教 高橋 弘樹			
<b>配当学年</b>	3,4回生	<b>単位数</b>	8	<b>開講年度・開講期</b>	2017・後期	<b>曜時限</b>	月3,4,火3,4	<b>授業形態</b>	演習	<b>使用言語</b>	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
有機化合物の合成・単離と構造決定、およびそれらの反応、機能、物性についての実験と演習を行うことにより、有機化学の実験手法を修得し、有機分子と分子集合体の性質に関する理解を深める。											
<b>[到達目標]</b>											
有機化学実験の基本的な実験手法を習得し、レポート作成を通じて課題に対して自主的に取り組む能力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
次の課題について実験と演習を行う。(1)縮合反応(Aldol縮合とKnoevenagel縮合)、(2)1-フェニルエチルアミンの光学分割(ジアステレオマー法)、(3)パン酵母からの、-トレハロース二水和物の単離、(4)液晶の合成と物性(アニシリデン-4-アミノフェノールアセテート)、(5)アルケンの合成(Zaitzev型およびHofmann型生成物)、(6)有機金属錯体の合成と吸収(サレン金属錯体)、(7)イリジウム錯体触媒の高い水素移動能を活用するアルコールの環境調和型酸化反応											
<b>[履修要件]</b>											
本課題演習の履修とともに、分子構造論(前期)、分子反応論(後期)、分子構造機能論演習A,B(前・後期)を履修することが、有機化学の理解を深める上で望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席、実験態度、レポート点で総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
全回分のプリントを配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 希望があれば紹介する。											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
予習として、事前に実験テキストを熟読し、実験の流れについてのフローチャートを作成し、実験操作のイメージトレーニングを十分しておくこと。 実験終了後、その日のうちにレポートの草稿を作成し、その後推敲を重ねてから提出すること。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	課題演習：生物学 Studies of Biology	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授	加藤 真
			人間・環境学研究科 教授	瀬戸口 浩彰
			地球環境学舎 教授	宮下 英明
			人間・環境学研究科 教授	市岡 孝朗
			生命科学研究科 教授	千坂 修
			生命科学研究科 准教授	吉村 成弘
			地球環境学舎 准教授	土屋 徹
			人間・環境学研究科 准教授	西川 完途
			人間・環境学研究科 助教	幡野 恭子
			地球環境学舎 助教	神川 龍馬
			人間・環境学研究科 助教	阪口 翔太

配当 学年	3,4回生	単位数	8	開講年度・ 開講期	2017・ 通年	曜時限	金3,4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	------	----------	----	----------	-----

#### 【授業の概要・目的】

ミクロからマクロまで、生物学のさまざまな分野の研究の基本的な手法と考え方を、室内実験と野外実習を通して学ぶことを目的とする。室内実験では顕微鏡や分光光度計、電気泳動装置、シーケンサーなどの使用方法をも学ぶ。野外実習では、フィールド調査における心構えや自然との接し方、危険の回避方法、自然や生物のナチュラルヒストリーの基本などをも学ぶ。

#### 【到達目標】

室内実験や野外観察・実験を通して、生物学研究の基本的な手法や考え方を習得する。

詳細な演習・実習スケジュールについては、4月の第1週までに、生物実習室1（吉田南2号館3階312室）前の掲示板に掲示する。

#### 【授業計画と内容】

以下のようなテーマの演習・実習・実験を行なう。

1. 動物の解剖による、動物の形態と系統関係の学習
2. 里山環境における両生・爬虫類の生態観察
3. 植物標本の作成と、分類学・形態学への入門
4. 植物や動物の分子系統解析
5. 潜葉虫の生存曲線と生命表の作成
6. 森林における真菌類の役割の学習
7. 水生昆虫の分類と、群集構造や住み分けの観察
8. 藻類や微生物の観察と検出
9. 光合成色素代謝経路の改変による、代謝工学の学習
10. 細胞と細胞内小器官の観察

#### 【履修要件】

特になし

課題演習：生物学(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

出席と、セミナーでの発表（文献紹介など）

[教科書]

使用しない

[参考書等]

（参考書）

興味のある生物群の図鑑の購入を薦める。『フィールド版 日本の野生植物 草本』、『フィールド版 日本の野生植物 木本』、『両生類・はちゅう類 (小学館の図鑑NEO)』、『水の生物 (小学館の図鑑NEO)』

[授業外学習（予習・復習）等]

演習・実習中の指示に従い予習・復習をおこなうこと

（その他（オフィスアワー等））

フィールドに出かけることがしばしばあり、集合場所や装備などを指示する掲示に注意してほしい。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	自然科学特別ゼミナールA Seminars on Natural Sciences A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 阪上 雅昭					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
卒業研究のためのゼミである。 履修登録は集中講義としているが詳細は担当教員と相談すること。											
<b>[到達目標]</b>											
担当の指導教員に問い合わせること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
担当の指導教員と相談すること。											
<b>[履修要件]</b>											
担当の指導教員の指示に従うこと。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
担当の指導教員に問い合わせること。											
<b>[教科書]</b>											
担当の指導教員の指示に従うこと。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 担当の指導教員の指示に従うこと。											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
担当の指導教員の指示に従うこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
担当の指導教員に問い合わせること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	自然科学特別ゼミナールB Seminars on Natural Sciences B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 阪上 雅昭					
配当 学年	4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
卒業研究のためのゼミである。 履修登録は集中講義としているが詳細は担当教員と相談すること。											
<b>[到達目標]</b>											
担当の指導教員に問い合わせること。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
担当の指導教員と相談すること。											
<b>[履修要件]</b>											
担当の指導教員の指示に従うこと。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
担当の指導教員に問い合わせること。											
<b>[教科書]</b>											
担当の指導教員の指示に従うこと。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 担当の指導教員の指示に従うこと。											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
担当の指導教員の指示に従うこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
担当の指導教員に問い合わせること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	物理学演習 A Studies of Physics A : recitation				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 森成 隆夫 基礎物理学研究所 助教 渡辺 優					
配当 学年	2-4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金3,4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
力学問題の方程式の導出と解法を身につけること。											
<b>[到達目標]</b>											
物理学の基礎科目の1つである力学の問題演習を通して、物理学の問題を解く基礎的力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
物理学の中で最も早くその理論体系が完成した力学について演習を行う。力学における法則（ニュートンの法則）を理解し、問題に応じて運動方程式を導出、導いた方程式を解くことを目標にする。粒子系を扱う質点系の力学、剛体を扱う剛体の力学、および、量子力学・統計力学に必要となる解析力学から出題する予定である。											
<b>[履修要件]</b>											
物理学演習 A、力学統論、解析力学を履修しておくこと。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
毎回の演習問題に対するレポートの結果を基に採点し、成績をつける。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 随時紹介する。											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
講義中に出題する演習問題を解くこと。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	物理学演習 B Studies of Physics B : recitation				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 木下 俊哉 基礎物理学研究所 助教 渡辺 優					
配当 学年	3,4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金3,4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
電磁気学の方程式の導出と解法を身につけること。											
<b>[到達目標]</b>											
電磁気学は法則やそれを表わすのに必要となる方程式や数式がとても多い科目の一つである。実際の問題にそれらをどのように使えばよいのか、いかに応用していけばよいのかを本演習を通して習得する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
電磁現象は重力と並んで時空の基本的な性質の現れである。また、20世紀におけるエレクトロニクスの発展の基盤となった。その電磁気学の基本的な問題を出題する。具体的には、静電場、静磁場、定常電流、電流と磁場、電磁誘導、Maxwell方程式などである。その他、電磁場、物性論と関連した問題についても出題するかもしれない。											
<b>[履修要件]</b>											
物理学基礎論 B、電磁気学続論を履修してくることを前提にする。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
毎回の演習問題に対するレポートの結果を基に採点し、成績をつける。											
<b>[教科書]</b>											
適宜、資料を配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
演習問題は初回講義時に与えるので、各自で取り組み予習しておくこと。											
(その他(オフィスアワー等))											
質問、希望等があれば、yuwata@yukawa.kyoto-u.ac.jp あるいは kinoshita.toshiya.6x@kyoto-u.ac.jp にメールすること。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	物理数学演習 Mathematics for Physics : recitation				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 木下 俊哉 非常勤講師 後藤 慎平					
配当 学年	3,4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3,4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
物理学に必要な数学のうち、基本的なものを身につけ、使えるようになること。											
<b>[到達目標]</b>											
ベクトル解析、微分方程式、複素関数の基礎を身につける。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
自然現象を理論的に解析するには数式を用いて表現することが求められる。数式を用いることで自然現象を抽象化し、その中に普遍的な構造を見出し、理論として一般化・体系化がなされていく。そのような物理学の理論形成に最小限必要な数学を身につけることを目標とする。具体的には、(1)ベクトル解析、(2)微積分、(3)微分方程式(j常微分方程式・偏微分方程式)、(4)フーリエ解析、(5)複素関数論などである。これらの中から適宜問題を選んで、演習を進めることにする。											
<b>[履修要件]</b>											
演習問題の内容に対応した数学の講義を履修していることを前提とする。内容については授業計画と内容を参照のこと。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
毎回の演習問題に対するレポートの結果を基に採点し、成績をつける。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 随時紹介する。											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
指示された演習問題を解いてくる。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
質問等は、kinoshita.toshiya.6x@kyoto-u.ac.jp											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	課題演習：地球科学 Studies of earth science				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 国際高等教育院 教授 人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 助教	鎌田 浩毅 酒井 敏 石川 尚人 小木曾 哲 加藤 護				
配当 学年	3,4回生	単位数	8	開講年度・ 開講期	2017・ 通年	曜時限	水3,4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
地球科学に関する基礎的実験を行なう。実験を通して、関連のある基礎的な知識 / 手法等の習得を目指す。											
<b>【到達目標】</b>											
地学現象や地球科学に関連する事項を理解して行くためのアプローチや基礎的知識を養う。卒業研究での研究テーマの設定やその準備段階として位置づけて、関連する知識や素養を身につける。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
各学期、または通年を通して、一つの実験テーマに取り組む。 実験内容は、学期始めに受講者の興味などに応じて、相談の上決定する。 各学期の最終日に、半期の実験成果について報告会を行う。											
<b>【履修要件】</b>											
演習なので、出席し、各自の課題に取り組むこと。開始時間に遅れないこと。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
半期毎に行なう実験成果の報告会の発表内容で評価する。											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>【授業外学習(予習・復習)等】</b>											
実験の進行状況に応じて、演習時間外での自主学習が必要となる。適宜指示する。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
地球科学に興味があれば、学部科目「地球科学演習」や、全学共通教育科目「地球科学実験」「探究型地球科学課題演習」も履修することを強く推奨します。  上記の通り、実験内容は相談の上決定します。そのため、前期/後期の第一回目の演習時には、受講者各自に実験テーマについての希望を聞きますので、考えておいてください。実験テーマに関しては、事前に相談してもらうほうがスムーズに演習に進めますので、相談したい方は地球科学分野スタッフに問い合わせてください。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	課題演習：(物理科学)レーザー物理学 Studies on Laser Physics	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 木下 俊哉
---------------	--	-----------------	---------------------

配当 学年	3,4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月3,4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	------	----------	----	----------	-----

#### [授業の概要・目的]

レーザーによる原子の冷却実験では、電磁気学、光学、量子力学の知識をもとに開発された、光に関する様々な技術が使われています。本演習では、まず輪読形式のゼミナールでレーザーや光学、原子と光との相互作用に関する基礎的な理論を文献によって理解した後、半導体レーザーの光源を製作します。これを飽和吸収分光に応用して原子のスペクトルを観測、レーザーの発振周波数の制御に利用します。レーザーと光学系の組み上げ、自動制御のための電子回路の製作を通して、冷却原子の実験に必要な技術の初歩を習得するだけでなく、基礎的な物理学がいかにサイエンスの研究現場に応用されているのかを体感してもらうことを目標とします。

#### [到達目標]

レーザー光の原理や原子の分光の理解を通して、電磁気学や量子力学の基礎を学び、さらに実験で必要となる電子回路の製作を通して、回路の基本を習得することを目指す。

#### [授業計画と内容]

以下のように進める予定である(進行具合により、変更あり)。

第1週： イントロダクション(演習全体の構成)

第2～4週： レーザーの基礎

第5～6週： 光と原子の相互作用

第7～10週： 外部共振器型半導体レーザーシステムの製作

第11～13週： レーザー制御用電子回路の製作

第14週： 飽和吸収分光による原子スペクトルの観測

第15週： フィードバックによるレーザーの周波数安定化

#### [履修要件]

物理学基礎論A, B, 電磁気学特論のほか、できれば量子力学を履修または受講していることが望ましい。

#### [成績評価の方法・観点及び達成度]

授業への取り組み方を総合的に評価します。学んだことを忘れないためにも、レポートの作成(例えば全員で一つ)などを計画しています。

#### [教科書]

必要な文献(和文・英文等)はこちらで用意します。

課題演習：（物理科学）レーザー物理学(2)

**[参考書等]**

（参考書）  
必要に応じて随時、紹介する。

**[授業外学習（予習・復習）等]**

初回講義で、ゼミで使うテキストを配布するので予習しておくこと。

**（その他（オフィスアワー等））**

連絡先：吉田南3号館2階F203号室 TEL: 075-753-6778

Email : kinoshita.toshiya.6x@kyoto-u.ac.jp

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	課題演習：（物理科学）物理の基礎A Basics of Physics A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 阪上 雅昭					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>いわゆる物理学に限らず，地球科学や他の自然科学また社会科学においても物理的な概念や手法が役立つことが多い．そこで，本課題演習では，これらの応用も念頭に置き，物理学の基本的概念の理解と数理的手法の習得をその目的とする．</p>											
<b>[到達目標]</b>											
<p>興味ある問題を自分で見つけ，具体的にモデル化を行い，数理的手法やパソコンでのシミュレーション・数式処理による解析することができる能力を身につける．さらに得られた結果について科学的な考察からその妥当性を判断できるようにする．</p>											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<p>物理の基礎Aでは，力学，熱力学，振動波動を主たる分野とする予定である．これらの分野について，基本的な概念やそこで必要となる数理的手法を簡単に解説した後，具体的な課題を解くことにより，実際に使いこなせるようになることをめざす．課題としてはパソコンによるシミュレーション，数式処理，統計処理等を行う．必要であれば簡単も実験おこなうこともある．</p> <p>具体的な内容としては，</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 運動方程式</li> <li>(2) 惑星の運動</li> <li>(3) 振動：減衰振動・強制振動・連成振動</li> <li>(4) カタストロフィー</li> <li>(5) カオス</li> <li>(6) 変分原理と最適化</li> <li>(7) ラグランジュ方程式</li> </ul> <p>などを予定しているが，受講者の興味・事前の知識や理解度に応じて内容を大幅に変更する可能性がある．</p>											
<b>[履修要件]</b>											
<p>物理学基礎論A，物理学基礎論B，熱力学，振動波動，力学統論の中の幾つかを履修していることが望ましい．当然であるが，できるだけ多く履修していることを期待する．</p>											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
<p>出席と授業中に課す課題やレポートにより評価する．</p>											
<b>[教科書]</b>											
<p>使用しない</p>											
<p>----- 課題演習：（物理科学）物理の基礎A(2)へ続く -----</p>											

課題演習：（物理科学）物理の基礎A(2)

**[参考書等]**

（参考書）

<http://ganesha.phys.h.kyoto-u.ac.jp/~sakagami/Basic-of-Phys.html>

**[授業外学習（予習・復習）等]**

与えられた課題を行う。

**（その他（オフィスアワー等））**

必須ではないがノートパソコンを持っていることが望ましい。

問い合わせ先： [sakagami.masaaki.6x@kyoto-u.ac.jp](mailto:sakagami.masaaki.6x@kyoto-u.ac.jp)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	課題演習：（物理科学）物理の基礎B Basics of Physics B	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 阪上 雅昭
---------------	--	-----------------	--------------------

配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### 【授業の概要・目的】

いわゆる物理学に限らず，地球科学や他の自然科学また社会科学においても物理的な概念や手法が役立つことが多い．そこで，本課題演習では物理の基礎Aに引き続き，これらの応用も念頭に置き物理学の基本的概念の理解と数理的手法の習得をその目的とする．

#### 【到達目標】

興味ある問題を自分で見つけ，具体的にモデル化を行い，数理的手法やパソコンでのシミュレーション・数式処理による解析することができる能力を身につける．さらに得られた結果について科学的な考察からその妥当性を判断できるようにする．

#### 【授業計画と内容】

物理の基礎Bでは，物理の基礎Aでやり残した分野と，フーリエ変換と時系列解析，統計力学，統計学，複雑系科学などを対象とする．これらの分野について，基本的な概念やそこで必要となる数理的手法を簡単に解説した後，具体的な課題を解くことにより，実際に使いこなせるようになることをめざす．物理の基礎Bでは，可能であれば，気象や地震等の地球科学や経済学に代表される社会科学，さらに生物集団への物理的手法の応用についても触れる．課題としてはパソコンによるシミュレーション，数式処理，統計処理等を行う．必要であれば簡単も実験おこなう予定である．

具体的な内容としては，

- (1) フーリエ解析
- (2) カオス
- (3) 音のスペクトルと情報処理
- (4) 時系列解析
- (5) 統計とデータ処理
- (6) 動的最適化と経済学
- (7) 群れのダイナミクスの解析

などを予定しているが，受講者の興味・事前の知識や理解度に応じて内容を大幅に変更する可能性がある．

#### 【履修要件】

物理の基礎Aを履修していること強く希望する．物理学基礎論A，物理学基礎論B，熱力学，振動波動，力学統論に代表される物理の基礎科目の幾つかを履修していることが望ましい．当然であるが，できるだけ多く履修していることを期待する．

#### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

出席と授業中に課す課題やレポートにより評価する．

課題演習：（物理科学）物理の基礎B(2)

**[教科書]**

使用しない

**[参考書等]**

（参考書）

<http://ganesha.phys.h.kyoto-u.ac.jp/~sakagami/Basic-of-Phys.html>

**[授業外学習（予習・復習）等]**

与えられた課題を行う。

**（その他（オフィスアワー等））**

必須ではないがノートパソコンを持っていることが望ましい。

問い合わせ先： sakagami.masaaki.6x@kyoto-u.ac.jp

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：日本列島弧の自然と生物多様性 Introductory Seminar: Nature and biodiversity of the Japanese Island Arc	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 加藤 真
---------------	---	-----------------	-------------------

配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	---------------	-----	------	----------	-------	----------	-----

### [授業の概要・目的]

生物学の最新の知見を得たとして、私たちはどれほど、日本の自然を理解したと言えるだろうか？生物多様性とはどのようなもので、守るべき自然とはどのようなものであるか？この授業では、日本列島弧の自然を概説したのち、日本の陸上生態系で最も生物多様性の高い場所の一つである信州の高原において、実際にフィールド調査を通して、自然や生物多様性を見る視点を涵養することをめざす。

具体的には、京都大学での簡単な講義のあと、8月に、木曾にある京都大学木曾生物学研究所において、4泊5日の予定で、フィールド調査を主体にした演習を行なう。実験所からほど近い場所に開田高原があり、そこにはきわめて豊かな植生と、清冽な溪流、そして多様な生物群集が存在する。開田高原において、植物・菌類の分類、花と昆虫の共生関係、植物と菌根菌の共生関係、森林の群集構造と動態、溪流の水生昆虫群集、魚やサンショウウオの生態などの調査を通じて、冒頭の問いに対する答えを見いだす。

### [到達目標]

植物・動物・菌類の分類学・生態学をフィールド実習・調査を通じて紹介することと、ナチュラリストを育てることを目指している。植物や菌類・昆虫などの分類の手ほどきをした上で、それらの生物同士の相互作用や共生関係を観察し、自然が多様な生物の相互関係のネットワークで織り込まれていることを理解する。在来種と帰化種の区別や、自然林と人工林の区別ができるようになれば、自然を保護するための方策についても、提案できるにちがいない。また、フィールド調査における基本的な手法や危険回避の知恵なども習得する。

### [授業計画と内容]

履修者が決定しだい、日程調整を行なったのち、5月にイントロダクションを、8月に木曾でのフィールド実習・調査を行なう。イントロダクションでは、海も含めた、日本列島の生物多様性の特徴とその現状について紹介を行なう。

8月に4泊5日で、京都大学木曾生物学研究所において集中フィールド実習・調査を行なう。研究所周辺と開田高原でまず最初に下記のようなテーマの実習を行なう。

1. 植物の採集方法、さく葉標本の作製方法、同定方法、生態観察方法
2. 昆虫の採集方法、標本作製方法、同定方法、生態観察方法
3. 菌類の採集方法、標本作製方法、同定方法、生態観察方法
4. 潜葉虫の生存曲線の作成
5. 花と送粉者の共生に関する調査方法
6. 水生生物の群集調査方法とその解析方法
7. 植生調査の方法

上記の実習を経て、各自がそれぞれのテーマで自由研究を実施する。研究テーマについては、前もって計画を発表し、意見を交換した上で、調査に入る。最終日の報告会で、その成果を発表し合う。

基礎演習：日本列島弧の自然と生物多様性(2)

**【履修要件】**

特になし

**【成績評価の方法・観点及び達成度】**

実習へのとりくみ姿勢と、自由研究の結果発表で評価する。

**【教科書】**

使用しない

**【参考書等】**

(参考書)

佐竹義輔ほか『フィールド版 日本の野生植物 木本』(平凡社) ISBN:4582535135 (樹木の同定に役立つ図鑑の決定版)

佐竹義輔ほか『フィールド版 日本の野生植物 草本』(平凡社) ISBN:4582535119 (草本の同定に役立つ図鑑の決定版)

加藤真『生命は細部に宿りたまう ミクロハビタットの小宇宙』(岩波書店) ISBN:400006276X

**【授業外学習(予習・復習)等】**

常日頃からさまざまな自然に触れて、自然を見る目を養うことを強く薦めたい。陸上生態系の理解には、植物の分類に関する基本知識が必須であり、植物標本を作り、植物の同定能力をつけておくことが期待される。

**(その他(オフィスアワー等))**

実習を伴うため、学生教育研究災害傷害保険等の傷害保険への加入が必要です。木曾への交通費と、木曾生物学研究所での宿泊費(食事付き4泊5日で約1万円)は各自に負担していただきます。オフィスアワーは特にもうけていませんが、研究室(南2号館311)に来ていただければ、できるかぎりいつでも対応します。植物や昆虫の標本を作成して、同定できないものがあれば、研究室に持参していただければ、同定します。

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがある。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：植物野外実習（高山植物の観察） Introductory Seminar: Experimental Practice in Field Botany	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 瀬戸口 浩彰 人間・環境学研究科 助教 阪口 翔太
---------------	---	-----------------	---

配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	---------------	-----	------	----------	-------	----------	-----

### 【授業の概要・目的】

自然界には多種多様な植物種があります。しかし皆さんが教室で受ける座学の生物学では、シロイヌナズナのようなモデル植物における知見が植物学の全てであるように勘違いを起こしてしまうリスクがあります。この授業のテーマは、野生植物を介して「生物多様性」を知る機会を持つことです。多様性の生物学を学ぶことは、将来に様々な環境問題に向き合うことになる皆さんにとって、必ず役に立つ素養であると思います。そして自分の眼で観察をして、自分の頭で考えることです。

この授業では、4月から8月にかけて2回の日帰り実習と座学を行った上で、8月上旬の3日間を使って、木曽駒ヶ岳の植物を観察します。野外において日本の野生植物の「分類」と「形態」、「環境への適応」について学びます。

### 【到達目標】

植物の分類、形態、環境への適応、植生を構成する植物種の多様性を理解する。野外における自然の観察：いわゆる「フィールドワーク」の手法を習得する。例えば、山における地形（稜線、雪渓、ハイマツ帯、石が露出した森林限界の上、風衝地）では、生育する植物種の組成が異なり、また、植物の形も異なります。このような事項を自分の眼で観察して考察できるようにして欲しいと願っています。

### 【授業計画と内容】

1. 4月1日に、吉田南2号館3階にある生物実習室1の掲示板に、履修希望登録用の掲示を出しますので、希望者は4月10日までに記入をして下さい。希望者多数の場合には抽選で履修者を決めます。
2. 履修確定後の4月から8月にかけての土曜日に、合計2回の日帰りの野外観察と座学を行います。
3. 8月上旬 フィードバック期間終了直後に3日間の自然観察を木曽駒ヶ岳で行います。
4. レポートをお盆前に提出します（電子メールでファイル添付の様式で提出）。

### 【履修要件】

学生教育研究災害傷害保険等の傷害保険に加入をしていることが必要です。入学時に大学から配られた案内、あるいは学生部の窓口で照会して、必ず加入して下さい。

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

出席を50%、レポートの点数50%で評価する。

基礎演習：植物野外実習（高山植物の観察）(2)

**[教科書]**

授業中に指示する

**[参考書等]**

（参考書）

授業中に紹介します。

木曾駒ヶ岳では、次の図鑑を携行することを勧めます：

山溪ハンディー図鑑8「高山に咲く花」清水建美（解説）山と溪谷社 4200円

ISBN978-4-635-07030-0

**[授業外学習（予習・復習）等]**

多くの履修者にとって、野外の植物を観察するという経験が初めてだと思われるので、授業を進めながら指示をします。

また、自学自習の機会として、京都府立植物園や京都市緑化協会などが一般向けに主宰する観察会や企画展に参加してレポートを提出して貰います。レポートをまとめるにあたっては、教員やTAがサポートして、レポートの書き方などについて指導します。

**（その他（オフィスアワー等））**

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがある。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：環境微生物概論 Introductory Seminar: Introduction to Environmental Microbiology				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 宮下 英明					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
微生物は我々の生活に深く関わりをもつうえ、地球上の物質循環、環境維持に不可欠である。本講義では、微生物の研究史、構造、種類等の基礎的性状について修得するとともに、細菌を中心に多様性、生理・生態、特性等について概説する。											
<b>【到達目標】</b>											
細菌に関する基本的事項を理解する。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>「微生物ってなに？」（日本微生物生態学会教育研究部会編著、日科技連 2006）の輪読を行う。ガイダンス時に担当を決め、担当学生は資料の作成し、他の学生に対して説明を行う。説明に際して、パワーポイント等の資料提示をしても良い。担当教員は、補足を行う。必要に応じて、微生物の観察等を加える。</p> <p>概ね以下の予定でゼミを進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) ガイダンス (1回) ゼミの進め方と分担の決定</li> <li>2) 地球の生い立ちと生命の歴史 - 惑星に生物圏が生まれる (2回)</li> <li>3) 微生物学の歴史 (2回)</li> <li>4) 微生物の種類 (2回)</li> <li>5) 地球環境の微生物たち (2回)</li> <li>6) 役に立つ微生物たち (2回)</li> <li>7) バイオ研究の課題 - 生態系への影響と世界の対応 (2回)</li> <li>8) 総合討論 (1回)</li> <li>9) フィードバック (1回)</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
特になし											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席点、プレゼンテーション点、受講態度を総合評価する。											
<b>【教科書】</b>											
日本微生物生態学会教育研究部会編著 『微生物ってなに？』（日科技連）ISBN:4-8171-9067-1（初回のゼミにおいて紹介する（事前購入の必要は無い））											
<b>【参考書等】</b>											
<p>（参考書）</p> <p>日本微生物生態学会教育研究部会編著 『微生物生態学入門』（日科技連）ISBN:4-8171-9067-1</p> <p>M. T. Madiganら 『Brock Biology of Microorganisms』（Pearson Education (US)）</p> <p>その他の参考資料等についてはゼミの際に随時紹介する。</p>											
----- 基礎演習：環境微生物概論(2)へ続く -----											

基礎演習：環境微生物概論(2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

担当するところや与えられた課題について図書館等を利用して予習し、資料を作成する。他の学生は資料に基づいて復習をすること。

**（その他（オフィスアワー等））**

履修希望者が多い場合は人数制限をすることがあるので、第1回目の授業に必ず出席すること。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	基礎演習：分子細胞生物学入門（英語講義） Introductory Seminar: Introduction to Molecular Cell Biology				担当者所属・ 職名・氏名	生命科学研究所 教授 千坂 修					
配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月5	授業 形態	ゼミナール	使用 言語	英語（日本語補助）
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>生命科学関係の科目の中で、数少ない英語講義の一つです。 分子細胞生物学の入門編で、多くの専門用語の意味、使い方を学びます。日本人の受講生には適宜日本語での解説も行います。</p> <p>This is a course taught in English.</p> <p>Basic concepts in molecular genetics and cell biology are overviewed using the information obtained from the recent studies in model organisms. The specificities and generalities in the “ Life ” will be emphasized.</p>											
<b>【到達目標】</b>											
<p>Knowledge on basic concepts of biochemistry, molecular biology, and cell biology will be acquired.</p> <p>基礎的な生化学、分子生物学、細胞生物学の知識が得られる。</p>											
<b>【授業計画と内容】</b>											
<p>以下の様な課題について、1課題あたり1～2週の授業を行う予定である。</p> <p>Major topics include:</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. History of modern biology</li> <li>2. Techniques used in biology</li> <li>3. Basic biochemistry</li> <li>4. Fusion of cell biology and molecular biology</li> <li>5. Developmental Biology</li> <li>6. Bioengineering</li> <li>7. Bioinformatics</li> <li>8. Applied bioscience</li> <li>9. Molecular Evolution</li> </ol>											
<b>【履修要件】</b>											
<p>Decent ability of English conversation is the prerequisite.</p> <p>High school level chemistry but not biology is required.</p>											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
Class participation (80%) and report (20%).											
<b>【教科書】</b>											
<p>使用しない Handouts for the class will be provided.</p>											
----- 基礎演習：分子細胞生物学入門（英語講義）(2)へ続く -----											

基礎演習：分子細胞生物学入門（英語講義）(2)

---

**[参考書等]**

（参考書）  
授業中に紹介する

**[授業外学習（予習・復習）等]**

High school level chemistry reviewing is required.

**（その他（オフィスアワー等））**

Anyone who is interested in learning modern molecular and cell biology is welcome to attend.  
When the registered students number surpass 25, selection will be applied. Please attend the first class.

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	生物適応変異論II Adaptive Relations Amongst Plants II	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 瀬戸口 浩彰
---------------	---	-----------------	---------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

### [授業の概要・目的]

植物は、いったん発芽した場所から動くことが出来ない生き物です。快適な生活場所を求めて移動が出来る動物とは大きな違いがあります。つまり、植物は生育環境に「適応」して「変わる＝進化する」ことが、生き残るために必要な生き物なのです。

この講義では、光・気温・標高・水・土壌・栄養などの環境に対して、植物がどのように「生き残り戦略をたてているか」を学習します。そして、これに対する対話を通して、サイエンスの考え方を涵養することを目的とします。

さらにもうひとつ：植物は地域ごとに適応進化しています。だから、たとえ同一の種でも地域ごとに維持することが生物多様性を守るうえで大切です。この講義では「総人」だからこそ取り組んできた「環境を守るサイエンスと社会での実践」についても扱い、皆さんに考えてもらいます。

### [到達目標]

以下の4項目に関する事項を理解し、自分の考えを涵養する

- 植物の種内の進化，
- 進化をもたらす様々な遺伝子の変異，
- 系統地理\*，
- 環境への適応という側面から見た絶滅危惧植物の保全。

\*系統地理学とは、地球上の様々な場所に生息する生物種が、どのような歴史的経緯を辿って、現在のような地理的分布を得てきたのか、現在の生息環境に見られるように至ったのかについて、主にDNAデータの解析から明らかにしていく学問領域のこと。

### [授業計画と内容]

1. 植物は、体中に「眼」を持って光をセンシングしている－1  
(植物が花を咲かせるタイミングを測るしくみと適応)
2. 植物は、体中に「眼」を持って光をセンシングしている－2  
(農業との関わり：幕末に来た黒船＝ペリー艦隊はダイズを集めていた)
3. 植物は、体中に「眼」を持って光をセンシングしている－3  
(1種の植物でも、日本列島の中では地域分化が進んでいる)
4. 湿潤なモンスーン気候ゆえに起こる、日本の川岸での適応進化－1  
(種の間を千切る力＝自然選択)
5. 湿潤なモンスーン気候ゆえに起こる、日本の川岸での適応進化－2  
(自然選択がもたらす短期間の進化)
6. 日本列島の植生はどのようにしてできたか？－1  
(落葉広葉樹の系統地理学)
7. 日本列島の植生はどのようにしてできたか？－2  
(高山植物の系統地理学)
8. 日本列島の植生はどのようにしてできたか？－3  
(琉球の系統地理学：世界最大級の「陸橋」が形作った進化)
9. 植物を守る！－1  
(琵琶湖に閉じ込められた海浜植物の保護の実践)

----- 生物適応変異論II (2)へ続く -----

## 生物適応変異論II (2)

10. 植物を守る！ - 2  
(高い値段がつく山野草を守る取り組み)

### 【履修要件】

特になし

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

出席とレポート

### 【教科書】

使用しない

### 【参考書等】

(参考書)

葛西奈津子『進化し続ける植物たち』(化学同人) ISBN:978-4-7598-1184-1 (日本植物生理学会(監修)の「植物丸かじり叢書」の第4巻です。他にも多数の同シリーズがあります。)

植田邦彦(編集)『植物地理の自然史』(北海道大学出版会) ISBN:978-4-8329-8205-5

### 【授業外学習(予習・復習)等】

項目ごとに予習あるいは復習用のプリントを渡しますので、その際の指示に従って予習・あるいは復習をしてください。

### (その他(オフィスアワー等))

毎年、少人数で開講しています。対話を進めながら「濃い」授業を心がけます。

オフィスアワーは特に指定しません：理科系の教員なので、毎日朝8時～18時の間は吉田南3号館3F、F302の研究室に居ます。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	分野を横断する自然科学 Natural Science Beyond Disciplinary		担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 森成 隆夫
				地球環境学舎 教授 梶井 克純
				人間・環境学研究科 教授 市岡 孝朗
				国際高等教育院 教授 酒井 敏

配当 学年	1,2回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

**[授業の概要・目的]**

自然科学の入門科目である「分野を横断する自然科学」では、分野を異にする複数の担当教員が相互に連携し、つながりのあるテーマでリレー講義を行う。自然科学は細切れの知識の集約ではなく高校理科の4区分を超えたものであり、先端研究が分野を広くまたがる学問であることを認識し、自然を支配する科学の普遍性を学び取ることを目標とする。

**[到達目標]**

自然界の森羅万象に興味をもち、それらを統合的に理解していくことの重要性を学ぶ。さらに、現在進められている最先端の研究内容に関する知識を得る。

**[授業計画と内容]**

今年度は「物質」という挑戦的なテーマに、化学（梶井）、物理（森成）、生物（市岡）、地学（酒井）の各分野の教員が、それぞれの切り口からリレー形式で講義を行う。以下にその概要を示す。

1. イントロダクション（梶井）【1週】

リレー講義全体の流れを概説する。

2. 大気環境を支配する物資（梶井）【3週】

人間活動の結果引き起こる大気環境問題（オゾン層破壊、地球温暖化、オキシダント問題）について物質の視点から講義する。

3. 物質が示す多彩な物理現象（森成）【3週】

物質の電気抵抗や光学的性質など基本的な物理現象について説明し、超伝導、超流動、量子ホール効果など量子力学的な効果が重要となる現象について講義する。量子流体を用いてブラックホールの物理を検証する研究についても述べる。

4. 生物の進化と多様化（市岡）【3週】

生命が誕生したのち、生物はさまざまな環境で、多様な形態や機能、生態を進化させ多様化していった。地球上に見られる多様な生物を概観したのち、生物同士がどのように関わりあいながら、進化と多様化を遂げていったのかについて、生物の系統と多様化の歴史、生物の上陸と動物における植物食の進化、森林生態系における4つの共生系、の観点から講義する。

5. 水が変えた地球環境（酒井）【3週】

水は我々にとってありふれた存在でありながら、極めて特異な性質を持つ物質である。地球は、この水を液体の状態で保つことができたことで、そこに生物が生まれ、火星や金星と大きく異なる進化を遂げ、実に多様な環境と生態系を維持している。この地球進化の歴史を振り返るとともに、現在の環境と生物の多様性の意味について考える。

## 分野を横断する自然科学(2)

### 【履修要件】

理系文系を問わず、新入生を主な対象とするが、2回生以上の履修も歓迎する。高校時代における理系科目の履修の程度が影響しないように内容を工夫する予定である。

### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

授業への出席率と各教員が与えるレポート課題によって総合的に評価する。

### 【教科書】

使用しない

### 【参考書等】

(参考書)

### 【授業外学習(予習・復習)等】

予習課題は特に定めないが、普段から自然科学にまつわる諸問題、話題に興味を持ってほしい。また、講義後のレポート課題に積極的に取り組み、復習に努めてほしい。

### (その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	量子力学I Quantum Mechanics I				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 木下 俊哉					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
ミクロの世界の物理法則である量子力学の入門的な講義を行う。粒子性と波動性、シュレディンガー方程式と波動関数、物理量と期待値など、量子力学の基礎的な部分の習得を目指す。											
[到達目標]											
1次元系のポテンシャルを中心したシュレディンガー方程式を実際に解きながら、古典力学とは異なる、量子力学特有の様々な概念、考え方、数式に慣れることを第1目標とする。さらに、量子力学の骨格部分にあたる重要な原理についても理解する。											
[授業計画と内容]											
以下の項目に従って授業を行う予定である。											
§ 1 前期量子論、粒子性と波動性 (3週) § 2 解析力学の簡単な復習 (2週) § 3 シュレディンガー方程式と波動関数 (2週) § 4 1次元系の量子力学、束縛状態とトンネリング (3週) § 5 期待値としての物理量、不確定性関係 (2週) § 6 量子力学の一般原理、表示と変換、完全性 (2～3週)											
[履修要件]											
物理学基礎論A, B程度の基礎知識は必須。振動・波動論、力学統論は必須ではないが、強く履修を薦める。解析力学は並行して履修してよい。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
レポートと定期試験により評価する。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習(予習・復習)等]											
初回講義で「解析力学」と「量子力学」それぞれに対して、入門用テキストと本格的な教科書、および演習書などをいくつか紹介する。講義とあわせて自分でも学習することを強く勧める。											
(その他(オフィスアワー等))											
質問等は、下記のメールアドレスまで kinoshita.toshiya.6x@kyoto-u.ac.jp											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	量子力学II Elements of Psychoanalysis II				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 藤原 直樹					
配当 学年	3,4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
量子力学IIは、中級の量子力学を取り扱う。シュレディンガー方程式の導出(量子力学I)に続く、量子力学の基礎諸項目について解説する。											
<b>[到達目標]</b>											
3, 4回生において習得すべき量子力学の基礎項目についての理解を深める。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1) シュレディンガー方程式と不確定性原理(簡単な復習)</li> <li>2) エルミート演算子と完全規格直交性 ブラとケットによる記法</li> <li>3) 水素原子:極座標系で表したシュレディンガー方程式</li> <li>4) 角運動量とスピン</li> <li>5) 定常状態での摂動論:縮退のない場合</li> <li>6) 定常状態での摂動論:縮退のある場合</li> <li>7) 摂動の例:電磁場、二準位系</li> <li>8) 時間変化を含む場合の摂動論:遷移確率 フェルミの黄金律</li> <li>9) シュレディンガー表示とハイゼンベルグ表示</li> <li>10) フェルミ粒子とボーズ粒子</li> <li>11) 交換相互作用</li> <li>12) 調和振動子</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
量子力学Iを受講しておくほうが望ましい。他にも、力学、電磁気、解析力学の概要を理解していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
定期試験により決定する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
特になし											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	体験から学ぶ超伝導 Learning of Superconductivity from Experience				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 准教授 藤原 直樹 人間・環境学研究科 教授 吉田 鉄平 人間・環境学研究科 准教授 森成 隆夫 人間・環境学研究科 助教 小山田 明 人間・環境学研究科 助教 大槻 太毅					
配当 学年	1,2回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
自然科学において、超伝導は魅力ある現象の1つである。この超伝導現象について、あまり予備知識を仮定せずに、現象に親しむ事を第一の目標にして学ぶ。講義だけでなく、電気抵抗の消失やマイスナー効果などの実演を多数行う予定である。											
<b>[到達目標]</b>											
現代物理学の魅力的なテーマである超伝導現象を体験することができる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下のようなテーマについて、2～3回程度の講義を行う。テーマによっては簡単な実験を行う。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 低温現象</li> <li>2. マイスナー効果と電気抵抗の消失</li> <li>3. BCS理論</li> <li>4. 大型実験施設を用いた超伝導研究</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポートにより評価する。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
特になし。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	地球と生命の起源と進化				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 国際高等教育院 教授 人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 教授 地球環境学舎 教授	小松 直樹 酒井 敏 小木曾 哲 加藤 真 宮下 英明				
配当 学年	1,2回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
<p>「起源と進化」という挑戦的なテーマに、地学（酒井、小木曾）、化学（小松）、生物（加藤、宮下）の各分野の教員が、それぞれの切り口からリレー形式で講義を行う。</p> <p>ビッグバン直後の元素の創生から、地球の誕生と進化、地上での分子進化から最初の生命の誕生、さらにはその進化に至る137億年の歴史を地学、化学、生物の視点から学ぶ。</p>											
<b>【到達目標】</b>											
本講義を通して、サイエンスへの興味を深めてほしい。また、総合人間学部で行われている基礎科学に根ざした研究の面白さを感じてほしい。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
以下に本講義の概要を示す。											
<p>1．元素の起源と進化（小松）【1週】 宇宙における元素の誕生とその進化について概説する。</p> <p>2．地球の誕生と進化（酒井、小木曾）【4週】 原始太陽系星雲の中で地球が生まれて現在に至るまでの過程を追いながら、なぜ地球が生命生息可能な星となったのかを考察する。具体的には、太陽系の材料と惑星の形成過程、初期地球の表層環境、地球内部と表層の相互作用について考える。</p> <p>3．有機分子の起源と進化（小松）【4週】 太古の地球環境下で、どのようにして生命に必要な分子が形成されていったか、また、それがどのように集合していき細胞の形成につながっていったのかについて考える。</p> <p>4．生物の進化と多様化（加藤、宮下）【4週】 生命が誕生したのち、生物はさまざまな環境で、多様な形態や機能、生態を進化させ多様化していった。地球上に見られる多様な生物を概観したのち、生物同士がどのように関わりあいながら、進化と多様化を遂げていったのかについて、生物の系統と多様化の歴史、生物の上陸と動物における植物食の進化、森林生態系における4つの共生系、の観点から講義する。</p>											
<b>【履修要件】</b>											
理系の新生を主な対象とするが、文系の新生、また、2回生以上であっても、興味のある方であれば、履修を歓迎する。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席やレポートなどにより評価する。本講義では、講義に参加することを最も重視する。											
----- 地球と生命の起源と進化 (2)へ続く -----											

## 地球と生命の起源と進化 (2)

### [教科書]

使用しない

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

講義で興味を持ったことに対して、積極的に調べてほしい。

### (その他(オフィスアワー等))

教官へのコンタクトを歓迎します。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	分子構造機能論演習A Lecture and Exercise on Organic Molecular Structures and Properties A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 津江 広人					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
有機化合物の構造解析に広く用いられている機器分析法の原理を解説するとともに、各種スペクトルに含まれる情報から有機化合物の構造を決定するための演習を行う。											
<b>[到達目標]</b>											
機器分析法の原理を理解し、各種スペクトルから有機化合物の構造を決定できるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
有機化合物の構造解析において有用かつ主要な機器分析法である 質量分析法、赤外分光法、紫外分光法、および 核磁気共鳴分光法の原理とスペクトルの解析方法について、解説と演習を交えながら授業を行う。これら4つの機器分析法について、1方法あたり3～4週の授業を行う予定である。											
<b>[履修要件]</b>											
基礎有機化学 ・ (または基礎有機化学A・B)、有機化学演習A・B(または構造有機化学入門、反応有機化学入門)を履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席と演習への参加状況により評価する。											
<b>[教科書]</b>											
マクマリー(伊藤ら訳)『有機化学 第8版 上巻』(東京化学同人)ISBN:978-4-8079-0809-7											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) R. M. Silverstein, F. X. Webster著, 荒木峻, 益子洋一郎, 山本修, 鎌田利紘訳『有機化合物のスペクトルによる同定法』(東京化学同人)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
この授業では、教科書等に掲載された問題を使って演習を行うので、指定された演習問題を次回授業時まで解いておくこと。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
分子構造論, 分子反応論, 分子構造機能論演習Bと併せて履修することを強く推奨する。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	分子構造機能論演習 B Lecture and Exercise on Organic Molecular Structures and Properties B				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 田村 類 人間・環境学研究科 助教 高橋 弘樹					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
キラルな有機化合物の純度決定や物性評価に広く用いられている機器分析法を理解し、また化学原著論文の読み方を習得することを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
化学の主要テーマの一つである化学物質のキラリティーに関する基本的事項を学び、これに関連する実験手法を理解する。ついで、生命の起源とも密接に関連する生命体のキラリティーの起源に関する学術論文を読み、このテーマがもつ重要性について認識する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
対象物質として、キラルな有機化合物や有機結晶を例に用いて、(1) 高速液体クロマトグラフ(HPLC)法、(2) ガスクロマトグラフ(GC)法、(3) 円二色性(CD)スペクトル法、(3) 単結晶X線構造解析法、(5) 熱分析法、および(6) プロブ顕微鏡(AFM, STM)や電子顕微鏡(SEM, TEM)の原理と、これらの利用法について解説する。同時に、キラリティーに関する次の基礎事項についても理解を深める。(7) キラルな分子構造と結晶構造、(8) キラリティーと点群、(9) エナンチオマーの純度と絶対配置、(10) 純エナンチオマー体の利用。さらに、(11) キラリティーに関する化学原著論文の輪読を行う。											
<b>[履修要件]</b>											
基礎有機化学A・B、構造有機化学入門、反応有機化学入門を履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席と演習への参加状況により評価する。											
<b>[教科書]</b>											
毎回、資料を配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 泉ら監修『第2版 機器分析のてびき 第2, 3集』(化学同人)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
各授業終了後に、その日講義した内容について、十分復習を行うこと。理解不十分な点については、参考書その他で自習するとともに、次回の授業の際に質問することにより確認する習慣を身につけてほしい。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
分子構造論、分子反応論、分子構造機能演習Aと併せて履修することを強く勧める。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	分子細胞生物学演習 Seminar on Molecular Cell Biology				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 准教授 土屋 徹					
配当 学年	2-4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 通年	曜時限	火5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
生命現象を分子レベルで解析するためには、さまざまな研究手法が必要とされる。本演習では、生命科学における基礎的な知識および研究手法の理解を主たる目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
生命現象を分子レベルで解析するための知識と実験手法について理解する。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
いわゆるミクロ系生物学の研究に必要とされる知識と研究手法について学ぶ。加えて、個々の研究手法が実際の研究の中でどのように利用されているのかについても解説する。											
<b>[履修要件]</b>											
生体分子機能論I、もしくは同等の科目を履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
平常点を基に総合的に評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
復習により、講義内容を理解すること。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	分子細胞生物学演習 Seminar on Molecular Cell Biology				担当者所属・ 職名・氏名	生命科学研究科 教授 千坂 修 生命科学研究科 准教授 吉村 成弘					
配当 学年	2-4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 通年集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
生命科学に関する原著論文（英語）を読み、内容を理解する。 論文に記載された実験・解析法等を深く掘り下げて調べ、それらの原理を理解する。											
<b>[到達目標]</b>											
生命科学に関する原著論文を英語のまま理解する事ができるようになる。 最先端の生命科学研究で用いられている実験・解析手法を原理から理解する事ができる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
下記のトピックに関する原著論文（それぞれ2～3報）を読む。											
分子生物学の基礎（3回） 細胞生物学の基礎（3回） 染色体の構造解析（3回） 細胞核の構造と動態（3回） 細胞イメージング技術（3回）											
<b>[履修要件]</b>											
生化学入門101および生化学入門102を履修済みであること。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席点（50%）と授業内での発表内容（50%）											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
配布された論文をあらかじめしっかりと読んでおくこと（予習）。											
（その他（オフィスアワー等））											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	自然史演習 Seminar on Natural History				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 准教授 西川 完途					
配当 学年	2-4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 通年	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
動物の自然史の研究方法について演習する。主に両生類を題材として、種レベル、遺伝的レベルでの生物多様性、史的時間を通じての生物環境動態について議論をし、理解を深めあうことを目指す。											
<b>[到達目標]</b>											
動物の自然史について知識を深めて、種レベル、遺伝的レベルでの生物多様性、史的時間を通じての進化や種分化について理解を深めることを目指す。この科目を履修することにより、現在、社会的に大きな問題となりつつある環境保護についても、自然史的な観点から自ら考えることができるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
以下のような課題について、1課題あたり2 - 4週の授業をする予定である。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 東南アジア産無尾両生類の分布様式</li> <li>2. 東南アジア産無尾両生類の分子系統</li> <li>3. 東南アジア産無尾両生類の分布形成史の推定</li> <li>4. 東アジア産有尾両生類の分布様式</li> <li>5. 東アジア産有尾両生類の分子系統</li> <li>6. 東アジア産有尾両生類の分布形成史の推定</li> <li>7. アジア産両生類の形態進化と遺伝的分化</li> <li>8. アジア産両生類の生活史の多様性</li> <li>9. アジア産両生類の保全と保護</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席点、演習中の発言などの平常点。											
<b>[教科書]</b>											
適宜資料を配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 松井正文 『両生類の進化』(東京大学出版会)											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
演習中に疑問に思った事は、ただ教員に聞くだけでなく、図書館などを利用して自ら調べて学習することが重要になる。自ら調べても解決できなかった場合には、演習中や、後にでも教員に質問する。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
疑問点などは西川(hynobius[a]zoo.zool.kyoto-u.ac.jp)までメールで連絡すること。  オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	自然史演習 Seminar on Natural History				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 教授		加藤 真 市岡 孝朗			
配当 学年	2-4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 通年	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
生物相互の種間関係、生物の個体群や群集の動態、生物の系統や進化、生態系の維持機構、生物多様性の現状とそれを保護するための方策などのテーマについて、研究紹介や論文講読を行なうとともに、研究計画の検討や、研究の経過報告、研究を発展させるための議論などを行なう。											
<b>[到達目標]</b>											
生態学の諸問題に精通し、また自然や生物多様性に関して俯瞰できる視点を養った上で、自然に関する自分の研究テーマを見つけてもらうことが最大の目標である。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
毎週、担当を決めて、下記のようなテーマに関する研究紹介や論文講読や、研究計画の検討、研究の経過報告、研究を発展させるための議論などを行なう。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生物相互の種間関係</li> <li>2. 生物の個体群や群集の動態</li> <li>3. 生物の系統や進化</li> <li>4. 生態系の維持機構</li> <li>5. 生物多様性の現状とそれを保護するための方策</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席と、セミナーでの発表（文献紹介など）											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
論文の検索の仕方、発表・講演の仕方、科学論文・報告の書き方、などの個別指導を行なうので、それらを参考に、セミナーでの発表準備に役立ててほしい。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
教員や大学院生のフィールド調査へ同行する機会を作る予定。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	自然史演習 Seminar on Natural History	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 瀬戸口 浩彰
---------------	-------------------------------------	-----------------	---------------------

配当 学年	2-4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 通年	曜時限	水4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

#### 【授業の概要・目的】

生物の自然史(とくに植物)に関する文献の購読や研究発表, これに対する討論を通して, 研究の進め方や考え方を涵養することを目的とする。

【対象となる内容】 植物(ときには動物も対象とする)の種内の進化, 進化をもたらす様々な遺伝子の変異, 系統地理\*, 絶滅危惧植物の保全。

\*系統地理学とは, 地球上の様々な場所に生息する生物種が, どのような歴史的経緯を辿って, 現在のような地理的分布を得てきたのか, 現在の生息環境に見られるように至ったのかについて, 主にDNAデータの解析から明らかにしていく学問領域のこと。

【履修によって得られると見込まれる知識と思考】 植物(生物)の進化, 植物の環境適応, 系統地理学, 系統分類学, 光や温度受容などの主要な遺伝子の機能と, これが種内分化をもたらす機構保全生物学, 第四紀の気候変動と日本の植生の変遷, 新しいことを探求する思考

#### 【到達目標】

上記の目標と重複しますが、「動くことが出来ない」ことを宿命づけられている植物は、生育環境への適応が不可欠で、そこに動物にはあり得ない進化のしくみが存在します。また、それゆえにこれからの気候変動の中で多くの種が絶滅をすることがもの凄く現実的になってきています。私たちの生活の「最も身近な生きもの=植物」について、進化や保全についての知識を得ることが出来ませんが、大学は自動車教習所ではありませんので、熟議によって、思考を涵養することを目標とします。

#### 【授業計画と内容】

毎週水曜日の4時間目(14:40開始)から吉田南2号館1階理系総合学習室で行う。予定は、吉田南2号館3階の廊下にある生物実習室1の掲示板に掲示する。毎回到ゼミの発表者が2人あるいは1人ずつ、特定の研究テーマや論文について紹介を行い、そのあとに討論を交わす。また、不定期に、総合博物館の地下にある植物標本収蔵庫において標本の整理作業も行う。将来に博物館に勤務を希望する人には貴重な体験学習の場になると考えます。

#### 【履修要件】

高校における生物の履修歴は不要。ただし、担当教員が全学共通科目で開講している「植物系統・進化学」と「生物学概論A」を履修していると、内容理解が平易になる。

#### 【成績評価の方法・観点及び達成度】

授業への参加(出席と発言)を総合的に評価する

## 自然史演習(2)

### [教科書]

使用しない

使用しません。ただし、主専攻や副専攻の別、個々人の興味に応じて良い本をたくさん紹介します。履修人数が少ない科目なので、個別対応のメリットを活かして下さい。

### [参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

全学共通科目の生物学に関わる講義や実習を予め履修しておくことを希望します。事前に知りたい方は、研究室HPを見て、直接に研究室でお話ししましょう。

### (その他(オフィスアワー等))

履修希望者は、初回のゼミに参加してください。様々な説明をします。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	自然史演習 Seminar on Natural History				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 宮下 英明					
配当 学年	2-4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 通年	曜時限	水5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
微生物自然史に関する文献や最近の研究動向に関する話題の提供によって、微生物を中心とした生物の多様性や生態，系統・分類，進化についての理解を深めること，また，実際の研究の結果や発表に対する討論を通して，自然史研究の計画策定，進め方，結果のまとめ方に関する考え方を涵養することを目的とする。											
<b>[到達目標]</b>											
論文紹介によって最新の研究動向やトピックスを掌握すること 研究計画の立案、発表、とりまとめ等について理解し、実行できるようになること											
<b>[授業計画と内容]</b>											
毎週，その週の担当を決め，下記について紹介（発表）・質疑応答・討論を行う。  自らの研究テーマに関連した最新の論文 微生物自然史研究における最新のトピックス 研究計画 研究の経過報告  担当者名やテーマの詳細については，吉田南2号館2階および3階の生物実習室前掲示板に掲示する。											
<b>[履修要件]</b>											
特になし。ただし，担当教員が開講している「微生物概論」（全学共通科目），「藻類学概論」（全学共通科目），「生体分子機能論II」（学部専門科目）や，他の教員が開講している微生物関連科目を履修しておくことと内容の理解を助ける。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
授業への参加を総合的に評価する											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
発表にあたっては事前の準備をしっかりと行うこと 演習時の討議内容について事後に整理し、必要に応じて図書館等で確認しておくこと  （その他（オフィスアワー等））											
問い合わせ等がある場合は，担当教員に電子メール等で問い合わせること。  オフィスアワーの詳細については，KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	物質構造機能論演習 A Lecture and Exercise on Material Structure and Function A				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究所 教授 杉山 雅人					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
分析化学と水圏地球化学に関わる具体的な事例を取り上げて、少人数で理論の概説と計算演習を行う。											
【到達目標】											
分析化学と水圏地球科学に関する理論と応用に関する演習問題が確実に解答できることを目指す。											
【授業計画と内容】											
以下に示す項目について、理論の概説と演習を行う。											
1．濃度の単位、最小二乗法、標準偏差											
2．酸塩基滴定（滴定曲線と酸解離定数）											
3．沈澱滴定（終点と当量点）											
4．吸光光度分析（モル吸光係数、等吸収点、組成比決定法）											
5．溶媒抽出（抽出平衡定数、pH - 抽出率曲線、pH - log（分配比）曲線、抽出錯体の組成決定法）											
6．酸化還元滴定（化学的酸素要求量、生物化学的酸素要求量）											
7．酸化還元平衡（pH - 電位図の作成）											
8．酸化還元平衡（閉鎖水塊での酸化還元電位低下と酸化還元活性化学種の動態）											
9．溶解度積と溶解度、海水中での炭酸カルシウム飽和度と補償深度											
10．錯生成平衡と酸解離平衡、副反応係数、自然水中での存在化学種の推定											
11．硬い酸塩基、軟らかい酸塩基											
12．質量分析											
13．定量分析の操作（標準溶液の調製、試料処理）											
【履修要件】											
全学共通科目の「基礎物理化学」、「基礎有機化学」を習得していることが望ましい。 「物質分析論」を習得したのち履修することが望ましい。 課題演習「物質の構造と機能」（分析化学・地球化学）と並行して履修することが望ましい。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
定期試験とレポートによる。											
【教科書】											
藤永太一郎 編著 『基礎分析化学』（朝倉書店）											
【参考書等】											
（参考書）											
藤永太一郎、関戸栄一 訳 『イオン平衡』（化学同人）											
姫野貞之、市村彰男 『分析化学』（化学同人）											
----- 物質構造機能論演習 A (2)へ続く -----											

物質構造機能論演習 A (2)

---

**[授業外学習（予習・復習）等]**

自宅学習のための演習問題を授業中に提示する。

**（その他（オフィスアワー等））**

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	物質構造機能論演習 C Lecture and Exercise on Material Structure and Function C				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 内本 喜晴					
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金1	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
物質の機能、特に無機機能性材料の電気化学デバイスへの応用について概説する。特に、無機固体材料の設計のために必要な固体化学についての演習を行う。											
<b>[到達目標]</b>											
次世代の環境・エネルギー問題の解決手法としての、固体材料の理解が出来るようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
次の項目について演習を行う。											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 結晶構造</li> <li>2. 主要な結晶構造</li> <li>3. 固体の化学結合</li> <li>4. 結晶の欠陥</li> <li>5. 相図</li> <li>6. 電気的性質</li> <li>7. 平衡電気化学</li> <li>8. 電荷移動過程</li> <li>9. 物質輸送過程</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
基礎物理化学((熱力学) および (量子化学) を習得していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
レポート試験と出席率による。											
<b>[教科書]</b>											
参考書を補助教科書として使用する。その他、必要な資料は適時配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書)											
A.R. ウエスト(著)、遠藤 忠(翻訳)、井川 博行(翻訳)、伊藤 祐敏(翻訳)、君塚 昇(翻訳)、武田 保雄(翻訳)、池田 攻(翻訳)、菅野 了次(翻訳)、泰松 齊(翻訳) 『ウエスト固体化学入門』(講談社サイエンティフィク) ISBN:4061533711											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
それぞれの講義の内容について、演習問題を行い、講義内容の定着を行う。											
(その他(オフィスアワー等))											
居室：人間・環境学研究科棟301号室 uchimoto.yoshiharu.2n@kyoto-u.ac.jp											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	地球科学演習 A Seminar on Earth Science A				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 助教	酒井 敏 石川 尚人 小木曾 哲 加藤 護				
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>【授業の概要・目的】</b>											
演習・実習を通して、地球の姿や地球上での地学的な諸現象に、興味を持ち、納得してもらう事を 目指す。											
<b>【到達目標】</b>											
書籍等で見聞きするだけであった地学的な事象や現象を、実験/演習という自身の体験を通じて、 理解することができる。											
<b>【授業計画と内容】</b>											
地球に関連する諸事象を、身近な事実や法則を用いて、また、簡単な実験やデータ解析を行ないな がら、自分で確かめ、納得してもらう事を目的とする。いくつかのテーマを設定し、複数回をかけ て、そのテーマに沿った課題での演習・実験を行なう。											
演習予定											
・ガイダンス：第1回目											
・地球の大きさや重さ（密度）：3回											
・地球の構造と構成物質（地球の層構造、岩石・鉱物）：4回											
・地球で働く力（重力、地磁気、コリオリ力など）：3回											
・地球での諸現象（火山、地震、気象、気候）：3回											
<b>【履修要件】</b>											
1コマの演習なので、開始時間には遅刻しないこと（厳守）。 演習なので、出席し、課題に取り組むことが履修及び成績評価の条件である。											
<b>【成績評価の方法・観点及び達成度】</b>											
出席及び各課題に対する達成度合い。演習テーマに応じて、複数回のレポートを課す。											
<b>【教科書】</b>											
授業中に指示する											
<b>【参考書等】</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>【授業外学習（予習・復習）等】</b>											
実験データの解析・まとめや演習に関して、複数回のレポートを課す。											
（その他（オフィスアワー等））											
地球科学の興味があれば、学部科目「地球科学演習 B・C」、全学共通教育科目「地球科学実験・ 探究型地球科学課題演習」も履修することを強く推奨する。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	地球科学演習 B Seminar on Earth Science B				担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授 人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 助教	酒井 敏 石川 尚人 小木曾 哲 加藤 護				
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
演習・実習を通して、地球の姿や地球上での地学的な諸現象に興味を持ち、理解を深めることを目指す。											
<b>[到達目標]</b>											
書籍等で見聞きするだけであった地学的な事象や現象を、実験/演習という自身の体験を通じて、理解することができる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
地球や地学的な諸事象に関して、簡単な実験・観測・データ解析を行い、自分で確かめながら、興味と理解を深めることを目的とする。複数の事象をテーマとして設定し、そのテーマに沿った課題での演習・実験を複数回(2 - 3回)行なう。											
演習予定											
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ガイダンス：第1回目</li> <li>・隕石－鉱物－岩石：3回</li> <li>・環境変動の記録媒体としての堆積物：3回</li> <li>・地球のダイナミクス－火山：2回</li> <li>・地震(地震活動の時間変化・空間変化など)：2回</li> <li>・気象－気候：3回</li> </ul>											
<b>[履修要件]</b>											
1コマの演習なので、開始時間には遅刻しないこと(厳守)。 演習なので、出席し、課題に取り組むことが、履修及び成績評価の条件である。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席及び各課題の達成度合い。演習テーマに応じて、レポートを課す。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
演習テーマに応じて、予習/復習/レポートを指示する。											
(その他(オフィスアワー等))											
地球科学に興味があれば、学部科目「地球科学演習A・C」、全学共通教育科目「地球科学実験・探究型地球科学課題演習」も履修することを強く推奨する。											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	地球科学演習 C Seminar on Earth Science C		担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 教授	酒井 敏
				人間・環境学研究科 教授	石川 尚人
				人間・環境学研究科 教授	小木曾 哲
				人間・環境学研究科 助教	加藤 護

配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	---------------	-----	------	----------	----	----------	-----

**[授業の概要・目的]**

地学現象は野外で起こっている。  
野外において、観測によりその現象を捉えることやその痕跡が残る現場を観察することを通じて、地学現象を「体感」し、地球科学に関連する諸現象への興味と理解を深める。

**[到達目標]**

地学的な事象や現象を野外での観察等による実体験を通じて、より深く知ることができる。地球科学における「フィールドワーク」の手法を知ることができる。

**[授業計画と内容]**

野外実習を伴う演習科目である。講義や室内を主とする実習では、映像や写真、言葉による説明で終わっている地学現象を現場で「体感」することにより、机上での学習を補完するものである。  
前期の期間内において、一日実習（土曜日または日曜日・祝日）、一泊二日実習（土・日）、二泊三日実習（前期試験終了後、夏期休業期間）を組み合わせる。各実習は、事前学習－事後学習（実習内容の取りまとめ、レポート）を伴う。

4月前期開始時期に、ガイダンスを行ない、実習概要の説明／実習時期（日程）・目的地の設定等を行なう。ガイダンスの日時は、4月初旬に教務掛を通じて連絡する。

- 実習目的地の例は以下の通りである。
- ・大文字山越え（京都大学から琵琶湖まで、地形・地質巡検）
  - ・淡路島～高松（野島断層、渦潮、新第三紀瀬戸内火山岩類）
  - ・夜久野～豊岡（山陰海岸ジオパーク、日本海形成期の地質記録、第四紀火山活動）
  - ・紀伊半島南部巡り（津波災害・津波防災、熊野酸性岩類、付加体）
  - ・東海地方探訪（根尾谷断層、生物大絶滅のP/T境界、化石）
  - ・伊豆大島（活火山、生々し噴火活動の痕跡、玄武岩溶岩流）
  - ・別府～阿蘇（火山活動の観測・研究の現場、阿蘇カルデラ）

**[履修要件]**

学部科目「地球科学演習」または全学共通教育科目における地球科学関連の講義・実験の中から少なくとも1つは履修済みであるか、同時期に履修中であること。

演習であるので、原則的に事前学習－実習－事後学習をすべて出席すること。

事後学習の1つとして、レポート課題が課せられるので、レポートは締切日時を厳守し、必ず提出すること。課題を満了したレポートで無い場合は、野外実習に参加したとは見なさない場合もある。

## 地球科学演習 C (2)

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

出席及び実習課題に対する達成度合い(レポート評価)

### [教科書]

授業中に指示する

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

事前学習時に、実習当日までに学習しておくべき事項を指示する。  
事後学習の1つとして、レポート課題を課す。

### (その他(オフィスアワー等))

地球科学に興味があれば、学部科目「地球科学演習 A・B」、全学共通教育科目「地球科学実験・探究型地球科学課題演習」も履修することを強く推奨する。

野外実習であるので、交通費・宿泊費等の経費上の負担が発生する場合がある。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	物質構造機能論演習 D Lecture and Exercise on Material Structure and Function D				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 地球環境学舎 助教		梶井 克純 坂本 陽介			
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
大気環境問題で重要なオゾン層破壊問題、光化学オキシダント問題などを学ぶために必要な化学の基礎として、分子と光の相互作用、分子の励起状態と緩和過程、光化学反応論について学ぶ。											
<b>[到達目標]</b>											
分子と光の相互作用を勉強することで、大気中で起こっている自然現象について理解出来ることを目指す。大気中での典型的な光化学反応を勉強することで、光化学オキシダントのメカニズムを理解することを目標とする。また、成層圏でのオゾン層について最新の知見を提供するとともに、今後どのようなようになるかについて予測できる力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 分子と光の相互作用</li> <li>2 励起状態の緩和</li> <li>3 光化学反応基礎 1</li> <li>4 光化学反応基礎 2</li> <li>5 成層圏オゾンの機構と機能</li> <li>6 対流圏オゾンの機構と機能</li> </ol>											
<b>[履修要件]</b>											
特になし											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席点とレポートおよび試験											
<b>[教科書]</b>											
使用しない 適宜ハンドアウトを配布する。											
<b>[参考書等]</b>											
(参考書) 授業中に紹介する 適宜ハンドアウトを配布する。											
<b>[授業外学習(予習・復習)等]</b>											
折に触れてレポート提出という形式で、授業で触れられなかった環境問題について自習する機会を提供する。											
<b>(その他(オフィスアワー等))</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	物質構造機能論演習E Lecture and Exercise on Material Structure and Function E				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 助教	吉田 寿雄 山本 旭				
配当 学年	2-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
人間社会・環境に貢献する触媒化学に深いかかわりのある化学反応速度論を中心として演習を行う パソコンを使った演習も行う。											
<b>[到達目標]</b>											
化学反応速度論の基礎と応用について学び、理解する。 化学反応速度論に関する演習問題を解けるようになる。 パソコンによって速度論的データやスペクトルデータを解析できるようになる。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
触媒は化学的物質変換に不可欠な物質であり、化学工業、環境保全におけるキーテクノロジーである。また、近年注目を集める光触媒は、エネルギー、環境分野での貢献が期待されている。本演習では、触媒・光触媒にかかわる反応速度論、データ解析、各種分光スペクトルの解釈、等について学習する。 反応速度論・基礎【第1回～第5回】 化学反応速度論の基礎について講義と演習を行う。 反応速度論・応用【第6回～第10回】 複雑な化学反応、酵素反応、光励起、吸着、同位体効果、等について講義と演習を行う。 パソコンを用いた演習【第11回～第14回】 パソコンを用いた反応速度論やスペクトルの解析を学習する。 フィードバック【第15回】											
<b>[履修要件]</b>											
化学や物理、物理化学等の一般的知識をある程度有していることが望ましい。また、前期の物質変換論を履修していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
演習時の小テストの結果、及び出席率により評価する。											
<b>[教科書]</b>											
授業中に指示する											
----- 物質構造機能論演習E(2)へ続く -----											

## 物質構造機能論演習E(2)

### [参考書等]

(参考書)

P. Atkins, J. Paula 『アトキンス物理化学(下)第8版』(東京化学同人)

田中庸裕・山下弘巳 『固体表面キャラクタリゼーションの実際』(講談社)

### [授業外学習(予習・復習)等]

宿題とした演習課題を行うこと。

### (その他(オフィスアワー等))

最後の数回にわたって、パソコンを用いた演習を行います。

自分のパソコンを持参してください。ソフトウェアにはMicrosoftのExcel(使い方を知っているのであれば類似のソフトウェアでも可)を用いますのでインストールしておいてください。

もし、パソコンを持っていない人には貸与することも検討します。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	課題演習：（物理科学）光電子分光 Photoemission Spectroscopy				担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 人間・環境学研究科 助教	吉田 鉄平 大槻 太毅				
配当 学年	3,4回生	単位数	4	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月3,4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
<b>[授業の概要・目的]</b>											
<p>金属や絶縁体など、物質が持つ電気的性質の起源は、電子のエネルギー分布を分析することで理解することができる。本演習では物質の電子状態の研究で用いられる光電子分光法に関する演習を行う。X線および紫外線を用いた光電子分光の実験では固体の内殻準位や価電子帯のスペクトルを測定しデータ解析を行う。また電子状態の理論的基礎や計算方法についても学習し、実験と理論の両面から物性に関する理解を深め、物質に対する感覚を養う。</p>											
<b>[到達目標]</b>											
物質の電子状態の理解を通して、自然を観察する上での物理感覚、思考能力を養う。											
<b>[授業計画と内容]</b>											
前半は光電子分光、電子構造の基礎に関する参考書をゼミ形式で学習する。後半はX線および紫外線を用いた光電子分光の実験を行い、固体物質の内殻準位や価電子帯のスペクトルを測定しデータ解析を行う。更に発展した内容に進む場合は、コンピュータによる電子構造の計算も行う。											
<b>[履修要件]</b>											
物理学基礎論A,B、振動波動論、量子力学、統計力学を履修または受講していることが望ましい。											
<b>[成績評価の方法・観点及び達成度]</b>											
出席およびレポートによる。											
<b>[教科書]</b>											
使用しない											
<b>[参考書等]</b>											
（参考書） 授業中に紹介する											
<b>[授業外学習（予習・復習）等]</b>											
前半のゼミ形式授業では学習、議論する項目の予習を必要とする。											
<b>（その他（オフィスアワー等））</b>											
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	総合フィールド演習 Exercise on Field Natural Sciences	担当者所属・ 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授	杉山 雅人
			人間・環境学研究科 教授	石川 尚人
			地球環境学舎 教授	梶井 克純
			人間・環境学研究科 教授	加藤 真
			人間・環境学研究科 教授	小木曾 哲
			国際高等教育院 教授	酒井 敏
			人間・環境学研究科 教授	阪上 雅昭
			人間・環境学研究科 教授	瀬戸口 浩彰
			地球環境学舎 教授	宮下 英明
			人間・環境学研究科 教授	市岡 孝朗
			人間・環境学研究科 准教授	西川 完途

配当 学年	1-4回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	---------------	-----	------	----------	----	----------	-----

### [授業の概要・目的]

多面的・複合的に自然を見る眼を養う。自然を研究題材とするフィールド科学の楽しさと難しさに触れる。

同一の水域・地域を対象に、物理学・化学・生物学・地球科学からなる多分野による演習と実習を行って、その水域・地域の自然科学的構造と動態を総合的に解析することによって、フィールド科学の知識・技術の基礎と応用を学ぶ。

### [到達目標]

自然科学のフィールドワークができるための知識と技術を、実際の現場での作業により修得する。

### [授業計画と内容]

いくつかの対象域を選定し、その水域や地域の自然科学的構造と動態について、物理学・化学・生物学・地球科学からなる多分野による複合的・総合的な演習と実習を行う。大気・水・堆積物（地殻）の構造・流動・化学組成・生物群集組成・生態系・生物多様性・地質学的特性について調査・解析する。この結果をもとに、教員と学生による総合討論を行って、調査水域・地域の構造と動態を考察する。対象域としては、伊勢湾、琵琶湖、田辺湾（和歌山県）、阿蘇山、別府湾、貴船川水系（京都市）、東南アジア（マレーシアを予定）などがある。

授業日程は次の3つからなる。1)と3)は必要に応じて不定期に開催するが、開催時限は、基本的に木曜5限とする。2)は3日または4日連続、海外演習では1～2週間の集中授業である。

- 1) 調査水域・地域ならびに調査手法とその原理に関する予備学習（総合人間学部にて）
- 2) 調査水域・地域での総合科学的な演習と実習（調査地についての詳細は、4月上旬に発表する）

3) 調査結果の解析と総合討論（総合人間学部にて）

\* 2) については調査水域・地域が遠隔地の場合には宿泊を伴う。

調査の内容・手法は調査水域・地域によって異なる。例えば、伊勢湾を対象とする演習・実習では、三重大学練習船「勢水丸」に乗船・宿泊して調査する。流向・流速計や多項目水質計などによる現場観測とともに、採水・堆積物採取・底生生物採集（ドレッシング）・プランクトン採取・大気採取などを行う。採取した試料は、船内あるいは大学に持ち帰って化学分析・生物群集解析・地質解析を施す。これらの結果をもとに、伊勢湾の物理・化学・生物・地質構造とその動態を考察する。

詳しい日程と調査内容については4月上旬に総合人間学部掲示板に掲示するとともに、4月中旬に科目内容説明会を行う。

----- 総合フィールド演習(2)へ続く -----

## 総合フィールド演習(2)

### [履修要件]

全学共通科目の自然科学系科目を履修しておくことが望ましい。自然に対する強い興味が重要である。

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

レポートならびに演習・実習への取り組み方によって評価する。

### [教科書]

本授業のために独自に作成した演習・実習指針を配布する。

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

フィールド実習の前後において、自宅学習するための課題を提示する。

### (その他(オフィスアワー等))

研究調査船等の定員の関係から、受講定員を20名とする。これを超える申込者があった場合には、無作為の抽選により受講者を決定する。海外での演習に関しては受講生の安全確保などの理由から若干名に限り、参加希望者とは個別に面接の上、参加の可否を判断する。履修登録は4月に行われるKULASISによる登録とは別に行う。

演習・実習中の万一の事故に備え「学生教育研究災害保険」等に必ず加入すること。この保険への加入は学務部学生課厚生掛で取り扱っている。また、海外での演習に関しては、海外旅行保険への自費加入を義務とし、受講者本人または保護者には、演習中の事故防止や安全確保に関する同意書の提出を求める。

調査地が遠隔地の場合、移動と宿泊のために費用を要することがある。これらは受講者の自己負担である。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。